

# 山遺跡（第3・9・12・14地点）

## 市内遺跡群発掘調査報告書 XXX

2023

白岡市教育委員会

白岡市埋蔵文化財調査報告書第32集

# 山遺跡（第3・9・12・14地点）

市内遺跡群発掘調査報告書 XXX

2023

白岡市教育委員会



## 序

このたび白岡市教育委員会では、『山遺跡（第3・9・12・14地点）』の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

白岡市は都心への通勤圏ということもあり、平成期以降住宅やマンション建設が相次ぎました。目覚ましい人口増加を背景に、平成24年10月には単独で市制を施行いたしました。目を転じますと郊外には、まだまだ緑豊かな田園風景が広がっています。

今回報告します山遺跡の調査は、これまで18次にわたる発掘調査を実施し、大きな成果をあげて参りました。特に、今から約4,000年前の縄文時代中期の大集落として注目を集め、その豊富な出土資料から白岡市を代表する縄文時代の集落遺跡であることがわかってきました。今回の調査では縄文時代中期の住居跡5軒の発見はもちろん、奈良・平安時代の木炭窯跡を検出するなど、古代における当地の生業を考える上で重要な調査となりました。

教育委員会では、地域文化の特色を生かしながら、あらゆる機会と場所での生涯学習を目指す「白岡らしさの発見と創造」を目標に掲げております。当報告書が市民の皆様や学校等関係機関の方々に広く活用され、郷土白岡の再発見と埋蔵文化財保護のご理解につながれば幸いに存じます。

最後に、今回の発掘調査及び報告書作成に当たり、地権者や事業主様、地域の方々には格別のご支援とご理解を賜りました。ここに心より厚く御礼申し上げます。

令和5年3月

白岡市教育委員会  
教育長 横松 伸二

## 例 言

- 1 本書は、埼玉県白岡市内に所在する山遺跡（第3・9・12・14地点）の発掘調査報告書である。
- 2 調査地点所在地は以下のとおりである。  
山遺跡（第3地点）：白岡市白岡744  
山遺跡（第9地点）：白岡市白岡744-5、745-1  
山遺跡（第12地点）：白岡市白岡746-1の一部  
山遺跡（第14地点）：白岡市白岡746-1の一部
- 3 発掘調査は、白岡市教育委員会と白岡市遺跡調査会が主体となって実施した。第9地点の調査費用は株式会社 井上工務店 代表取締役 井上 堅一氏が負担した。第12地点の調査費用は藤岡やえ子氏が負担した。第14地点の調査費用は丸和セレクトホーム株式会社 代表取締役社長 矢部 和幸氏が負担した。それ以外の調査費用及び整理事業費用は白岡市教育委員会が負担した。
- 4 調査期間は、以下のとおりである。  
山遺跡（第3地点）：平成9年5月12日から平成9年7月3日まで  
山遺跡（第9地点）：平成21年6月22日から平成21年7月15日まで  
山遺跡（第12地点）：平成27年5月7日から平成27年5月29日まで  
山遺跡（第14地点）：令和2年5月27日から令和2年6月18日まで
- 5 指示通知番号は、以下のとおりである。  
山遺跡（第3地点）：平成9年6月9日付け教文第3-163・-164・-165号（指示）  
平成9年5月12日付け教委第295-1・-2・-3号（通知）  
山遺跡（第9地点）：平成21年7月1日付け教生文第5-288号（指示）  
平成21年7月1日付け教生第120号（通知）  
山遺跡（第12地点）：平成27年5月1日付け教生文第5-38号（指示）  
平成27年5月1日付け教生文第2-9号（通知）  
山遺跡（第14地点）：令和2年5月29日付け教文資第5-277号（指示）  
令和2年5月26日付け教文資第2-6号（通知）
- 6 発掘調査は、第3地点を奥野 麦生と松崎 慶喜が、第9地点を松崎が、第12・14地点を杉山 和徳が担当した。  
整理事業及び報告書作成作業は、杉山の協力を得て奥野が担当した。
- 7 遺物の実測は、奥野が担当し、青木 美代子、増田 香織の補助を得た。
- 8 本書の執筆分担は以下のとおりである。  
I・II：杉山  
III：奥野  
IV：株式会社古環境研究所
- 9 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、地権者である神田 三岐夫様、柿沼 利樹様、柿沼 恵美子様、井上 安子様、藤岡やえ子様、丸和セレクトホーム株式会社 代表取締役社長 矢部 和幸様の御理解、

御協力を得て実施した。また、下記の諸氏及び諸機関から御指導と御助言を賜った。

板垣 時夫、鬼塚 知典、小宮 雪晴、篠田 泰輔、鈴木 敏昭、関 絵美、守谷 健吾、油布 憲昭。

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、埼玉県教育委員会文化資源課、

白岡市文化財保護審議会、東部地区文化財担当者会（50音順、敬称略）。

- 10 発掘調査及び整理事業にあたっては、下記の方々の参加協力を得た。

青木 美代子、池田 ひろ枝、入江 正宏、江原 ウメ子、大野 美沙子、折原 奈美子、桂 都、

角田 喜好、川島 みつ、興野 明夫、黒田 雅之、坂田 玲子、下田 富士子、菅原 春男、関口 潤子、

高橋 安代、田中 玉緒、丹下 幸夫、鳥海 恵子、中尾 亜子、長倉 知以子、中山 敏夫、藤巻 良雄、

星 和枝、細井 まさ子、堀田 勤一郎、槇島 武二、増田 香織、水澤 和子、森本 美代子、矢口 章、

山田 登、蓬田 富江、渡辺 トシ子、渡辺 英子（50音順、敬称略）。

- 11 調査組織は以下のとおりである。

調査組織（令和4年度）

調査主体者 白岡市教育委員会

事務局 教 育 長 横松 伸二

生涯学習部長  
兼学び支援課長 安野 弘之

文化振興担当主幹 早津 敦

同主査 杉山 和徳（調査担当）

同主任専門員 奥野 麦生（調査担当）

同主事 爲國 翠子（調査担当）

## 凡 例

- 1 本書で用いる方位は国土座標の方位で、標高は海拔を表す。

- 2 使用した基準点と遺跡原点（日本測地系平面直角座標第9系）は以下のとおりである。

X = 977.071 m、Y = -15,468.809 m（5A コウ107）

X = 1,075.000 m、Y = -15,415.000 m（遺跡原点）

巻末抄録の経緯度は遺跡原点を世界測地系に変換したものである。

- 3 本書で掲載した図版の縮尺は原則として以下のとおりである。

遺構：1/60 遺物：土器実測図・拓影図・石器実測図1/3

- 4 挿図と表中の略号は以下のとおりである。

H：住居跡 SI：竪穴状遺構 SK：土坑 SD：溝跡 P：ピット

- 5 遺物の観察表において残存値には（ ）を付して表記した。

# 目 次

序		3 第9地点の遺構と遺物	84
例言		(1) 土坑	84
凡例		(2) 溝跡	86
目次		(3) グリッド出土遺物	86
		4 第12地点の遺構と遺物	90
		(1) 住居跡	90
		(2) 竪穴状遺構	104
		(3) 土坑	108
		(4) 溝跡	111
		(5) グリッド出土遺物	111
I 調査の概要	1	5 第14地点の遺構と遺物	115
1 調査に至る経緯	1	(1) 土坑	115
2 調査の経過	1	(2) グリッド出土遺物	115
II 位置と環境	3		
1 遺跡の立地と地理的環境	3	IV 自然科学分析	117
2 歴史的環境	3	1 山遺跡(第3地点)出土炭化材の自然科学 分析	117
III 調査の成果	7	V 総 括	120
1 遺跡の概要と調査地点の様相	7	1 出土土器	120
2 第3地点の遺構と遺物	10		
(1) 住居跡	10	写真図版	
(2) 土坑	51	報告書抄録	
(3) 溝跡	64		
(4) 木炭窯跡	68		
(5) グリッド出土遺物	69		

# 挿 図 目 次

第1図 山遺跡と周辺の遺跡分布図	5	第10図 第2号住居跡出土遺物(3)	18
第2図 山遺跡の位置と発掘調査区	6	第11図 第2号住居跡出土遺物(4)	20
第3図 調査区全測図	8・9	第12図 第2号住居跡出土遺物(5)	22
第4図 第1号住居跡	11	第13図 第3A号住居跡	24
第5図 第1号住居跡出土遺物(1)	12	第14図 第3B号住居跡	25
第6図 第1号住居跡出土遺物(2)	13	第15図 第3号住居跡遺物分布図	26
第7図 第2号住居跡	14	第16図 第3号住居跡出土遺物(1)	28
第8図 第2号住居跡出土遺物(1)	16	第17図 第3号住居跡出土遺物(2)	30
第9図 第2号住居跡出土遺物(2)	17	第18図 第3号住居跡出土遺物(3)	31

第19図	第3号住居跡出土遺物 (4)……………	33	第47図	グリッド出土遺物 (3)……………	76
第20図	第3号住居跡出土遺物 (5)……………	34	第48図	グリッド出土遺物 (4)……………	77
第21図	第3号住居跡出土遺物 (6)……………	35	第49図	グリッド出土遺物 (5)……………	78
第22図	第3号住居跡出土遺物 (7)……………	37	第50図	グリッド出土遺物 (6)……………	80
第23図	第3号住居跡出土遺物 (8)……………	39	第51図	グリッド出土遺物 (7)……………	82
第24図	第3号住居跡出土遺物 (9)……………	40	第52図	第46～55号土坑……………	85
第25図	第3号住居跡出土遺物 (10)……………	42	第53図	第5・6号溝跡……………	86
第26図	第3号住居跡出土遺物 (11)……………	43	第54図	第9地点出土遺物 (1)……………	87
第27図	第3号住居跡出土遺物 (12)……………	45	第55図	第9地点出土遺物 (2)……………	88
第28図	第4号住居跡……………	46	第56図	第5号住居跡……………	91
第29図	第4号住居跡出土遺物 (1)……………	48	第57図	第5号住居跡遺物分布図……………	92
第30図	第4号住居跡出土遺物 (2)……………	49	第58図	第5号住居跡出土遺物 (1)……………	93
第31図	第4号住居跡出土遺物 (3)……………	50	第59図	第5号住居跡出土遺物 (2)……………	94
第32図	第1～10号土坑……………	52	第60図	第5号住居跡出土遺物 (3)……………	96
第33図	第11～22号土坑……………	54	第61図	第5号住居跡出土遺物 (4)……………	97
第34図	第23～31号土坑……………	55	第62図	第5号住居跡出土遺物 (5)……………	99
第35図	土坑出土遺物 (1)……………	58	第63図	第5号住居跡出土遺物 (6)……………	100
第36図	第32～45号土坑……………	60	第64図	第6号住居跡……………	101
第37図	第1～4号溝跡……………	61	第65図	第6号住居跡出土遺物……………	103
第38図	土坑出土遺物 (2)……………	63	第66図	第1号竪穴状遺構……………	104
第39図	土坑・溝跡出土遺物……………	65	第67図	第1号竪穴状遺構出土遺物 (1)……………	105
第40図	第1号木炭窯跡 (1)……………	66	第68図	第1号竪穴状遺構出土遺物 (2)……………	107
第41図	第1号木炭窯跡 (2)……………	67	第69図	第56～68号土坑……………	109
第42図	木炭窯跡出土遺物……………	70	第70図	土坑出土遺物 (3)……………	110
第43図	I2グリッド遺物集中区出土遺物 (1) ……………	71	第71図	グリッド出土遺物 (8)……………	112
第44図	I2グリッド遺物集中区出土遺物 (2) ……………	72	第72図	グリッド出土遺物 (9)……………	113
第45図	グリッド出土遺物 (1)……………	73	第73図	第69号土坑……………	115
第46図	グリッド出土遺物 (2)……………	75	第74図	第14地点出土遺物……………	116
			第75図	炭化材顕微鏡写真……………	119

## 表 目 次

第1表	周辺遺跡地名表……………	4	第5表	第4号住居跡出土石器計測表……………	49
第2表	第1号住居跡出土石器計測表……………	13	第6表	土坑・木炭窯跡出土石器計測表……………	69
第3表	第2号住居跡出土石器計測表……………	21	第7表	第3地点グリッド出土石器計測表……………	81
第4表	第3号住居跡出土石器計測表……………	44	第8表	第9地点出土石器計測表……………	89

第9表 第5号住居跡出土石器計測表…………… 98  
 第10表 第1号竪穴状遺構出土石器計測表……108  
 第11表 第12地点グリッド出土石器計測表…114

第12表 試料と方法……………117  
 第13表 測定結果……………117

## 写真図版目次

図版1	掘削作業状況 (1)	第1号住居跡出土遺物 (2)
	掘削作業状況 (2)	第2号住居跡出土遺物 (1)
	実測作業状況 (1)	第2号住居跡出土遺物 (2)
	実測作業状況 (2)	図版9 第2号住居跡出土遺物 (3)
図版2	第3地点調査区西半部全景	第2号住居跡出土遺物 (4)
	第3地点調査区東半部全景	図版10 第2号住居跡出土遺物 (5)
図版3	第1号住居跡	第3号住居跡出土遺物 (1)
	第2号住居跡	第3号住居跡出土遺物 (2)
	第3号住居跡	第3号住居跡出土遺物 (3)
図版4	第3A号住居跡炉体土器	図版11 第3号住居跡出土遺物 (4)
	第3B号住居跡炉体土器	第3号住居跡出土遺物 (5)
	第4号住居跡	第3号住居跡出土遺物 (6)
図版5	第25号土坑	図版12 第3号住居跡出土遺物 (7)
	第26号土坑	第3号住居跡出土遺物 (8)
	第27号土坑	図版13 第3号住居跡出土遺物 (9)
	第28号土坑	図版14 第3号住居跡出土遺物 (10)
	第30号土坑	第3号住居跡出土遺物 (11)
	第31号土坑	第3号住居跡出土遺物 (12)
図版6	第35号土坑	図版15 第4号住居跡出土遺物 (1)
	第37号土坑	第4号住居跡出土遺物 (2)
	第41号土坑	第4号住居跡出土遺物 (3)
	第42号土坑	図版16 土坑出土遺物 (1)
	第43号土坑	土坑出土遺物 (2)
	第3号溝跡	土坑・溝跡出土遺物
図版7	第1号木炭窯跡前庭部	木炭窯跡出土遺物
	第1号木炭窯跡燃焼部	図版17 I2グリッド遺物集中区出土遺物 (1)
	第1号木炭窯跡前庭部横断面	I2グリッド遺物集中区出土遺物 (2)
	第1号木炭窯跡燃焼部横断面	図版18 グリッド出土遺物 (1)
	第1号木炭窯跡前庭部縦断面	グリッド出土遺物 (2)
	第1号木炭窯跡燃焼部縦断面	グリッド出土遺物 (3)
図版8	第1号住居跡出土遺物 (1)	図版19 グリッド出土遺物 (4)

- グリッド出土遺物 (5)  
 グリッド出土遺物 (6)  
 グリッド出土遺物 (7)
- 図版 20 第9地点調査区西半部全景  
 第9地点調査区東半部全景
- 図版 21 第46号土坑  
 第48号土坑  
 第51号土坑  
 第53号土坑  
 第54・55号土坑  
 第5号溝跡
- 図版 22 第9地点出土遺物 (1)  
 第9地点出土遺物 (2)
- 図版 23 第12地点調査区全景  
 第12地点調査区東端全景
- 図版 24 第5号住居跡  
 第5号住居跡遺物出土状況  
 第5号住居跡炉体土器
- 図版 25 第6号住居跡  
 第6号住居跡遺物出土状況  
 第6号住居跡炉体土器
- 図版 26 第1号竪穴状遺構  
 第1号竪穴状遺構遺物出土状況  
 第56号土坑  
 第59号土坑
- 第60号土坑  
 第61号土坑
- 図版 27 第62・63号土坑  
 第64号土坑  
 第66号土坑  
 第67号土坑  
 第67号土坑遺物出土状況  
 第6号溝跡
- 図版 28 第5号住居跡出土遺物 (1)  
 第5号住居跡出土遺物 (2)
- 図版 29 第5号住居跡出土遺物 (3)  
 第5号住居跡出土遺物 (4)
- 図版 30 第5号住居跡出土遺物 (5)  
 第5号住居跡出土遺物 (6)  
 第6号住居跡出土遺物
- 図版 31 第1号竪穴状遺構出土遺物 (1)  
 第1号竪穴状遺構出土遺物 (2)
- 図版 32 土坑出土遺物 (3)  
 グリッド出土遺物 (8)  
 グリッド出土遺物 (9)
- 図版 33 第14地点調査区全景  
 第14地点調査区西半部全景  
 第69号土坑
- 図版 34 第14地点出土遺物



# I 調査の概要

## 1 調査に至る経緯

白岡市は埼玉県東部に位置する総面積24.92km<sup>2</sup>の市で、東西約10km、南北約6kmと東西方向に長い。市域の中央部を南北にJR宇都宮線（東北本線）、東北新幹線、東北自動車道等が貫き、JR白岡駅・新白岡駅周辺や主要地方道（県道）さいたま栗橋線沿いに市街地が形成されている。しかし市街地外縁には水田や畑地、特産の梨の畑等が営まれ、水と緑の豊かな光景が広がる。

昭和29年に篠津村と日勝村及び一部を除く大山村の3村合併により誕生した白岡町は、当初純農村的な町であった。しかし、昭和33年の東北本線の電化、同40年代初頭の県道大宮・栗橋線（現さいたま栗橋線）や国道122号など主要道の開通などをきっかけに、都心から40km圏内である当市はベッドタウン化が顕著となった。平成以降は駅周辺にマンションや集合住宅の増加が目立ち、山林は分譲宅地に姿を変えつつある。中高層のマンション開発も進み、今後も市域における開発の激化が予想される。

また、平成22年度には、市域北部で首都圏中央連絡自動車道（圏央道）と東北自動車道を接続するジャンクション建設（久喜白岡ジャンクション）が完了し、交通網の発達が目ざましい。人口の増加を背景に、平成24年10月には市制を施行した。

このような情勢のなか、白岡市教育委員会では公共及び民間の開発事業と埋蔵文化財保護の調整に努めてきた。開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）に該当する場合は事前に試掘調査等を行い、遺跡の破壊が免れない場合には事前に発掘調査による記録保存を実施している。今回報告する山遺跡（第3・9・12・14地点）の発掘調査は、以下の経緯で調整された。

## 2 調査の経過

山遺跡（第3地点）は、個人住宅建設計画に伴い平成9年4月22日に実施した試掘調査の結果を受け、同年中に発掘調査を行った。調査地点は、遺跡の南寄りに位置し、標高は約16mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成9年 5月12日	調査区西半部表土除去
5月13日	周辺環境整備、基準杭設定
5月15日～6月4日	包含層掘削、遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
6月5日・6日	排土反転、調査区東半部表土除去
6月7日～7月2日	包含層掘削、遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
7月3日	埋め戻し作業、調査終了

山遺跡（第9地点）は、宅地造成計画に伴い平成20年10月1日に実施した試掘調査の結果を受け、翌年度に発掘調査を行った。調査地点は、遺跡の南寄りに位置し、標高は約16mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成21年6月22日	調査区西半部表土除去
6月23日～25日	周辺環境整備、基準杭設定



6月26日～7月6日	包含層掘削、遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
7月7日・8日	排土反転、調査区東半部表土除去
7月9日～13日	包含層掘削、遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
7月14・15日	埋め戻し作業、調査終了

山遺跡（第12地点）は、分譲住宅建設計画に伴い平成27年4月2日に実施した試掘調査の結果を受け、同年中に発掘調査を行った。調査地点は、遺跡の南寄りに位置し、標高は約16mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成27年5月7日・8日	表土除去
5月11日	周辺環境整備、基準杭設定
5月12日～27日	包含層掘削、遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
5月28・29日	埋め戻し作業、調査終了

山遺跡（第14地点）は、宅地造成計画に伴い令和元年11月6日に実施した試掘調査の結果を受け、翌年度に発掘調査を行った。調査地点は、遺跡の南寄りに位置し、標高は約16mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

令和2年 5月27日	調査区東半部表土除去
5月28日	周辺環境整備
5月29日～6月4日	包含層掘削、遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
6月9日・10日	排土反転、調査区西半部表土除去
6月11日～17日	包含層掘削、遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
6月18日	撤収作業、調査終了

## II 位置と環境

### 1 遺跡の立地と地理的環境

山遺跡の位置する地域は、近世村名をとって白岡地区といわれ、地形的には大宮台地白岡支台上にあたる。白岡支台は久喜市除堀付近から、当市の篠津地区、白岡地区、小久喜地区を経て、蓮田市黒浜付近まで南北約9kmにわたって展開している。支台の東側に広がる沖積地は「日川筋」と呼ばれる利根川水系の旧河道である。西側には元荒川の沖積低地が広がっている。

白岡支台の特徴は、北部と南部で標高や低地との比高差が異なることである。北部では標高12m、低地との比高差は1m程と低平なのに対し、南部では標高約15～16m、比高差5～6mと明瞭な崖線を形成する。支台北部の標高低下と沖積地との比高縮小という現象は、加須市を中心とする関東造盆地運動に起因するといわれている。

また支台の東縁と西縁の台地形状も対照的で、西縁は支谷が発達し切り立った崖線を形成するのに対し、東縁は沖積低地との差が不明瞭となるという特徴を持つ。

### 2 歴史的環境

大宮台地白岡支台上に展開する遺跡のうち、山遺跡周辺の代表的な遺跡を通時的に概観する。

旧石器時代の遺跡としては、層位的な出土ではないものの、入耕地遺跡をはじめ白岡支台西縁部の山遺跡やタタラ山遺跡、篠津地区の中妻遺跡や小久喜地区の鬼窪尾張繁政館跡などで、ナイフ形石器や角錐状石器等が出土している。

縄文時代は早期から晩期までの遺跡がみられる。早期初頭の撚糸文期の資料は、篠津の中妻遺跡やタタラ山遺跡などで検出されるが、遺構の確認事例はない。条痕文期の事例では、野島式期から茅山上層式期まで比較的検出量も多く、多数の炉穴や住居跡の検出事例もあり、白岡支台に本格的に人々の暮らしの痕跡が残され始める時期だと見ることができる。

縄文時代前期初頭の花積下層式期では、タタラ山遺跡で70軒に及ぶ住居跡などが検出され、埼玉県下でも屈指の規模の集落であったことが判明した。同遺跡の豊富な遺構、遺物量、ことに造形豊かな石製装飾品群の出土は、今後の該期文化の研究を強力に推進するものとなろう。前期後半以降では、元荒川左岸最奥貝塚として知られる正福院貝塚を擁し、昭和62年の正福院本堂の発掘調査では、黒浜式期の住居跡2軒が検出されている。また、諸磯b式期に茶屋遺跡やタタラ山遺跡で住居跡や土坑等が検出されるものの、全体に集落規模は縮小傾向にある。

再び集落遺跡が確認されるようになるのは、縄文時代中期後半の加曾利E式期からで、山遺跡をはじめ、沖山西遺跡やタタラ山遺跡などでも一定規模の集落の展開が明らかになっている。

縄文時代後期から晩期になると、遺跡数は限定されるものの、一遺跡において膨大な量の遺物を伴うようになる。昭和26年に國學院大學考古学会が発掘調査を行ったことで著名な入耕地遺跡は、正福院貝塚との間に入る小支谷の谷頭を囲むように環状盛土遺構を形成しており、堀之内式期から安行3a～3d式期の遺物が確認される。

弥生時代から古墳時代にかけては遺跡分布が希薄になる。古墳時代前期では入耕地遺跡や茶屋遺跡で住居跡が認められ、一定規模の集落規模の展開が窺われるほか、正福院貝塚では方形周溝墓が検出されている。一方、古墳時代中・後期は中妻遺跡や神山興善寺遺跡で住居跡が数軒検出される程度である。

奈良・平安時代では、中妻遺跡が居住域及び生産域の中心であったと考えられる。中妻遺跡では精錬作業を含む鍛冶操業を行っていた8世紀代の鍛冶工房跡が検出された。山遺跡や鬼窪尾張繁政館跡においても同時期の木炭窯跡が検出されており、鍛冶関連遺構への炭の供給が想定される。

中世では、入耕地遺跡で堀に囲まれた14～16世紀の館跡とともに舶載陶磁器類が多数出土している。また、中妻遺跡においても掘立柱建物跡群や大規模な堀が検出されている。白岡支台は中世の埼玉郡に属し、武蔵七党の野与党の有力一族、鬼窪氏が本貫地としたといわれる。遺跡近辺に存在する白岡八幡宮や正福院、篠津久伊豆神社などは、草創や社殿造立に同氏との関わりが伝承されている。

第1表 周辺遺跡地名表

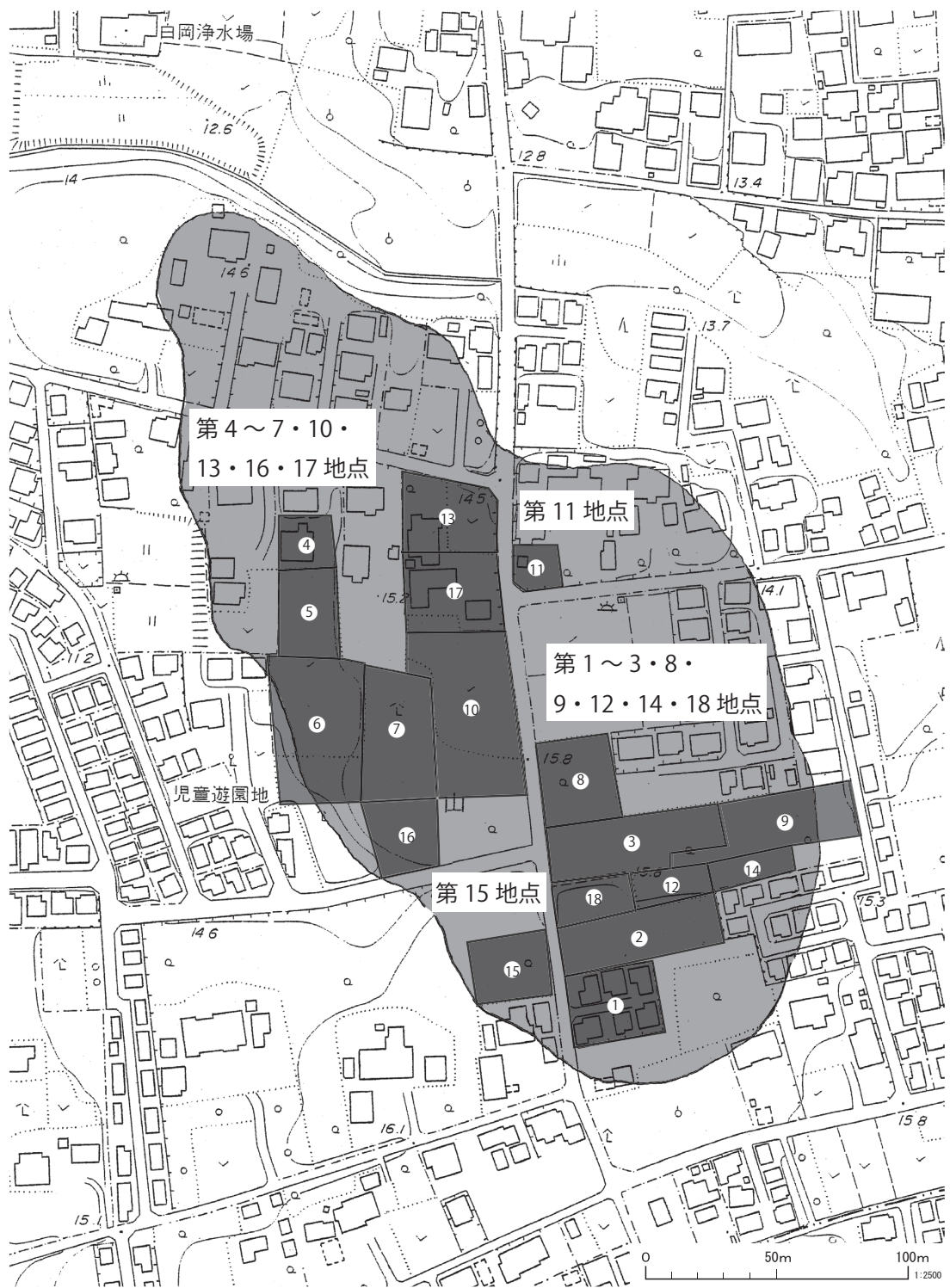
番号	遺跡名	所在地	時代	発掘調査(年度)
1	山遺跡	白岡字山	旧石器、縄文中～後、古墳前、奈良・平安、中世、近世	昭和62・平成2・9・11・12・18・21・23・25・27・令和元・2・3・4
2	中妻遺跡	篠津字中妻・神山・磯・宿	縄文早～後、古墳前～後、奈良・平安、中世、近世	平成12・14・16・18・21・22・24・25・26・27・28・29・令和元・2・3・4
3	神山興善寺遺跡	篠津字神山・白岡字東	縄文前・中、古墳中・後、中世、近世	昭和51・平成5・12・17・25・26・29・令和元
4	西下谷遺跡	白岡字西下谷・東	縄文中、古墳前	
5	白岡東遺跡	白岡字東	縄文早・前・後、中世	
6	七カマド遺跡	白岡字東下谷	縄文後、中世、近世	平成22
7	正福院貝塚	白岡字茶屋	縄文早～晩、古墳前、中世、近世	昭和62・平成13
8	入耕地遺跡	白岡字茶屋・東	縄文早・前・後・晩、古墳前、中世、近世	昭和26・平成3・4・7・15・16・17・19・23・25・28・30・令和2・3
9	茶屋遺跡	白岡字茶屋	縄文早・前・後、古墳前	昭和57・平成6・8・13・14・18・令3
10	新屋敷遺跡	白岡字茶屋	縄文早～後、平安、近世	平成6・令和元
11	タタラ山遺跡	白岡字山	旧石器、縄文中～後、古墳前、奈良・平安、中世、近世	昭和59・平成4・6・11・12・13・25・29・令和2・3
12	鬼窪尾張繁政館跡	小久喜字中村	旧石器、縄文中～晩、奈良・平安、中世、近世	平成7・9・18・19
13	小久喜神辺遺跡	小久喜字神辺	縄文中、近世	





第1図 山遺跡と周辺の遺跡分布図





第2図 山遺跡の位置と発掘調査区

### Ⅲ 調査の成果

#### 1 遺跡の概要と調査地点の様相

山遺跡は大宮台地白岡支台の中央部に位置する。同支台の西側は元荒川の沖積地と接して明瞭な崖線を形成する。崖線縁辺は若干の小支谷が入り込み、それを取り囲むように遺跡が連綿と形成される。山遺跡は北側を「八幡磯」と呼ばれる支谷に、南側を「天神磯」と呼ばれる支谷に挟まれた舌状台地上に発達した集落遺跡で、さらに「天神磯」の谷頭部を囲むように展開する。おそらく、天神磯の谷の南側、本遺跡の西側に隣接するタタラ山遺跡と接する、あるいは一部重複するように広がる可能性が高いものとみられ、これを裏付けるように、タタラ山遺跡からは少数ながら縄文中期の住居跡も確認されている。

18地点に及ぶこれまでの発掘調査では、縄文時代中期後半の加曾利E式後半期を中心とする集落遺跡として把握されており、合計20軒を上回る住居跡、土坑などが検出されている。特に、第12地点の南側に位置する第1地点、第2地点では、加曾利EⅢ式期の竪穴式住居跡群が検出されており、窓枠状モチーフの連なる口縁部文様帯を伴わない、いわゆる吉井城山類型や隆帯による渦巻文を構成するいわゆる梶山類型に該当する良好な土器群を伴う事例として注目される。

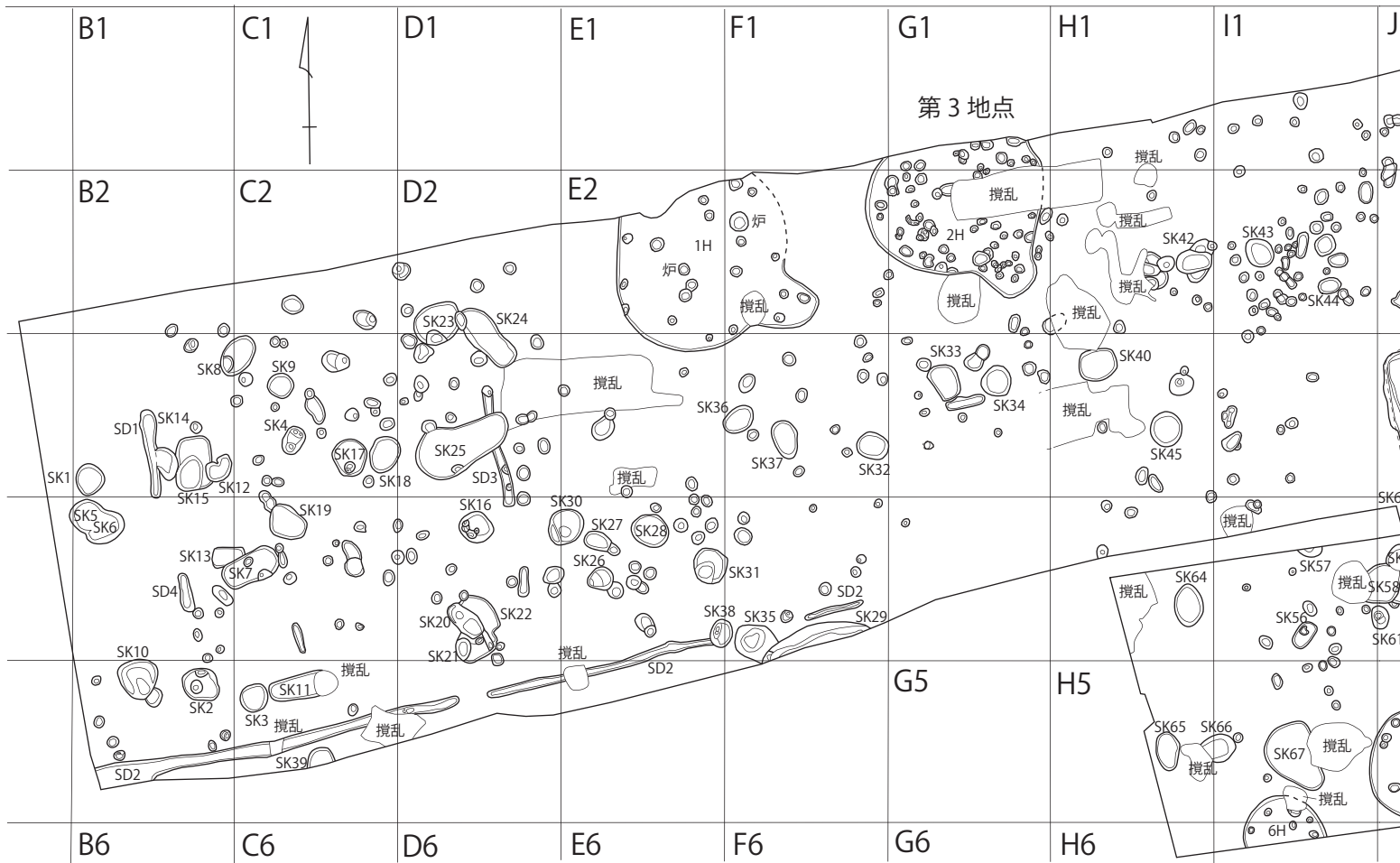
また、第2地点では加曾利EⅣ式期の埋設土器なども検出された。本報告で取り上げる第12地点の第5号住居跡や第1号竪穴状遺構と同時期の事例であり、両者の関連性などにも興味を持たれる。

山遺跡は、縄文時代中期のほかにも旧石器時代、平安時代、中世の人々の生活の痕跡を留める複合遺跡であることがわかっている。特に今回報告する木炭窯跡は興味深いものである。隣接するタタラ山遺跡の名前のもととなった周辺の小名である「タタラ山」から、周辺にはタタラ製鉄の遺構が残されている可能性が高いものと思われ、燃料炭の焼成を行った木炭窯の確認は、地域の言伝えの信憑性を高めるものといつてよい。

視野を広げて見た時、篠津の中妻遺跡での精錬炉を持つ工房跡の検出や鬼窪尾張繁政館跡、沖山西遺跡の木炭窯の検出事例などは、古代末期から中世におけるこの地域での鉄生産のあり方やその後の中世期の様相を理解する上で、極めて重要な視点を投げかけているものといえる。また、広く関連文化財群として捉えようとしたとき、地名、縄文遺跡、古代遺跡、中世豪族などを結びつけるストーリーの構成なども想定でき、地域資料を扱う上からも山遺跡の持つ意義は小さくない。

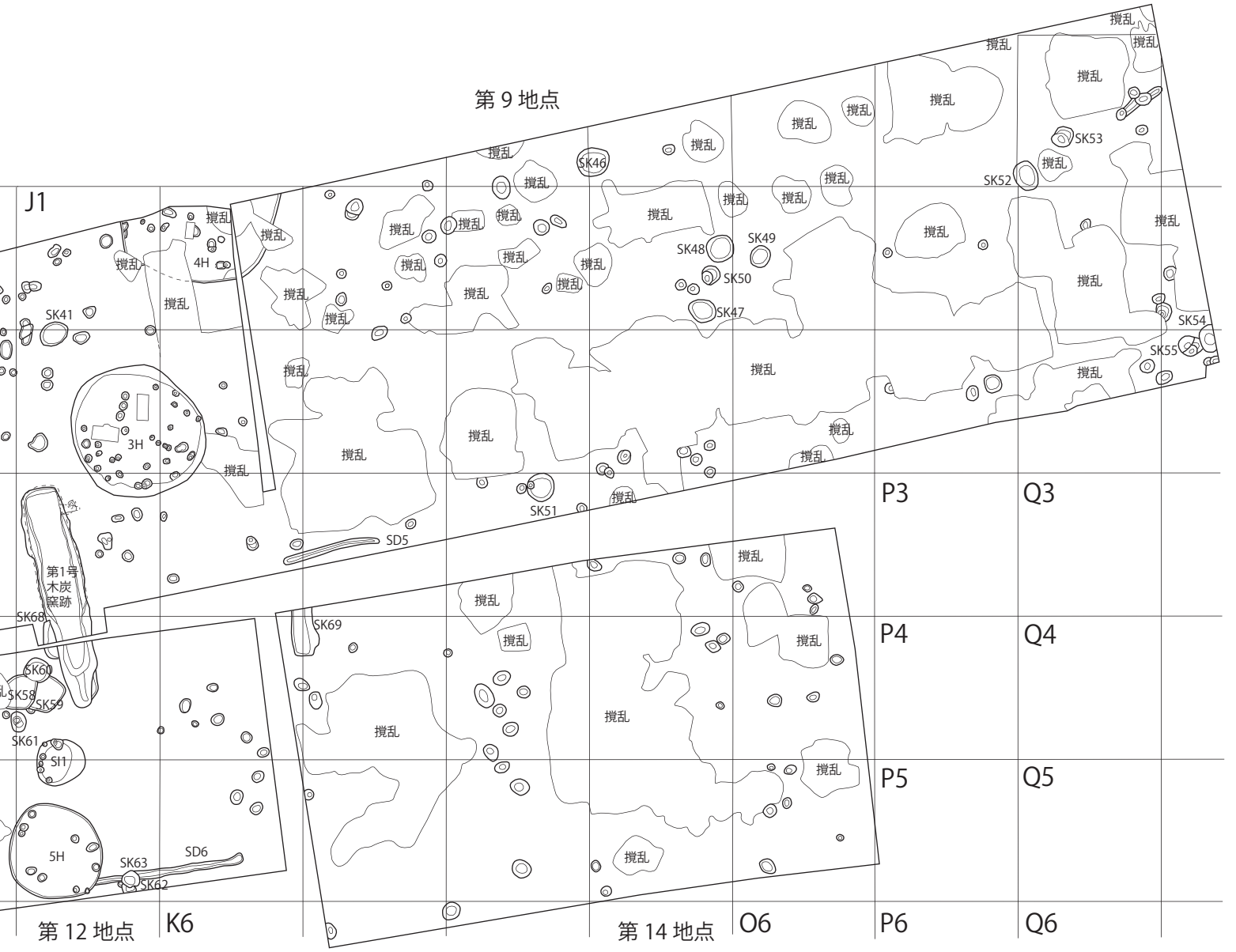
本書をもって報告するのは、このうちの第3地点、第9地点、第12地点、第14地点の4地点で、遺跡の中央からやや南東寄りに位置し、標高は約16mを測る。これらの地点は第3地点を中心に隣接しており、東西方向に長い1つの範囲を形成している。

各地点の遺構の配置は第3図のとおりである。第3地点で検出した第3号住居跡は、2軒の住居跡が重なった状態で確認されており、これを第3A号住居跡と第3B号住居跡として取り扱った。重複する住居跡を1軒ずつとして数えると、本報告地点では計7軒の住居跡を検出したことになる。また、第1号木炭窯跡は第3・9・12地点にまたがって位置しており、調査区の制約上、1基の木炭窯跡を3地点でそれぞれを調査することとなった。第9地点、第14地点では住居跡は確認されておらず、東へ向かってわずかながら下がる地形を考慮するとすでに集落エリアからは外れた集落外縁部に該当する可能性が高い。



第3図 調査区全測図

第9地点



第12地点 K6

第14地点 O6



## 2 第3地点の遺構と遺物

### (1) 住居跡

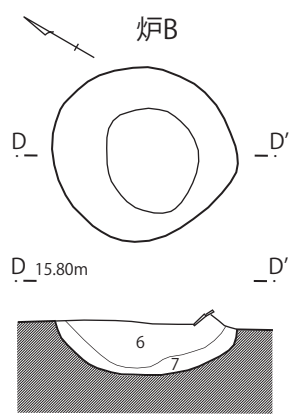
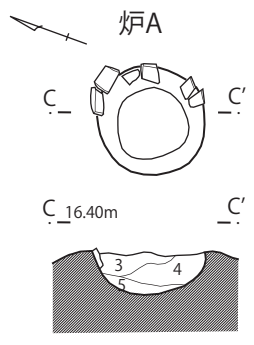
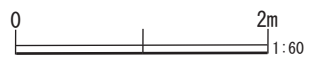
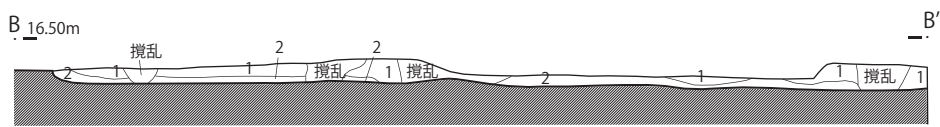
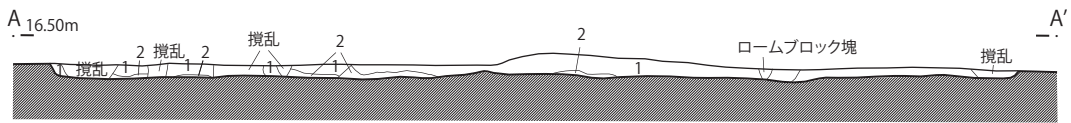
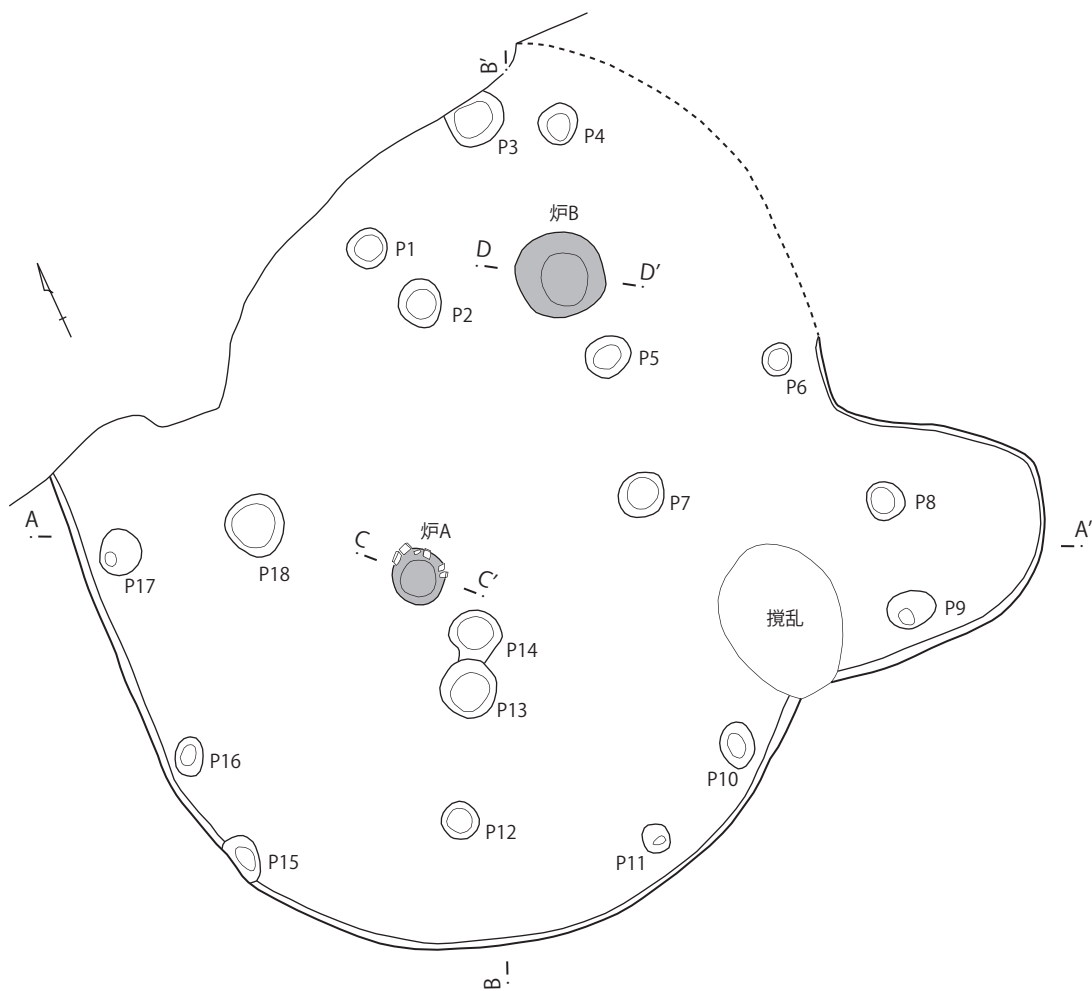
#### ●第1号住居跡（第4図）

E2・3・F2・3グリッドに位置し、北端は調査区外、南端の一部を攪乱で切られる。長径約7.8m、短径約7.2mを測り、平面形は不整楕円で南東側に張出部をもつ。張出部は長さ約1.8m、最大幅約2.1mを測る。確認面から床面までの深さは約0.2mであった。住居跡に伴うピットは18基検出したが、いずれも深さのあるものではなく、支柱穴、支柱穴の別は明らかではない。床面は、目立った硬化は認められない。

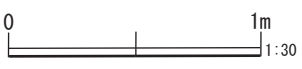
炉跡は、住居跡のほぼ中央（炉A）と北寄り（炉B）で計2基検出した。炉Aの平面形は長径約0.5m、短径約0.4mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。東側に縄文土器の大破片が散在しており、炉体土器が埋置されていた可能性が考えられ、胴部のみのものであるが、器形復元することができた（第5図28）。炉Bの平面形は長径約0.8m、短径約0.7mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

#### 出土遺物（第5・6図）

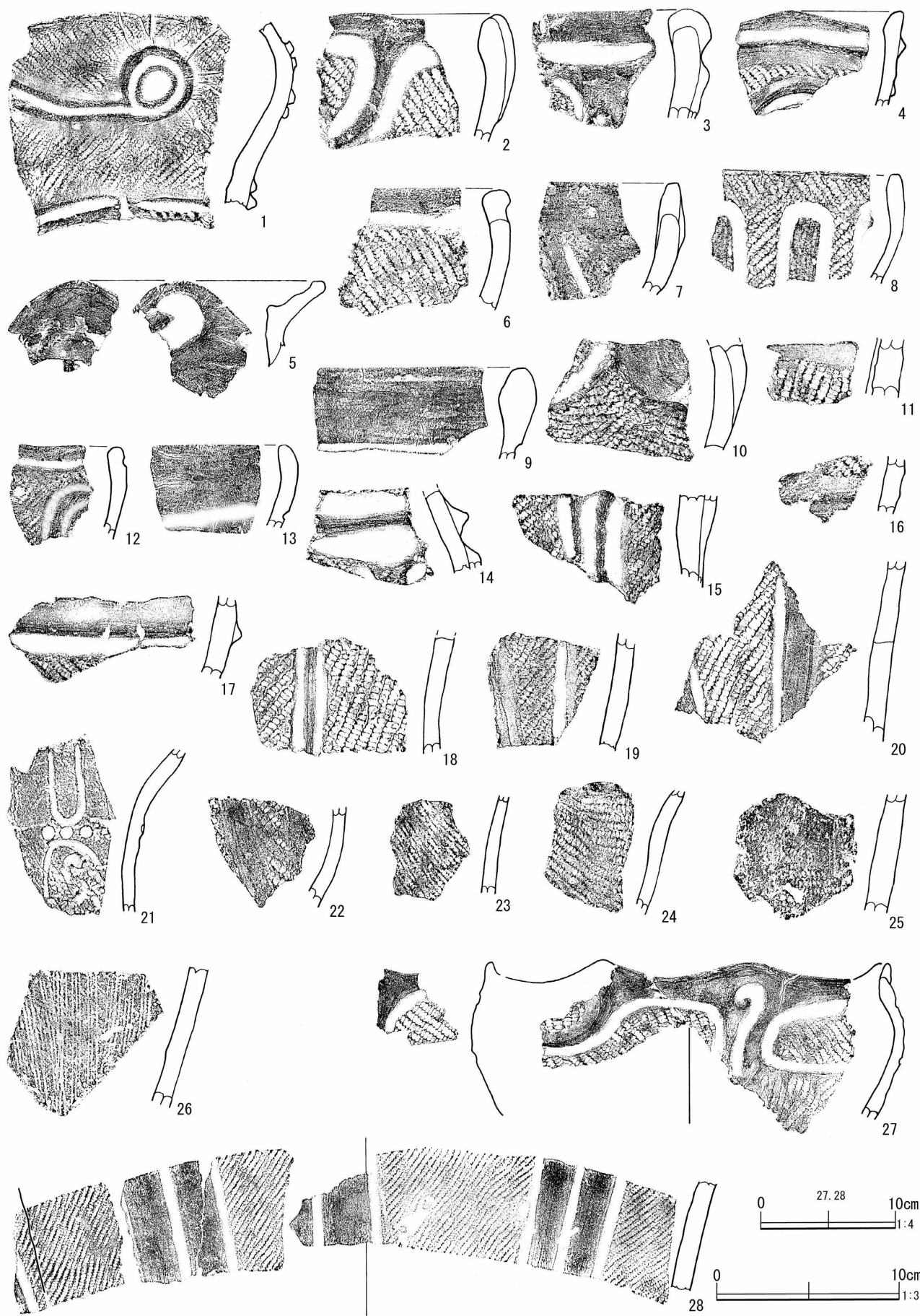
**土器** 第5図1は、キャリパー形深鉢の口縁部付近の大型破片である。口縁部文様帯には、2条の粘土紐で形成した環状浮文から横位に伸びるモチーフが展開する。口縁部と胴部の文様帯の区画にも隆帯が用いられ、一部に刺突が加えられることがわかる。加曾利E I式に該当するが、ほかに本址に該期の資料はなく、混入したものと思われる。2～4は、口縁部に隆帯による窓枠状のモチーフを展開するキャリパー形深鉢の口縁部資料である。3では、口唇部が玉縁状となり、隆帯による渦巻が形成される可能性がある資料で、2、4に比べやや古相を呈する。4は、緩波状縁を呈するものと思われ、断面三角形のシャープな隆帯で口唇部下端を画したあと、大振りの渦巻状の隆帯文で口縁部を飾るものと思われる。5は、無文の浅鉢の口縁部に付された山形突起と思われ、内面に太い沈線で蕨手状のモチーフを形成する。全体に平滑に撫で整形が施される。6は、わずかに内湾傾向を示す平縁深鉢の口縁部資料で、口唇下端に太目の沈線を引き以下には単節RL縄文が施される。7は、口唇部を角頭状に整形する平縁深鉢の口縁部資料で、口唇外縁の無文帯下端は丈の低い隆帯で画され以下には斜行する沈線が看取される。8、12は「∩」状の磨消文を垂下させる平縁深鉢である。8ではわずかに内湾する口唇外縁に単節RL縄文を横位施文し、磨消縄文帯間は単節RL縄文縦位施文である。9、13は口縁部無文の平縁深鉢で、口縁部無文帯下端は横走沈線で画される。9は口縁内面が肥厚する。10は、橋状把手を持つ両耳壺の胴部破片である。11、14～17は、縄文地文に隆帯を貼付し隆帯に沿って撫で整形が施された大型深鉢の胴部資料である。11では単節RL縄文を斜位回転させるもの、14は内湾する資料、15は単節RL縄文縦位回転の地文上に垂下隆帯が、17では単節RL縄文横位回転の縄文上に横走隆帯が観察される。なお、11と17は炉Bからの出土資料である。18～20、22は深鉢形土器の胴部資料である。2条1組の浅い沈線を垂下させ沈線間を磨り消す。18～20は地文は単節RL縄文を縦位から斜位に回転施文するもので、同一個体である可能性が高い。22は胴部に近い部位のもので、地文は単節LR縄文である。21は胴部上半を大きく外反させる深鉢形土器で、口縁部はキャリパー形を呈するものと思われる。胴部中で「U」状沈線と「∩」状沈線が3個の円形刺突を挟んで対峙する。「∩」状沈線帯の中には粗い縄文が施されるとともにS字状の沈線が観察される。22～25は、単節縄文の施された胴部資料である。23、24は単節LR縄文、25は単節RL縄文である。25は、炉B出



- 1H
- 1 暗褐色土 ロームブロック(径1cm)とローム粒子(径0.1cm)をわずかに含む。ボソボソで締まり弱。
- 2 暗褐色土 ロームブロック(径1cm)を多く含む。床面からの持ち上がりと思われる。
- 1H炉A
- 3 暗褐色土 少量のカーボン微粒子と焼土微粒子を含む。粘性に欠ける。
- 4 褐色土 少量の焼土粒子(径微~0.2cm)とカーボン微粒子を含む。粘性に欠ける。
- 5 茶褐色土 カーボン微粒子と焼土微粒子を含む。粘性に欠ける。
- 1H炉B
- 6 暗褐色土 多量のカーボン微粒子と焼土微粒子(径微~0.3cm)を含む。
- 7 褐色土 少量の焼土微粒子を含む。

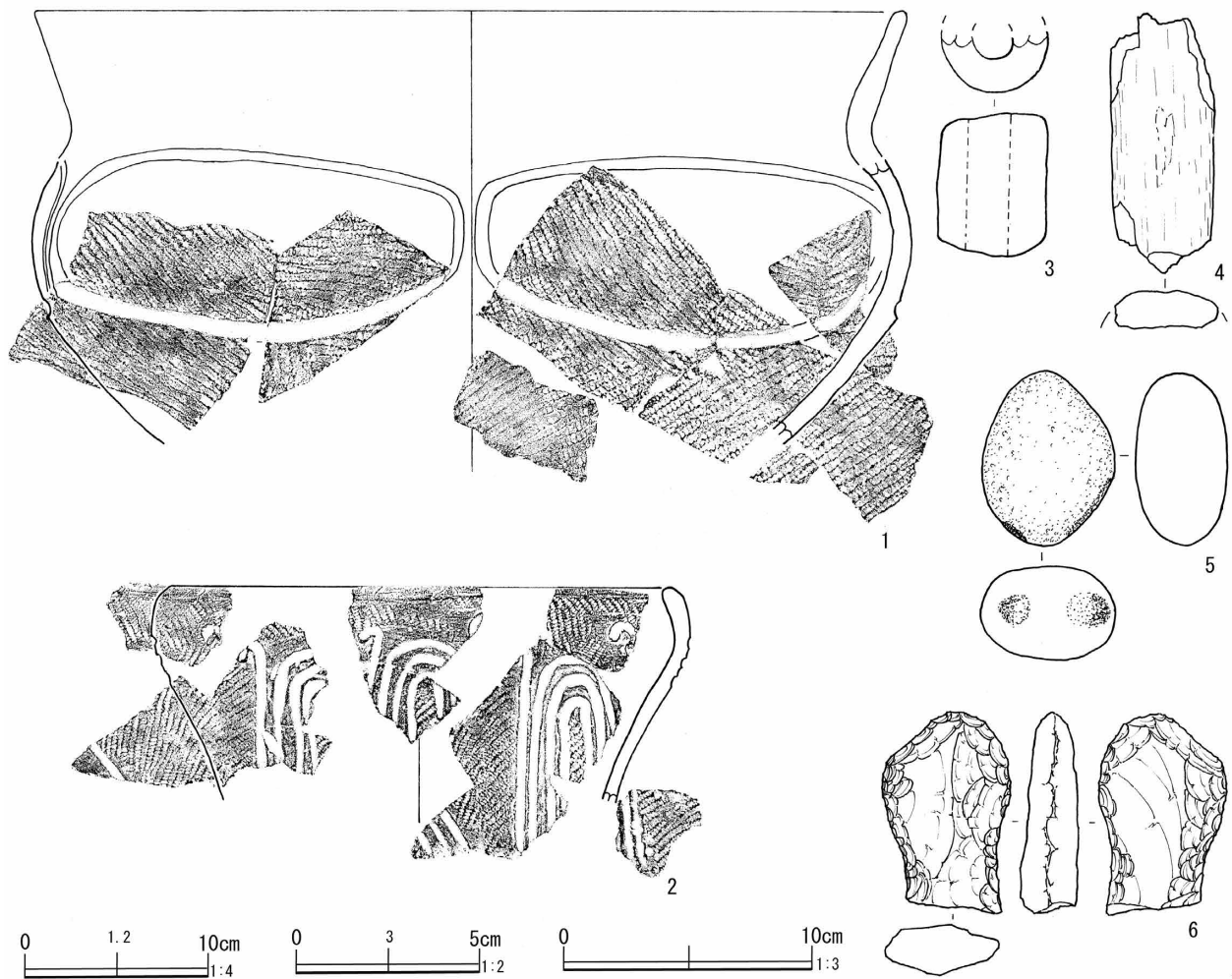


第4図 第1号住居跡



第5图 第1号住居跡出土遺物(1)





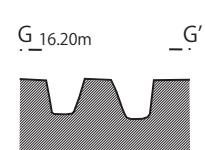
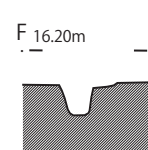
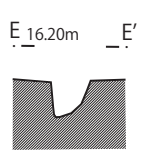
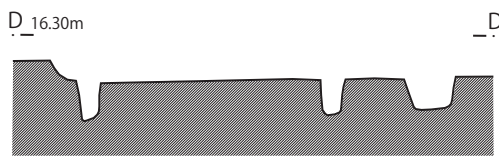
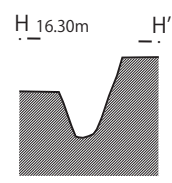
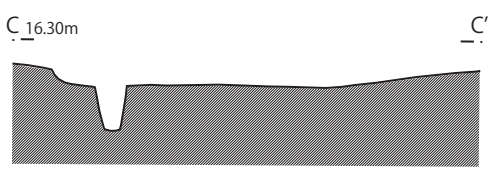
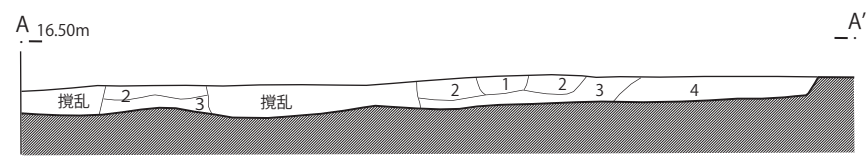
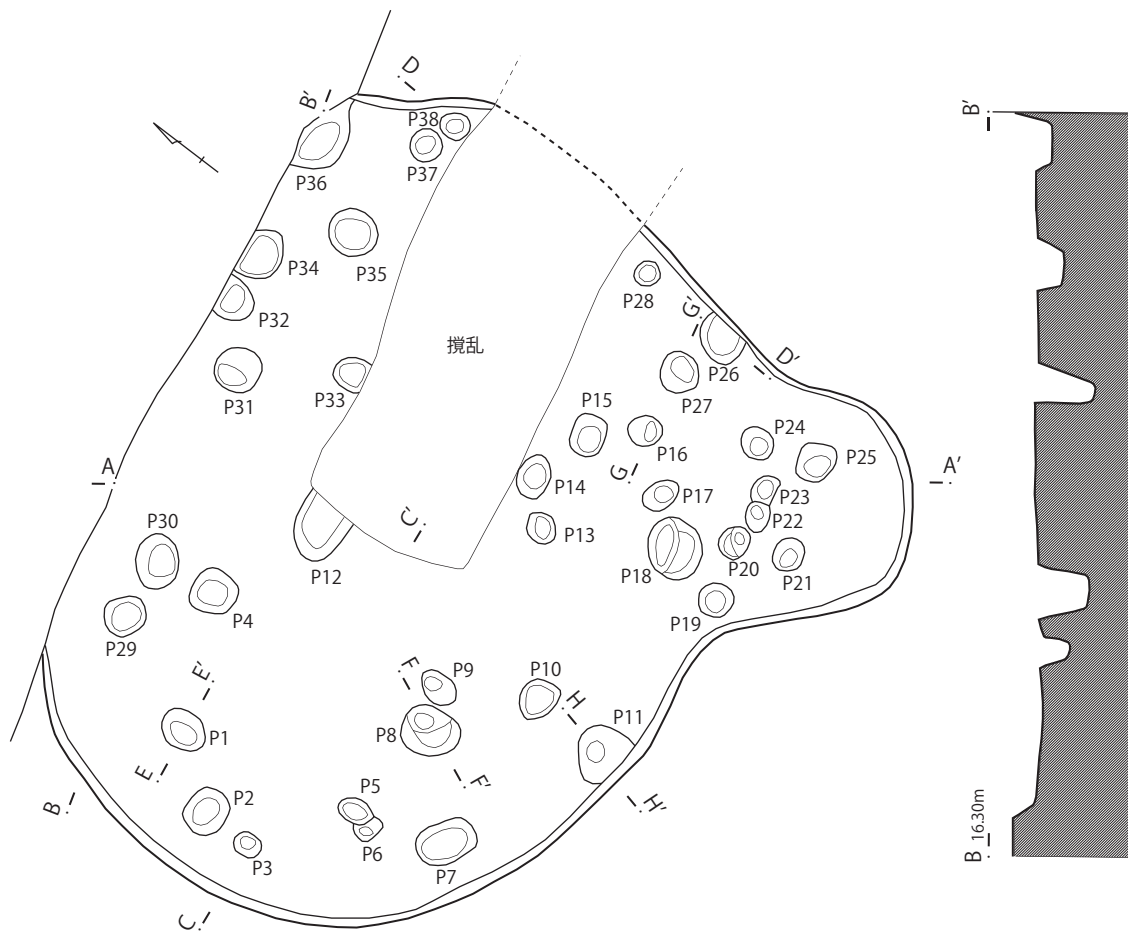
第6図 第1号住居跡出土遺物 (2)

土資料である。26は櫛状施文具による条線文の施された胴部資料である。27は、多単位の波状縁をなすキャリパー形深鉢の口縁部資料である。残存部の最大径は32cm、残存高は12cmほどである。口縁部には横長の楕円区画が配され、要所にS字状沈線が配される。充填される縄文は単節RL縄文で、口縁部楕円区画では横位回転、頸部以下では縦位から斜位回転となる。28は、3条1組の沈線を垂下させる大型の深鉢形土器の胴部資料である。本址炉Aの炉体土器と思われる。沈線間は丁寧に磨り消され、磨消縄文帯間は単節RL縄文が縦位施文される。胴部中位の資料と思われる、残存部の最大径は51cm、残存高は9cmを測る。

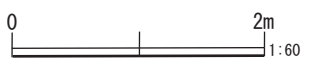
第6図1は、本址覆土及び炉B出土の資料で、頸部に窓枠状の楕円区画を配し無文の口縁部が外反しながら立ち上がる浅鉢または両耳壺と思われる。地文は単節RL縄文で最大径は47cmほどと推定される。2は、口縁部最大径29cm、残存高15cmを測るキャリパー形平縁深鉢である。単節縄文の地文上に単沈線3本1組で「U」状のモチーフや蕨手状のモチーフを描くものである。本資料の一部も炉Bからの出土資料である。3は円筒形の土錘であろう。

第2表 第1号住居跡出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
6	4	石棒	緑泥片岩	(10.5)	4.2	(1.4)	(105.9)	炉B掘方出土・被熱
6	5	敲石	安山岩	7.0	5.3	3.7	186.4	
6	6	打製石斧	ホルンフェルス	(8.0)	5.2	2.3	(112.8)	



- 2H  
 1 黒褐色土 少量のローム粒子を含む。締まり無し。  
 2 褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。  
 3 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子(径0.2~0.3cm)とカーボン粒子を含む。  
 4 暗黄褐色土 少量のローム微粒子とカーボン微粒子を含む。



第7図 第2号住居跡

**石器** 第6図4は緑泥片岩製の石棒残欠と思われる。本址炉Bの掘方から出土したもので被熱している。このことから炉Bは石囲炉であった可能性もある。5は、敲石で楕円形の転石を素材とし、小口面2方向に敲打痕が認められる。6はホルンフェルス製の打製石斧の基部から同中位にかけての資料である。粗く剥離された大型の剥片を素材とし、両側縁に階段状の剥離と敲打を加え成形している。

#### ●第2号住居跡（第7図）

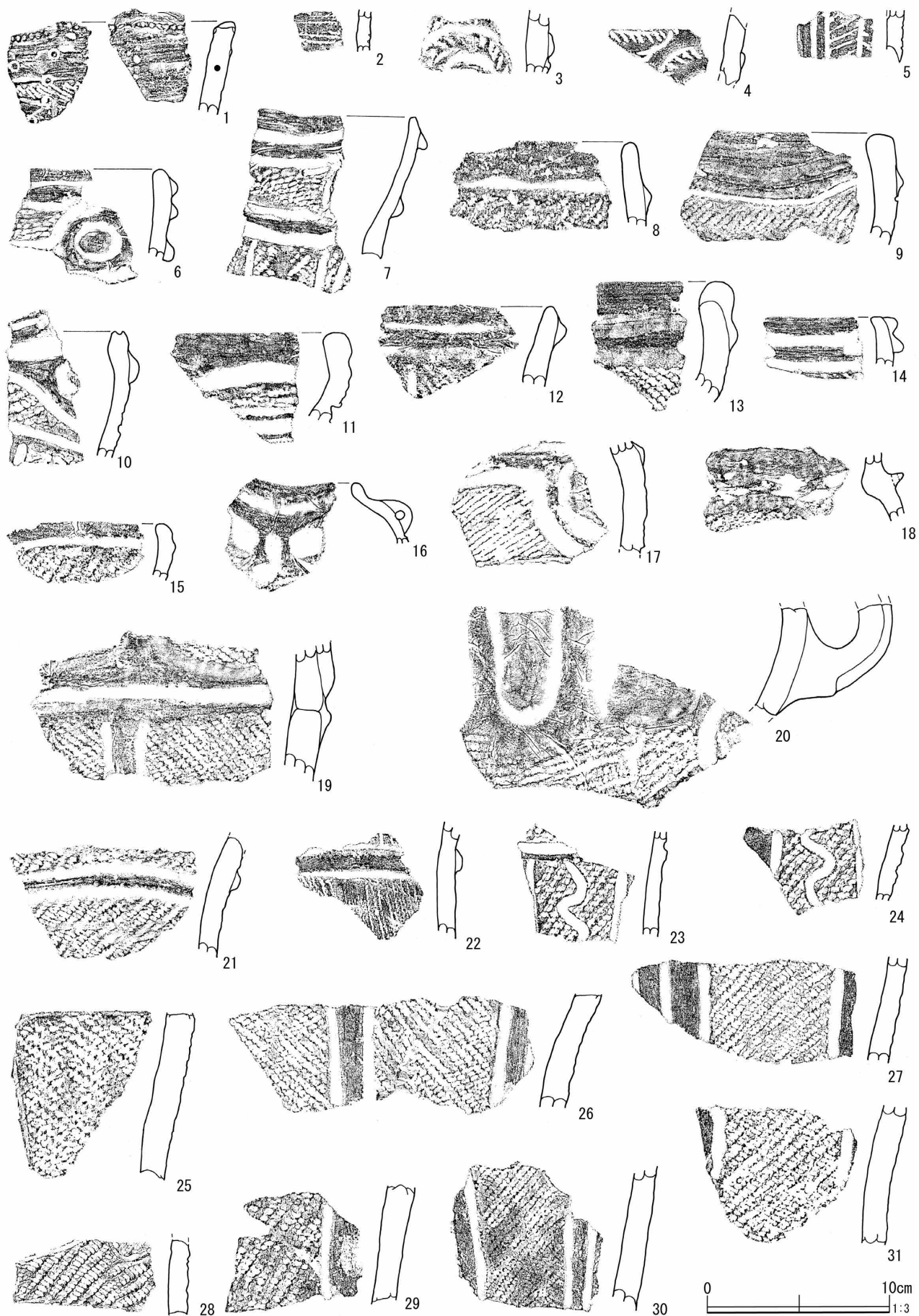
F1・2・G1・2グリッドに位置し、北端は調査区外、東端の一部を攪乱で切られる。東西径6.5mほどを測る。平面形は不整形で南東側に張り出し部をもつ。張り出し部は長さ約1.5m、最大幅約2.2mを測る。確認面から床面までの深さは浅く約0.2mであった。住居跡に伴うピットは38基検出した。P1、P3、P8、P11、P28、P38など壁際の柱穴に深さのあるものが認められるが、規則的な配列や支柱穴支柱穴等の別は把握できなかった。また、張り出し部にかかるピットも集中して確認できたが、明確な対応関係等は把握できなかった。攪乱の陥入もあり炉跡は認められなかった。また、踏み固め貼り等についても把握できなかった。

#### 出土遺物（第8～12図）

**土器** 第8図1は、縄文早期末葉の条痕文系土器群に位置付けられる。円形刺突を結ぶように沈線が引かれる口縁部資料で、口唇部には刺突が見られる。鶉ヶ島台式に該当しよう。2は縄文前期後葉の資料で、半裁竹管による平行沈線が認められる。諸磯式に該当しよう。3～5は、刻みのある隆帯による直・曲線の見られる胴部資料で、中期前半勝坂式期の資料である。市内では出土例の少ないもので、山遺跡でも出土事例は少ない。6、7、10、11は加曾利EⅢ式の比較的古手に相当する深鉢形土器で、6、7は同一個体で、口縁部に隆帯による円文が見られ、ここから両側に隆帯区画が伸びるものと思われる。10は口縁部文様帯に隆帯による渦巻文が配されるタイプ、11は、口縁部の窓枠状区画が扁平なものである。8、9、12～16は、口縁部に隆帯を巡らせる資料である。このうち8、9は断面三角形の隆帯とこれに沿う沈線の組み合わせを持つもので、加曾利E式末葉近くの所産と思われる。12～15は丈の高い隆帯の上下を撫でて凹線上に整形するもので、加曾利EⅢ式期の後半に位置付けられよう。16は、瓢型の注口土器の口縁部資料と思われ、小型の橋状把手が看取される。17、19は大型のキャリパー形深鉢の口縁部付近の破片資料で、前者ではクランク状の隆帯が見られる口縁部、後者は口縁部文様帯の窓枠状の区画から胴部へ移行する部位にあたる。18は鐔状の隆帯が付される頸部資料で、鐔には貫通孔が観察されることからいわゆる有孔鐔付土器に分類される。20は、大型の橋状把手の観察される両耳壺である。把手には長楕円形の沈線文が描かれる。地文は単節LR縄文である。21、22は横走隆帯の配される胴部資料で、前者は単節縄文が、後者は撚糸文が地文として施される。23～31、第9図1～4は縄文地文に磨消文帯が垂下する胴部資料である。23、24は複節縄文の施される同一個体で縄文帯には蛇行沈線が見られる。

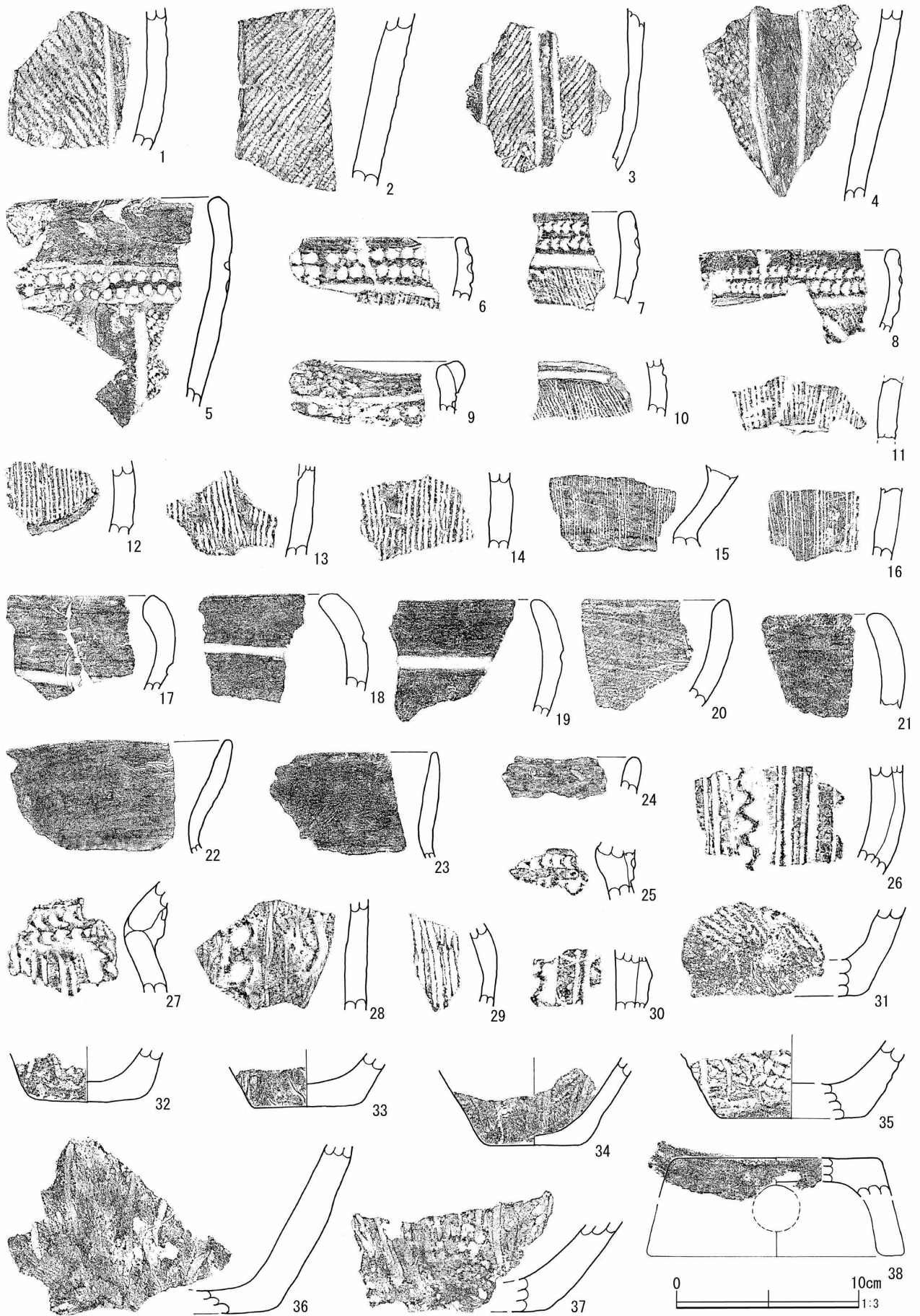
第9図5～9は、口縁部に刺突文列を配した深鉢形土器である。5は、口縁部無文帯下端に2条の凹線を引きこれと重複するように2条の円形刺突列を配するもので、胴部は縄文帯と磨消文帯とが交互に垂下するものとみられる。6～8は磨消された口縁部に2条の刺突列を配するもので、6では円形竹管、7、8ではC字状爪形文列が配される。地文はいずれも条線文で、8では連弧文となる沈線が見られる。9は小突起の付されるタイプのもので、口縁部無文帯を沈線で画しその下部に円形刺突列を配する。10～15、16は櫛状施文具を用いた条線文を地文とする一群で、10及び12では弧線をなす沈線も看取され連弧文土器であることがわかる。13、14は撚糸文を地文とするもので同じく連弧文系の土器群に相当する。17～24は無





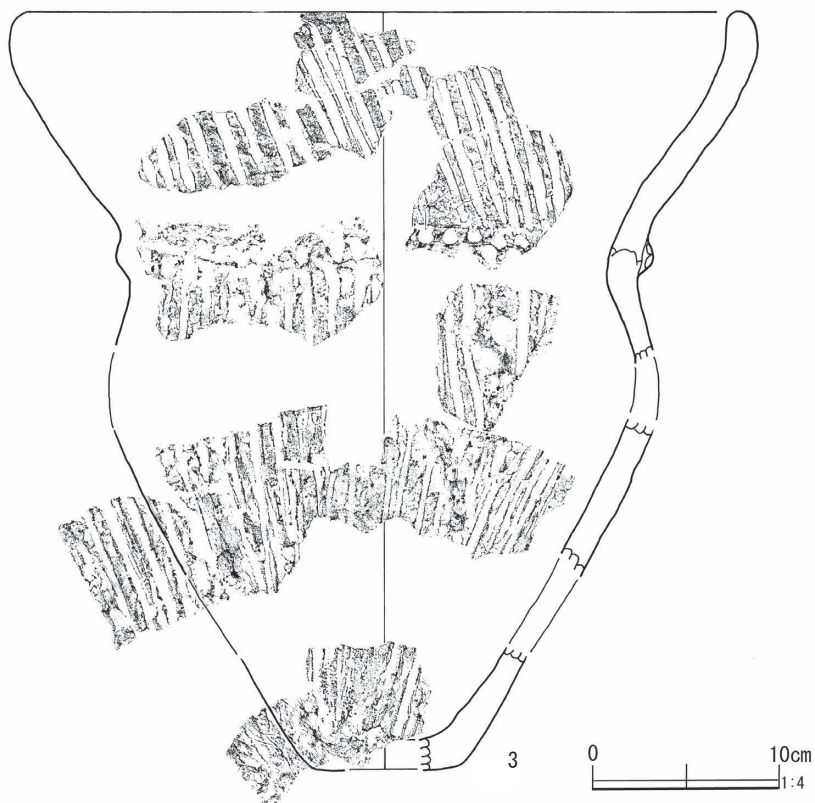
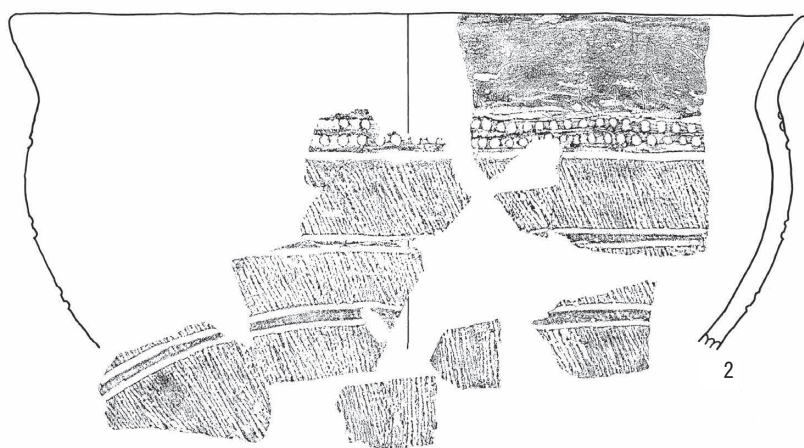
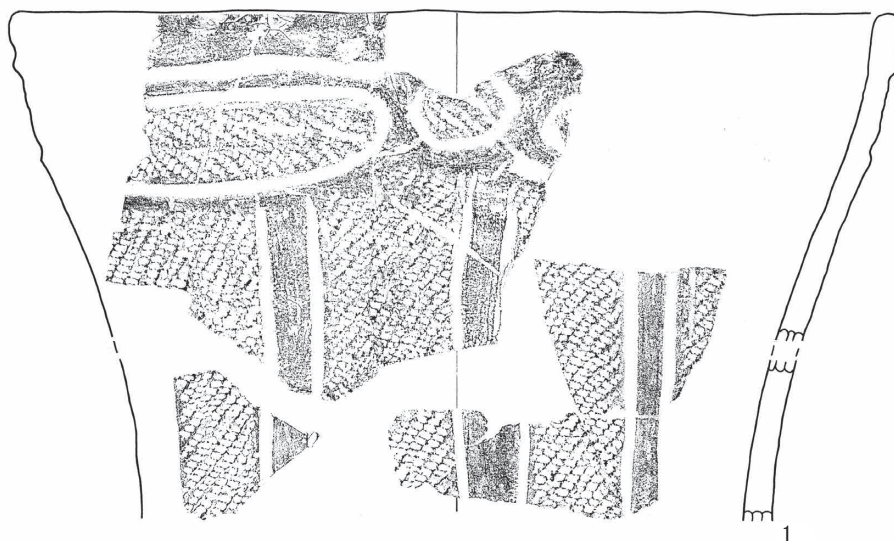
第8图 第2号住居跡出土遺物(1)





第9图 第2号住居跡出土遺物(2)





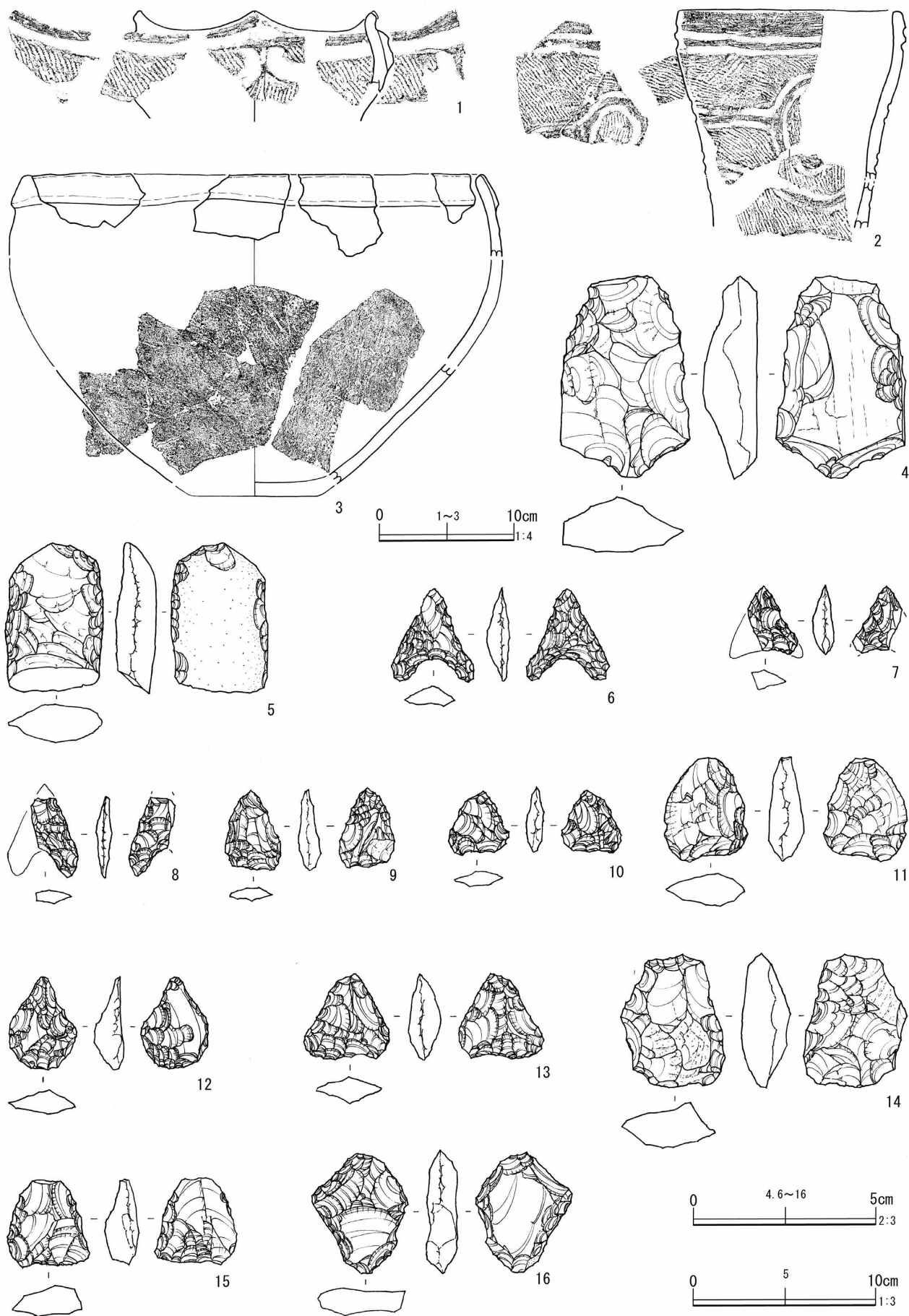
第10图 第2号住居跡出土遗物 (3)

文となる口縁部資料で、17~19では横走沈線が見られる。17~21は内湾傾向を示すが、22、23は直立から外反傾向を示す比較的薄手の資料で、機種が異なることがわかる。25~30は多裁竹管または篋状工具を束ねたようなもので施文したとみられる集合沈線を地文とし、この上に横走または垂下する鎖状隆帯を配する一群で、甲信地方の曾利式土器に比定される。25、27では、頸部の括れ部に半裁竹管による2条の爪形文列が施される。31~37は、本址出土の底部資料を一括したものである。31、32、35では地文の縄文が見られ、35では垂下沈線も看取される。36、37は、地文は見られないものの垂下沈線の末端と思われる沈線が観察される。33、34は無文の資料である。38は、器台型土器である。上面径11.5cm、底径14cm、器高5cmほどと推定される。体部には直径2.5cmほどの円窓が穿たれる。平滑によく撫でられ無文である。

第10図1は、推定口径47cm残存高27cmを測る大型の深鉢形土器である。口縁部はあまり内湾せず頸部でわずかに括れながら徐々にすぼまり底部に至るものと推測される。玉縁状となる口唇部外縁に幅の狭い無文帯を持ち、太目の沈線を上下に沿わせた隆帯で、円形と楕円形の窓枠状区画を形成する口縁部文様帯をもつ。この窓枠状区画内に充填される縄文はRL縄文を横位回転させたものである。頸部以下の文様帯には同一原体を用いた単節縄文を縦位施文する幅広の縄文帯と2条1組の沈線で画した磨消文帯とが交互に垂下する。内面は、口縁部は横位の体部は斜位から縦位の粗い撫で整形が施される。胎土には、粗い砂粒を含むが焼成は良好である。2は、推定口径42cmを測る鉢形土器と思われる。頸部で「く」の字に屈曲し、無文となる口縁部が外反しながら立ち上がる。括れ部直下にその下端を1条の沈線で区画した2条1組の刺突列が巡る。体部は櫛状施文を用いた条線文が全面に施され、この上から2条1組の沈線で画された幅の狭い磨消文帯が2帯巡る。これらの要素から連弧文系土器群に伴うものと推測されるが、器形としては希なものといえよう。内面の整形は口縁部が横位の丁寧な撫で整形、体部は掻きあげるような斜位の整形が施される。胎土は比較的緻密で洗練されたものとみられ、焼成も良好である。3は、口縁部最大径40cm、推定器高40cmを測る、頸部に括れを有する平縁深鉢形土器である。頸部に相互刺突を有する太目の隆帯を巡らせ、胴部には一部「Y」字状となる鎖状隆帯を垂下させる。地文は多裁竹管または篋状工具を束ねたような工具による集合沈線で、口縁部では右下がりの斜位施文、頸部の括れ部以下では縦位施文となる。胎土は砂粒を含むきめの粗いもので整形も粗雑な印象を受ける。曾利式に伴ういわゆる斜行沈線文系の土器群であるが、口唇内面への反しや加飾は見られない。

第11図1は、口縁部最大径20cm、残存高8cmほどを測る比較的小振りのキャリパー形深鉢の口縁部資料である。4単位の波状縁を呈し波頂部は外反する。口縁部に沿って太目の沈線を1条引き、以下に隆帯と太目の沈線を組み合わせて連弧状の窓枠状文を巡らせるようである。地文は単節RL縄文で、残存する口縁部付近では概ね横位に回転施文されている。2は、推定口径17cm、残存高17cmを測る小型の深鉢形土器で、口縁部に最大径を持ち徐々にすぼまる器形を持つようである。口縁部に幅の狭い無文帯を設けこの下端を2条1組の沈線で閉じている。口縁部文様帯胴部文様帯の区別はなく、胴部全体を一つの文様帯として2条1組の沈線で縁どる幅の狭い磨消文帯によって渦巻文とこれを連結するような沈線が観察される。地文は撚糸文である。内面の整形は口縁部では斜位、胴部では縦位の丁寧なものである。連弧文系の土器群であろう。3は、無文の鉢形土器である。胴上位の最大径は36cmほどと推定され、器高は23cmほどと思われる。内湾する口縁部には外面に帯状の隆帯を貼り複合口縁とし、胴部は斜位方縦位のランダムな撫で整形が施される。内湾する複合口縁の鉢形土器は、該期の資料としては類例の多いものではなく、出自系統等を探る必要がある。





第11图 第2号住居跡出土遺物(4)

石器 第11図4は、チャート製の矩形の石器である。裏面と上端面に節理面を残し、両側縁に粗い階段状剥離を施しているが、器体中央部も厚く残されている。刃部に相当する下端部は両面方不規則で粗い剥離を加えているものの刃部として仕上げられてはいないものと思われる。篋状石器未製品と思われる。5は、硬砂岩製の打製石斧の基部から器体中央付近にかけての資料である。厚みのある大振りな剥片を素材とし裏面に自然面を残す。正面中央付近には素材剥片の厚みを減じるための大型の剥離が観察され、その後、側縁に両面からの調整加工が施されている。6~10はいずれもチャート製の石鏃である。6は、凹基無茎石鏃で、基部の抉り込みは比較的深い。正面中央付近に残る左下方からの剥離が主剥離と思われ、やや厚く残る。7は、右脚及び左脚端部を欠く。基部の抉り込みは浅い。右側縁の調整加工は両面とも不規則なものである。器厚を比較的厚く残している。8は、右脚及び先端部を欠く。裏面の加工は全体に不規則で乱雑なものである。正面右側縁の調整加工は比較的丁寧で規則的なものである。9は、やや不整形ながら平基無茎の石鏃である。粗悪なチャートを素材とし、正面中央には先端側、基部側両面からの足の長い剥離が施され、素材剥片の厚みを減じている。正面側の調整加工は左側縁から基部にかけて密度が高い。裏面は先端部を中心に細かな調整加工が施されている。10は小型の平基無茎の石鏃である。正面には左上

第3表 第2号住居跡出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
11	4	篋状石器未製品?	チャート	5.6	3.6	1.5	30.4	
11	5	打製石斧	硬砂岩	(8.1)	5.1	2.2	(125.5)	
11	6	石鏃	チャート	2.6	2.4	0.6	2.3	
11	7	石鏃	チャート	1.8	(1.1)	0.6	(1.1)	攪乱出土
11	8	石鏃	チャート	(2.2)	(1.1)	0.4	(0.9)	P14出土
11	9	石鏃	チャート(粗悪)	2.2	1.5	0.6	1.6	
11	10	石鏃未製品	チャート	1.8	1.6	0.4	1.2	
11	11	石鏃ブランク	チャート	2.9	2.3	0.9	6.2	
11	12	石鏃ブランク	黒曜石	2.6	1.9	0.8	2.8	
11	13	石鏃ブランク	チャート	2.4	2.3	0.8	3.7	
11	14	石鏃ブランク	チャート	3.7	2.6	1.4	13.8	
11	15	石鏃ブランク	チャート	2.4	2.2	0.9	4.2	攪乱出土
11	16	石鏃ブランク	チャート	3.4	2.8	0.8	7.0	
12	1	石鏃ブランク	ホルンフェルス	3.6	3.2	1.1	11.6	
12	2	石鏃ブランク	チャート	3.2	2.8	1.0	8.1	
12	3	2次加工剥片	チャート	3.2	1.4	0.6	2.4	
12	4	2次加工剥片	チャート	3.0	1.7	0.7	2.9	
12	5	2次加工剥片	ホルンフェルス	2.3	1.7	0.4	1.3	
12	6	2次加工剥片	チャート	1.9	1.4	0.6	1.3	
12	7	2次加工剥片	硬砂岩	(1.7)	2.4	0.6	(2.3)	
12	8	削器	チャート	3.2	3.5	1.0	8.1	
12	9	2次加工剥片	チャート	3.6	2.9	1.2	9.6	
12	10	2次加工剥片	黒色緻密安山岩	2.3	1.1	0.3	0.9	
12	11	磨製石斧	緑色岩	(4.2)	(2.3)	(0.9)	(10.3)	小型の残欠
12	12	磨製石斧	緑色岩	5.0	2.0	1.1	19.3	
12	13	敲石	安山岩	8.8	3.7	3.2	186.2	攪乱出土
12	14	敲石	砂岩	(4.8)	6.0	3.5	(138.8)	被熱
12	15	磨製石斧兼用敲石	緑色岩	8.2	3.4	2.3	105.3	攪乱出土



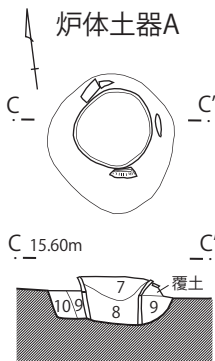
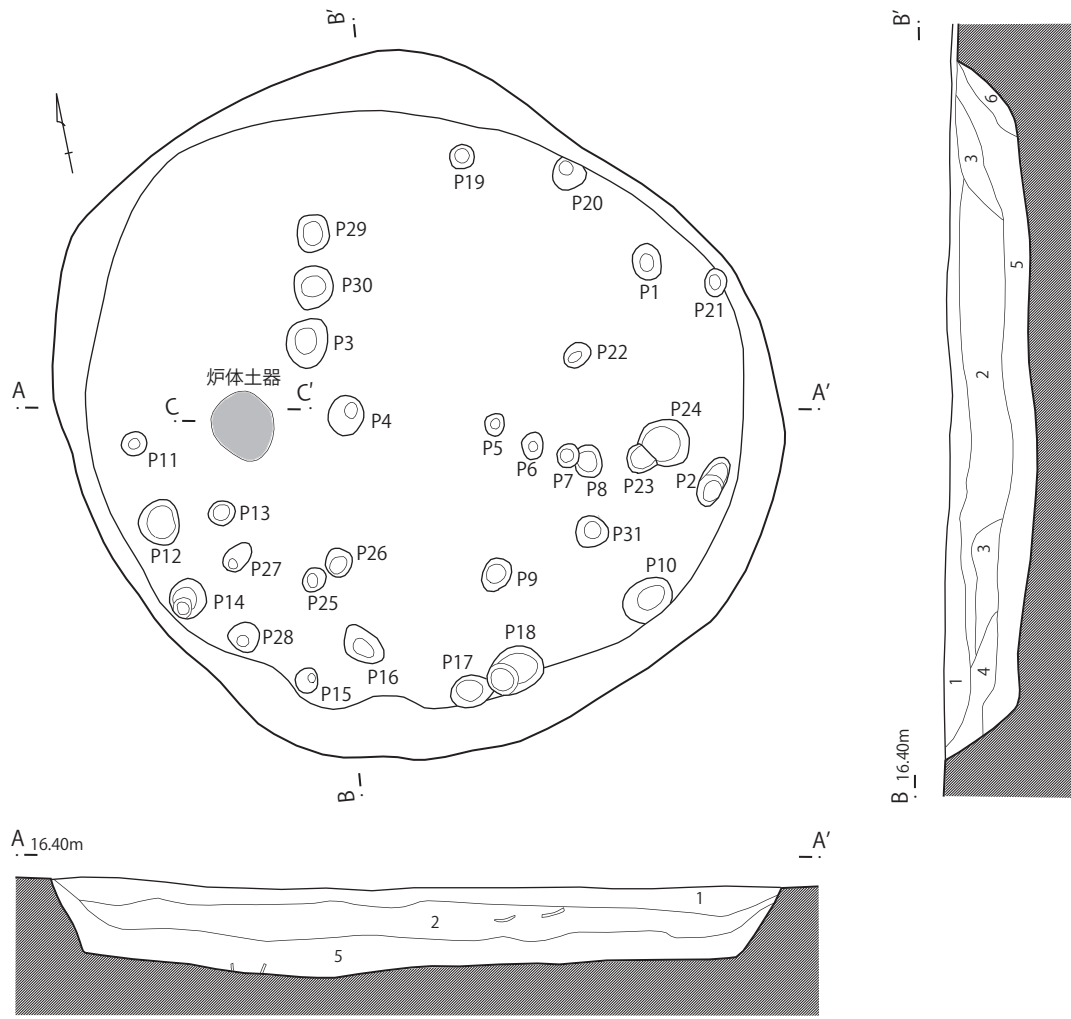
第12図 第2号住居跡出土遺物 (5)

部からの2面の剥離痕が残され、事実上これが素材剥片の主剥離と思われる。基部を粗く剥離し、右側縁に規則的な押圧剥離を加え正三角形に近い形状を整えている。裏面も左上部からの大きな剥離が見られる。正面に見みられた剥離とは交差する剥離となる。裏面右側縁、基部など正面で比較的粗めの加工であった部分は裏面で細かく加工していることがわかる。11～第12図2は2次加工剥片であるが、いわゆる石鏃ブ



ランクと思われる。11、12は打点が右側縁にある横長の不整形剥片を素材とし、打点や打瘤を剥ぎながら成形を進めている。前者では打瘤のあった右側縁部に階段状の成形加工が集中的に施される。器厚は厚く残る。13は、比較的三角形の形状に近づいている。両側縁、基部から階段状の剥離を加えているものの中央付近にかなりの厚みを残している。14は長軸3.7cmを測る大振りのもので、表裏両面に節理面や大型剥離面を残しながら、周辺部からソフトハンマーを用いた長脚の剥離を加えている。15は裏面に主剥離面を残し、正面に両側縁からの大型剥離が観察される。裏面基部側の剥離は打瘤を削ぐものである。平基無茎の石鏃を念頭に整形が進められていたものと思われる。16は、裏面に主剥離を残す扁平な剥片を素材とし、正面上部には厚みを減じるよう両側縁からの長脚の剥離が施される。周縁部には不規則で粗い成形加工が見られるが、石鏃の形状も未だ定まっていないようである。

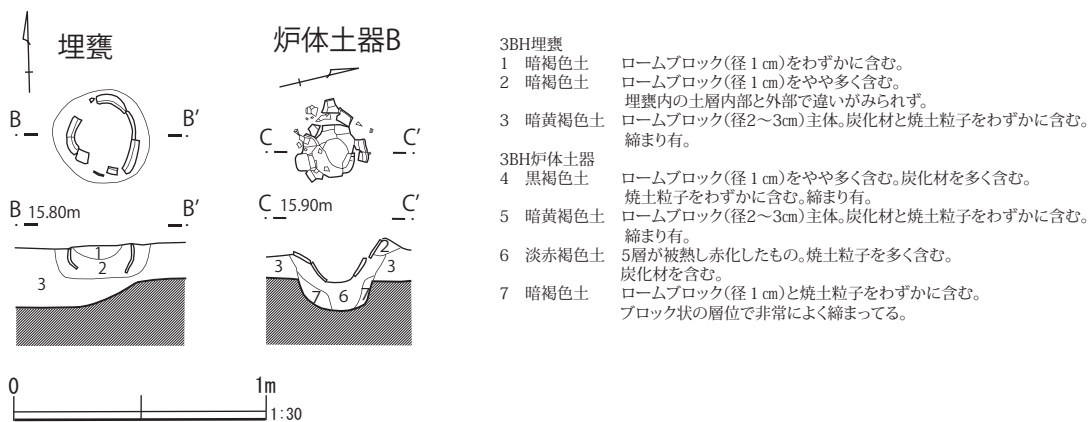
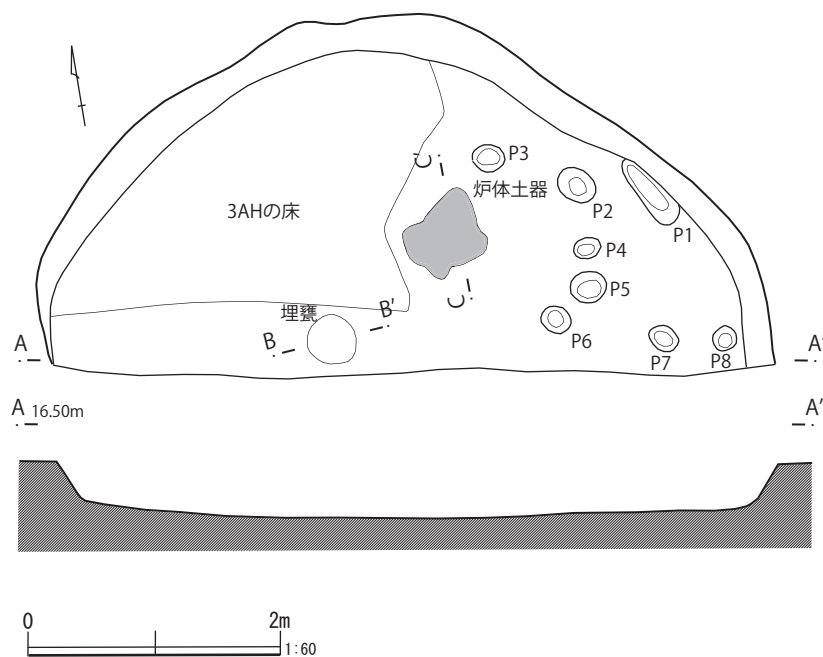
第12図1は、ホルンフェルス剥片を素材とするもので、裏面には素材剥片の主剥離を削る大型剥離が残されている。正面には周囲からの階段状剥離を加えているものの中央付近の厚みはまだ減じきれていない。平面形状は徐々に三角形に整いつつある。2は、裏面に素材剥片の主剥離を残し、上部に剥離を集中させ、打点や打瘤を剥いでいる。正面でも上部に長脚の剥離を重ねているが未だかなりの厚みが残される。3～10は、2次加工剥片である。3は、正面には下方から、裏面には上方からの加撃による素材剥片の主剥離面が残される。上端部では表裏両面からの加撃による成形加工が施される。裏面側の剥離は打瘤を削ぐものであろう。両側縁には正面からの押圧剥離による調整加工が施されている。4は、上面に打点を持つ縦長の剥片を素材とするもので、正面にポジティブバルブ、裏面にネガティブバルブを見ることができる。正面上部から右側縁上部にかけて、ポジティブバルブを削ぐとともにブランディングを意識したと思われる調整加工が施される。5は、正面左側縁側に打点を持つ貝殻状剥片で正面右側縁には表裏からの押圧剥離が加えられる。6も小型の貝殻状剥片で正面基部側及び裏面左側縁に押圧剥離が加えられることがわかる。7は硬砂岩製の横長不整形剥片を素材としたもので、正面に自然面を、裏面に主剥離を残す。周縁部に丁寧に規則的な調整加工が施される。下端は切断面のようである。8はチャートの三角形の剥片を素材とするもので、裏面は主剥離面が残される。正面側にも大剥離が観察されるが、剥片は全体によじれが強い。下端部及び両側縁に細かな押圧剥離が加えられる。削器であろう。9は、三角形の不整形剥片を素材とするもので、先端部から右側縁にかけて丁寧に細かな剥離が加えられている。裏面下部からの剥離は上部の整形後のもので、器厚を減じようとしたものと思われる。上部の作りは錐にも似るが、使用の痕跡は見られない。10は、小型の横長剥片を素材とするもので、正面右側縁に押圧剥離が施されている。11は、磨製石斧の残欠である。正面に磨製石斧としての研磨痕が残され、右縁辺には、敲打による側縁の成形痕が観察される。12は、小型の磨製石斧である。基部と刃部に欠損が見られる。正面、裏面、両側面とも丁寧に研磨痕が残される。裏面基部側には成形時の剥離痕が研磨しきれず残されている。正面側は比較的湾曲度合いが弱く、裏面側は湾曲度合いが少ない。片刃に近い状況で、鑿と考えられる。13は、敲石である。やや角のある長楕円礫を素材とし、下端部と側縁の角部を使用している。14は敲石である。やや厚みのある楕円礫を素材とし、下端部小口面と裏面中央に使用痕が観察される。被熱しており、上部はその影響で欠損したものと思われる。15は、乳棒状の磨製石斧を転用した敲石である。敲打は、上下両端と側面に及ぶが、主な使用は下端面である。



- 3AH
- 1 明褐色土 ロームブロック(径1cm)をわずかに含む。焼土粒子と炭化材を含む。
  - 2 黒褐色土 ロームブロック(径1cm)をやや多く含む。炭化材を多く含む。焼土粒子をわずかに含む。縮まり有。
  - 3 暗黄褐色土 ロームブロック(径1cm)を多く含む。炭化材と焼土粒子をわずかに含む。縮まり有。
  - 4 暗黄褐色土 ロームブロック(径2~3cm)を多く含む。炭化材と焼土粒子をわずかに含む。縮まり有。
  - 5 暗黄褐色土 ロームブロック(径2~3cm)主体。炭化材と焼土粒子をわずかに含む。縮まり有。
  - 6 黄褐色土 炭化材を含む。縮まり有。
- 3AH炉体土器
- 7 暗褐色土 焼土粒子を多く含む。
  - 8 暗褐色土 第7層より色調暗い。縮まり第7層より強い。焼土粒子を多く含む。
  - 9 暗褐色土 焼土粒子を多く含む。焼土ブロックをわずかに含む。
  - 10 暗褐色土 焼土粒子をわずかに含む。ブロック状の土層で縮まり強。



第13図 第3A号住居跡



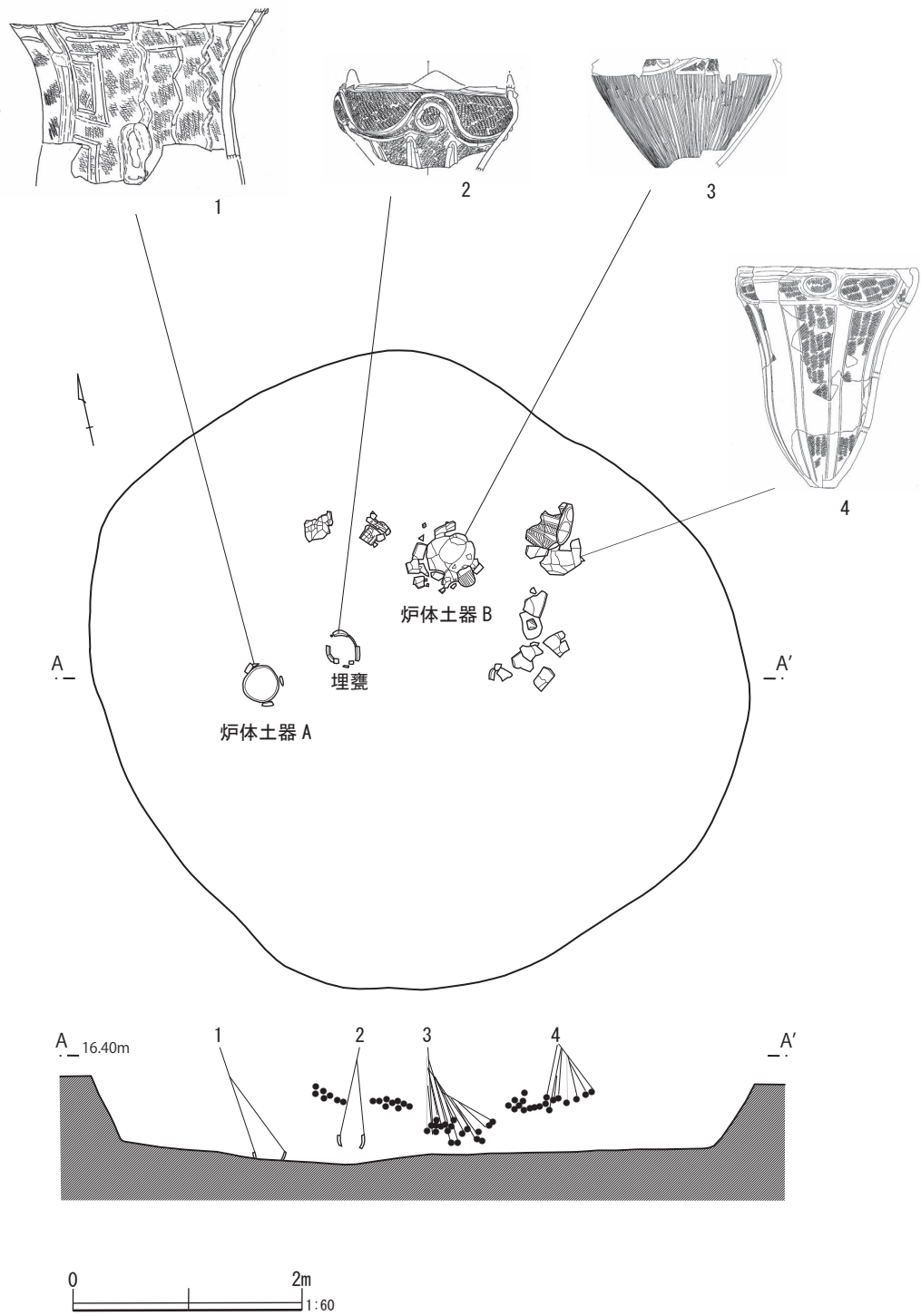
第14図 第3B号住居跡

●第3号住居跡 (第13~15図)

J2・3・K2・3グリッドで検出された2軒重複の住居跡である。当初1軒として調査を進めたところ、南側では上側住居跡の貼り床が甘く下層の住居の床面に到達したことから2軒の重複であることが明らかとなった。構築順に下層の住居を3A号、上層を3B号とした。両者はほぼ同一規模で完全重複していたものと思われる。

第3A号住居跡は、平面形は長径約5.8m、短径約5.6mで不整形円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.7mであった。炉跡は、本址の南北軸では中央付近に位置し、東西軸上を軸長の1/4ほど西に寄った位置に設けられた埋甕炉である。平面形は長径約0.6m、短径約0.5mの不整形円形の掘り方を持ち炉体土器A(第22図1)を埋設する。確認面から炉床までの深さは約0.2mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。埋設される炉体土器の直径は約0.3mを測り、口縁部を欠くものの胴部中位まで認められ、正位で出土した。炉体土器を除くと明確に本址に伴う遺物は多くない。本址のものとしたピットを31基検出したが、この





第15图 第3号住居跡遺物分布图

うちいくつかは上層の3B号住居跡の所産である可能性がある。ピットの配列に規則性は認められない。床面からの深さが30cmを超えるものは、P1が82.5cm、P3が37.6cm、P4が38.5cm、P10が57.6cm、P14が40.1cm、P15が30.0cm、P20が61.6cm、P22が32.2cm、P25が35.0cmの9基である。深い順にP1、P20、P10、P14などが上屋構造に関連する可能性がある。これらはいずれも壁際に穿たれている共通性を持つことがわかる。P22は3B号住居跡のものである可能性があり、P3もこれと対をなすものである可能性が高い。P4は炉に伴う何らかの構造である可能性がある。

第3B号住居跡は、明確に検出したのは北半部のみであり、検出部分での長径は約5.7mを測る。確認面から床面までの深さは約0.4mであった。南半では、明確な床面が検出できず、3A号住居跡の床面まで掘り下がった状態で図化した。

炉跡は本址東西軸の中央わずかに東よりで検出された埋甕炉である。南北軸では北側に寄った位置と見ることができよう。炉体土器B（第22図7）を検出した。炉床面からはやや浮いた状態で検出されているものの内部から焼土交じりの覆土が検出されており炉体土器とみてよい。炉の掘り方の平面形は長径約0.3m、短径約0.2mの不整形円形を呈す。埋設された炉体土器は直径約0.4mを測る浅鉢形土器で、内湾する口縁部文様帯付近から胴部下半に至るもので正置した状態で出土した。また、炉の南西側1mほどの位置で埋甕（第22図3）を確認した。埋甕は直径約0.4mのピットに正位で埋設されたもので、キャリパー形土器の口縁部から頸部の資料である。ピットは本址の床面と判断できた北東ブロックで確認した8基は本址に伴うものと判断できるが、3A号住居跡の中のいくつかが関連するものと考えている。本址のP6と3A号住居跡のP22はほぼ同一位置にあり本址の床面からの深さを足すとP22は深さ52cmほどと考えられる。このピットと炉跡の位置を手掛かりに推測すると、炉跡を挟んでちょうど反対側にある3A号住居跡のP3が浮かび上がる。この2本と対をなす可能性を持つのが、P25とP31である。この4本が上層の3B号住居跡の支柱穴である可能性が高いと思われる。

上層の3B号住居跡は、加曾利EⅢ式期の所産であるのに対し、下層の3A号住居跡は加曾利EⅠ式期の所産と思われ、埋まりきらない3A号住居跡の窪地を利用して3B号住居跡が形成されたものと思われる。

#### 出土遺物（第16～27図）

**土器** 第16図1は2条の擦糸側面圧痕が口縁部を巡るもので、前期末葉の所産と思われる。2は、屈曲する口縁部に刻み目文と相互刺突が観察されるもので、中期初頭五領ヶ台式土器と思われる。3～27は、中期前半、阿玉台式、勝坂式に比定される一群である。3は、わずかに内湾する口縁部に丈の高い隆帯を貼りその両脇に篋状施文具による角押文が施されるもので、阿玉台式の古い段階の資料と思われる。4、5は、角頭状の口唇部を持つ平縁の口縁部資料で、篋状の施文具で鋸歯状の角押文が施された同一個体である。6は、単節LR縄文を横位に施す口縁部資料で、口唇内面に隆帯を貼るものである。7は、口唇部を内削ぎ状に整えたもので、口唇外面に刻目文を密に施す。8は、大型の深鉢形土器に付された口縁部装飾突起の一部とみられるもので、外面に櫛状施文具による縦位の集合沈線を施し、口唇端面には短い刻みを施している。9は、直立する短い口唇部を持つ短頸壺風の資料で、屈曲部には櫛状施文具による簾状文風の刺突が見られる。胴部には斜行する丈の低い隆帯とこの両側に沿う平行沈線が観察できる。10は、丁寧に撫でられた器面に竹管内皮を出すような押し引き刺突列が施される。11～18は、隆帯とこれに沿う刺突列、あるいは隆帯上に刺突列を持つ胴部資料である。11は、やや縦長の瘤状突起を起点とする刺突列が見られるもの、12は、片側を横走隆帯に掛けながら押し引きの刺突列を施したもの、13は、環状浮文から放



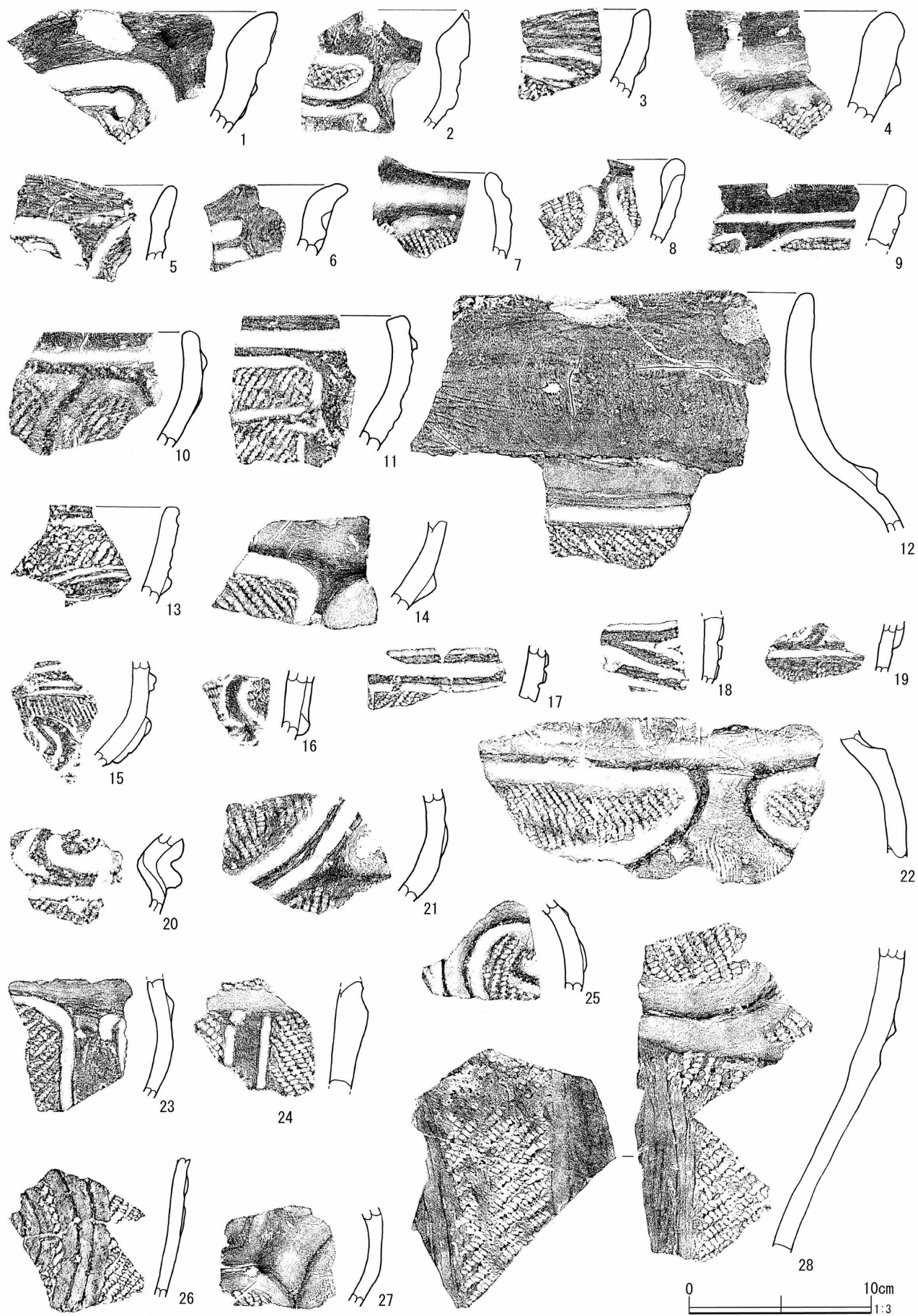
第16图 第3号住居跡出土遺物(1)



射する隆帯上に篋状施文具による刺突を加えるものである。隆帯の両側は棒状工具による沈線が見られる。地文は斜位回転の単節縄文である。15はいわゆるキャタピラ文、16は横位の長楕円区画内に径の大きな多裁竹管を用いた連続刺突が観察されるもの、18は横位に展開する不整形の蛇行隆帯に沿って連続刺突文が施されるものである。19は、斜行する隆帯上に縄文を施すもので、体部には集合沈線による幾何学文が描かれる。20は、単沈線で縁どられた太く丈の高い隆帯とその周囲を短沈線や条線で埋めるものである。21は、半裁竹管の内皮を用いて縦走する半肉彫りの沈線や渦巻状の沈線を描きこの間を集合沈線で埋める土器である。胴下半の資料で、残存部の最大径は8~9cm程度を測る。22、27は連続刺突の看取されるもの、23、25は斜行する半肉彫りの沈線と体部を埋める横走集合沈線が見られるもの、24は、隆帯上に刺突列の見られる横位区画をもつもの、26は横走隆帯とその下位に集合沈線の見られるものである。28~第17図13は、加曾利E式の比較的古手の段階に位置付けられる資料の口縁部破片である。28~31は、口縁部に隆帯によるしっかりと巻いた渦巻文とこれに連なる楕円区画の観察されるものである。29では区画内は集合沈線で充たされるようである。31は3A号住居跡出土である。32~36は、同時期のもので渦巻文などの施されない部分である。33は口唇部外側にやや上向きの幅狭文様帯を持つ。一部に相互刺突が見られる。中峠式系譜のものと思われる。35、36は撚糸文を地文とするもので同一個体である。35は3A号住居跡の炉体土器内からの出土である。37は波状縁の波頂部資料で、両側へ斜行する隆帯が見られる。38~第17図11、13は、口縁部に横位展開する窓枠状文や円文、渦巻文などが施される一群である。38は口唇部内面を肥厚させるもの、39は緩波状縁または山形の突起の付されるものである。41は緩波状縁をなすもので、楕円区画内には単節RL縄文が斜位に施される。42、43は大口径のキャリパー形深鉢である。

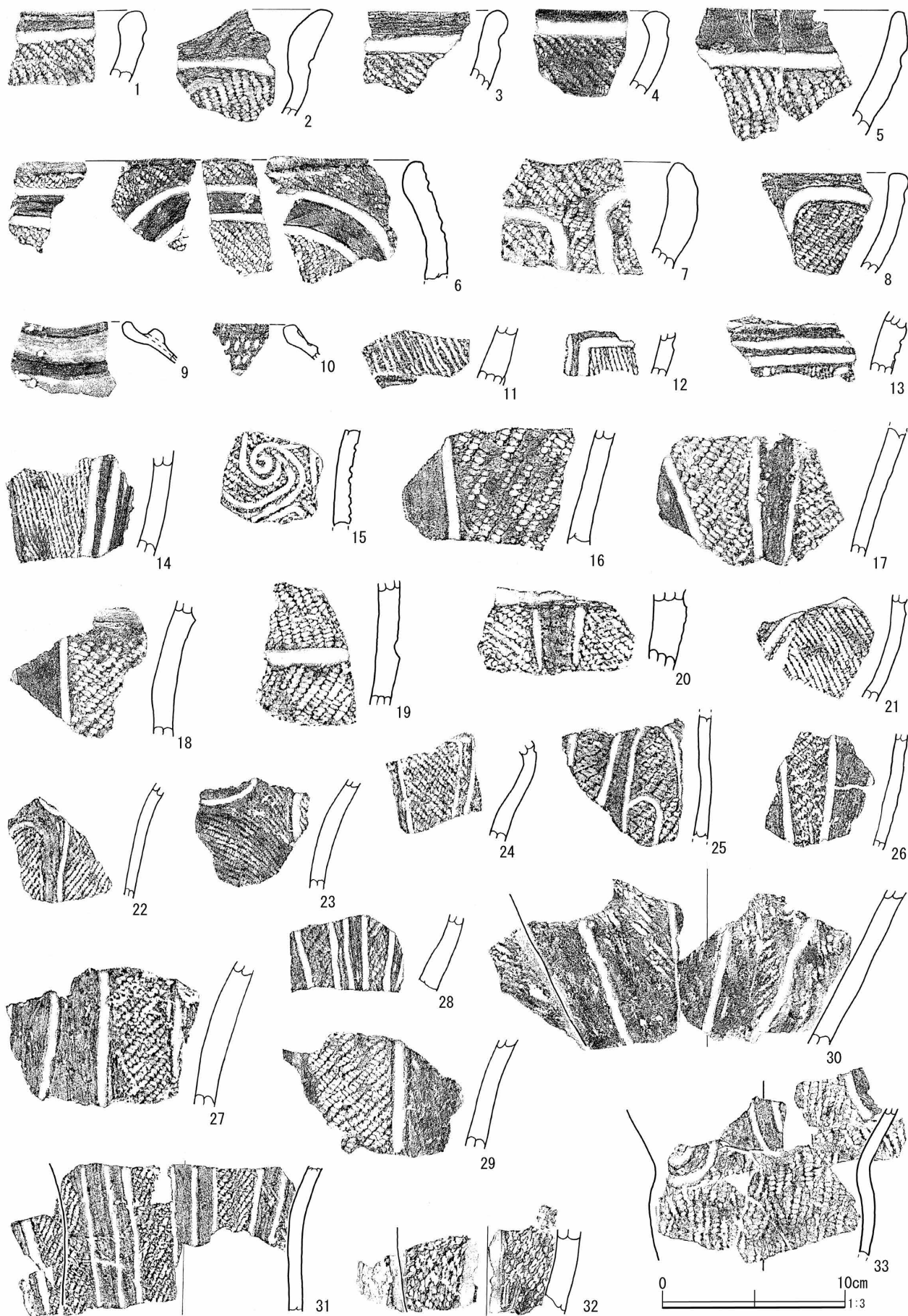
第17図1~3、5~8は緩波状縁または山形の突起を持つものである。1は口縁部が外反傾向をもつ。2は山形突起の例であるが、渦巻文と突起の位置は合致していない。6も山形突起を持つ例で、突起部は外側へ引き出されるように外反する。8は、隆帯を伴わず沈線だけで表現されるものである。4は大口径の深鉢形土器と思われ、口縁部無文帯の下に断面三角形の横走隆帯を見ることができる。10では、口縁部を巡る丈の高い隆帯を起点としてやや開き気味に垂下する2条の隆帯が看取される例である。12は、直立する無文の口縁部を持つ短径壺ないし両耳壺と思われる。口縁部外面は縦位に撫でられた後横位の撫でも観察される。胴部の縄文は単節RL縄文を横回転させたものである。14~29は、同時期の口縁部周辺の資料を一括したものである。15は、細い撚糸文の地文上に横位展開するS字状の隆帯文が施されるもので、16図35、36などと親和性が高く3A号住居跡の時期を示すものと思われる。16は、垂下する弧状の隆帯が看取されるものである。19などと近似する口縁部文様帯の区画隆帯と思われる。17、18は口縁部文様帯を形成する横走隆帯の一部と思われる資料である。20は、口縁部文様帯に施された渦巻文の一部と思われる隆帯である。21以降は3B号住居跡に伴うものと思われる資料で、加曾利EⅢ式段階に下るものである。21は口縁部文様帯下部の資料で左下がりの隆帯が頸部まで下がる大きな区画を形成するもの。22は、短頸壺または両耳壺の肩部の資料で、胴部上位に展開する横長の窓枠状の区画文が観察される。区画内には単節RL縄文が充填され、胴部には櫛状施文具による蛇行条線が施される。23も小型の短頸壺と思われ、頸部の横走隆帯下に「∩」状の縄文帯と蕨手文が観察される。24は口縁部文様帯から胴部文様帯へ移行する部分で、太い凹線が口縁部楕円区画下端、以下に垂下する磨消文帯が観察できる。25は、3条1組の隆帯で胴部に渦巻文を形成するものである。26、27を含めいわゆる梶山類型といわれる一群に相当する。28は、口縁部に横位展開の楕円形区画を持ち、胴部には磨消文帯と縄文帯が交互に垂下する。





第17图 第3号住居跡出土遺物(2)





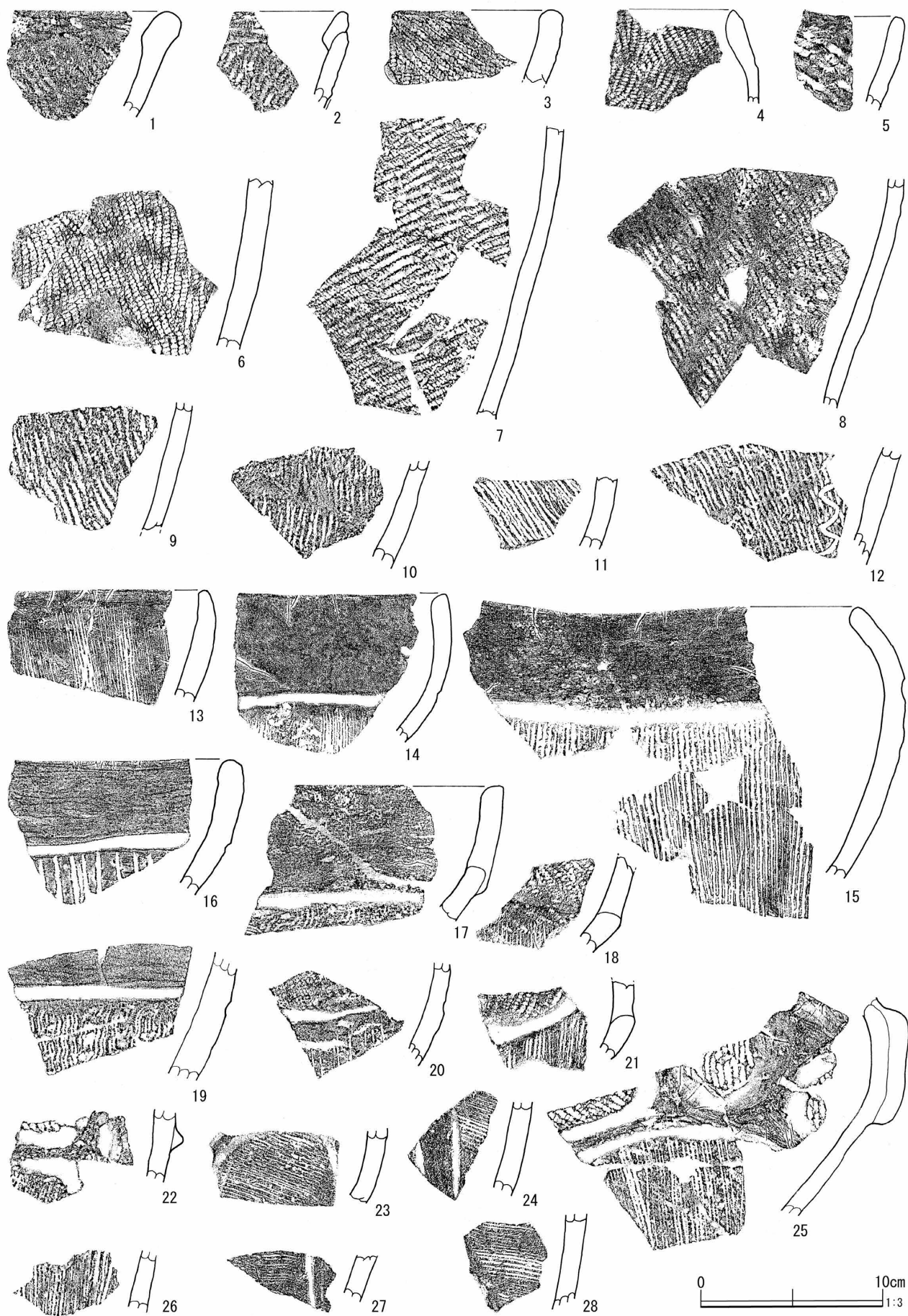
第18图 第3号住居跡出土遺物(3)

第18図1～5は、口縁部を1条の沈線が巡るものである。2は山形突起を持つもの、5は開き気味となる資料である。6～8は口縁部に独立した文様帯を持たず、「∩」状の磨消文帯または沈線が描出されるものである。6は、内湾する口縁部に2条1組の沈線で画された磨消文帯が観察できる。7は山形突起がつくものであろうか。8でも彫の浅い撫でるような凹線で「∩」状文が描出される。9、10は大きく内傾する薄手の土器で、瓢型の注口土器の口縁部資料と思われる。前者では口縁部に沿って巡る隆帯に貫通孔が穿たれていることがわかる。後者では2列の紡錘形の刺突文列が観察される。11～14は地文に撚糸文を持つ胴部資料である。12は鉤の手に屈曲する沈線区画内に撚糸文が施されたもの、13は、太目の平行沈線の下部に撚糸文が見られるもの、14は垂下する磨消文帯の脇に撚糸文が施されるものである。15は、単節LR縄文を縦位施文した上から短沈線で渦巻文等を描出するもので、加曾利E I式段階に相当しようか。18～20は、口縁部文様帯の下端から胴部へ移行する部位の資料である。18、20では磨消文帯と縄文帯が縦位に施される。16、17、26～32は、磨消文帯と縄文帯が縦位展開する胴部資料である。このうち30は、残存部の最大径が22cmを測る胴部下半の資料である。地文は無節縄文である。31は、残存部最大径15cmほどの小型の深鉢の胴部資料で、3条1組の垂線で構成される磨消文帯と縄文帯とが交互に縦位展開する。地文は単節RL縄文の縦位施文である。32は、残存部最大径10cmほどの小型の胴部資料である。厚みがあり底部に近い部位であるものと思われる。太目の凹線に画された幅の狭い磨消文帯と複節縄文の施された縄文帯が縦位展開する。33は、残存部最大径15cm、残存高12cmほどの小型の深鉢形土器である。胴部に括れを持ち、括れの上部に鉤状の磨消文が数単位巡るようである。地文は単節RL縄文を斜位回転させたものである。内面の整形は、括れ部以下では縦位の搔き上げるような撫で整形、括れ部の接合部以上では横位の撫でが加えられる。焼成は良好である。

第19図1～5は、縄文の施された口縁部資料である。1は、外反する口唇内面を肥厚させるもの、2は口唇部内側に1帯の粘土紐を貼り付け内側に張り出すようにした例である。4は、キャリパー形深鉢の口縁部資料である。おそらく「∩」状の磨消文の施されるものと思われる。5は、無節縄文の施された口縁部資料である。6～9は縄文の施された胴部資料である。6は、単節RL縄文を斜位回転させたもの、7は0段3条の単節RL縄文を縦位回転させたものである。8、9は単節LR縄文を縦位回転させたものである。10～12は撚糸文の施されたもので、12では、蛇行沈線が看取される。13は、櫛状施文具による条線が施された浅鉢形土器の口縁部資料である。14～17は、口縁部に幅の広い無文帯を置き、その下端を画する太目の沈線以下の胴部に櫛状施文具による条線文または、集合沈線が施される浅鉢形土器の口縁部資料である。15は、口縁部の内湾傾向の強いもの、16では、多裁竹管または、篋状工具を束ねて集合沈線を引いたもの、17、19は、櫛状施文具による蛇行条線の施された資料である。18、20、21は、破片上部に縄文が、下部に条線が施された例である。22、25は、口縁部に円文や楕円文の展開する文様帯を持ち、胴部に条線の施された浅鉢形土器である。23、24、27、28は「∩」状磨消文で形成された区画の内外に横位に施文される条線文を持つ胴部資料である。26～第20図5は、縦位の条線文が観察される胴部の資料である。

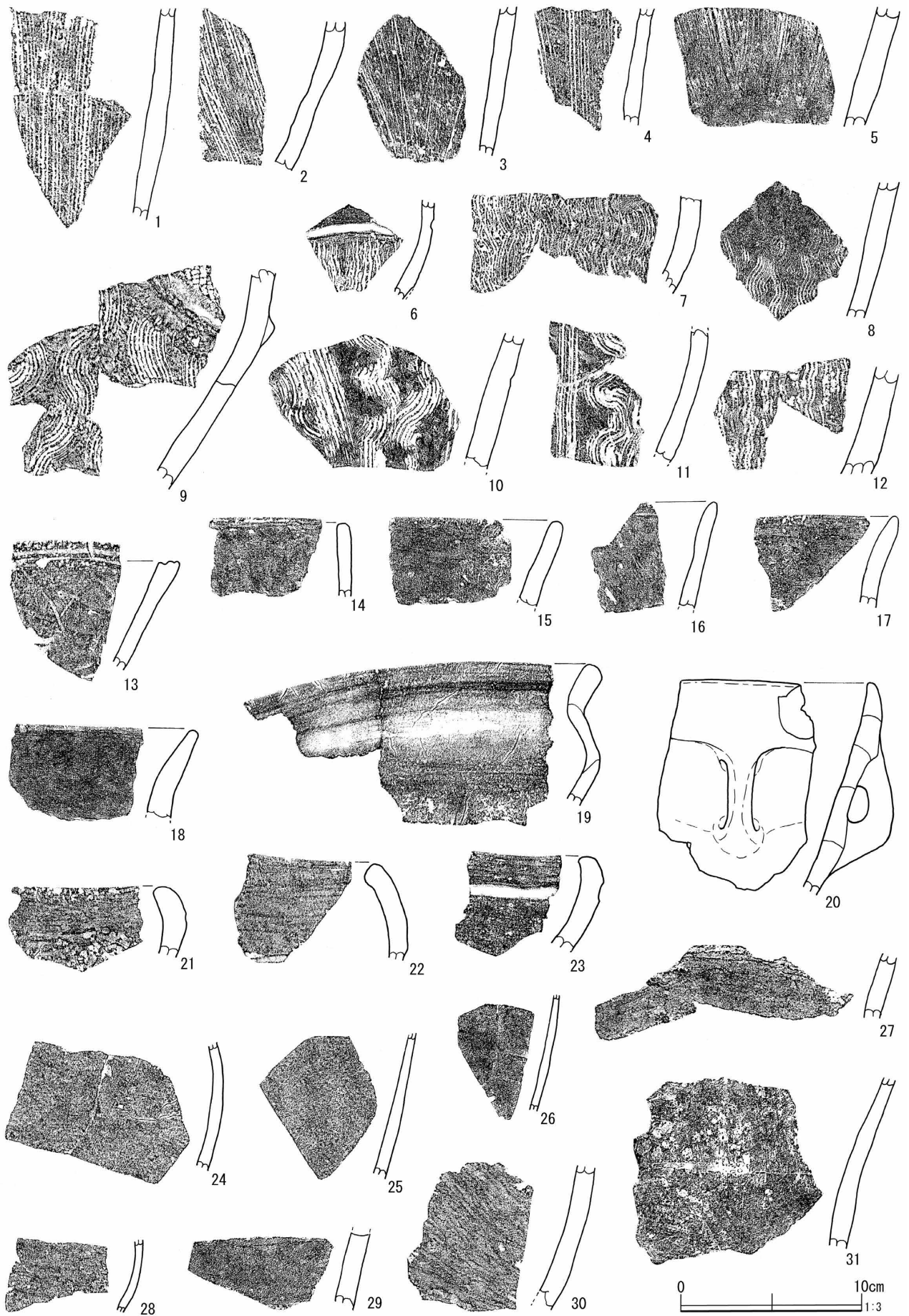
第20図9～12は蛇行条線文の観察される胴部資料である。9は、隆帯で区画される縄文の充填される口縁部文様帯を持つ。両耳壺であろうか。7は施文具の支点を変えながらコンパス文状に施文するもの、10、11は同一個体と思われ、蛇行条線と直行条線を交互に垂下させる例である。13～23は無文の口縁部資料である。13は、口唇部に沈線を巡らせるものである。中世の播鉢である。14～18は、直立からやや外反する無文の口縁部である。浅鉢あるいは短頸壺等の口縁部資料と思われる。19は、算盤玉状の浅鉢



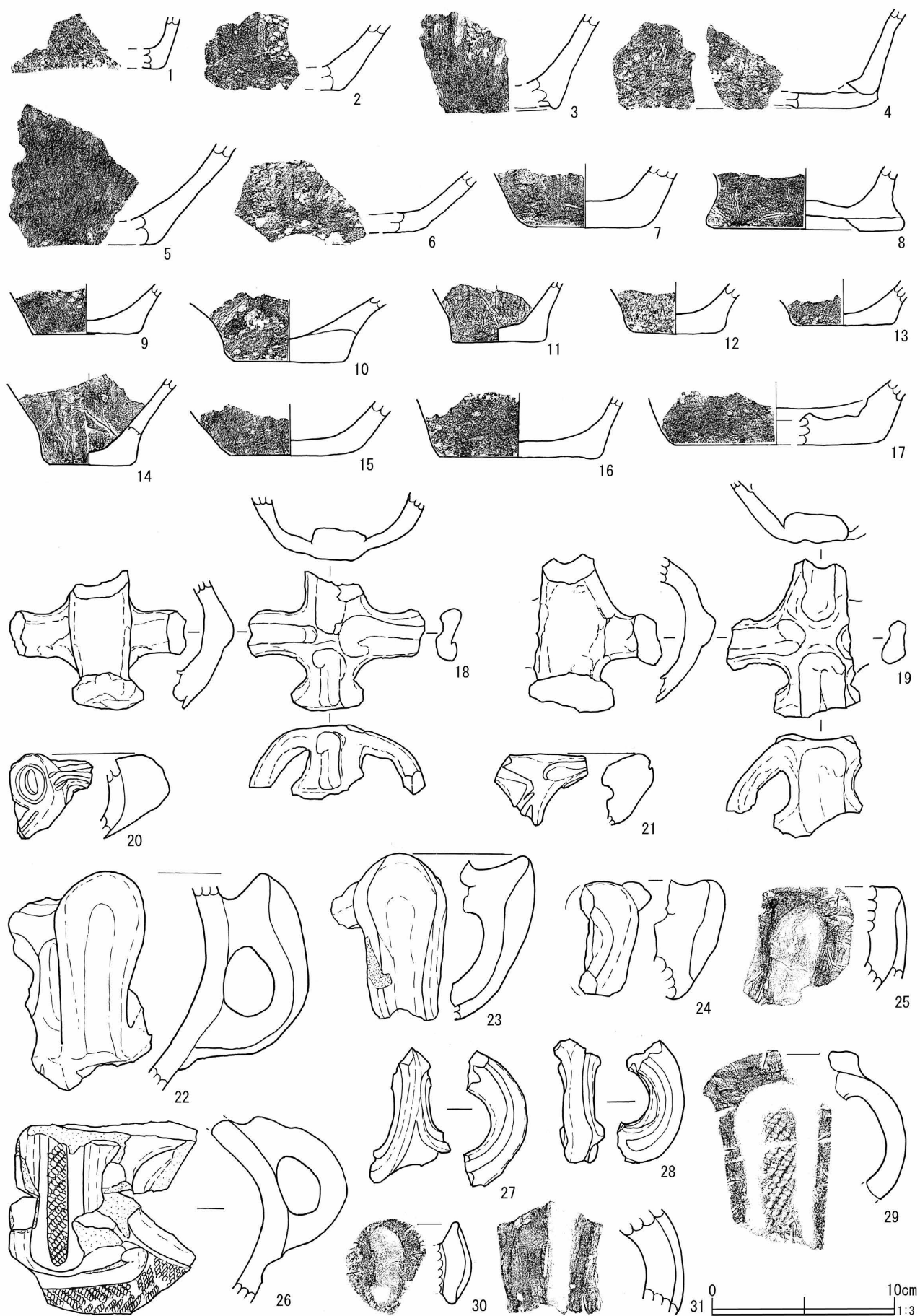


第19图 第3号住居跡出土遺物(4)





第20图 第3号住居跡出土遺物(5)



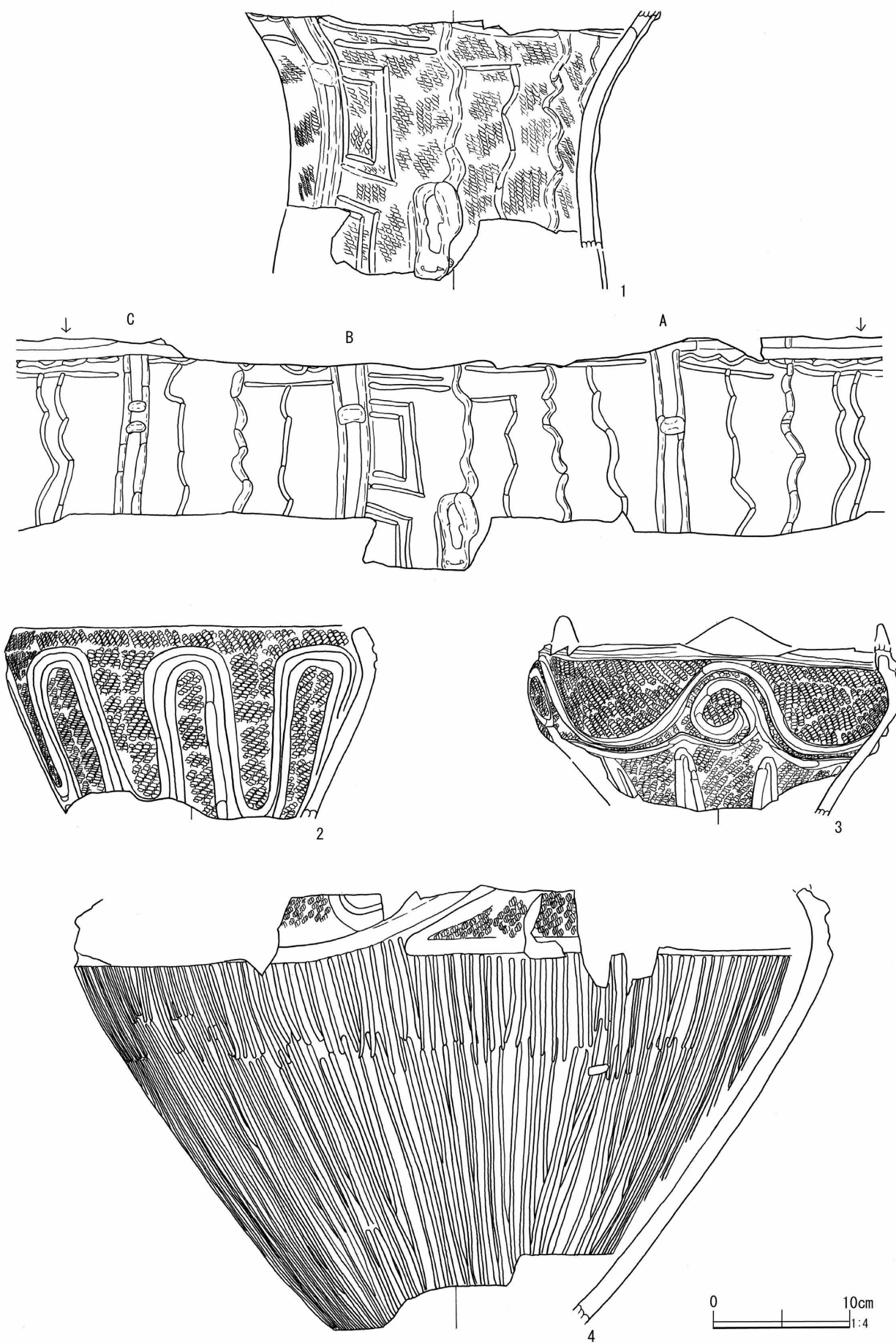
第21图 第3号住居跡出土遺物(6)



形土器の口縁部から胴部にかけての資料である。20は、橋状把手を持つ鉢形土器である。表裏とも丁寧に撫でられ無文となる。21、22は内湾する口縁部資料である。後者の下端には沈線の上端がわずかに残ることから、無文帯下端を沈線で画す浅鉢であるものと思われる。23は、口縁外面に1条の沈線を巡らせる資料である。浅鉢であろう。24～31は無文の胴部資料である。いずれも丁寧に撫で整形が施されている。24、26、28は極めて薄手の資料である。

第21図1～17は、本址出土底部資料を一括したものである。2、3、6では、垂下する沈線や縄文帯が観察される。4は比較的底径の大きなもので、底面円盤から器壁を積み上げていく状況が良くわかる。8は、やや外側へ張り出すもので、底面円盤の中ほどから剥落している。9は単節縄文が施される。11、14は、底面を小さくすぼめるように形成するものである。17は底径約12cmを測る大振りの資料で、底部内面は粗雑な整形を受け凹凸が激しい。18、19は、同一個体と思われるもので、橋状把手と思われる。垂直に伸びる把手の中ほどに直交する加飾を付したもので、外面には交点に合わせるように蕨手文あるいはこれを意識した凹線が描かれる。十文字に交差するドーム状の把手となるものと思われる。20、21、27、28は、加曾利E式土器古相の深鉢の口縁部に付される装飾把手の一部と思われる。22～26、29～31は橋状把手である。22～25では、把手正面を縦位に桶状に窪める。26、29は縦位の楕円区画を設け単節縄文を充填している。

第22図1は、3A号住居跡の炉体土器である。胴部に括れを持つキャリパー形深鉢の口縁部を打ち欠き胴部下位までの20cmほどを埋設したものである。残存部最大径は約30cm、残存高は19cmを測る。口縁部文様帯下端を区画したと思われる横走隆帯が残されており、胴部上位の文様をほぼ把握することができる。器面は垂下する2条1組の隆帯によって3分されると見ることができる。垂下隆帯の中ほどにはこれを連結する瘤状の貼り付けが見られるが、AとBの下では長方形に近い貼瘤1つが観察されるのに対し、Cの下では2つの貼瘤が施される。3分されるパネル内には垂下する蛇行隆帯と蛇行沈線等が配されるが、これにも各パネルで差異が認められる。AB間パネルでは、蛇行隆帯2条が垂下しB側の蛇行隆帯上には不正楕円形の隆帯が貼られる。また、蛇行隆帯間を見るとA側では蛇行沈線1本、中央では鉤の手に曲がる蛇行沈線、B側では、2重の矩形のモチーフが描出されることがわかる。BC間では、蛇行隆帯のB側にはT字状のモチーフが、C側には蛇行の弱い蛇行沈線が描かれる。AC間では、蛇行隆帯のC側には2条1組の蛇行沈線A側には「T」字状の蛇行沈線が見られる。という状況である。地文は単節LR縄文を斜位回転施文している。2は、キャリパー形深鉢の胴部上半の資料である。大振幅の「∩」状の波状文を胴部上半に巡らせ、胴下半まで突き抜ける長い「∩」状の縄文帯を入れ弧状に配するものである。地文は単節RL縄文で、口縁部に幅狭な横位回転帯を設け、以下は縦位施文で充填している。3は、3B号住居跡の埋設土器である。山形の突起を持つキャリパー形深鉢の胴部上半の資料で、最大径は27cm、残存高12cmほどを測る。口縁部には頂点が山形突起と合うように振幅する4単位の波状隆帯が施される。隆帯の上下には撫でつけるような幅広の沈線が見られ、振幅の波頂下には、波状隆帯から派生する隆帯とこれに沿う沈線とで渦巻状の円形区画を設けている。この円形区画はすべてが同様ではなくそれぞれに差異がある。頸部以下には「∩」状の磨消文帯が見られる。磨消文帯は、全周で10単位確認でき、図化部分では波頂下の渦巻文風の区画の両端に合わせるように垂下させているように見えるが、他の部分では必ずしもそうならず、口縁部文様帯と胴部の磨消文帯の分割構造は異なると見ることができる。4は、3B号住居跡の炉体土器である。肩部で屈曲し外傾気味の無文の口縁部を持つ浅鉢形土器と思われ、最大径は55cm、残存



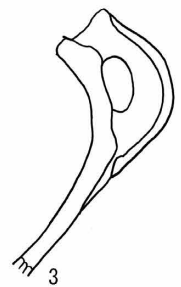
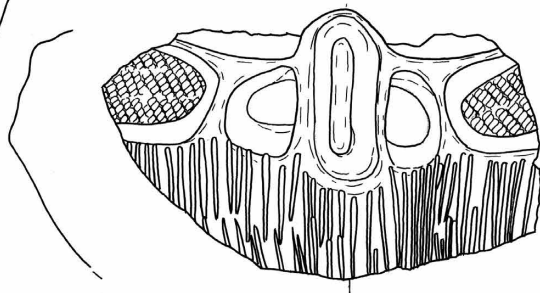
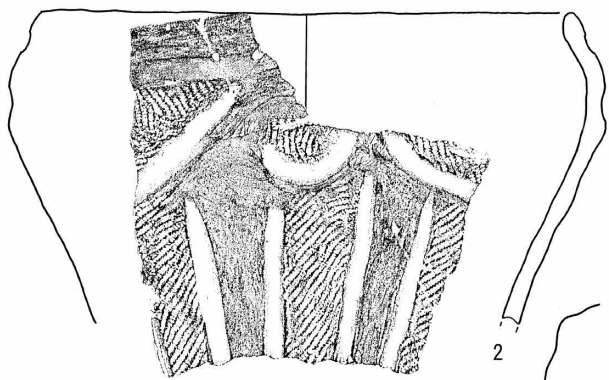
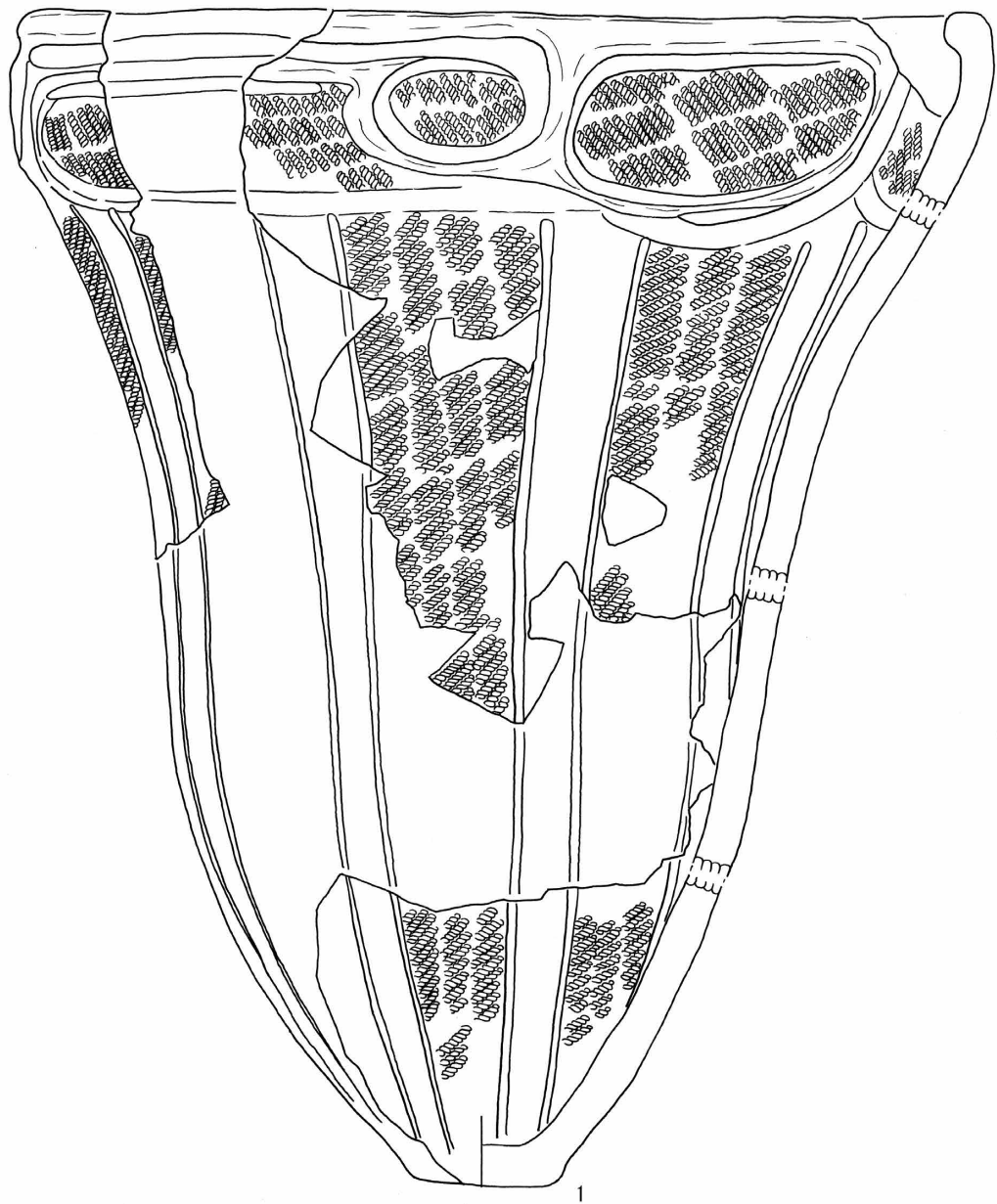
第22图 第3号住居跡出土遺物(7)



高は32cmほどを測る。肩部に横位展開する文様帯には、左下がりの丈の低い隆帯とこれに沿う太目の沈線とで細長い平行四辺形状の区画が形成されるものと思われ、隆帯上部が渦を巻くようにして円形区画を形成するなどの構成と推測される。体部は集合沈線が施される。体部上位に集合沈線文の継ぎ目が見られ、土器成形に係るものである可能性がある。全体に橙褐色を呈し焼成は良好であるものの、被熱し火はねを起こす部分も見られる。

第23図1は、大型のキャリパー形深鉢で、口径53cm、器高64cmほどを測る大型資料である。口唇部は内側に肥厚し玉縁状を呈し、頸部の屈曲は強いものではなく滑らかなカーブを描きながら下降し、胴下半でわずかに膨らんだのち底部に至る。口縁部文様帯は、隆帯とこれに沿う幅広の凹線で横長の楕円区画と円形区画とを組み合わせたものとなる。区画内部には太目の単節RL縄文がわずかな傾きを持ちながら横位回転される。頸部以下には幅広の沈線で区画された磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下する。縄文は、口縁部文様帯と同一原体で縦位施文される。内面は、ほぼ全面に径数ミリの火はねと思われる潰痕が見られ、整形の状況をうかがうことは難しい。2は、平縁のキャリパー形深鉢で、推定口径28cm、最大径32cm、残存高18cmほどを測る。口縁部文様帯は幅広の凹線で描かれ、凹線の縁の盛り上がりを見せられている。口縁部無文帯下端を画す凹線の末端が渦を巻くように巻き込み円形の区画となり、この部分から両側へ凹線が斜行するのが見て取れる。おそらく半円形の区画を形成するものとみられる。頸部以下は凹線で画される磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下する。地文は単節RL縄文で、口縁部文様帯では横位や斜位に、胴部縄文帯では縦位に施文される。3は、橋状把手を有する両耳壺の胴部資料で、胴部最大径は35cm、把手を含めると約40cmと思われる。残存高は13cmほどを測る。直立ないしやや外反気味の無文の口縁部を持ち、頸部に隆帯とこれに沿う沈線とで楕円区画を設ける文様帯を持つものと思われる。楕円区画内には単節RL縄文が横位に施される。橋状把手は、長さ10cm、幅5cmほどで、上方に尖るように突出する。中央部に縦位の窪みをつけているのみで縄文は施されない。体部は、籠状工具数本を束ねたような施文具を用いたと思われる集合沈線が施される。

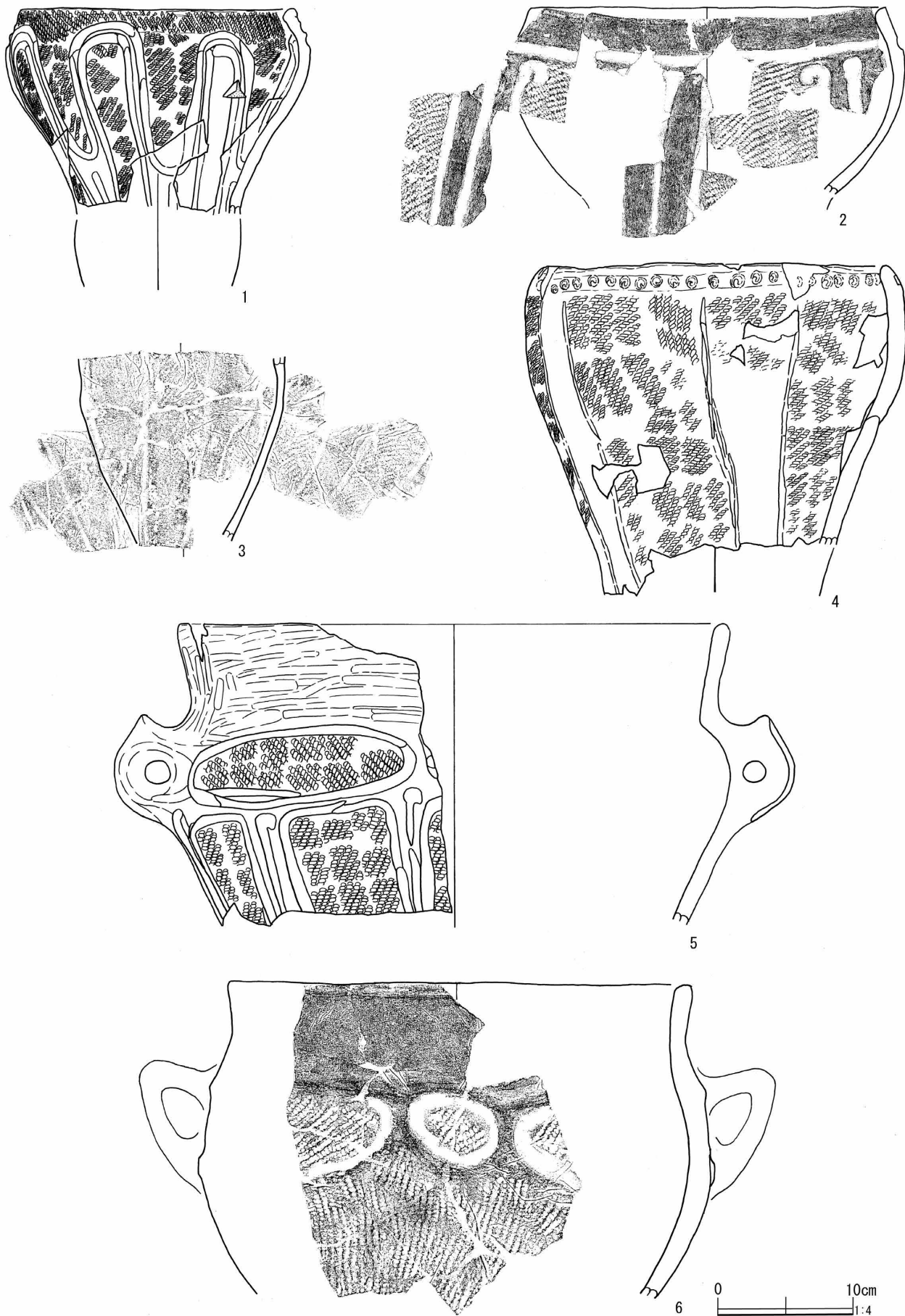
第24図1は、平縁のキャリパー形深鉢で、口径20cm、最大径22cm、残存高15cmを測る。大きく括れる同上半に太目の沈線による大振幅の波状文を描き、これと入れ子になるように「∩」状文を描出する。また、「∩」状文間には太目の沈線を垂下させ、上部の連結した「H」状磨り消し文帯を形成する。地文は単節RL縄文で、口縁部に2指幅ほどの横位施文帯を設け、以下の大振幅の波状文や「∩」状文の中は同一原体を用い縦位施文している。「∩」状文の内側に縄文を充填しない部分も見られる。2は、平縁のキャリパー形深鉢で、口径26cm、最大径29cm、残存高15cmを測る。口縁部に2cm余りの無文帯を設け、下端を沈線で画す。以下には沈線で区画した磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下する。区画沈線の上部は蕨手状を呈し、残存部では縄文帯側を向くようである。磨消文帯は中央に1条の沈線を持ち、上部はやや膨らみを持つことがわかる。縄文は単節RL縄文を縦位回転施文したものである。3は、深鉢形土器の胴部下半の資料で、残存部最大径15cm、残存高14cmを測る。磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下する。縄文は単節RL縄文を縦位回転施文するものである。焼成はやや甘く、器面の風化が進行している。4は、内湾傾向の強くない深鉢形土器で、口径25cm、最大径28cm残存高24cmを測る。口縁部にごく浅い凹線を引き凹線内に円形刺突を施す。刺突の形状は円形であるが、工具自体は半裁竹管を用いているものと思われ、刺突後工具を回転させて円形としている。このため内部の粘土が半分挟れるように捻転していることがわかる。以下に磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下する。縦位の沈線は細く不明瞭な部分もある。図化部分では磨消



0 10cm  
1:4

第23图 第3号住居跡出土遺物(8)





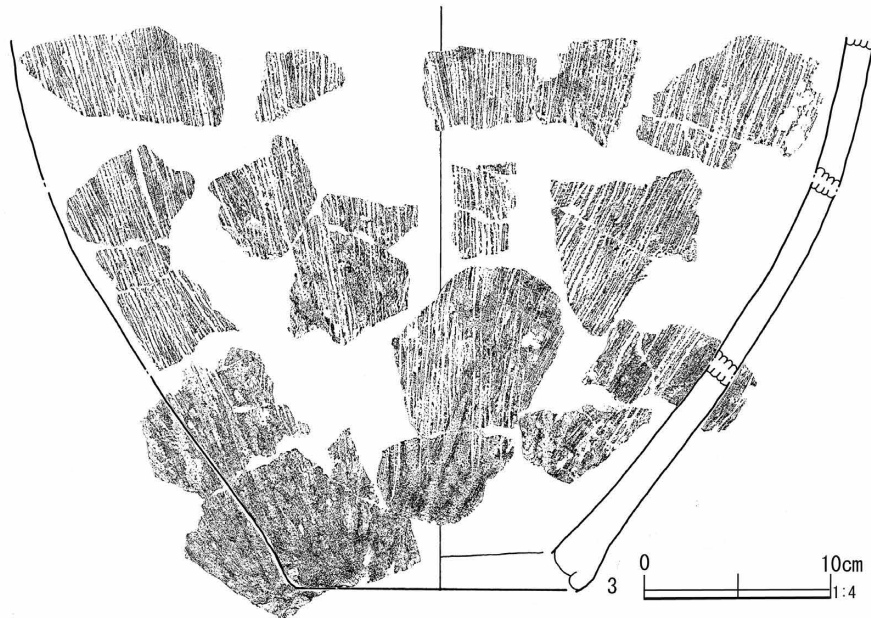
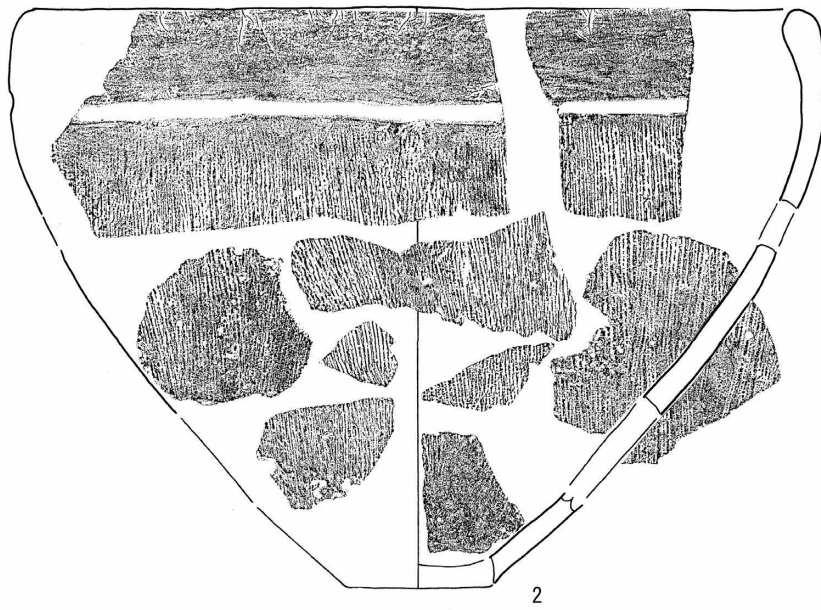
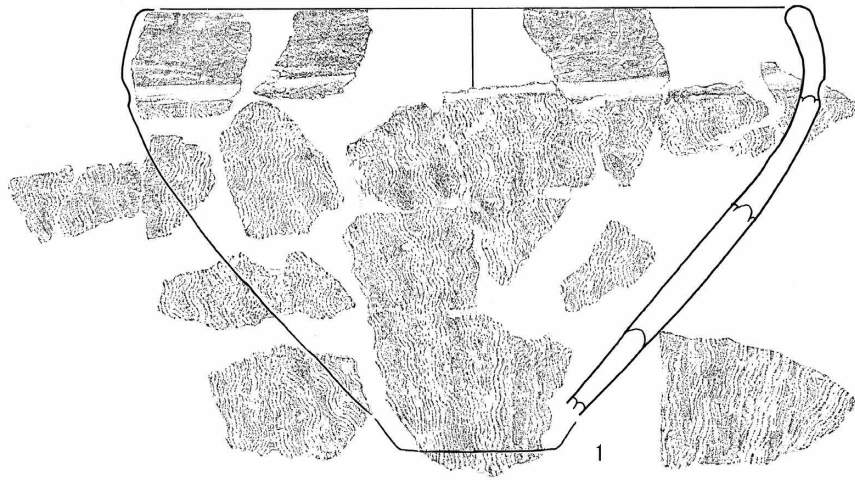
第24图 第3号住居跡出土遺物(9)

文帯上部にも縄文の施される部分も見られる。縄文は、単節 RL 縄文で、部位によって回転方向が異なるが縦位施文の部分が多い。器壁は輪積みを反映して凹凸が激しいもので、あまり丁寧な整形は施されていない。5は、無文の口縁部を持つ両耳壺である。口径40cm、肩部の最大径は42cm、残存高は21cmを測る。口縁部は主に横位の撫で整形が施される。肩部に横長の長楕円形区画を持ち長さ7cmほどの橋状把手が付される。把手上部は尖るように突出する。長楕円区画内には単節 RL 縄文を横位回転させている。胴部には、隅丸長方形区画が垂下し単節 RL 縄文を縦位回転させ充填している。隅丸長方形区画間には蕨手状をなす太目の沈線が配される。6は、ほぼ直立する無文の口縁部を持つ両耳壺である。口径34cm、肩部の最大径は37cm、残存高は24cmを測る。無文の口縁部下端に横位隆帯を置き肩部に横長楕円区画と円形区画を配する。区画内及び胴部には節の大きな単節 RL 縄文が施される。施文方向は、区画内部は縦位回転が主であるが、胴部では、斜位回転し条の走行方向が縦位になるよう意識しているものと思われる。橋状把手は接合部が残されるが把手自体は脱落している。

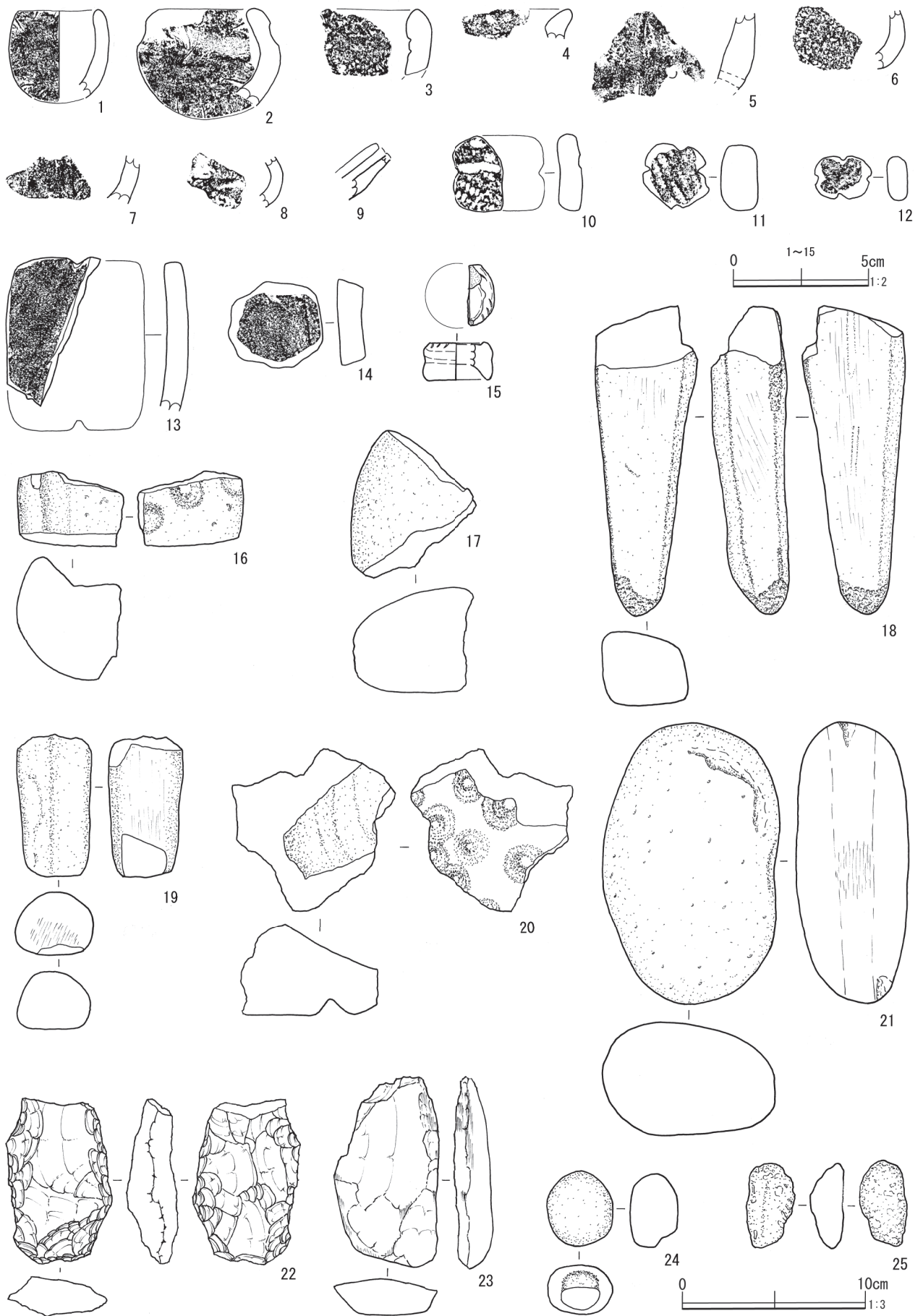
第25図1は、やや内湾する無文の口縁部を持つ浅鉢形土器で、口径36cm、最大径は37cm、推定器高は24cmほどと思われる。口縁部に丁寧に横位の撫で整形を施した幅4cmほどの無文帯を持ち、下端を幅広の凹線で区画している。以下は櫛状施文具を用いた蛇行条線文が施される。輪積痕が顕著に残され、底部を含めると大きく5段に積み重ねられていたことがうかがわれる。2は、やや内湾する無文の口縁部を持つ浅鉢形土器で、口径40cm、最大径は42cm、推定器高は31cmほどと思われる。口縁部は内側を肥厚させる玉縁状を呈し、丁寧に横位の撫で整形を施した幅4cmほどの無文帯を持つ。無文帯下端は幅広の凹線で区画している。以下は櫛状施文具を用いた条線文が施される。櫛状施文具の幅は約2cmほどで、非常に細かな条線を間断なく施すが、底部付近は無文となるようである。内面の整形は横位の丁寧なものである。3は、残存部最大径46cm、残存高29cmを測る浅鉢の胴部と思われる資料である。底部付近を中心に接合できるが、接合できない多くの同一個体破片を伴う。底部付近には粗い縦位の撫で整形が加えられ、この上から櫛状施文具による条線文が施される。櫛状施文具の幅は2.5cmほどで櫛歯の目は粗い。

**土製品** 第26図1～8は、丸底のミニチュア土器である。1は、口径3.0cm、胴径3.5cm、器高3.5cmを測る無文の資料である。手づくねであるが、内外とも撫でられている。2は、口径3.5cm、最大径5.2cm、器高4.0cmを測る球胴、丸底の資料である。口縁部外縁に1条の凹線を持つ。浅鉢を写したものであろうか。3は、無文の口縁部資料である。前2者よりやや大振りながらミニチュア土器の範疇である。4は、口縁部が外反する平縁資料である。屈曲部外面は外側を向くことから2のような球胴を呈する可能性が高い。5は、胴部下半の破片資料で、焼成前穿孔の直径3mmほどの小孔が穿たれる。孔は下向きに開けられている。外面は縦位の撫でが施される。6は、丸底となると思われる胴部下半の破片資料である。表裏とも器面は荒れており整形等は確認できない。7は底部付近の破片資料である。丸底とも平底とも判断しきれない。外面は縦位の撫で整形が施される。8は球胴をなす小型個体の胴部破片資料である。9は小型の注口部の破片と思われる。10～13は土器片錘である。10は、1条の沈線と縄文の施された破片を素材とし、楕円形から隅丸方形に整形し長軸方向に切り込みを入れている。11は、縄文の施された厚手の胴部破片を素材とし、十文字に切り込みを入れるものである。12は、無文の胴部資料を素材とし、十文字に切り込みを入れるものである。13は、無文の胴部破片を素材とし、長方形に整形したのち長軸方向に切り込みを入れている。14は土製円盤である。無文の胴部破片を素材とし周囲を打ち欠いて楕円形に整形したものである。15は耳栓である。直径2.5cmほどの滑車型の資料で外面周囲に刻み目を持つ。





第25图 第3号住居跡出土遺物 (10)



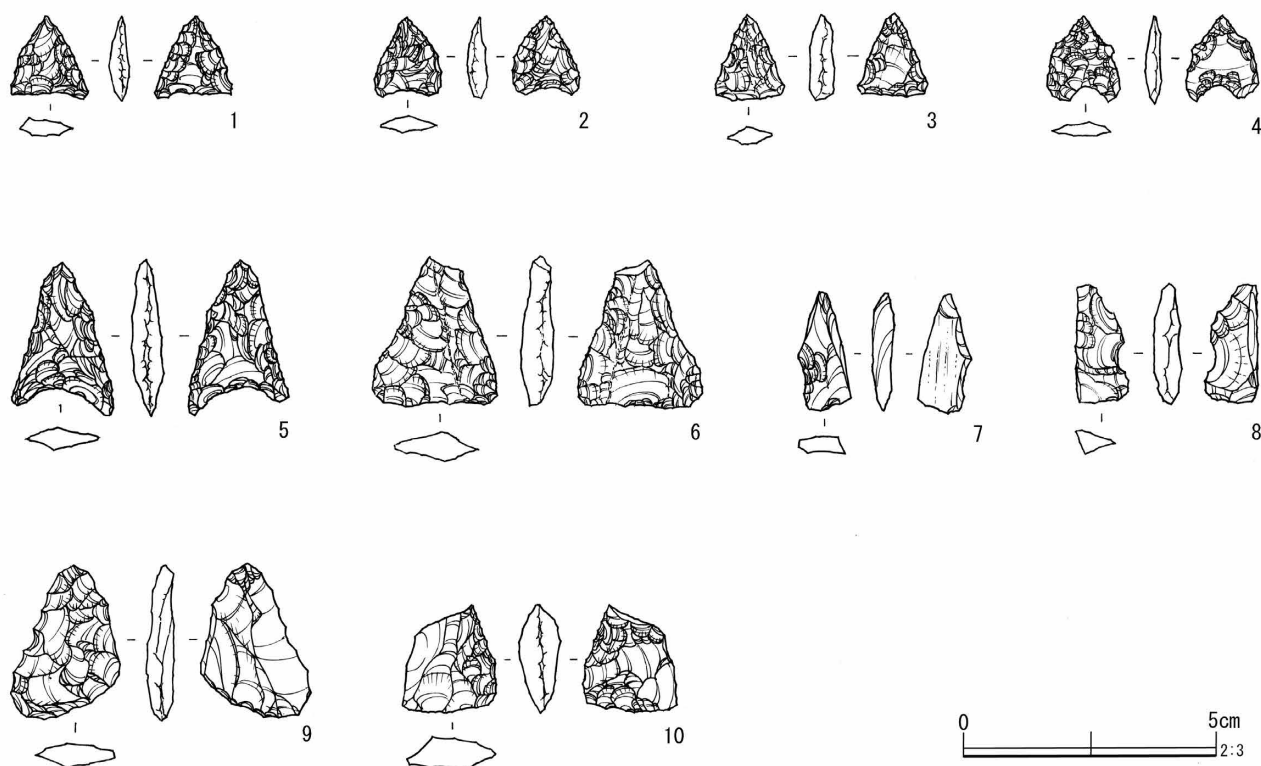
第26图 第3号住居跡出土遺物 (11)

石器 第26図16は、石皿残欠である。扁平で大型の安山岩を素材としたもので、7cmを超える厚みを持つ。側縁の立ち上がり部分を残すのみで詳細は不明である。裏面には3個の窪みを確認することができる。17も石皿残欠である。底面は平坦に整形され安定が良い。縁の立ち上がりは急なものではなく、幅広く緩やかなものである。18は、敲石である。細長い硬砂岩を素材とするもので、下端部の小口面に敲打痕が集中する。また、右側縁の角を使つての敲打も行われている。19は、断面の丸い細長い硬砂岩の礫を素材とするもので、下端部小口を磨ったり敲いたり多用途に使っているものと思われる。20は、石皿残欠である。大型の安山岩製の石皿で使用が進行している。縁部が残されていないため明確な深さは不明であるが、残存部だけでも3cmを超える深さを持つ。裏面には、少なくとも9個の窪みが確認できる。21は、磨石である。硬砂岩の楕円礫を素材とするものである。面取りは行われていない。磨石としての使用は両面に及ぶほか、一部側縁にも研磨部が見られる。22は短冊形の打製石斧である。基部を欠損する。扁平な大型剥片を素材とし、正面上部に素材剥片の主剥離面を残す。これに裏面刃部方向からの剥離を加え厚みを削ぎ、両側縁及び刃部の成形加工を行っている。裏面側は、両側縁からの階段状の剥離で平坦に整形したのち必要部位に不規則な調整加工を施している。23は、扁平な楕円礫を素材とする磨石と思われる。大きく剥離した横長剥片となったのちも磨石として使用されている。正面側は、右側縁を中心に裏面から不規則な調整加工を加え、上部右側縁側や左側縁は中位以下に研磨の痕跡が見られる。24は、小型の敲き石である。やや扁平な安山岩の円礫を素材とし、下端小口に敲打痕とはじけたと思われる剥離痕を認める。石鏃等の小型利器を作成する際の間接打撃用のものと思われる。市内でも後晩期の遺跡では出土数が多いが、中期では希な資料である。25は、軽石製品である。長さ4cm余りの細長い資料で断面形状は三角形を呈する。裏面は平坦で、研磨、先行などの加工痕は見られない。

第4表 第3号住居跡出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
26	16	石皿	安山岩	(3.4)	(5.7)	(6.8)	(122.9)	残欠
26	17	石皿	安山岩	(6.8)	(8.0)	5.6	(297.0)	炉体土器B出土・残欠
26	18	敲石	硬砂岩	(16.5)	(5.5)	4.1	(463.0)	
26	19	敲石	硬砂岩	(7.7)	4.1	3.5	(149.7)	被熱
26	20	石皿	安山岩	(8.5)	(7.3)	4.9	(311.0)	残欠
26	21	磨石	硬砂岩	15.5	9.3	6.3	1,400.0	被熱
26	22	打製石斧	礫岩	(9.0)	5.5	2.3	(151.5)	
26	23	磨石	石英結晶片岩	11.4	5.7	2.0	138.9	
26	24	敲石	安山岩	4.1	3.6	2.7	42.3	
26	25	軽石製品	軽石	4.6	2.5	1.8	2.4	
27	1	石鏃	チャート	1.6	1.5	0.4	0.8	
27	2	石鏃	チャート	1.6	1.4	0.4	0.8	
27	3	石鏃未製品	チャート	2.2	1.5	0.5	1.1	
27	4	石鏃	黒曜石	1.7	1.5	0.3	0.6	
27	5	石鏃未製品	チャート	3.0	2.0	0.6	2.6	
27	6	石鏃未製品	チャート	(3.0)	2.4	0.6	(4.4)	
27	7	2次加工剥片	チャート	2.3	0.9	0.4	1.1	
27	8	2次加工剥片	チャート	2.4	1.0	0.5	1.3	
27	9	石鏃ブランク	チャート	2.9	2.1	0.5	2.7	
27	10	石鏃ブランク	チャート	2.0	1.9	0.8	3.1	

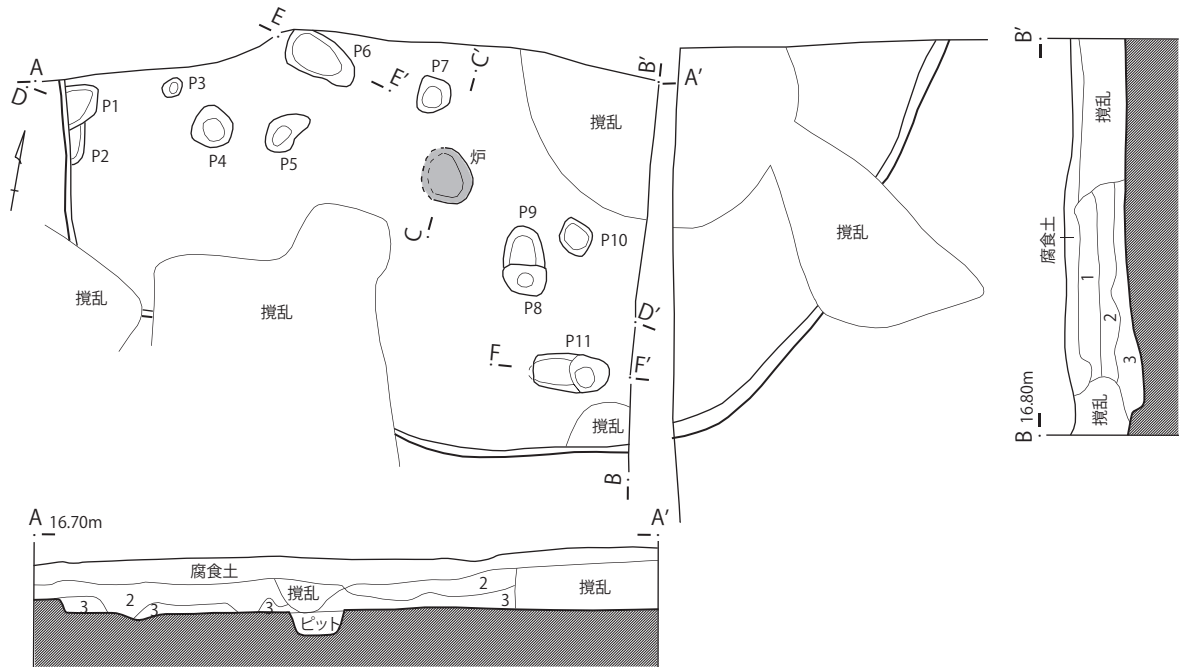




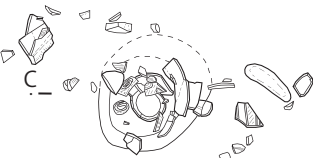
第27図 第3号住居跡出土遺物 (12)

第27図1は、平基無茎の石鏃である。裏面中央に細長く素材剥片の主剥離面が残される。調整加工は、正面左側縁では規則的で丁寧な押圧剥離によるものである。右側縁は表裏とも乱雑で不規則なものである。2は、小型の無茎石鏃である。基部の抉りも極めて浅く平基といってよい。側縁の調整加工は両面とも左側に顕著である。3は、平基無茎の石鏃で、裏面中央に素材剥片の主剥離面を残す。調整加工は、正面では両側縁から丁寧な剥離が加えられる。裏面では、周縁部のみ不規則な押圧剥離が加えられる。4は、黒曜石製の凹基無茎石鏃である。裏面に大きく素材剥片の主剥離面を残す。先端部を丁寧に尖らせるが、両側縁中央付近に出っ張りがあり意図して残したものと思われる。5は、凹基無茎石鏃である。裏面基部寄りに素材剥片の主剥離を残す。両面の成形加工は不規則かつ粗雑なもので、押圧剥離による調整加工も進んでいない。形状も両脚の長さが異なり、先端部の不整形さや全体に厚みを残すことなどから未製品である可能性もある。6は、石鏃未製品と思われる。平基無茎の石鏃を意図するものと思われる。裏面上半中央部に細長く素材剥片の主剥離を見ることができる。両面とも、周縁部から階段状剥離を加え側縁の形状はかなり整いつつある。先端部は事故欠損と思われ、先端部を再生していくはずだったのであろう。7は、細長い2次加工剥片である。正面左側縁に両側から剥離を加えている。8は、チャート製の2次加工剥片である。正面左側縁に表裏両面からの剥離を加えている。左側縁は折り取っているようである。9は、2次加工剥片であるが、石鏃を意図した可能性が高い。正面は周縁部からソフトハンマーを用いた長脚の剥離を丁寧に施し、素材剥片の厚みを減じている。下端部では表裏両面に押圧剥離が加えられる。裏面には上下両側からの大きな剥離面を残す。下部側からの3回の剥離ののち左上部から2回の剥離を加えられていることがわかる。10は、2次加工剥片であるが、これも石鏃を意図したものと思われる。表裏に加撃方向の異なる大型剥離面を残す。正面では基部方向からの数度の剥離によって厚みを減じたのち、右側縁に不規則だが細かな剥離を加えている。裏面では、基部への加工も見られる。

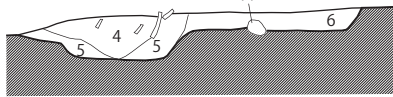




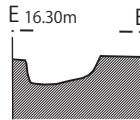
炉



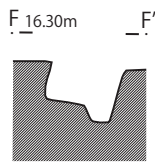
C\_16.30m



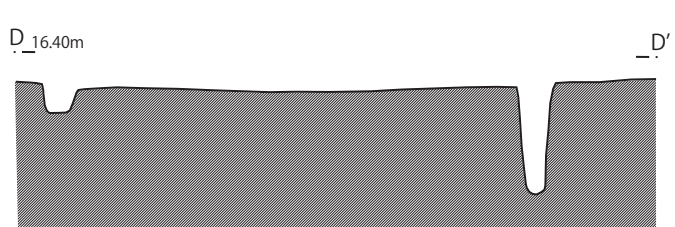
0 1m 1:30



E\_16.30m



F\_16.30m



D\_16.40m

0 2m 1:60

基本土層

- 1 暗褐色土 表土層で締まりが無くバサバサしている。
- 4H 暗褐色土 ローム粒子(径0.1cm)をわずかに含む。ロームブロック(径1cm)を多く含む。炭化材を含む。締まり有。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック(径0.1cm)を多く含む。炭化材を含む。
- 4H 炉
- 4 黄褐色土 締まり有。粘性やや有。赤みがかった色調。
- 5 暗黄褐色土 ロームブロック(径1cm)と炭化材をわずかに含む。
- 6 黄褐色土 白色砂粒子をわずかに含む。

第28図 第4号住居跡

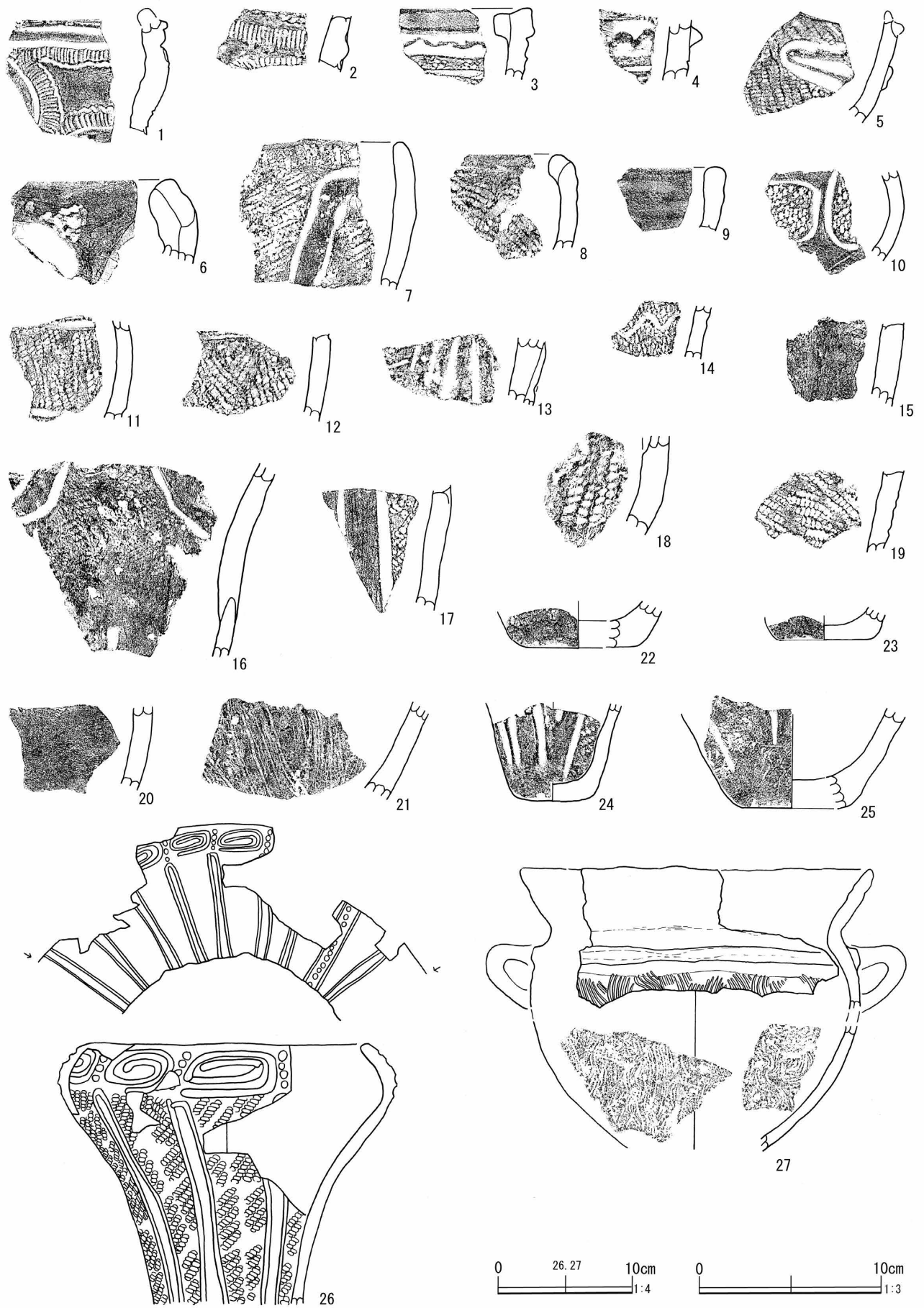
#### ●第4号住居跡（第28図）

J1・K1グリッドに位置し、北半部は調査区外、南端も一部は攪乱で切られる。検出部分の東西径は約7.0m、南北軸では南側3.2mを検出した。確認面から床面までの深さは約0.4mであった。住居跡に伴うピットは11基検出した。

炉跡は長径約0.5m、短径約0.4mの不整形円形を呈するもので、東西のほぼ中央部で南壁から2mほどの位置に設けられていた。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。縄文土器の口縁部から胴部までの大破片が散在しており、炉体土器（第29図26）を伴う埋甕炉であったものと考えられる。

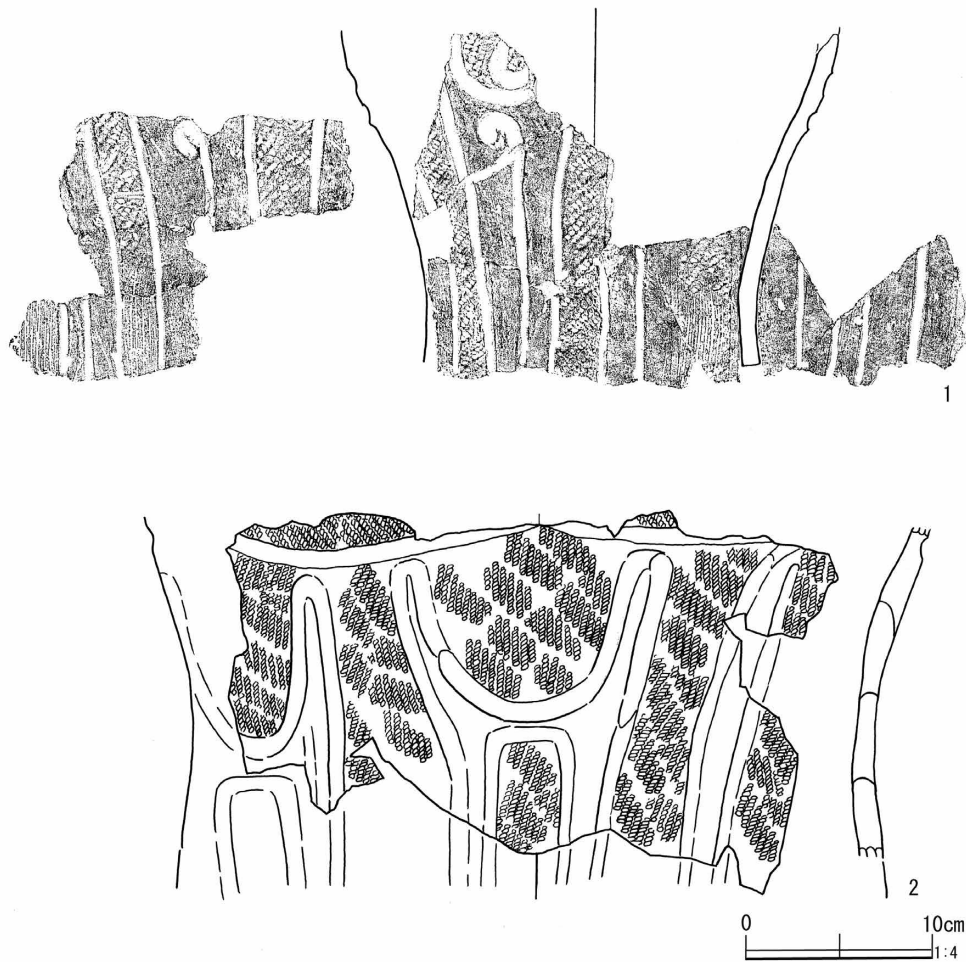
#### 出土遺物（第29～31図）

**土器** 第29図1、2は中期前半勝坂式に相当する。前者は口縁部付近の資料で、半裁竹管に縁どられたキャタピラ文が看取される。3は、加曾利E式古相を示す口縁部資料で、角張った口縁部の内側に隆帯を貼る平縁深鉢である。口唇部外縁には相互刺突列が施される。4は蛇行隆帯が横位に展開するもの、5は単節縄文地上に中央部を窪める舟形の隆帯を横位展開させる口縁部付近の資料である。6以降が本址の時期を表す資料と思われる。6は、大型のキャリパー形深鉢の口縁部資料である。太い隆帯で渦巻状の円形区画や楕円形区画を構成するものであろう。7は16と同一個体で、内湾傾向を示す平縁深鉢の口縁部資料で、2条1組の沈線で「∩」状の磨消文帯を描出するものである。地文は単節RL縄文である。16を見ると、弱く括れる胴部下位には大振幅となる磨消文帯のちょうど間に入るように1条の垂下沈線が引かれるようである。残存部では磨消文帯や縄文帯となる様子はない。8は、口唇部が内屈する平縁深鉢である。口唇部外面に撫でを加え幅の狭い無文部を持つ。以下は単節縄文が観察される。9はほぼ直立する無文の口縁部資料である。10は、内湾傾向の強い胴部資料で、単沈線に縁どられた楕円区画2つが看取される。区画内部には単節縄文が充填される。11、12は上下に沈線区画を見ることのできる胴部資料で、内部には単節縄文が充填される。前者は単節RL縄文を斜位回転させたもの、後者は単節RL縄文を施文方向を変えながら縦長の羽状構成風に施したものである。13は垂下隆帯とこれに沿う沈線が観察される胴部資料、14は燃糸文上に鋸歯文が横位展開するもの、15、20は無文の胴部資料である。17は、磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下すると思われる胴部資料、18、19は単節縄文の施された胴部資料である。21は、櫛状施文具による条線文の施されたものである。22～25は底部資料である。22、23は無文の平底資料で、前者は底径7cm、後者は底径5cmほどと推定される。24は、磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下すると思われるもので、底径は4.5cmほどである。25は沈線2条が垂下することがわかるもので、底径は6cmほどと思われる。26は、本址の炉体土器である。口縁部が強く内湾する平縁深鉢で、口径20cm、最大径25cm、残存高19cmを測る。斜め上方を向く口縁部文様帯には、沈線のみによる角ばった渦巻文が施される。横位展開する渦巻文同士の間には円形刺突が施される。屈曲部以下には、上部を閉じた幅の狭い磨消文帯と幅の広い縄文帯とが交互に垂下する。展開図を見てわかるように、磨消文帯のうちの1帯に円形刺突が列状に施される。器面整形は、内面上半部は被熱により荒れており判然としないものの、胴部は縦位の丁寧な撫でが観察できる。また、火はねと思われる潰痕は外面にも散見される。27は、無文の口縁部が外反し、球胴を呈する両耳壺と思われる資料である。推定口径26cm、推定高23cmほどと思われる。頸部の括れ部直下に太い断面台形となる隆帯1条を配し、以下を櫛状施文具による蛇行条線で埋めるものである。口縁部内外面は横位の撫でが加えられる。



第29图 第4号住居跡出土遺物(1)





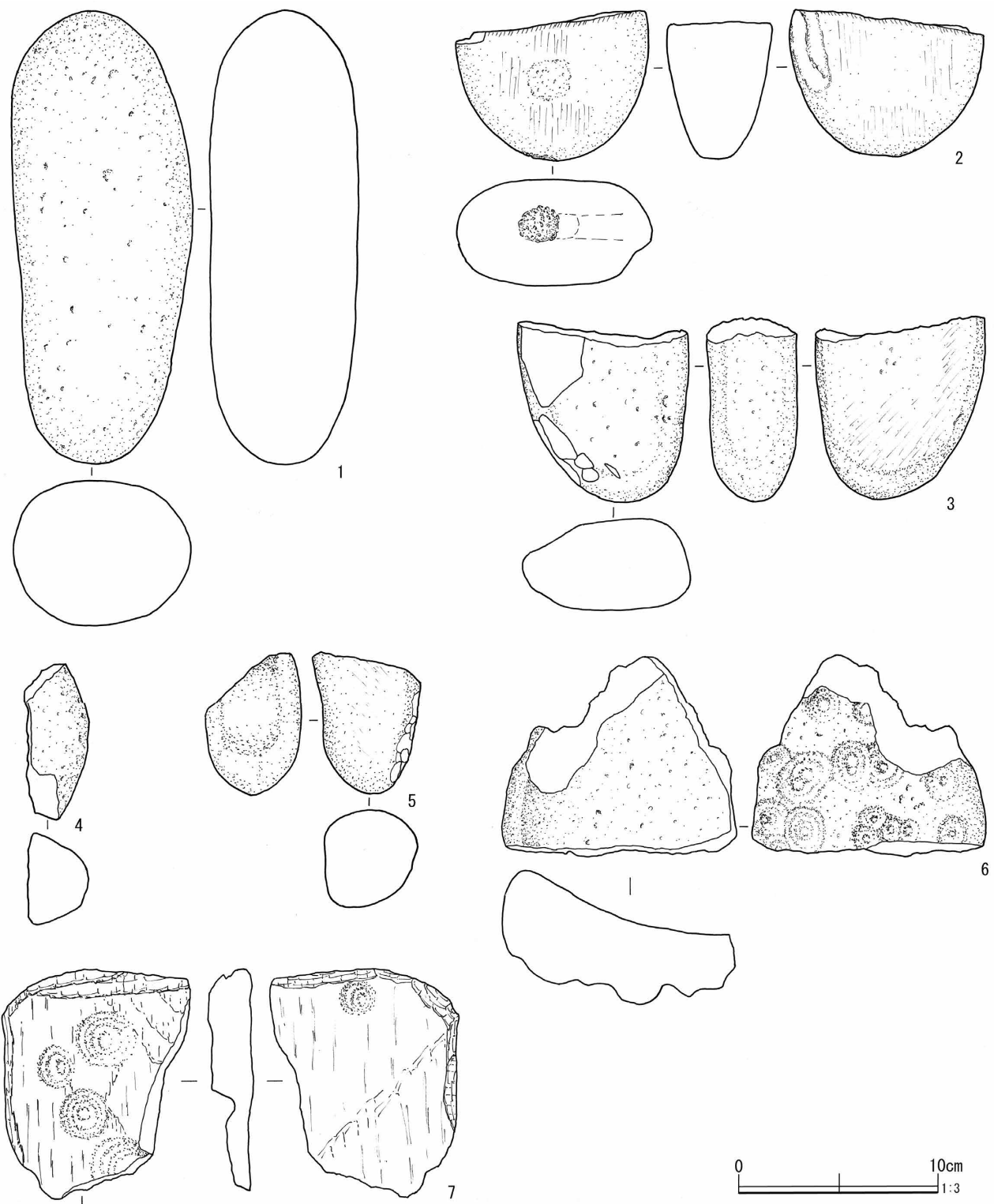
第30図 第4号住居跡出土遺物(2)

第30図1は、キャリパー形深鉢の口辺部から胴部にかけての資料で、残存部最大径27cm、残存高18cmほどを測る。口縁部には太い沈線によって渦巻状あるいは鉤の手状のモチーフが描かれ縄文が充填されることがわかる。胴部には磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下するが、磨消文帯の中ほどに蕨手文が配される。地文は胴部でも上部は単節縄文であるが、下部では条線文が施される。2は、緩い括れを持つ深鉢形土器の胴上位の資料であり、残存部最大径42cm、残存高20cmを測る。口縁部文様帯の下端を区画する凹線は、中央部が摘み上げられるようにわずかに上がっており、この部分にアクセントがあったものと思われる。胴部文様帯はいわゆる「H」状磨り消しが配されるが、「H」の上側が開き連弧文を想起させる。実測図右側の1条は単なる垂下磨消文帯であることがわかる。地文は単節RL縄文を斜位回転させ、条の走行方向が縦位になるよう志向していることも連弧文を意識したものかもしれない。

**石器** 第31図1は敲石と思われる。目立った敲打痕はないが、全体に器面がボツボツしている。2は、磨

第5表 第4号住居跡出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
31	1	敲石	安山岩	22.7	9.0	7.3	1,960.0	
31	2	磨石兼敲石	硬砂岩	(7.3)	9.8	5.3	(524.0)	
31	3	磨石	安山岩	(9.1)	8.6	4.5	(487.0)	
31	4	石皿	安山岩	(7.8)	(2.8)	(4.5)	(113.6)	残欠
31	5	磨石兼敲石	硬砂岩	(7.1)	4.8	4.6	(202.0)	被熱の為爆ぜている
31	6	石皿	安山岩	(10.0)	(11.7)	(5.1)	(576.0)	残欠
31	7	石皿	緑泥片岩	(11.3)	(9.2)	(2.1)	(333.0)	残欠



第31図 第4号住居跡出土遺物 (3)

石兼敲石である。表裏両面を磨石として使用し、欠損後下端部小口などを使って敲いている。欠損部にも研磨を加えている。3は磨石である。扁平な楕円礫を素材とし、両面を使用しているが、裏面は特によく使われている。4は石皿の残欠である。5は磨石兼敲石である。断面の丸い長楕円形の円礫を素材とし正面を磨石として使い、側面を敲石として使用している。6、7は石皿残欠である。前者は、安山岩製で縁

の薄いもので、掘り込みも深い。裏面は多孔石となっており、少なくとも15個の窪みが確認できる。後者は緑泥片岩製で、正面右上部がなだらかに窪み石皿として使用していた様子が見られる。表裏両面に窪みが見られる。

## (2) 土坑

### ●第1号土坑 (第32図)

B3グリッドに位置する。平面形は長径約1.3m、短径約1.2mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

**土器** 第35図1は、単節LR縄文を縦位施文した胴部資料である。

### ●第2号土坑 (第32図)

B5グリッドに位置する。平面形は長径約1.7m、短径約1.4mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は中央が浅く窪む。土坑に伴うピットを2基検出した。

### ●第3号土坑 (第32図)

C5グリッドに位置する。平面形は長径約1.3m、短径約1.2mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

### ●第4号土坑 (第32図)

C3グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約0.9mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.4mを測り、底面は南寄りが浅く窪む。土坑に伴うピットを3基検出した。

### ●第5号土坑 (第32図)

A4・B4グリッドに位置し、第6号土坑を切る。平面形は長径約1.4m、短径約1.1mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

**土器** 第35図2～4が本址出土資料である。2、3は、単節縄文を施した胴部資料、4は、底径7.5cmほどの無文の底部資料である。

### ●第6号土坑 (第32図)

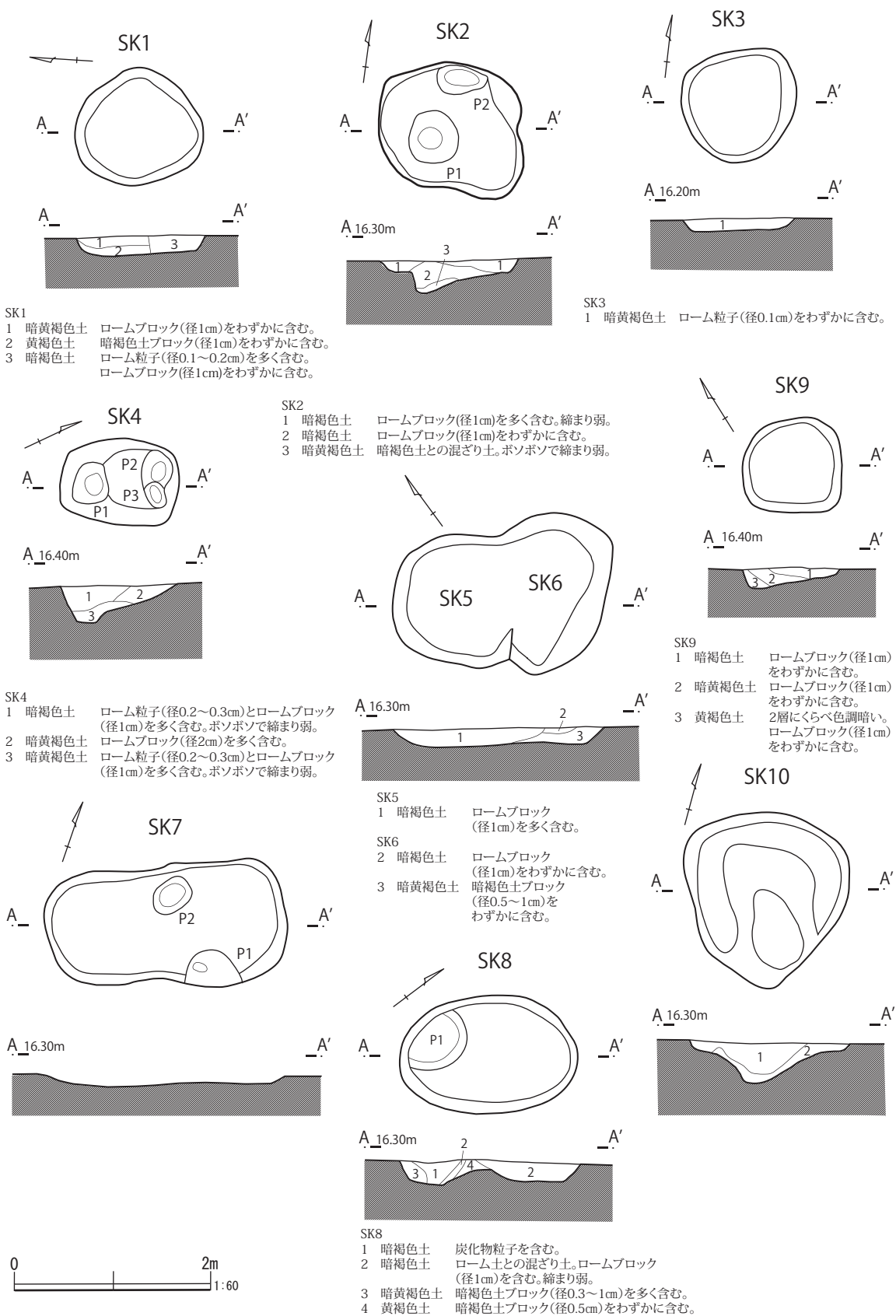
B4グリッドに位置し、第5号土坑に切られる。平面形は長径約1.7m、短径約1.1mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

**土器** 第35図5は、条線文の施される胴部資料である。

### ●第7号土坑 (第32図)

B4・C4グリッドに位置し、第13号土坑を切る。平面形は長径約2.5m、短径約1.2mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。





第32図 第1~10号土坑

●第8号土坑（第32図）

B3・C3グリッドに位置する。平面形は長径約1.9m、短径約1.2mを測る。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。土坑に伴うピットを1基検出した。

●第9号土坑（第32図）

C3グリッドに位置する。平面形は長径約1.1m、短径約0.9mを測る。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

●第10号土坑（第32図）

B5グリッドに位置する。平面形は長径約1.8m、短径約1.7mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.4mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第11号土坑（第33図）

C5グリッドに位置し、東端を攪乱に切られる。残存部で長径約1.9m、短径約1.1mを測る。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

**土器** 第35図6、7が本址出土資料である。前者は大型のキャリパー形土器の口縁部文様帯下端付近の資料、後者は単節縄文の施された胴部資料である。

**石器** 第35図11は、磨製石斧の刃部残欠である。円刃を成し、右側縁には敲打調整の痕跡を留めるもので、表裏ともよく研磨されている。

●第12号土坑（第33図）

B3グリッドに位置し、第15号土坑を切る。平面形は長径約1.0m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

●第13号土坑（第33図）

B4・C4グリッドに位置し、第7号土坑に切られる。残存部で長径約1.2m、短径約0.8mを測る。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

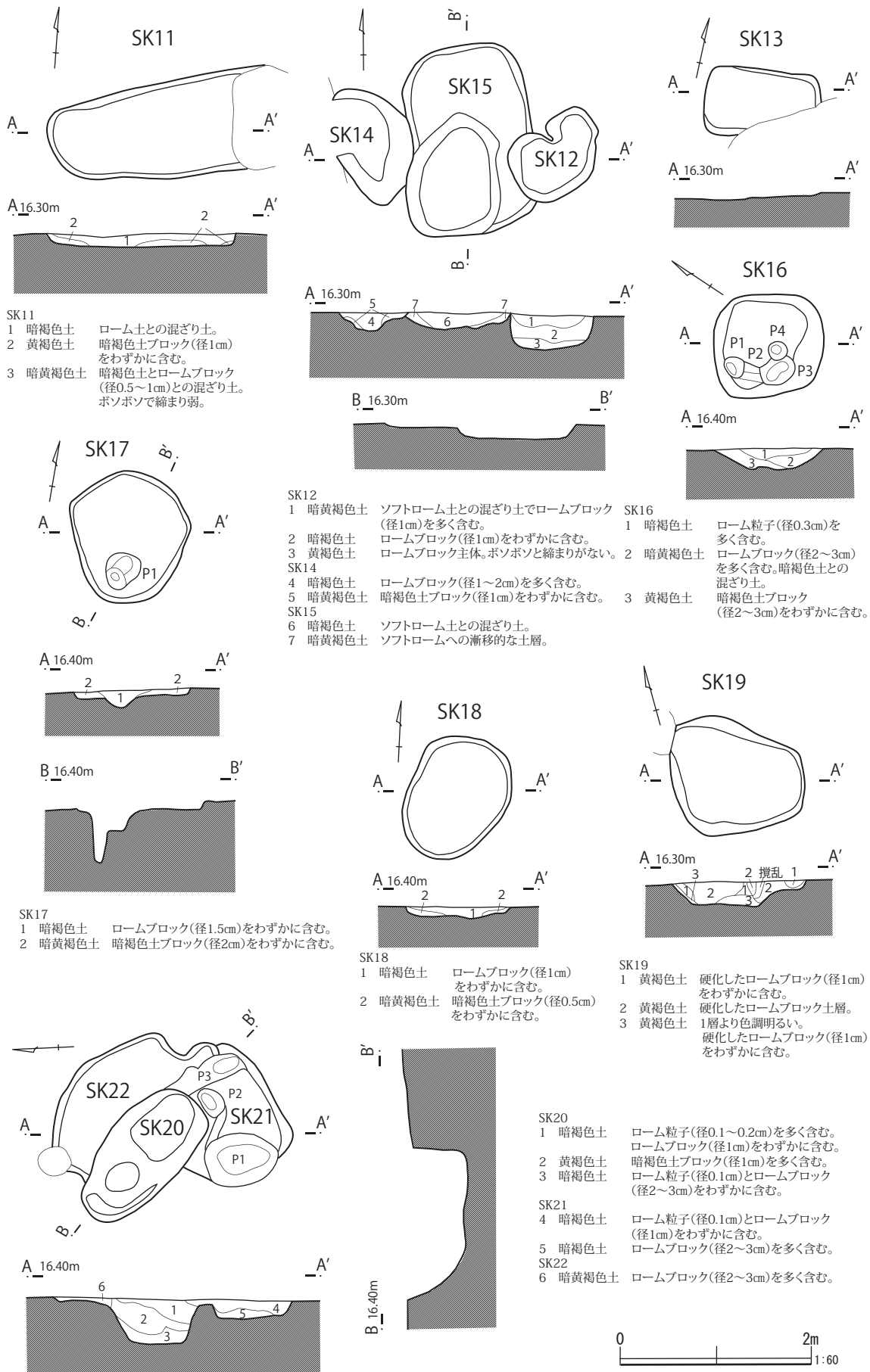
●第14号土坑（第33図）

B3グリッドに位置し、第15号土坑を切る。第1号溝跡と重複するが、新旧関係は明確でない。平面形は長径約1.3m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第15号土坑（第33図）

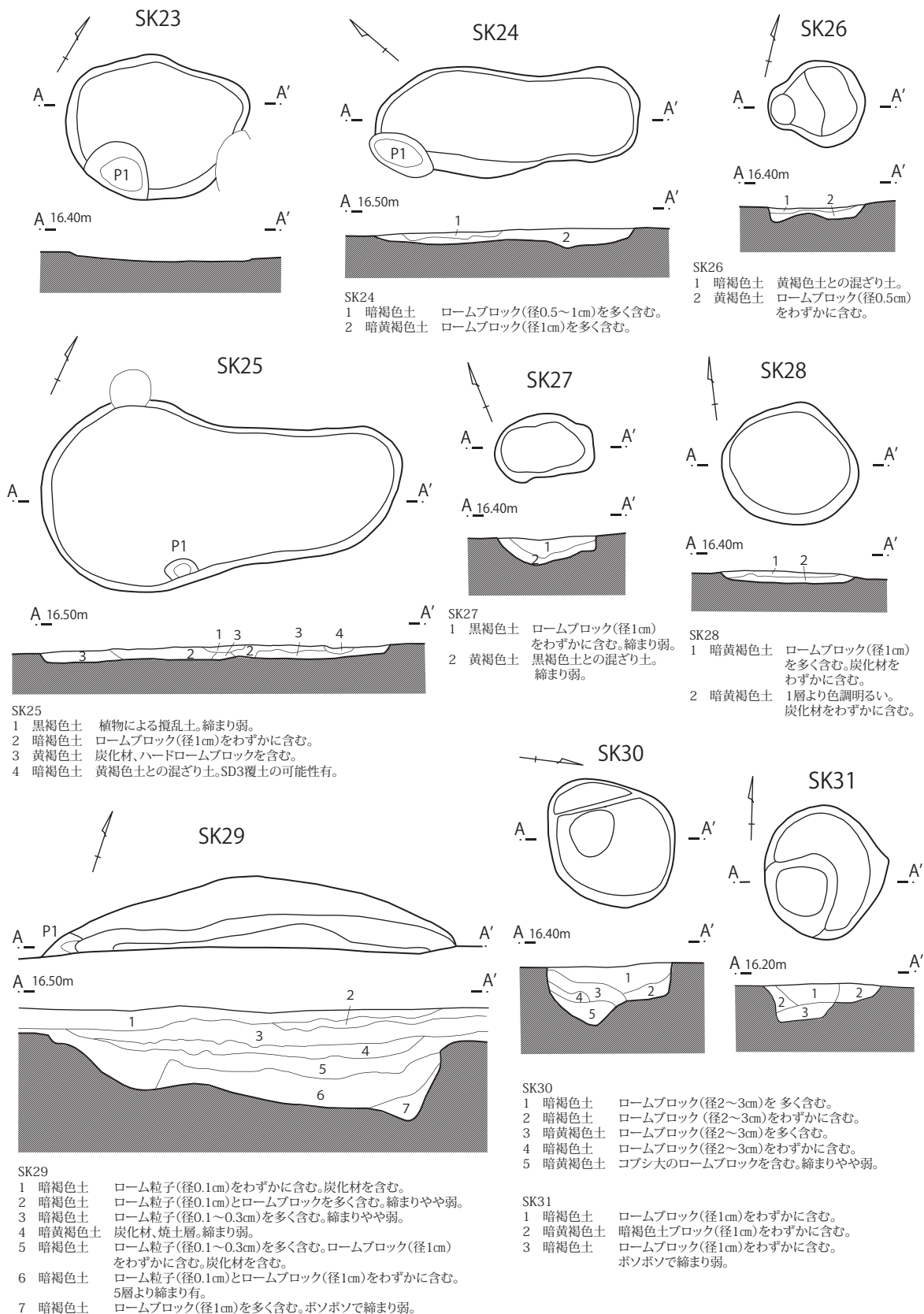
B3グリッドに位置し、第12・14号土坑に切られる。平面形は長径約2.0m、短径約1.2mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

**土器** 第35図9は、早期末葉条痕文系土器群に位置付けられる口辺部資料である。刺突を伴うに隆帯が斜行する。



第33図 第11~22号土坑





第34図 第23~31号土坑

●第16号土坑（第33図）

D4グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約1.1mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は南寄りが浅く窪む。土坑に伴うピットを4基検出した。

土器 第35図10は、2条の沈線が垂下する胴部資料である。

●第17号土坑（第33図）

C3グリッドに位置する。平面形は長径約1.4m、短径約1.3mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。土坑に伴うピットを1基検出した。

●第18号土坑（第33図）

C3・D3グリッドに位置する。平面形は長径約1.3m、短径約1.1mの不整円形を測る、確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第19号土坑（第33図）

C4グリッドに位置する。平面形は長径約1.4m、短径約1.3mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

土器 第35図11～13は本址出土資料である。11は、内面に稜を持つ角頭状の口縁部資料である。口唇外縁に1条、やや間隔をあけてもう1条の押し引き刺突文列が観察される資料である。12は1条の沈線が垂下する胴部資料、13は単節縄文の施される胴部資料である。

●第20号土坑（第33図）

D4グリッドに位置し、第21・22号土坑を切る。平面形は長径約1.6m、短径約0.8mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.5mを測り、底面は平坦である。

土器 第35図14はやや内湾する口縁部資料で、無文帯下端を沈線で区画することがわかる。15は、縄文帯と磨消文帯の看取される胴部資料である。

●第21号土坑（第33図）

D4・5グリッドに位置し、第22号土坑を切り、第20号土坑に切られる。平面形は長径約1.8m、短径約1.5mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

土器 第35図16は、磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下する胴部資料である。

●第22号土坑（第33図）

D4グリッドに位置し、第20・21号土坑に切られる。残存部で長径約1.7m、短径約0.7mを測る。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は南寄りが浅く窪む。

土器 第35図17は、条線文の施された胴部資料である。

●第23号土坑（第34図）

D2・3グリッドに位置し、第24号土坑に切られる。平面形は長径約1.8m、短径約1.5mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。土坑に伴うピットを1基検出した。

●第24号土坑（第34図）

D2・3グリッドに位置し、第23号土坑を切る。平面形は長径約2.6m、短径約1.1mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。土坑に伴うピットを1基検出した。

**土器** 第35図18～20が本址出土の資料である。18は、磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下する胴部資料、19、20は間隔のある条線文が横位弧状に施文される胴部資料である。

●第25号土坑（第34図）

D3グリッドに位置し、第3号溝跡を切る。平面形は長径約3.6m、短径約2.0mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。土坑に伴うピットを1基検出した。

●第26号土坑（第34図）

E4グリッドに位置する。平面形は長径約1.0m、短径約0.9mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

●第27号土坑（第34図）

E4グリッドに位置する。平面形は長径約1.0m、短径約0.7mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

●第28号土坑（第34図）

E4グリッドに位置する。平面形は長径約1.4m、短径約1.2mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

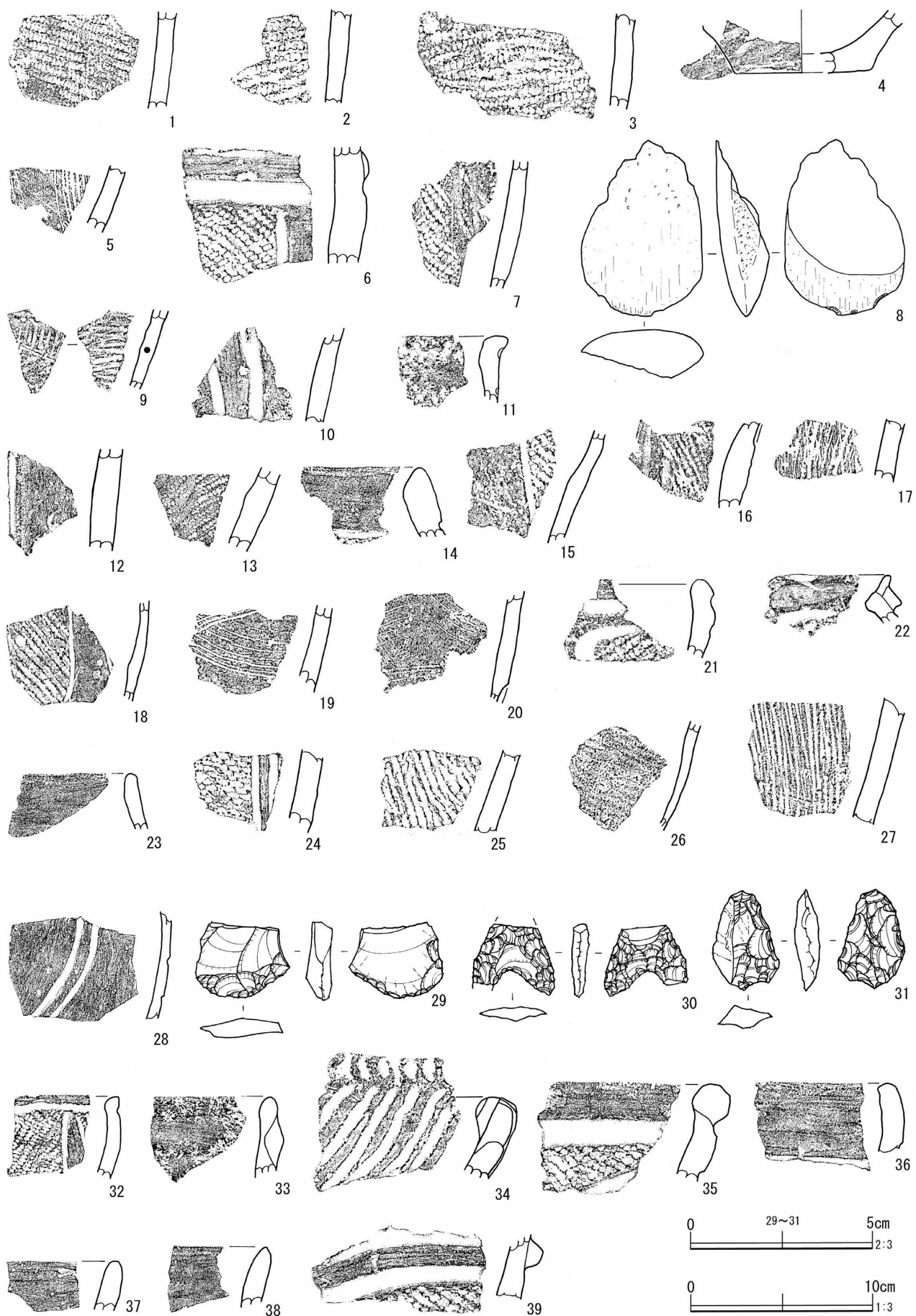
●第29号土坑（第34図）

F4・5グリッドに位置し、南半部は調査区外である。第35号土坑を切る。残存部で長径約4.2m、短径約0.7mを測る。確認面から底面までの深さは約1.0mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。土坑に伴うピットを1基検出した。

**土器** 第35図21～28が本址出土の土器である。21は、比較的小型のキャリパー形深鉢の口縁部資料、22は、「く」の字に外折する口縁部資料である。断面三角形の隆帯が貼られる。23は内傾する無文の口縁部資料、24は磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下する胴部資料、25、26は縄文の施された胴部資料である。27は条線文の施される胴部資料、28は無文地に斜行する沈線2条が観察される薄手の資料である。

**石器** 第35図29～31は本址出土の石器である。29はスクレーパーである。貝殻状の剥片を素材とし下端部に主に裏面から加撃して斜度のある成形を行ったのち両面から調整加工を施している。基部はもう少し長かった可能性もある。30は、凹基無茎石鏃である。片脚端と先端部を欠く。正面挟入部に素材剥片の





第35图 土坑出土遗物 (1)

主剥離面を残す。成形、調整加工は比較的丁寧なものである。31は、石鏝未製品と思われる。正面中央に節理面を残し、左側縁も大剥離を残したままである。右側縁及び裏面には不規則で大型の成形剥離が施され、器厚を徐々に薄く削ごうとしていることがうかがえる。

●第30号土坑（第34図）

D4・E4グリッドに位置する。平面形は長径約1.4m、短径約1.3mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.6mを測り、底面は南寄りが浅く窪む。

●第31号土坑（第34図）

E4・F4グリッドに位置する。平面形は長径約1.3m、短径約1.2mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

**土器** 第35図32は、小型のキャリパー形深鉢の口縁部資料である。先端の尖る磨消文帯がうかがえる。33は、無文の口縁部資料である。太い隆帯が貼られる。

●第32号土坑（第35図）

F3グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約1.0mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

●第33号土坑（第35図）

G3グリッドに位置する。平面形は長径約1.4m、短径約1.0mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は南寄りが浅く窪む。

●第34号土坑（第35図）

G3グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約1.1mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

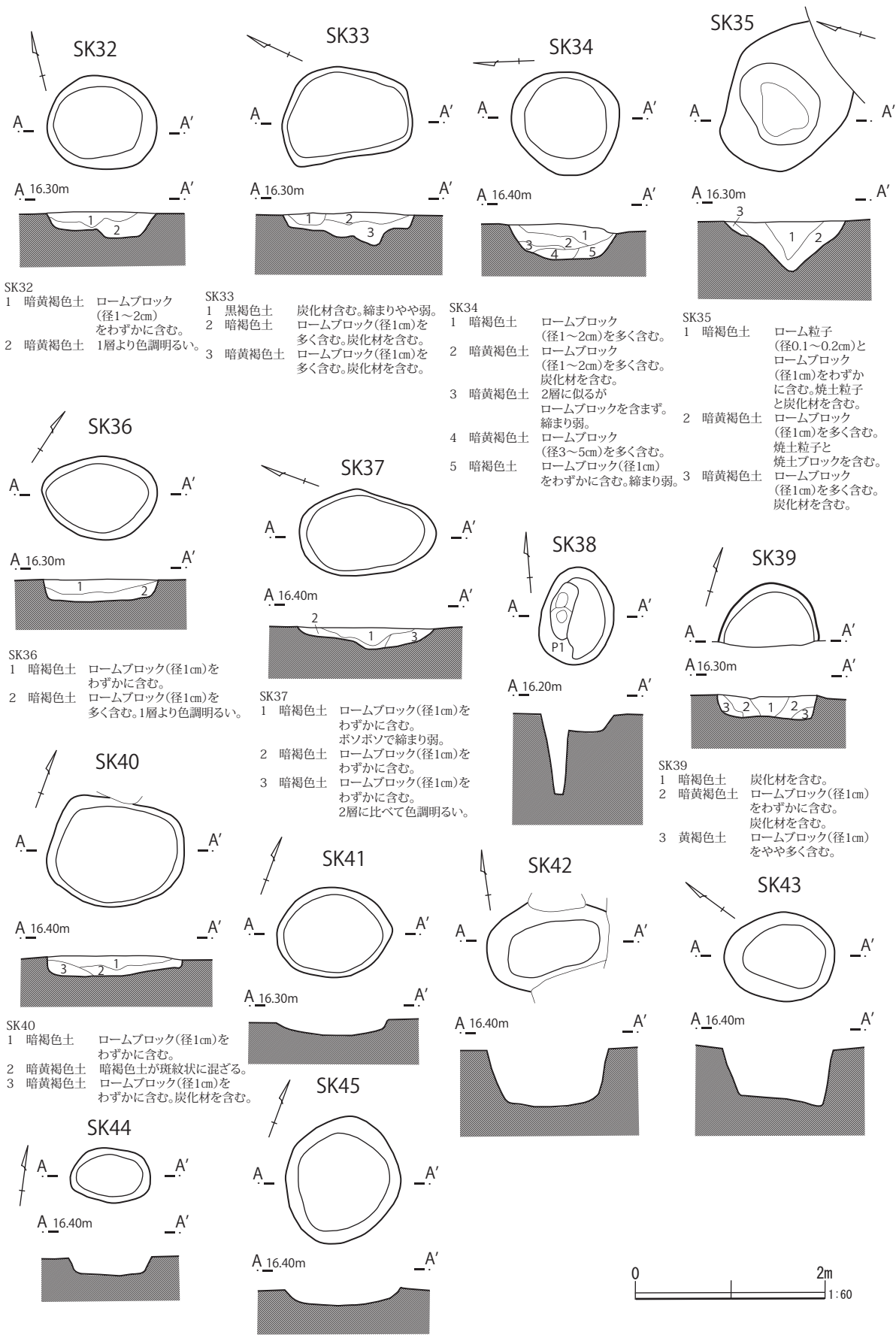
●第35号土坑（第35図）

F4・5グリッドに位置し、第29号土坑に切られる。平面形は長径約1.5m、短径約1.3mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.5mを測り、底面は中央が浅く窪む。

**土器** 第35図34～39、第38図1～13は本址出土の土器である。第35図34は、曾利式の斜行沈線文系の深鉢の口縁部資料である。口唇部内面にまで施文が及ぶ。35は、やや外反するものの、加曾利EⅢ式期に相当する大型深鉢の口縁部資料、36～38は無文となる口縁部資料である。39はキャリパー形深鉢の頸部資料と思われ、丈のある横走隆帯が観察される。

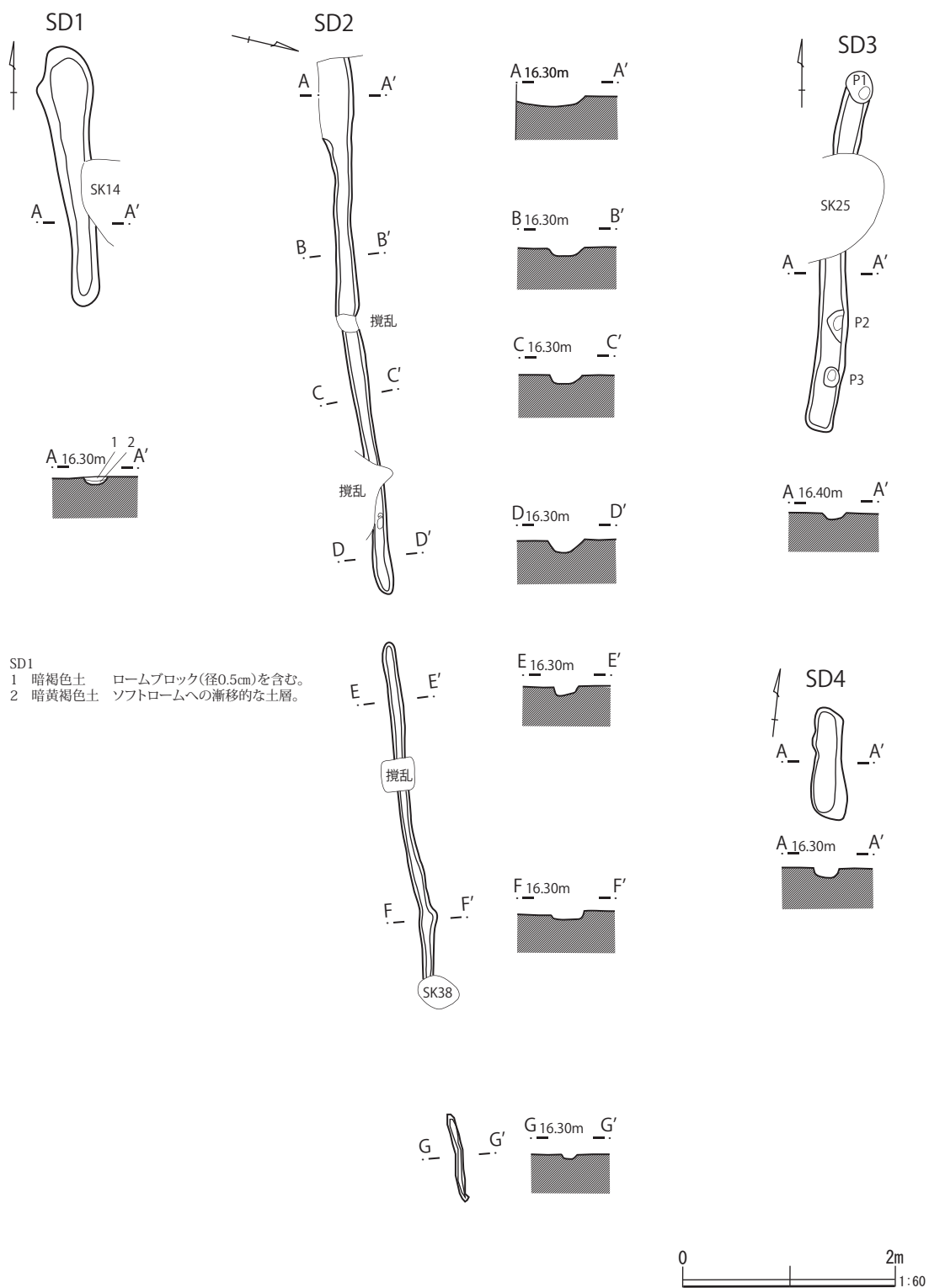
第38図1～4は、キャリパー形深鉢の頸部資料である。口縁部文様帯下端を画す沈線や隆帯が看取され、以下は縄文帯となる。5、6、10～13は、磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下する胴部資料である。8はよく撫でられた胴部に単沈線で渦巻の描かれる資料で、7も同類であろう。9は、無文の底部資料である。

**石器** 第38図14～17が本址出土の石器である。14～16はいずれも凹基無茎の石鏝で、14は、片脚を欠くが、



第36図 第32~45号土坑





第37図 第1~4号溝跡

3cmを超える大きなもので、基部の抉りも深い優品である。両面の整形剥離は不規則ながら丁寧なものである。15は、先端を欠くもので、脚部から基部にかけての調整加工は丁寧なものである。16は脚部残欠である。器幅に対して器長の短いものと推定される。脚部の整形加工は丁寧である。17は、2次加工剥片である。右側縁に表裏両面から整形加工を施すもので、削器として用いられた可能性が高い。

●第36号土坑（第35図）

E3・F3グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約0.9mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第37号土坑（第35図）

F3グリッドに位置する。平面形は長径約1.5m、短径約0.9mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。

土器 第38図18～20が本址出土資料である。18は、内湾傾向を示す無文の資料である。19は条線文の施された胴部下半の資料である。20は無節縄文の見られる資料である。

●第38号土坑（第35図）

E4・F4グリッドに位置し、第2号溝跡を切る。平面形は長径約1.0m、短径約0.8mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。土坑に伴うピットを1基検出した。

土器 第38図21は、口縁部に山形の突起を持つキャリパー形深鉢の口縁部資料である。22は、斜位の撫で痕を残す無文の資料である。

●第39号土坑（第35図）

C5グリッドに位置し、南半部は調査区外である。残存部で長径約1.0m、短径約0.7mを測る。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

土器 第38図23は、口縁部に縦位の刻み目文を持つ。前期末葉の資料であろう。

●第40号土坑（第35図）

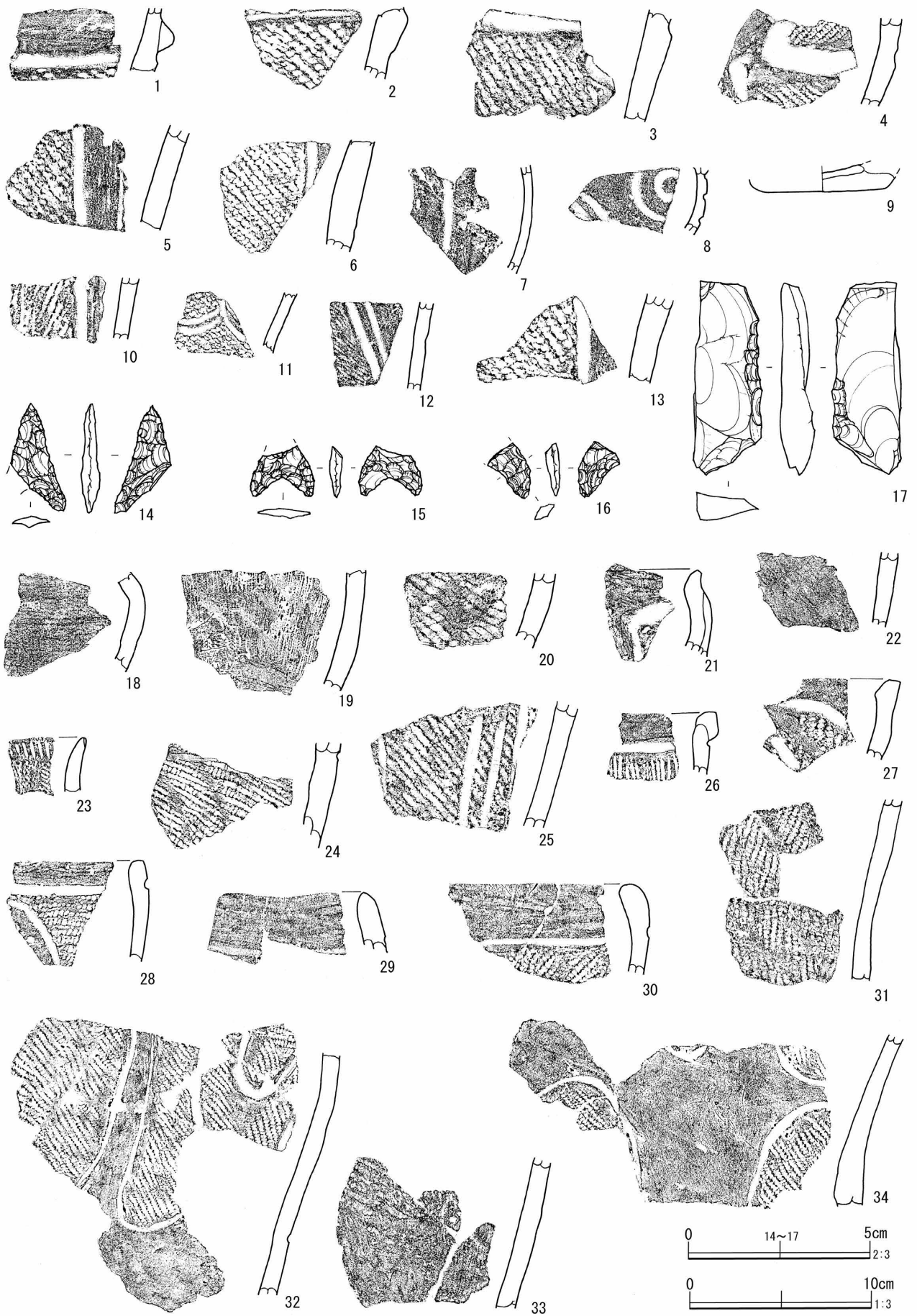
H3グリッドに位置し、北端の一部を攪乱に切られる。平面形は長径約1.5m、短径約1.1mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

土器 第38図24は、横位に1条の沈線が引かれ以下を縄文帯とする胴部資料である。

●第41号土坑（第35図）

J1・2グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約0.9mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

土器 第38図25は、単節縄文の地文上に数本の沈線が垂下する胴部資料である。



第38图 土坑出土遗物(2)



### ●第42号土坑（第35図）

H2グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約0.8mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.6mを測り、底面は平坦である。

**土器** 第38図26～34、第39図1～5が本址出土の資料である。26は、口縁部外面に1条の沈線を引く平縁深鉢で口縁部文様帯には縦位の条線文が観察される。27は、内面に稜を持ち角頭状の口唇部形態をとる深鉢の口縁部資料で、右下がりの楕円区画内に縄文が充填される。28～30は、キャリパー形深鉢の口縁部資料で、1条の沈線で画された口縁部無文帯の下に縄文帯を有し、28では磨消文帯が斜行することがわかる。31は、縄文の施された胴部資料、32、34は「∩」状その他の縄文帯と磨消文帯の看取される胴部資料、33は、縄文の施された底部周辺の資料である。第39図1は、縄文の施された胴部資料、2は、条線文の施された胴部下半の資料、3は無文の資料、4、5は本址出土の底部資料ある。

### ●第43号土坑（第35図）

I2グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約0.9mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.6mを測り、底面は南寄りが浅く窪む。

**土器** 第39図8～11が本址出土の資料である。8、9は無文の口縁部資料、10は横走る太い凹線と以下に条線文の施された胴部資料である。11は、無文の底部資料である。

**石器** 第39図7は、2次加工剥片である。正面左側縁から下端にかけて加工が施される。

### ●第44号土坑（第35図）

I2グリッドに位置する。平面形は長径約0.8m、短径約0.6mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

**土器** 第39図12は、外反する口縁部に2条の沈線が引かれ、以下に縄文の施された口縁部資料である。

### ●第45号土坑（第35図）

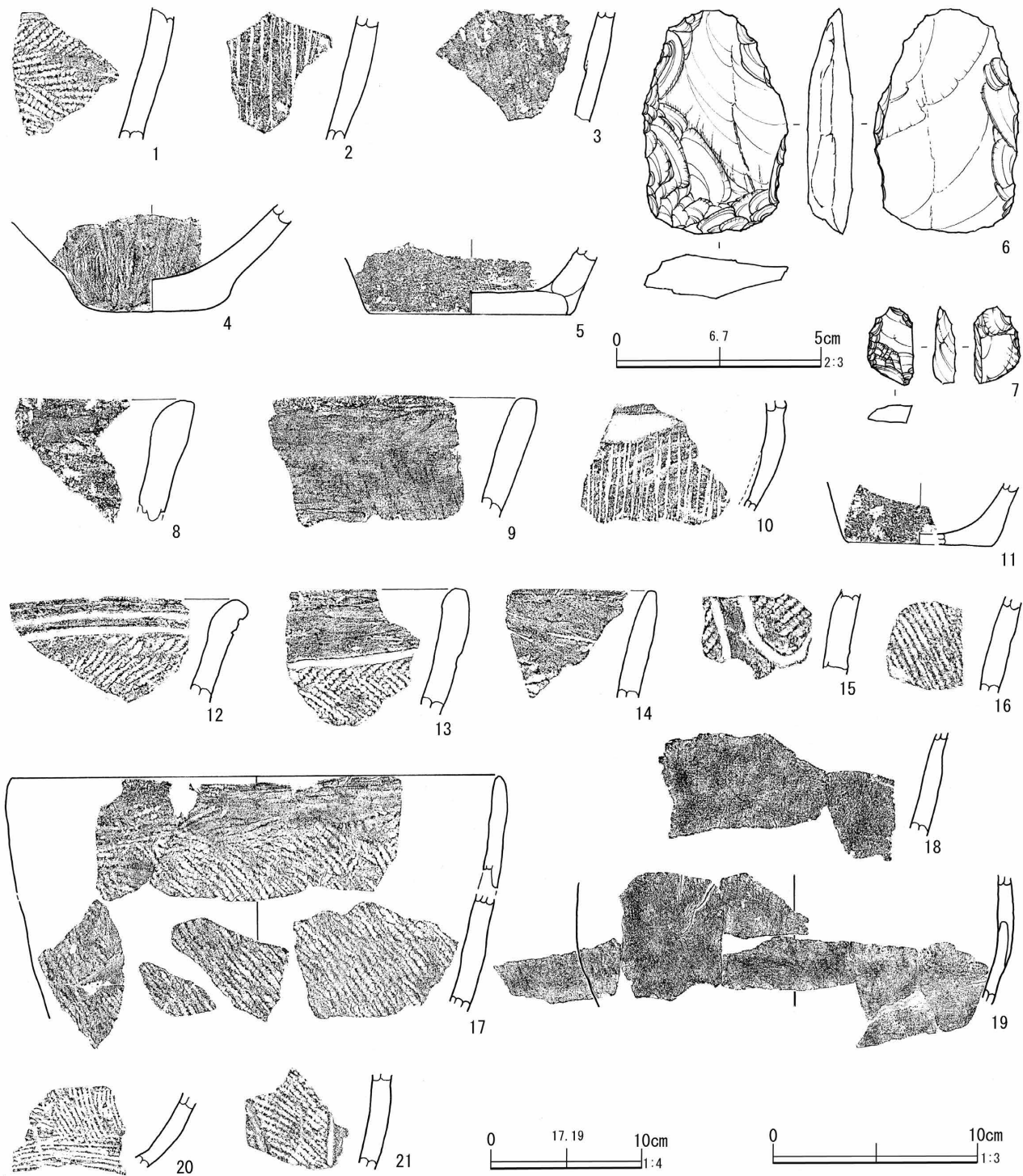
H3グリッドに位置する。平面形は長径約1.4m、短径約1.2mの不整形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

**土器** 第39図13～19が本址出土の資料である。13は、口縁部に無文帯を持ち、1条の沈線を挟んで以下に縄文が施される平縁の口縁部資料である。14は、無文の口縁部資料であるが、破片左下端に無節縄文がわずかに見られる。15は「H」状磨消文のうかがわれる胴部資料。16は単節縄文が施された胴部資料。17は、推定口径32cm、残存高17cmを測る平縁資料である。口縁部に無文部を持つが、下端区画線は引かれない。胴部には単節LR縄文が施される。18は無文となる胴部資料、19は、球胴を呈する無文の胴部資料で、残存部最大径29cm、残存高10cmほどを呈する。

### (3) 溝跡

#### ●第1号溝跡（第36図）

B3グリッドに位置し、第14号土坑と重複するが、新旧関係は明確でない。調査区内を南北方向に長さ約2.5m延伸する。平面形は直線的で、最大幅は約0.5m、確認面からの最大深は約0.1mを測る。



第39図 土坑・溝跡出土遺物

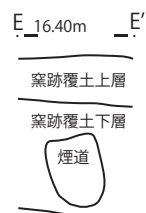
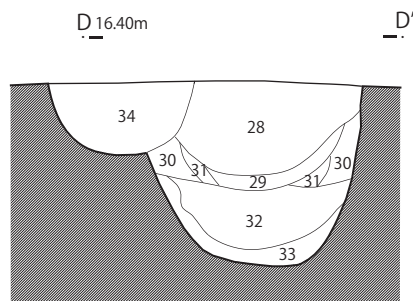
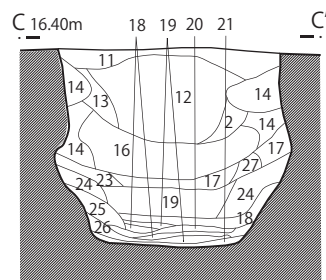
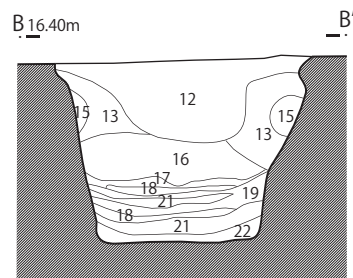
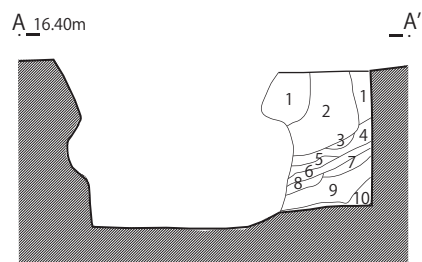
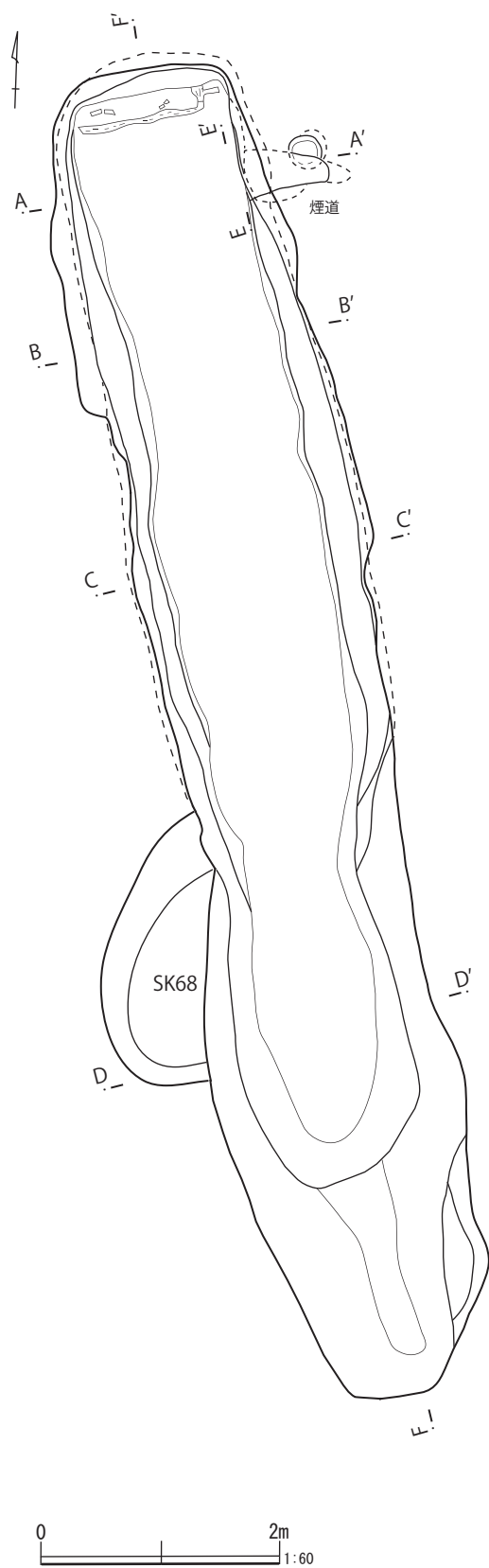
南に位置する第4号溝跡と同一遺構である可能性が考えられる。

●第2号溝跡 (第36図)

B5・C5・D5・E4・5・F4グリッドに位置し、第38号土坑に切られる。攪乱で切られる部分や途切れる部分を挟みながらも、調査区内を東西方向に長さ約11.0m延伸する。平面形は直線的で、最大幅は約0.3m、確認面からの最大深は約0.1mを測る。

出土遺物 (第39図)

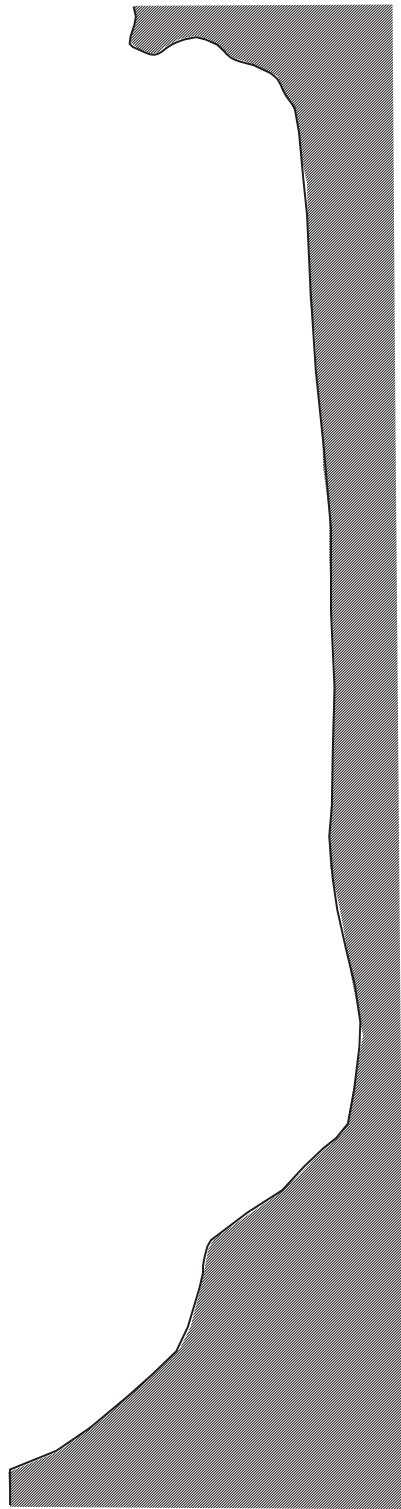
土器 第39図20、21は、両側を沈線で区画された縄文帯が垂下する胴部資料である。



第40图 第1号木炭窯跡 (1)



F. 1



- 第1号木炭窯跡
- 1 暗黄褐色土 ローム層、ソフト化が進み、締まりにやや欠ける。天井層。
- 2 暗茶褐色土 少量のカーボン粒子(微~2cm)と焼土粒子(微~0.3cm)を含む。ブラックバンドを基本としており締まり強し。
- 3 暗茶褐色土 2層に比し多量のカーボン粒子(1~2cm)を含む。
- 4 暗茶褐色土 多量のカーボン粒子(微~3cm)と少量の焼土微粒子を含む。ジャリジャリした締まりのある層位。
- 5 茶褐色土 少量のカーボン粒子(微~1cm)と暗橙色の焼土粒子(微)を多量に含む。締まり強く粘性あり。
- 6 暗茶褐色土 4層に近似。多量のカーボン粒子と暗茶褐色土ブロックの混じった層位。
- 7 暗茶褐色土 5層に近似するものの、焼土含有量は少なく色調は暗い。カーボン粒子(1cm内外)を含む。
- 8 暗茶褐色土 5層に近似するものの、カーボン粒子(微~1cm)と焼土微粒子を含む。
- 9 暗茶褐色土 きわめて多量のカーボン粒子(微~3cm)と焼土(にぶい暗橙色)を含む。
- 10 黄褐色土 ローム粒子により構成される。締まりなくボソボソ。
- 11 黒色土 ローム粒子(0.1cm)を多く含む。しまり良。
- 12 黒褐色土 ロームブロック(1~3cm)を多く含む。
- 13 暗黄褐色土 黒褐色土とローム土の混じり土。
- 14 暗黄褐色土 13層に近似するが、焼土粒子がわずかに混じってくる。
- 15 黄褐色土 ソフトローム土。天井部の付け根か。
- 16 黄褐色土 ソフトローム土。焼土粒子、炭化材をわずかに含む。15層の崩落土か。
- 17 暗黄褐色土 炭化材を多く含む。焼土粒子をわずかに含む。
- 18 暗黄褐色土 焼土粒子主体、炭化材を多く含む。粗い粒子状の層で締まり強。
- 19 黒色土 炭化材層。焼土粒子、灰色粒子を多く含む。
- 20 黒色土 炭化材層。19層に近似するが、焼土粒子はわずかである。
- 21 暗黄褐色土 炭化材、焼土粒子をわずかに含む。
- 22 黒色土 炭化材層。炭化材主体だが焼土粒子、灰色粒子はわずか。
- 23 赤褐色土 焼土層。焼土粒子、ブロック主体層。炭化材をわずかに含む。
- 24 赤褐色土 焼土層。焼土ブロック主体。締まり有り。
- 25 赤褐色土 焼土層。24層に近似し、より赤い。
- 26 赤褐色土 焼土層。25層に比しより赤みを増し、全体的にブロック化している。
- 27 赤褐色土 焼土層。焼土ブロックである。
- 28 黒色土 締まり有 粘性強 径1cm程の焼土粒子が下位に集中。
- 29 黒色土 締まり有 粘性有 径1cm程の焼土粒子と炭化材を多く含む。
- 30 暗褐色土 締まり有 粘性有 径0.5~1cmの焼土粒子と炭化物粒子を多く含む。
- 31 暗橙色土 締まり有 粘性有 径0.5~1cmの炭化物粒子を多く含む。操業面層か。
- 32 茶褐色土 締まり有 粘性有 径0.5~1cmの炭化物粒子を多く含む。
- 33 黄褐色土 締まり有 粘性有 ローム土を多く含む。
- 34 灰褐色土 締まりやや有 粘性有 径1cm程のローム粒子を多く含む。SK68の覆土。



第41図 第1号木炭窯跡 (2)

●第3号溝跡（第36図）

D3・4グリッドに位置し、第25号土坑に切られる。調査区内を南北方向に長さ約3.4m延伸する。平面形は直線的で、最大幅は約0.3m、確認面からの最大深は約0.1mを測る。溝跡に伴うピットを3基検出した。

●第4号溝跡（第36図）

B4グリッドに位置する。調査区内を南北方向に長さ約1.1m延伸する。平面形は直線的で、最大幅は約0.3m、確認面からの最大深は約0.1mを測る。

北に位置する第1号溝跡と同一遺構である可能性が考えられる。

(4) 木炭窯跡

●第1号木炭窯跡（第40・41図）

J3・4グリッドに位置し、第68号土坑を切る。堆積土中に認められるローム土（11～16層）は天井部が崩れ落ちたものと考えられ、窯の構造はローム層を掘り抜いて天井部を構築していたものと推定される。前庭部と焚口部を南、燃焼部を北に向けて位置し、煙道は燃焼部の北東部に設けられる。全長11.4m、前庭部の長さは約1.9m、燃焼部の長さは約9.5mを測る。煙道は燃焼部側で直径約0.6m、外側（排煙部）で直径約0.3mを測る。

焚口部を境に前庭部から燃焼部に移行しており、窯体の縦断面（エレベーション）から、前庭部南端から2.5m程の位置が浅く窪み、焚口部分として捉えられる。燃焼部は焚口部に向かって緩傾斜が認められる。最大幅は焚口部付近で約2.1m、確認面からの最大深も焚口部付近で約2.8mを測る。

燃焼部では炭主体層と焼土主体層が互層となって堆積している。炭主体層を19・20・22層の3面確認することができ、最低でも3回の操作が行われたものと推定される。遺構の年代を特定できる遺物は出土しなかったが、炭主体層からサンプリングした炭化材を年代測定試料とし、1190±40年（BP AD780～890年）の値を得ている。

出土遺物（第39図・42図）

土器 第42図1、2は勝坂式土器である。前者は、口唇部が「く」の字に外折するもので、丸みを帯びる口縁部にはキャタピラ文が施される。2は、垂下沈線とこれに沿うように施されたキャタピラ文が観察される。3はキャリパー形深鉢の口縁部資料で、隆帯上に沈線を施す太目の沈線で横位の「S」字文を施すものである。地文は単節RL縄文の縦位回転である。4は、口縁部が直立する深鉢形土器と思われ、口縁部に大きく張り出す鏝状の把手を持つ。地文に単節縄文がうかがわれる。5は、複合口縁となるキャリパー形深鉢である。条線文が施される。6は、口縁部に丈の高い隆帯の貼られた無文の口縁部資料である。7は、内湾する口縁部に丈の高い横走隆帯を貼るもの、8は、地文に撚糸文を施し、頸部に連続刺突文の施された隆帯を持つ胴部資料である。9は、括れ部に断面三角形の横走隆帯を貼る胴部資料である。地文は撚糸文である。10、11は、口縁部に1条の沈線で画された無文帯を持つ口縁部資料で、前者は外反しながら開くもの、後者はキャリパー形となるものである。ともに、単沈線で区画された磨消文が発達するものである。12は無文の口縁部、13は横走隆帯の看取される胴部資料、14～17は縄文の観察される胴部資料で、14では、微隆帯が垂下するもの、15は磨消文帯の垂下するものである。18～24は底部資料を一括した。20は高台風にリングをつけ上げ底とするもので、推定底径6cmを測る。21、24は大きく外反するもの、22

は比較的ストレートに立ち上がるものである。25は、口唇部を外側に折り曲げ複合口縁化するキャリパー形の平縁深鉢である。複合化した口縁部は横位の撫でを加え無文化し複合部の下端には1条の沈線を引き、以下は撚糸文となる。内面は横位の撫で整形が施される。推定口径30cm、残存高11cmほどを測る。26は、残存部最大径39cm、残存高15cmほどを測るキャリパー形深鉢の口辺部から胴部上半にかけての資料である。内湾する口縁部文様帯には、2条1組の隆帯を横位展開し「S」字状文などを描出する。明瞭な下端区画は持たないものの、頸部無文帯を形成し、胴部には、横走隆帯を起点とする2条1組の垂下隆帯を施すようである。地文は太目の撚糸文である。

**石器** 第39図6、第42図27が本址出土の資料である。6は、筥状石器である。チャート製の大型剥片を素材とし、正面の中央から右側縁側と裏面には主剥離面を残す。正面の成形加工は左側縁から刃部にかけて、丁寧に形を整え、器厚が均一になるよう整形している。刃部の整形加工は裏面からの加撃による不規則ながら丁寧なもので、急斜度の角度を持つ。27は、石皿残欠である。大振りの石皿で、縁部の残欠である。裏面には窪み1つが観察できる。内面整形は丁寧なもので口縁部は横位、胴部は縦位である。

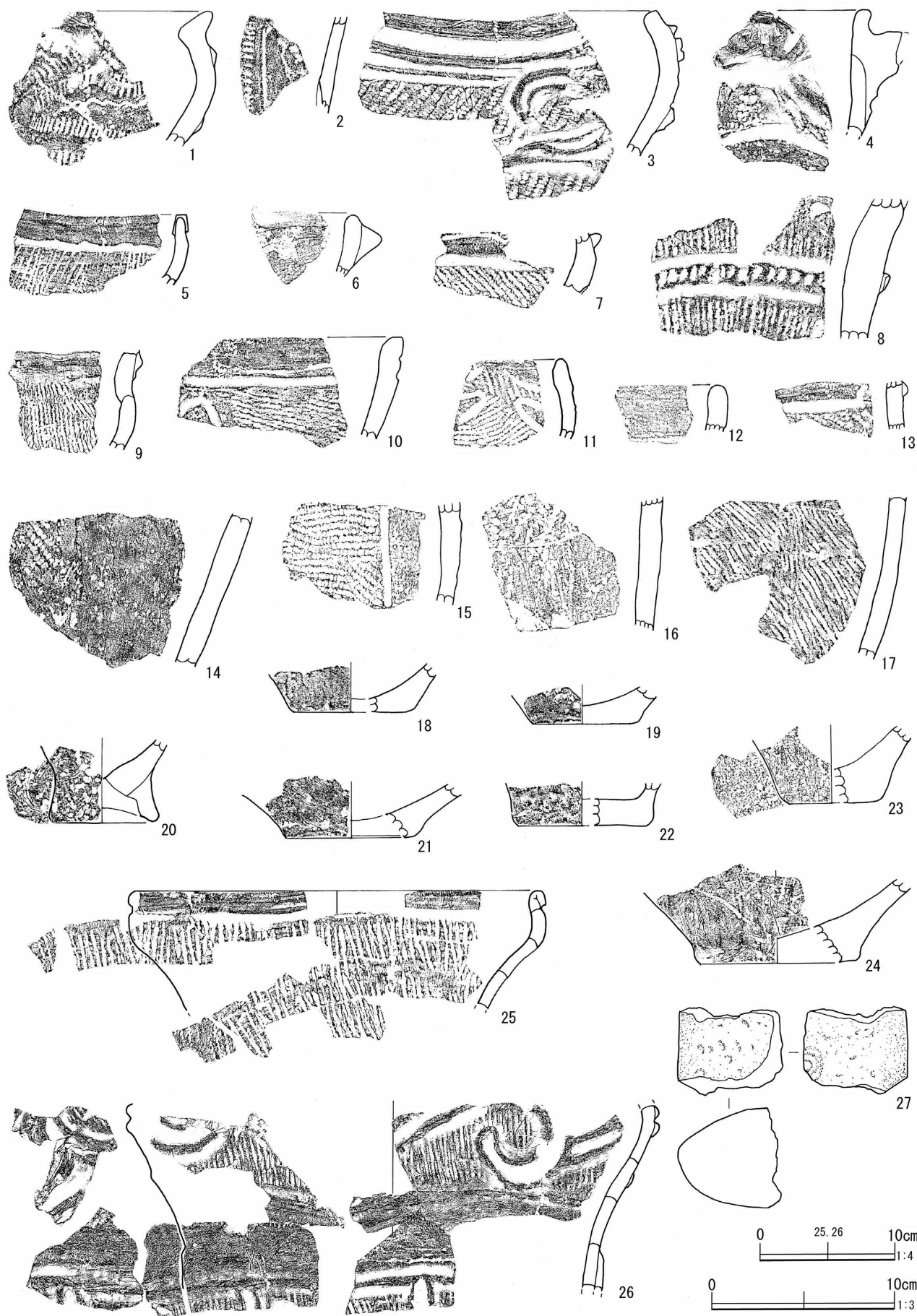
第6表 土坑・木炭窯跡出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
37	8	磨製石斧	ホルンフェルス	(9.7)	(6.7)	2.5	(165.4)	第11号土坑・被熱
37	29	搔器	黒色緻密安山岩	(2.1)	2.6	0.7	(4.6)	第29号土坑
37	30	石鏃	黒曜石	(1.5)	2.4	0.5	(1.7)	第29号土坑
37	31	石鏃未成品	チャート	2.7	1.7	0.7	2.6	第29号土坑
38	14	石鏃	赤チャート	3.0	(1.3)	0.5	(1.4)	第35号土坑
38	15	石鏃	チャート	(1.4)	1.8	0.3	(0.6)	第35号土坑
38	16	石鏃残欠	チャート	(1.5)	(1.2)	0.3	(0.4)	第35号土坑
38	17	2次加工剥片	チャート	5.3	1.9	0.9	8.6	第35号土坑
39	6	筥状石器	珪質岩	5.5	3.6	1.1	24.2	第42号土坑
39	7	2次加工剥片	チャート	1.9	1.1	0.5	1.4	第43号土坑
42	27	石皿残欠	安山岩	(4.3)	(5.1)	5.5	(191.5)	第1号木炭窯跡

#### (5) グリッド出土遺物 (第43～51図)

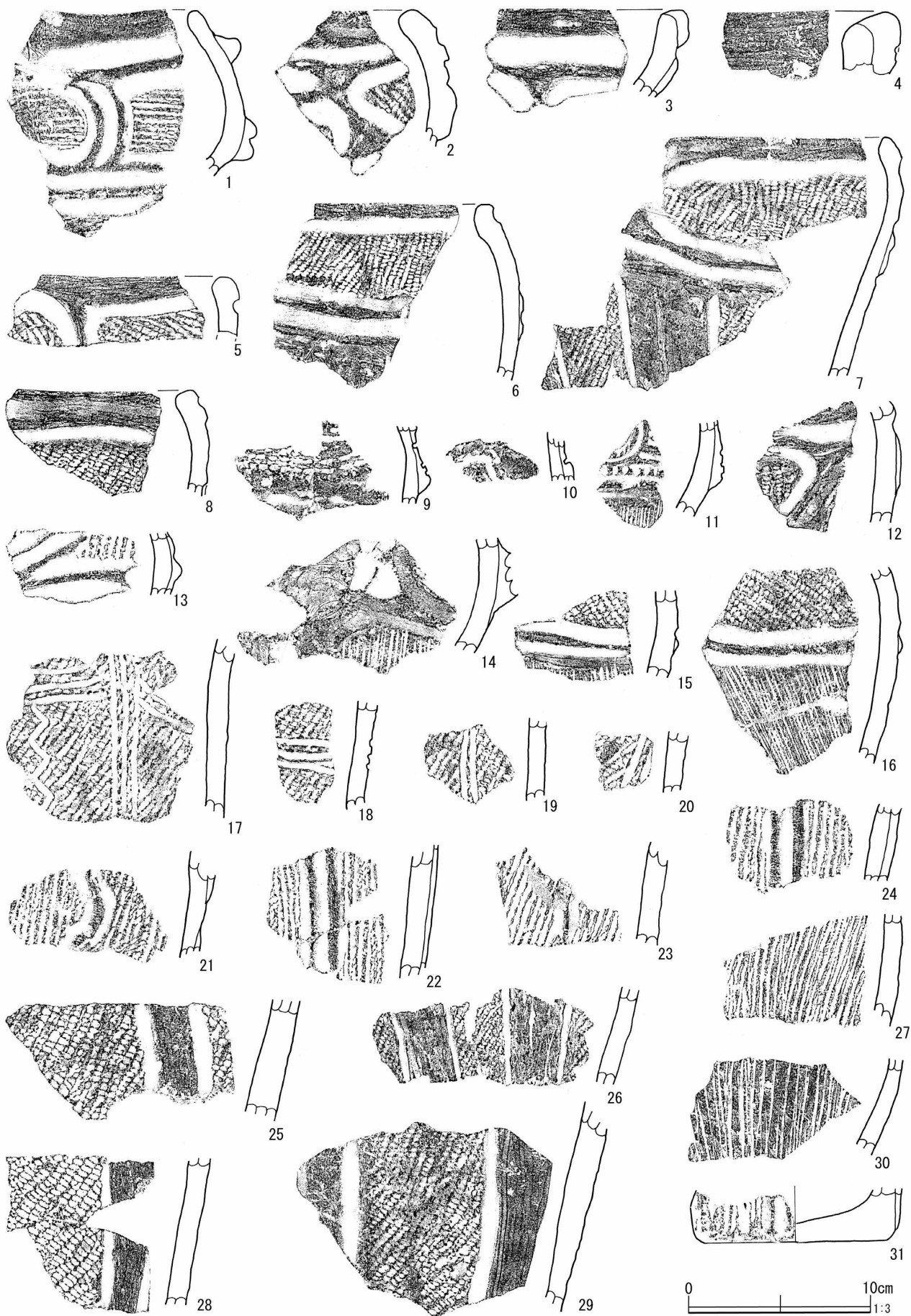
**土器** 第43図・第44図はI2グリッドの遺物集中区出土遺物である。1～8は、キャリパー形土器の口縁部で、1は、横位の撚糸文を地文とし丈の高い隆帯で「S」字文ないし鉤の手となるモチーフを描出する。頸部には無文帯が形成されるようである。加曾利E I式土器である。2～8は、口縁部に低平な隆帯による楕円区画等が描かれるものである。加曾利E III式期のもと思われる。9は、内湾傾向を持つ口縁部に半裁竹管を用いた刺突列を持つ。阿玉台式期のものであろう。10は、刺突の施される隆帯が観察される胴部資料、11は、粘土帯を貼り、その上に同心円ないし渦巻文を描くと思われる資料で、粘土帯下端には刺突列が観察される。12は、加曾利E III式の口縁部付近の資料、13は加曾利E I式期の口縁部資料である。14は、両耳壺の把手付け根の資料で、体部には条線文が看取される。15、16は同一個体と思われる、口縁部楕円区画文の下部に条線文が施される資料である。17～20は同一個体で、加曾利E I式期のキャリパー形深鉢の胴部資料である。単節RL縄文を縦位回転させた地文上に2～3条の沈線で縦横斜めの区画線を設け、区画内に蛇行沈線を垂下させるものである。21～24は同一個体である。加曾利E I式期のキャリパー形深鉢の胴部資料で、撚糸文の地文上に2条1組の垂下隆帯と蛇行隆帯とを交互に垂下させると思



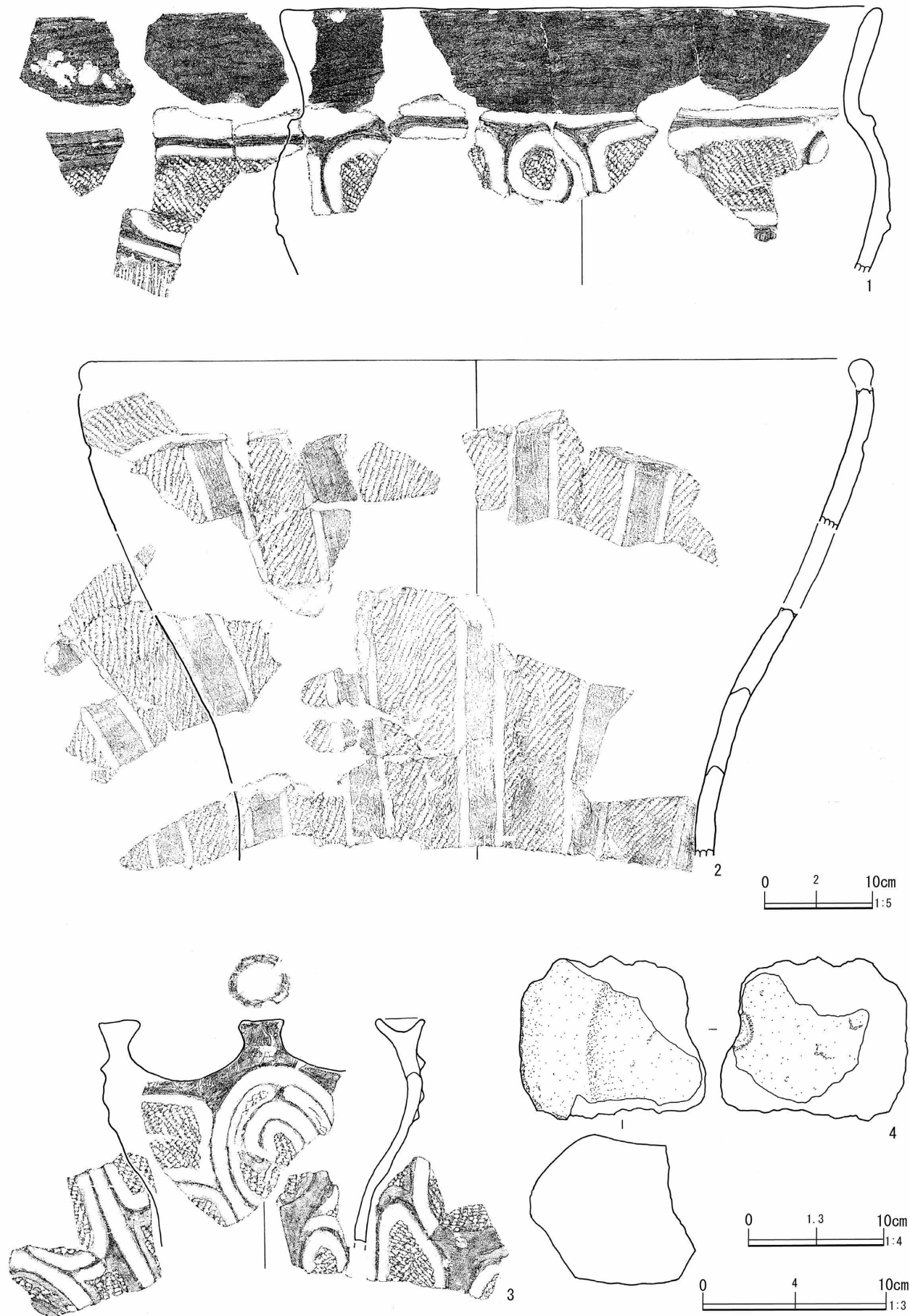


第42図 木炭窯跡出土遺物





第43図 I2グリッド遺物集中区出土遺物(1)



第44図 I2グリッド遺物集中区出土遺物(2)





第45図 グリッド出土遺物(1)

われるものである。25、26、28、29は加曾利EⅢ式期のキャリパー形深鉢の胴部資料で、磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下するものである。27、30は縄文の施された胴部資料である。31は、撚糸文地文上に垂下隆帯の見られる底部資料である。

第44図1は、推定口径44cm、残存高18cmを測る浅鉢形土器である。やや外反する口縁部は横位の丁寧な撫でを加え無文とし、肩部に上下を横走隆帯で区画した横帯を設け横長の楕円区画や渦巻風の区画を連ねる。区画内には単節RL縄文を充填する。以下は櫛状施文具による条線文が施される。2は、推定口径58cm、残存高33cmを測る大振りのキャリパー形土器の胴部上半の資料である。わずかに残された口縁部文様帯には、縄文の施された横長楕円区画が施されたようである。胴部には、磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下する。地文は単節RL縄文縦位回転である。3は、口径24cm、残存高18cmを測るキャリパー形深鉢で、口縁部に4単位の臼状突起が配される。突起下に隆帯による渦巻が配され、これをつなぐ柾上の区画文が形を変えながら施される。いわゆる梶山類型に相当しよう。

**石器** 第44図4は石皿残欠である。器厚7.5cmを測る厚みを持つ縁の薄いものである。裏面には窪み1つが観察される。

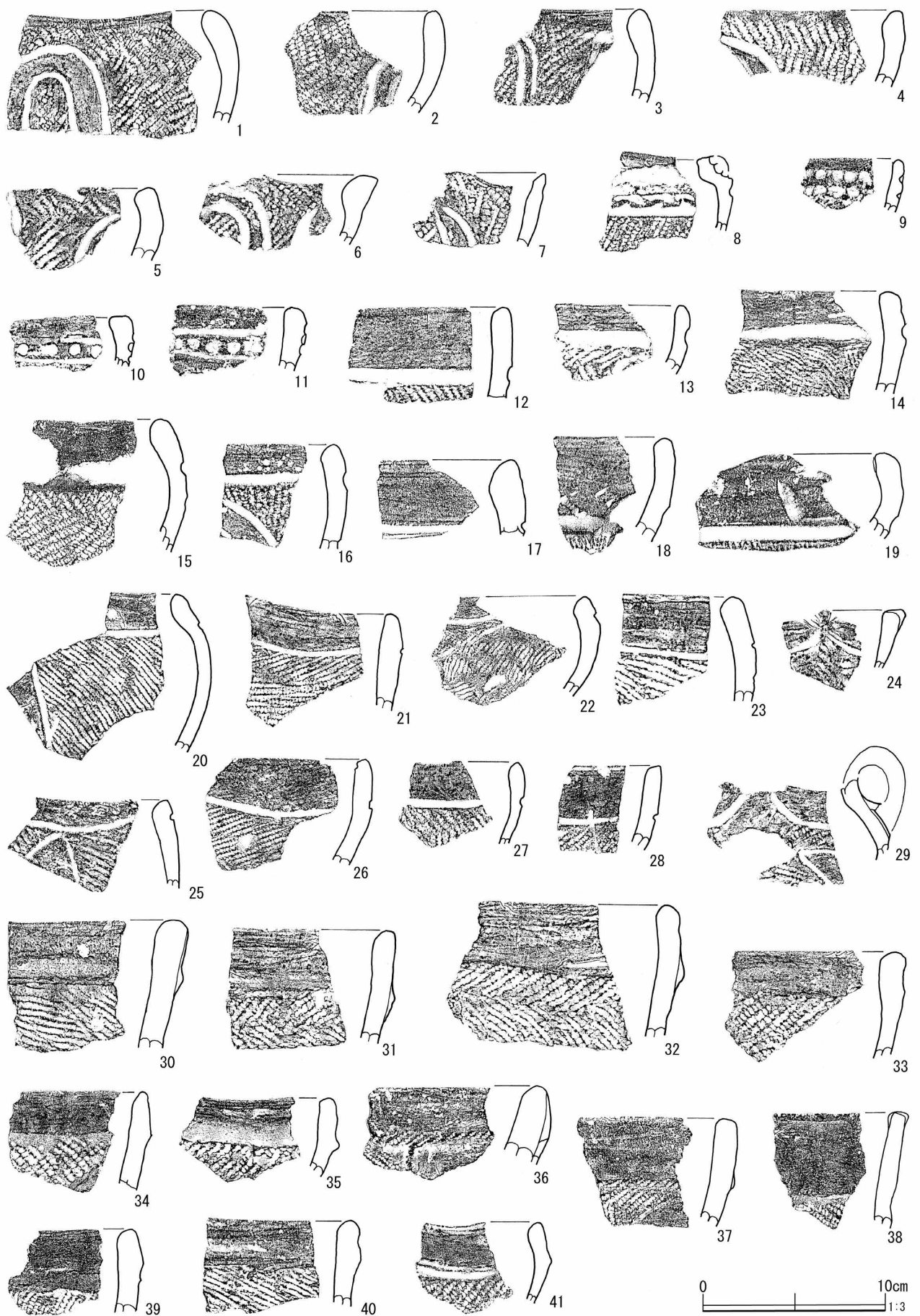
**土器** 第45図～第49図がグリッド一括の土器資料である。

第45図1～4は、条痕文の施された早期末葉の一群である。1は、斜行する沈線が施され、要所に円形竹管文の施されるものである。鶉ヶ島台式に比定できよう。2では、微隆帯が観察される野島式土器であろう。5、6は、角頭状となる口縁部に先端の尖る押し引き刺突が施されるものである。10はこれに類する口縁部資料で横位展開の鋸歯文が見られる。7～9、11～13は、角押文あるいはこれに類する刺突列の施される一群である。12はよく撫でられた平縁土器で微隆帯の両側に刺突列が施されるもの、13は「∩」状の刺突列が観察されるものである。阿玉台式に相当する一群と思われる。14～21は勝坂式土器で、C字状爪形文に縁どられたキャタピラ文が見られる胴部資料である。16では三叉文が、21では円形刺突文が看取される。22～33は、加曾利EⅠ式期から、同Ⅱ式段階と思われる口縁部資料である。22では横位の撚糸文地文に2本1組の隆帯が横位展開する。23は突起の鏢状の付されるもの、25、26は渦巻文の施されるもの、29は斜め上を向く幅狭文様帯を持つもの、31は、口縁部内外面に横走隆帯が貼られたものである。34～36は、加曾利EⅢ式に相当するキャリパー形土器の口縁部資料である。37は口縁部の臼状の突起である。38～43は、加曾利E式の口辺部の資料で、38ではしっかりと巻いた渦巻文が看取される。42は撚糸文地文上に2本1組の隆帯が横走する。

第46図1～7は加曾利EⅢ式の後半の資料で、いわゆる吉井城山類型及びその周辺に相当する資料である。8～11は、口縁部に刺突列を持つ一群で、8では内屈する口縁部外縁に相互刺突列が施されるもの、9～11は円形刺突の施されたものである。12～19は、口縁部に無文部を持ちその下端を1条の沈線で区画するものである。18、19は沈線以下に条線文の施されるものである。20～29は、加曾利EⅣ式に相当するキャリパー形深鉢の口縁部資料である。緩波状縁を呈するものが多い。24では波頂部に小突起を持ちそこから両側へ斜行する沈線が口縁部無文帯の下端を区画する。29では波頂部に橋状把手が付される。20、25では、先端の尖る磨消文帯が観察される。30～41は、口縁部無文帯を断面三角形の微隆帯で区画するもので口縁部は外反し平縁となるものが多い。

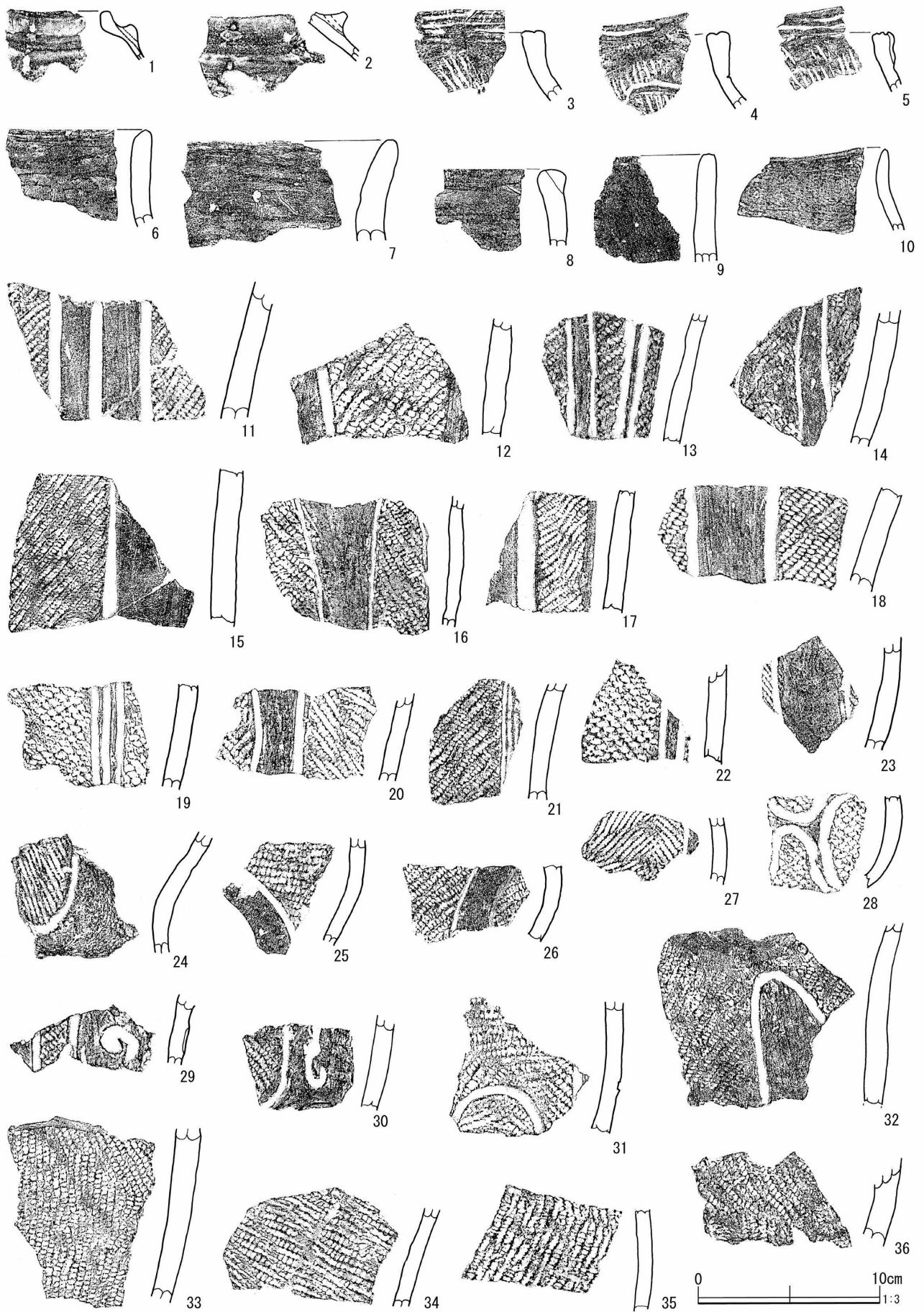
第47図1、2は、強い内湾傾向を示す薄手の土器で、口縁外縁に貫通孔を持つ隆帯が付される。いわゆる瓢型の注口土器の口縁部資料である。3～5は同一個体と思われるもので、大きく内傾する平縁土器の





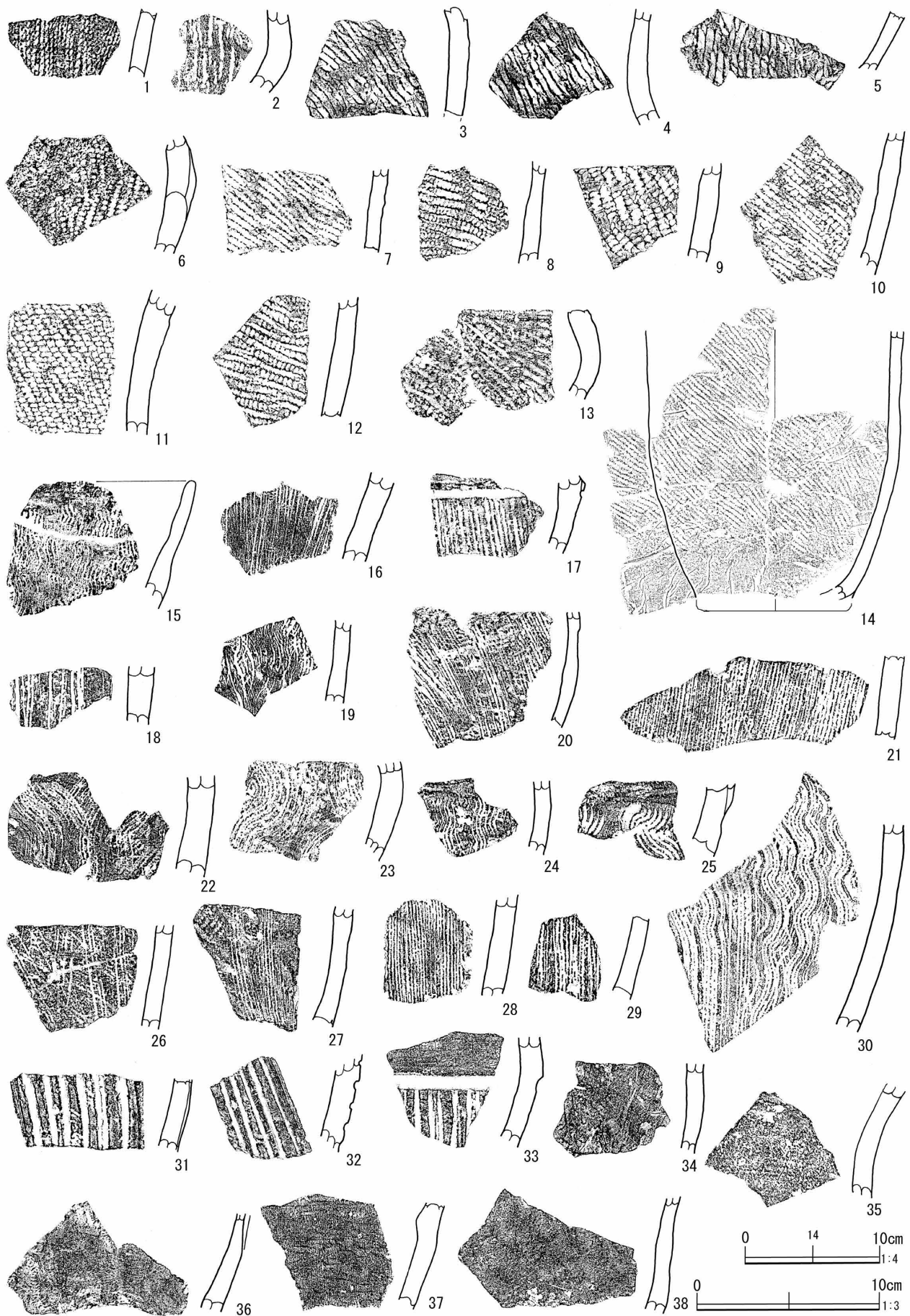
第46図 グリッド出土遺物(2)



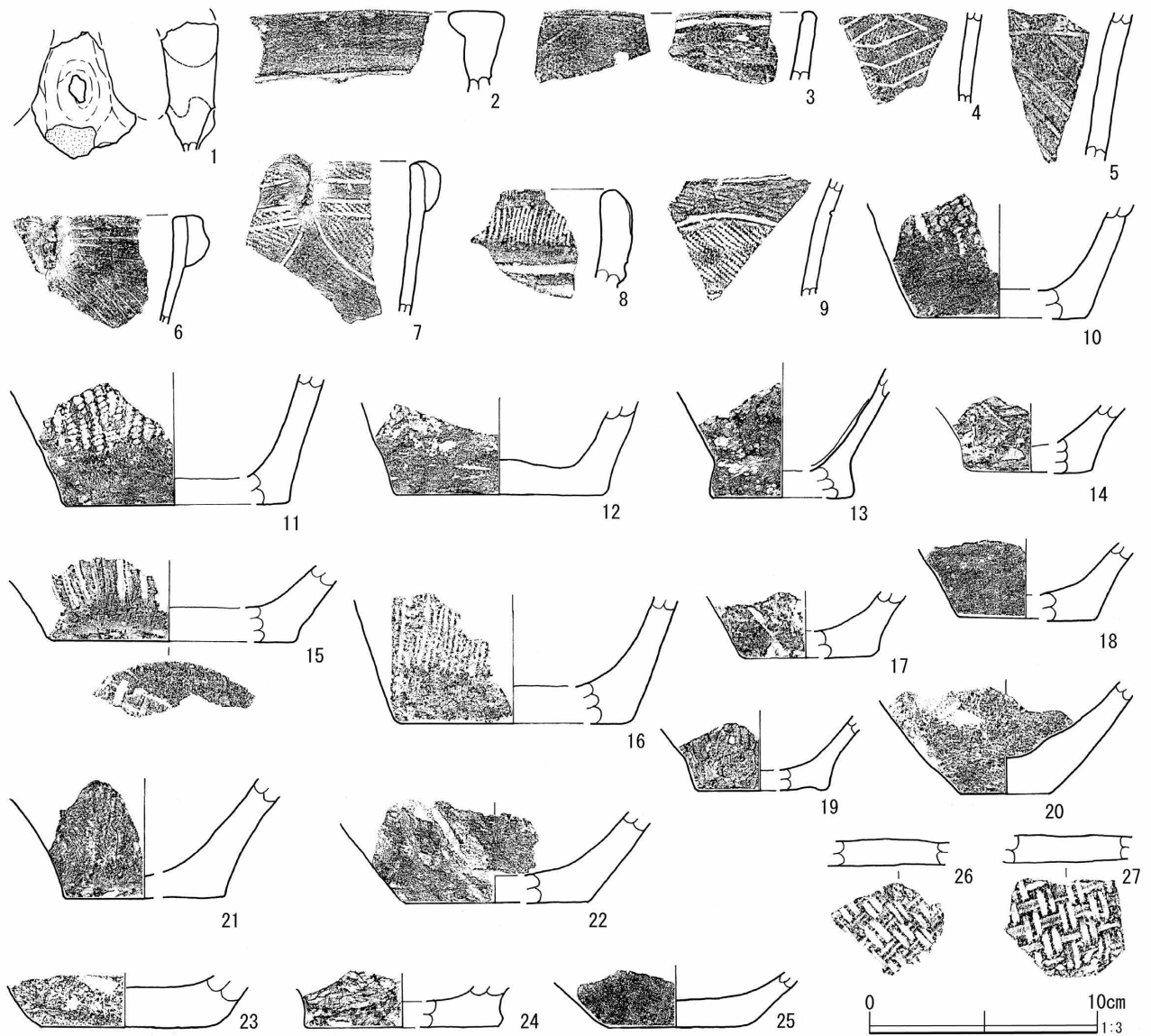


第47図 グリッド出土遺物(3)





第48図 グリッド出土遺物(4)



第49図 グリッド出土遺物(5)

口縁部資料である。口唇部に数条の条線を施すほか、体部にも同様に条線文が施される。4では、半裁竹管によって横走る沈線が引かれることがわかる。6~10は、無文の口縁部資料である。8では、口唇部外縁に隆帯が貼られる。11~23は、磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下する胴部資料である。11では、磨消文帯の中央にもう1条沈線が施される。16は上端がすぼまるようである。19、21は3条1組の沈線が垂下する。24は、「U」状の縄文帯が看取される胴括れ部の資料、25~27は、「∩」状の磨消文帯の施される胴部上半の資料であろう。28は、「H」状となる幅狭の磨消文の観察されるものである。29、30は、蕨手文の施される資料である。31は「∩」条の沈線がうかがわれる資料である。32~36は縄文の施される胴部資料である。

第48図1、2は燃糸文の施された資料、3~13は縄文の施された胴部資料である。14は、残存部最大径19cm、残存高21cmを測る深鉢形土器の胴部から底部に及ぶ資料である。前面に縄文が施され、底部周辺は無文となる。15~33は、条線文または集合沈線文の施された資料である。15は、蛇行条線の施された



外反する口縁部資料である。17、25は横走する隆帯や沈線が観察されるものである。27では、破片左上部に縄文も施される。34～38は無文の胴部資料である。

第49図1は、口縁土器の波頂部に付された把手の残欠と思われる。後期称名寺式期の所産であろう。2は、口唇部が内折する平縁土器で、口縁部無文帯下端の沈線がうかがわれる。称名寺式期の資料であろう。3は、口唇内面に1条の沈線が引かれる平縁資料、4は菱形の縄文帯と磨消文帯が交互に施文される薄手の資料、5は、胴部を巡る浅い沈線の下部に斜行する沈線が見られるものである。いずれも堀之内式期の所産であろう。6、7は、口縁部に横走する沈線帯や縄文帯の要所に縦長の瘤を持つ平縁土器で、7では、半円形の縄文帯が見られる。8は、口縁部に縦位の刻み目を持つ厚手の土器、9は、背合わせの弧線文に画された縄文帯の観察される胴部資料である。いずれも後期加曾利B式末葉から安行式初頭に相当するものであろう。10～27は底部資料である。10～12は縄文が施される。15、16は条線文の施されるものである。15、26、27は底面に網代痕が残される。

**石器** 第50図1は、先端部と基部を欠くが、有舌尖頭器の残欠と思われる。正面不規則ながら正面は丁寧な整形加工が施される。裏面は両側縁からの粗雑な整形加工が施され、右側縁を中心に細かな整形加工が施される。2～6は、石鏃である。このうち2～4は凹基無茎石鏃、5はほぼ平基無茎の石鏃としてよい。ただし、正面基部を剥ぎ切れておらず、未製品とみるべきであろう。また6は、かなり分厚く器厚を残す未製品と思われるが、有茎石鏃を意識したものと思われる。7～12も石鏃未製品と思われる。7は正面中央に素材剥片の主剥離面を残す。先端部は両側縁からの成形加工、調整加工が施されている。基部の処理方針はうかがえない。裏面は右側縁を中心に丁寧な調整加工が施される。8は、表裏に素材剥片の主剥離を残すもので、正面両側縁に押圧剥離を加え調整を試みている。特に右側縁の加工は、基部から先端へ向かう規則的なものである。裏面は素材剥片の打瘤のあった右下側に加工が集中しており、打瘤の厚みを減じる加工を施していたものとみてよい。9は、正面左側縁側に素材剥片の主剥離を見ることができる。右側縁成形加工調整加工は丁寧なものである。裏面両側縁にも調整加工を加えている。10は、正面右側縁には表裏から丁寧な調整加工が施されるが、左側縁側は両面とも素材剥片の主剥離を残したままである。11は、横長の剥片を素材とするもので、裏面に主剥離が残される。正面では両側縁から成形、調整加工が加えられているが、特に右側縁側に素材剥片の打面が大きく残る。一部打瘤を削ぐ加工が見られる。12も横長剥片素材である。正面は周辺から大きく成形加工が施され先端を作り出す意図がうかがえる。裏面においても先端部を意識した加工が行われている。13、14はいわゆる石鏃ブランクと呼ばれる資料であろう。厚みのある剥片に整形加工を加えながら徐々に成形を進めている。前者では、正面に節理を残すが、周辺部から厚みを減じる加工を施している。裏面右側縁ではソフトハンマーによる足の長い剥離が行われている。後者は、中央にかなりの厚みを残しながらも周辺部に長脚の剥離を施し、形状を整えつつある。15～18は2次加工剥片である。15では裏面右側縁に細かな調整加工が施される。16は、不整形剥片の正面に両側縁から、丁寧な整形加工を加え平坦に整えている。裏面は素材表皮とランダムな剥離面が残され、断面形状は逆三角形となる。17は、先端部に長脚の剥離を施しやや尖り気味ながら円刃を作りだしている。裏面には大きく主剥離を残すが右側縁も一部調整加工が見られ、搔器として用いられた可能性がある。18は、やや細長い不整形剥片で両側縁に整形加工を施し先端部を断面が菱形になるように整形している。ドリルを意識したものであろうか。19は、上部に節理面を大きく残し、楔形の断面を持つことから、石核である可能性もあるが、明確な剥片剥離作業の痕跡は認められない。むしろ、正面下端や、裏面左側縁部



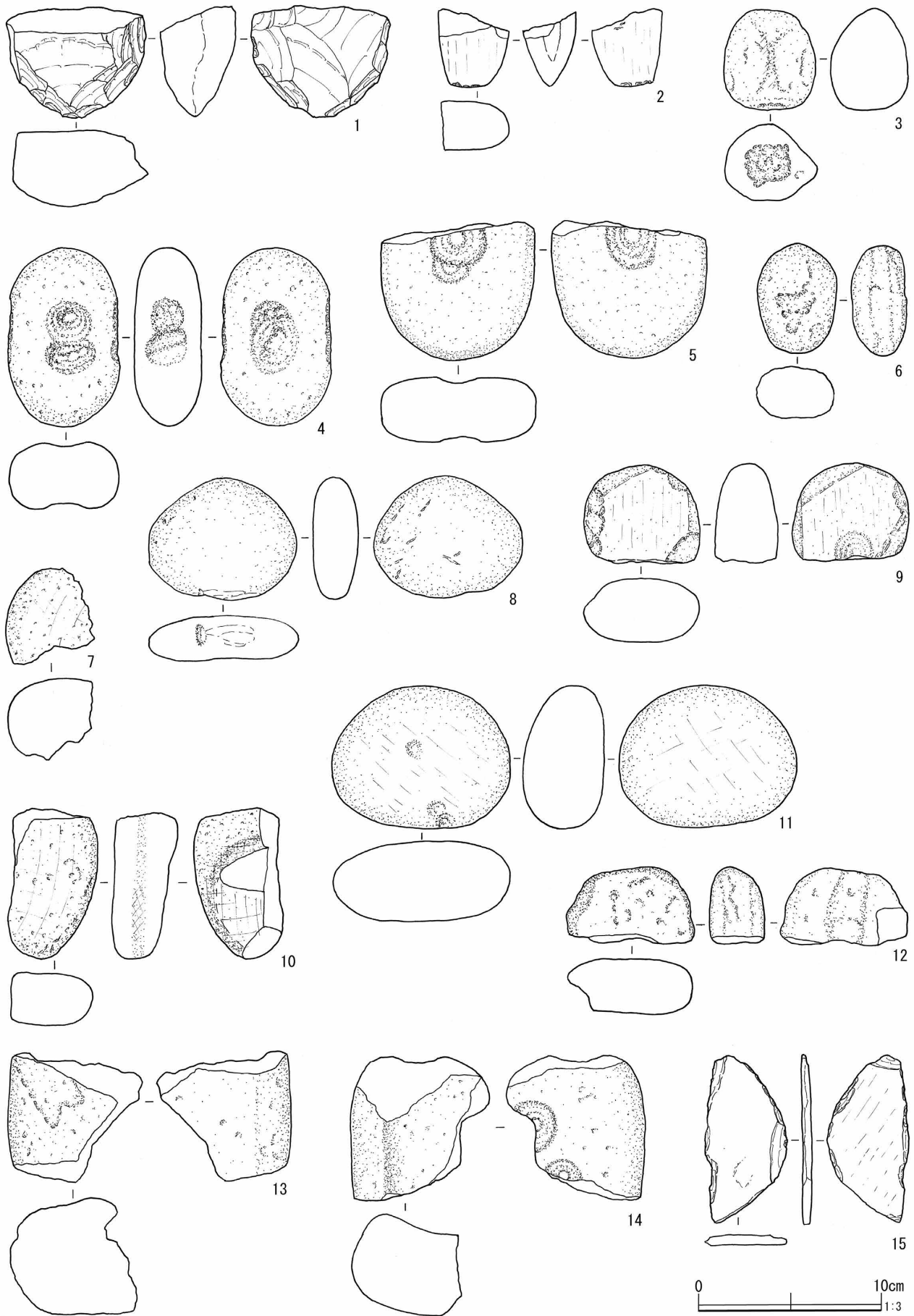
第50図 グリッド出土遺物 (6)

の成形加工や調整加工の状況から、削器である可能性が高いものと思われる。20はドリルである。凹基無茎石鏃が縦に欠損したのち、先端部を錐に加工している。21は、石錘である。扁平な楕円礫を素材とし、四方を打ち欠き紐かけとしたものとみられる。下端は欠損している。22は、小型で細身の磨製石斧である。先端を欠くが、これまでも欠損したことがあり、正面側を研ぎなおしたものと思われ、裏面に比べやや角地が急であることがわかる。断面形状は整った長方形を呈する。鑿であろう。

第7表 第3地点グリッド出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
44	4	石皿	安山岩	(8.5)	(9.9)	8.0	(910.0)	残欠
50	1	有舌尖頭器	チャート	2.0	1.2	0.4	1.0	
50	2	石鏃	チャート	2.6	1.6	0.3	0.9	
50	3	石鏃	チャート	(2.2)	1.8	0.4	(1.3)	
50	4	石鏃	チャート	2.6	1.8	0.4	1.4	
50	5	石鏃未製品	黒曜石	2.2	1.6	0.9	2.1	
50	6	石鏃未製品	チャート	3.3	2.3	1.1	6.1	
50	7	石鏃未製品	赤チャート	2.3	1.9	0.6	2.1	
50	8	石鏃未製品	チャート	2.2	1.6	0.7	2.1	
50	9	石鏃未製品	チャート	2.5	1.9	0.5	2.3	
50	10	石鏃未製品	チャート	2.2	1.7	0.7	1.8	
50	11	石鏃未製品	チャート	2.0	1.7	0.4	1.5	
51	12	石鏃未製品	チャート	2.4	1.3	0.7	2.1	
50	13	石鏃ブランク	チャート	2.5	2.3	1.1	5.5	
50	14	石鏃ブランク	チャート	2.2	1.9	0.9	4.3	
50	15	2次加工剥片	チャート	3.2	2.0	0.9	4.5	
50	16	2次加工剥片	チャート	2.4	1.0	0.7	1.7	
50	17	2次加工剥片	チャート	2.3	1.2	0.5	1.7	
50	18	2次加工剥片	凝灰岩	5.8	3.0	0.9	12.1	
50	19	スクレーパー	チャート	3.2	5.3	2.4	41.3	
50	20	石鏃転用ドリル	チャート	1.8	0.7	0.5	0.6	
50	21	石錘	砂岩	(3.5)	3.5	0.9	(13.6)	
50	22	磨製石斧	砂岩	(4.9)	1.5	1.0	(14.0)	
51	1	打製石斧	ホルンフェルス	(6.0)	7.5	4.1	(212.0)	
51	2	磨製石斧	緑色岩	(4.1)	(3.6)	2.8	(53.6)	残欠
51	3	磨石	安山岩	5.5	5.0	4.1	146.9	
51	4	摩石兼用凹石	安山岩	9.7	5.9	3.7	320.0	
51	5	磨石兼用凹石	安山岩	(7.4)	8.4	3.4	(356.0)	
51	6	敲石	安山岩	5.9	4.2	2.8	70.4	
51	7	磨石	安山岩	(5.2)	(4.7)	(4.4)	(116.0)	被熱
51	8	磨石	硬砂岩	8.1	6.6	2.4	201.0	
51	9	磨石兼用敲石	安山岩	(5.3)	6.3	3.4	(189.9)	
51	10	磨石	安山岩	(8.1)	(4.5)	2.9	(141.4)	
51	11	磨石	安山岩	7.9	9.7	5.3	475.0	
51	12	磨石	安山岩	(3.8)	6.9	2.9	(104.1)	
51	13	石皿	安山岩	(6.5)	(7.3)	6.3	(344.0)	残欠
51	14	石皿	安山岩	(7.9)	(7.4)	4.1	(386.0)	残欠
51	15	不明	緑泥片岩	9.2	4.5	0.5	36.0	





第51図 グリッド出土遺物 (7)

第51図1は打製石斧の刃部残欠である。厚みのあるホルンフェルスの大型剥片を素材とするもので、正面に残されるのが素材の主剥離であろう。整った円刃を呈する。裏面は周辺からの剥離によって礫表皮を剥いだものと思われる。2は、磨製石斧の刃部残欠である。右側縁が一部残る。3は、小型の磨石兼敲石である。4、5も磨石兼敲石である。両者とも扁平な楕円礫を素材とし、石鹼状に面取り整形している。前者は、表裏両面と側面にも敲打痕が残される。後者は、上部を欠損するが表裏に敲打痕が残される。6～8は磨石である。7は残欠である。被熱しており、これによって欠損したものと思われる。9は、磨石兼敲石である。扁平な楕円礫を素材としたものであるが、半分に欠損したのち周囲をくまなく敲打使用している。10～12は磨石である。10は、扁平な楕円礫素材である。表裏ともよく磨られている、側縁も磨石として使用している。11は、扁平な楕円礫を整形せずに使用している。使用は両面に及ぶが、頻度は高くない。12は、扁平楕円礫素材で石鹼状整形を施している。欠損後、槌状の使用痕も見られる。13、14は石皿残欠である。後者は皿の縁部が明瞭に残る。裏面には2か所の窪みが残される。15は、半円形の緑泥片岩製品である。薄く剥離した緑泥片岩の周囲を敲打整形したものである。

### 3 第9地点の遺構と遺物

#### (1) 土坑

##### ●第46号土坑 (第52図)

第9地点の北寄りに位置する。平面形は長径約1.3m、短径約1.1mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

##### 出土遺物 (第54図)

土器 1は無文の底部付近の資料である。

##### ●第47号土坑 (第52図)

N1グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約0.9mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

##### ●第48号土坑 (第52図)

N1・O1グリッドに位置する。平面形は長径約1.1m、短径約1.0mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は中央が浅く窪む。

##### ●第49号土坑 (第52図)

O1グリッドに位置する。平面形は長径約1.0m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は南寄りが浅く窪む。

##### ●第50号土坑 (第52図)

N1グリッドに位置する。平面形は長径約0.8m、短径約0.7mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

##### ●第51号土坑 (第52図)

M3グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約1.1mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。土坑に伴うピットを1基検出した。

##### ●第52号土坑 (第52図)

Q1グリッドに位置する。平面形は長径約1.3m、短径約0.9mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

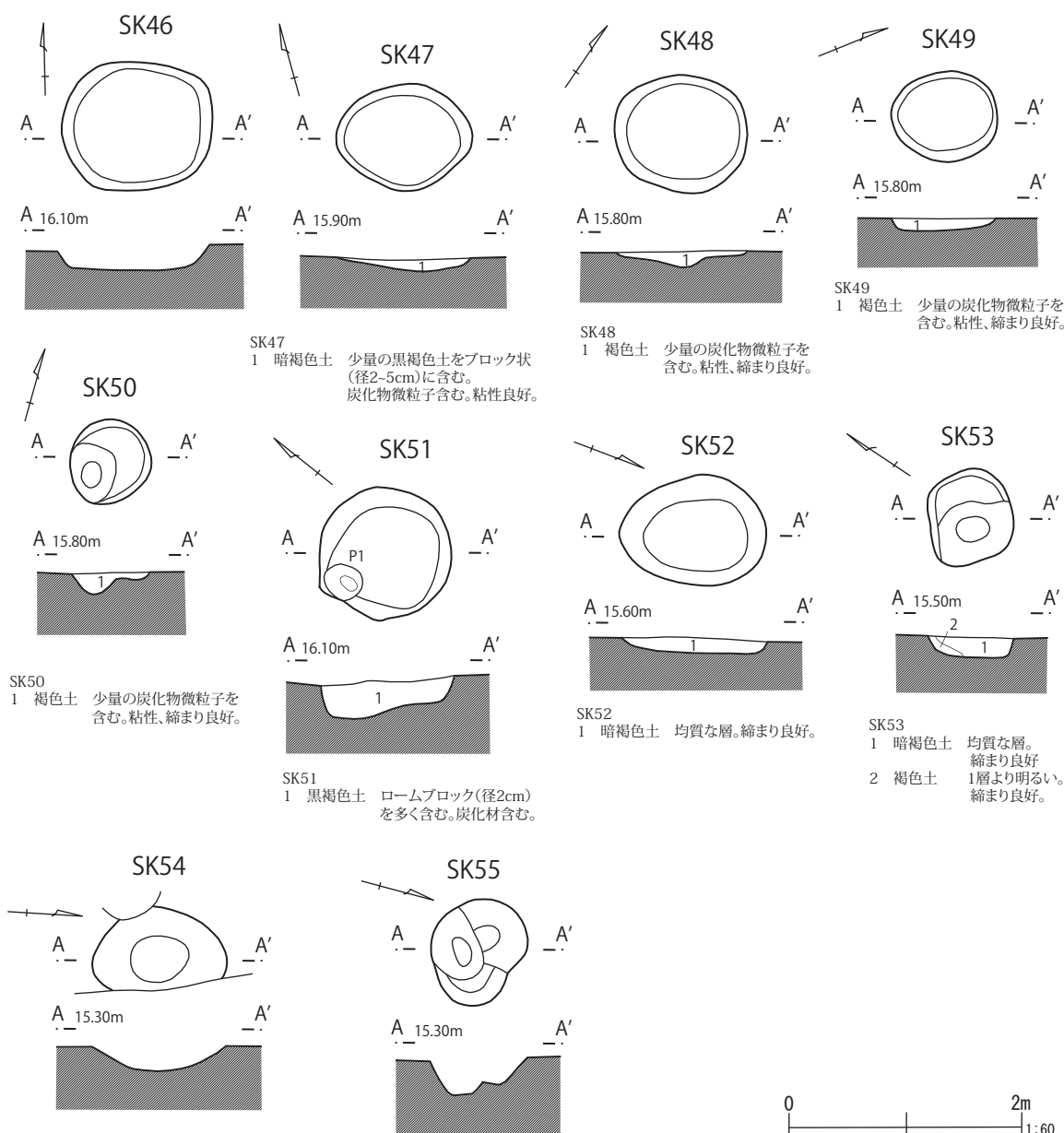
##### 出土遺物 (第54図)

土器 2は、単節縄文のうかがわれる小破片である。

##### ●第53号土坑 (第52図)

第9地点の北東寄りに位置する。平面形は長径約0.9m、短径約0.7mの不整円形を呈す。確認面から床





第52図 第46～55号土坑

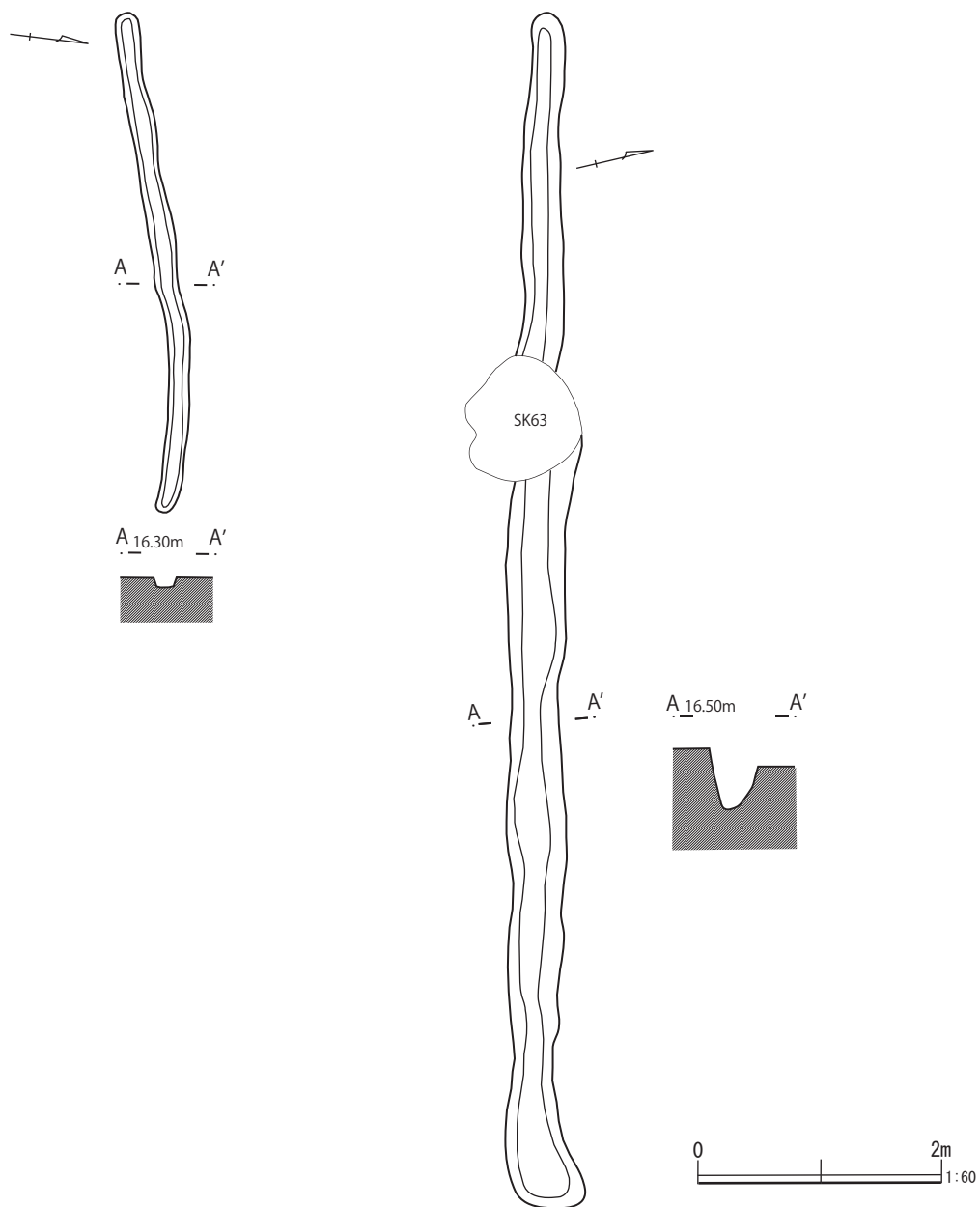
面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第54号土坑 (第52図)

R1、2グリッドに位置し、東半部は調査区外である。第55号土坑に切られる。残存部で長径約1.1m、短径約0.8mを測る。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第55号土坑 (第52図)

R2グリッドに位置し、第54号土坑に切られる。平面形は長径約0.9m、短径約0.8mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は南寄りが浅く窪む。



第53図 第5・6号溝跡

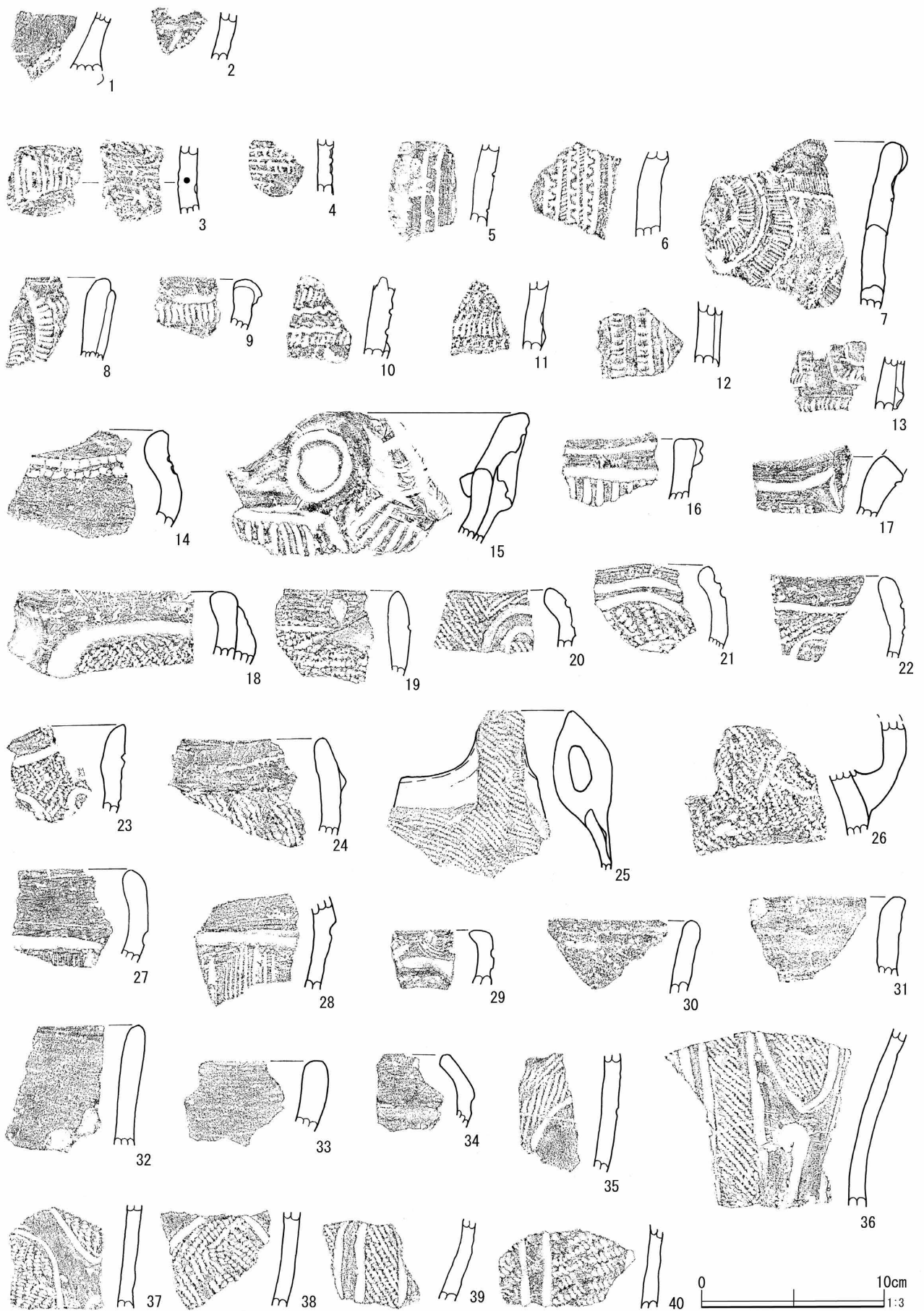
(2) 溝跡

●第5号溝跡 (第53図)

K3・L3グリッドに位置する。調査区内を東西方向に長さ約4.1m延伸する。平面形は直線的で、最大幅は約0.2m、確認面からの最大深は約0.1mを測る。

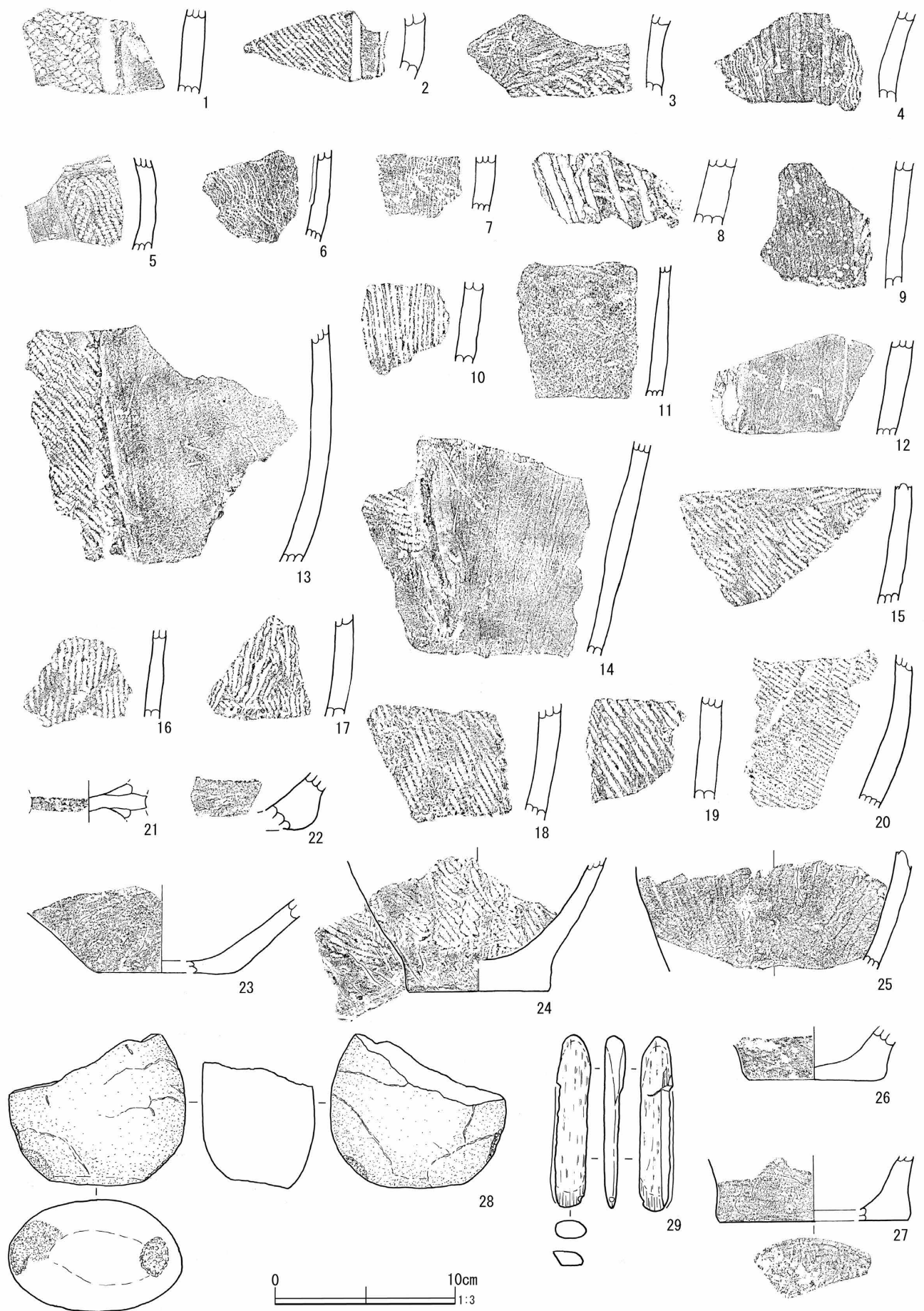
(3) グリッド出土遺物 (第54・55図)

土器 第54図3は表裏に条痕の施された、早期末葉の土器群である。縦位の短沈線や円形刺突が看取される。鶉ヶ島台式の範疇であろう。4は、ガイドラインを持つC字状爪形文の施されたものである。前期後葉、諸磯 b1 式土器に相当しよう。5は、よく器面調整された胴部に2条の沈線が垂下するもので、沈線内側に



第54图 第9地点出土遗物(1)





第55图 第9地点出土遗物(2)

交互に三角形の刺突が観察される。6は、よく器面調整された胴部に3列の相互刺突文列と細かな刻み目文列が垂下するものである。両者は、中期初頭の土器群として位置づけられる可能性が高い。7～13は、幅広の多裁竹管を用いたキャタピラ文等が付される土器で、勝坂式期に比定されよう。14は、小突起を有する口縁部資料で、2条の角押文が観察される。阿玉台式土器であろう。15～17は加曾利E式古相を示すもので、15は波頂部に大きな環状の突起を持つもので、口縁部文様帯内は集合沈線となる。16も口縁外縁に隆帯を貼り区画内は集合沈線となるものである。18、19は大型のキャリパー形深鉢の口縁部資料で、横位の楕円区画を持つもの、20～22は比較的小振りなキャリパー形深鉢の口縁部資料で、口縁部に「∩」状の沈線または磨消文帯を持つものである。21は緩波状縁をなすと思われる。23は、波状縁となる深鉢形土器の口縁部資料である。口縁部に無文帯を持ち、口縁部文様帯には磨消文帯で鉤の手状等のモチーフが描かれるものと思われる。24は、口縁部無文帯下端を微隆帯で区画する平縁深鉢である。25、26は、口縁部に大型の橋状把手を持つ4単位波状縁の深鉢形土器と思われる。27、28は口縁部に無文帯を持つ浅鉢形土器である。体部には条線文が施される。29は口唇部が内折する小型の土器で、口縁部外縁には弧状の条線文が見られる。30～34は無文の口縁部資料である。35～40は縄文帯と磨消文帯とで構成される胴部資料である。36は「H」状磨消文の観察されるものであるが、「U」の下側は蕨手文となる。

第55図1、2、5は磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下する胴部資料、3は、磨消となる上部の下に縄文帯が観察される胴部資料である。4、6～8、10は、条線文または集合沈線の施される胴部資料、9、13、14は垂下する磨消文帯と縄文帯との区画を微隆帯で行う胴部資料である。11、12は無文の胴部資料である。15～20は縄文の施された胴部資料である。21～24、26、27は底部資料である。21は脚と思われる粘土紐が付けられたもの。23は胴部が大きく外反する資料、24は無節縄文が縦位施文される資料である。25は、無文の胴部下半の資料で、残存部最大径は15cmを測る。

**石器** 第55図28は厚みのある楕円礫を素材とするもので、表裏両面を磨石として使用している。下端両側に敲打痕が見られる。29は、細長い円礫を素材とし、下端を研磨整形して刃部を形成している。正面右側縁は剥落している。

第8表 第9地点出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
55	28	磨製石斧	緑色岩	9.6	1.8	1.0	25.6	
55	29	磨石	硬砂岩	8.5	9.8	6.2	584.0	

## 4 第12地点の遺構と遺物

### (1) 住居跡

#### ●第5号住居跡 (第56・57図)

15・J5グリッドに位置し、第6号溝跡に切られる。平面形は長径約5.8m、短径約5.2mの不整形円形を呈す。確認面から床面までの深さは浅く約0.2mであった。住居跡に伴うピットを10基検出した。有意な深さを持つピットは、P2の37.5cm P4の42.5cm P5の29.5cm P6の28.8cm P9の26.7cmなどである。上屋構造を考えるとP2、P5、P6、P9の4本柱が想定されようか。また、もっとも深いP4も何らかの構造的意味を持ったと考えるのが自然であろう。

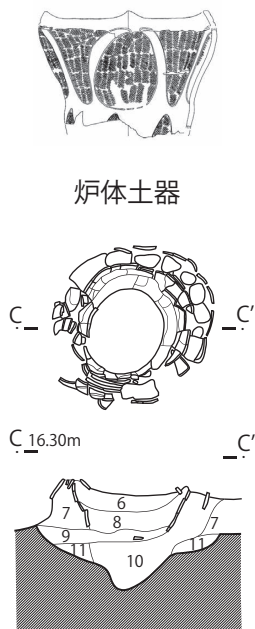
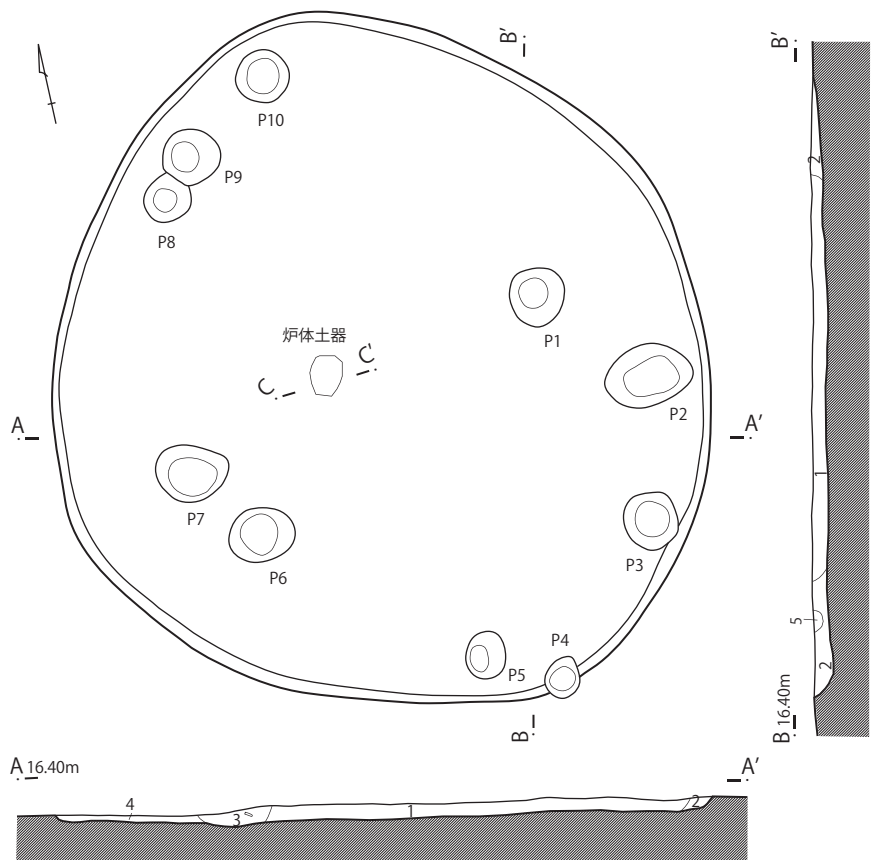
炉跡は埋甕炉で、住居跡の中央やや西寄りで検出した。炉跡の平面形は炉体土器を含め長径約0.7m、短径約0.6mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は中央が浅く窪む。埋設される炉体土器の直径は約0.5mを測り、口縁部から胴部上半までが認められ、口縁部を上に乗せた状態で出土した。炉体土器は炉の底面からは約0.2m浮いた状態で出土した。埋置された炉体土器の外側を取り囲むように石器片が配置される。さらにその外側を取り囲むように土器片が配置され、「土器→石器→土器」の三重に炉枠が形成される。

住居跡内には第57図に示した通り、土器片の集中箇所が複数認められ、住居跡西寄りの土器集中は縄文土器の口縁部から胴部上半まで、中央と東寄りの土器集中は縄文土器の口縁部から底部まで接合する資料となった。

#### 出土遺物 (第58～63図)

**土器** 第58図1～8、11は加曾利E IV式期に伴う波状縁のキャリパー形深鉢の口縁部資料である。これらはいずれも内湾する口縁部に1条の沈線で画した無文帯を持ち、以下に縄文を配するものである。1では、波頂下に剣先状の磨消文帯が垂下することがわかる。7でも弧状の磨消文帯の一部が確認できる。8は波頂部に橋状把手の付される事例である。また、3や11に見られるように無文帯に沿って原体を1指ないし2指幅だけ横位回転させるものも散見される。13も同種の資料の口縁部文様帯と思われる資料で、破片上端にわずかに横走沈線がうかがわれ、玉抱きとなる大振りの磨消文帯が配されるものである。10は、口縁部の直立する無文の資料である。12は、無文の口縁部下端を断面三角形の微隆帯で区画し以下に縄文を施す平縁深鉢である。微隆帯直下に単節RL縄文を横位回転させ、以下は条の走行が縦位になるよう同一原体を斜位回転施文させている。14～16は縄文の施された胴部資料である。18は縄文帯と磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下胴部資料で、上記の一文に比べやや古相を呈する資料である。19は断面台形のしっかりとした隆帯を横走させ、以下に蛇行条線文を施す資料である。17は、推定口径18cm、胴部最大径24cm、残存高12cmを測る、4単位の緩波状縁深鉢である。波頂部は摘み上げられるように突起化する。口唇部外縁に縄文の施された低平な隆帯2条を持つ。隆帯間には凹線が引かれ、さらに紡錘形の刺突が施される。内湾傾向を示す口縁部の文様帯には波頂下を起点として玉抱きとなると思われる磨消文帯が形成される。またこれを取り囲むように垂下する緩い弧状の磨消文帯も観察される。地文は単節RL縄文で、口縁部の隆帯上を除くと縦位ないし斜位の回転施文である。内面の整形は横位の丁寧なものである。20は、加曾利E IV式に相当する4単位の緩波状縁深鉢の胴上半部資料である。推定口径21cm、最大径28cm、残存高10cmほどの資料である。口縁部に1条の沈線で画される幅2cmほどの無文帯を持ち、以下に玉抱きや



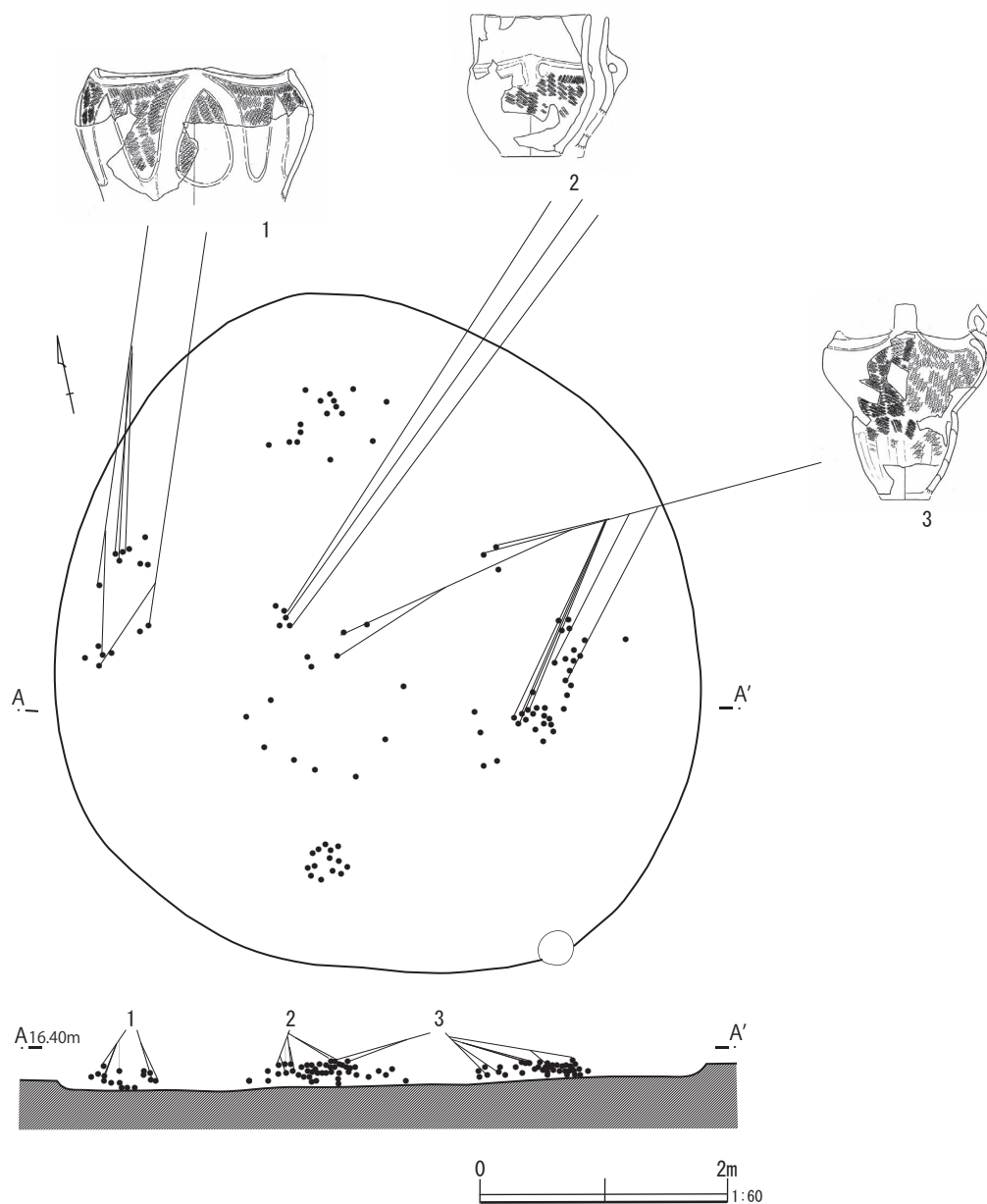


炉体土器

- 5H
- 1 黄褐色土 縮まり有 粘性有 径0.1~0.3cmの炭化物粒子を若干含む。
  - 2 黄褐色土 縮まり有 粘性有 ローム土を多く含む。
  - 3 黒褐色土 縮まり有 粘性有 径3cm程のロームブロックを多く含む。
  - 4 黄褐色土 縮まり有 粘性有 径0.1~0.3cmの炭化物粒子を多く含む。
- SD6
- 5 黒褐色土 縮まり有 粘性有 径1~3cmのロームブロックを若干含む。
- 5H炉体土器
- 6 褐色土 縮まり有 粘性有 径0.5cm程のローム粒子を多く含む。
  - 7 黒褐色土 縮まり有 粘性有 径0.1cm程のローム粒子を若干含む。
  - 8 茶褐色土 縮まり有 粘性有 径0.1cm程のローム粒子を若干含む。
  - 9 赤褐色土 縮まりやや有 粘性やや弱 径0.1~0.3cmの焼土粒子を多く含む。9層より上層においては、焼土はほとんど認められない。
  - 10 赤褐色土 縮まり有 粘性やや弱 径3~4cmの焼土ブロックを多く含む。
  - 11 暗褐色土 縮まりやや強 粘性有 ローム土を多く含む。



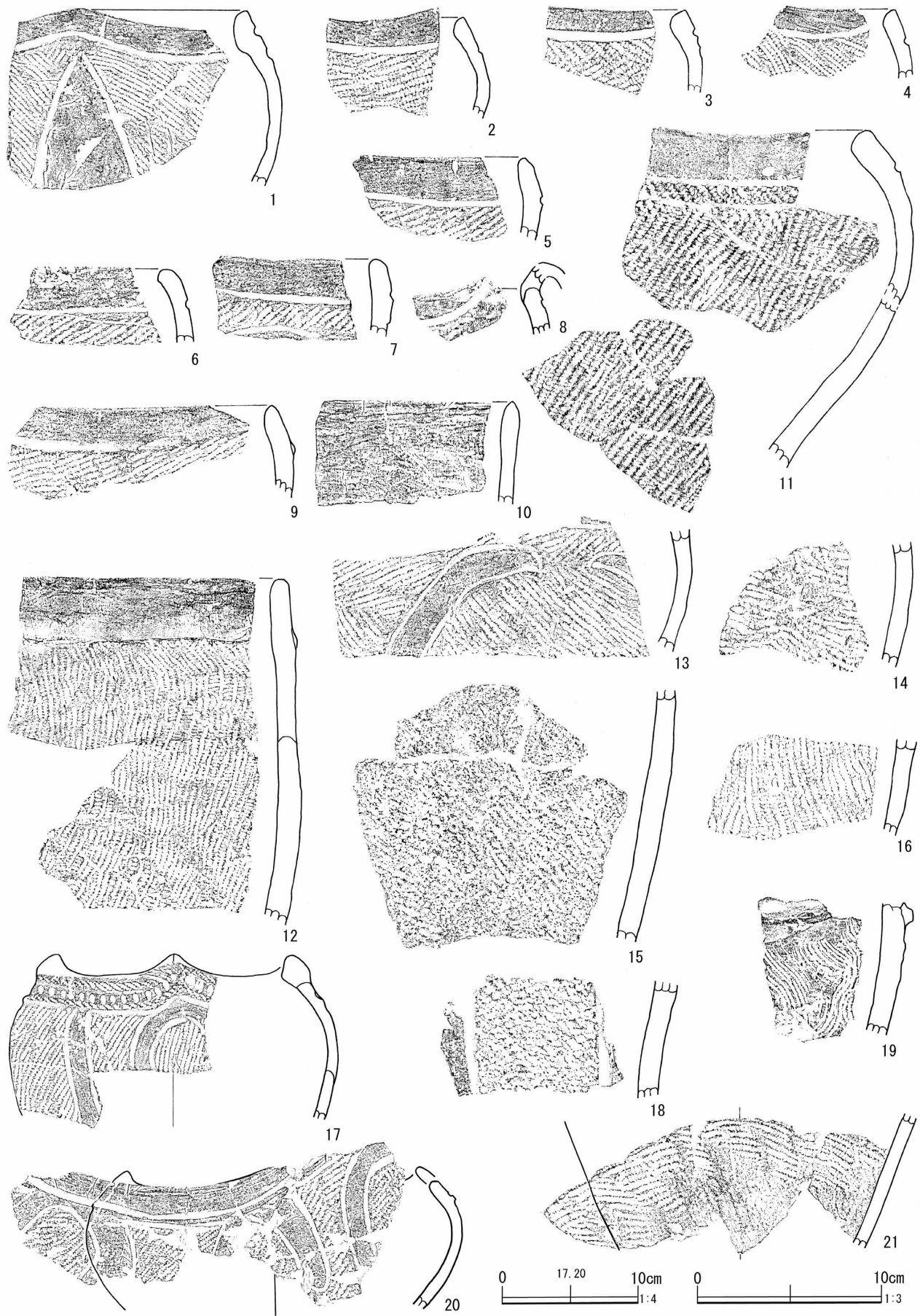
第56図 第5号住居跡



第57図 第5号住居跡遺物分布図

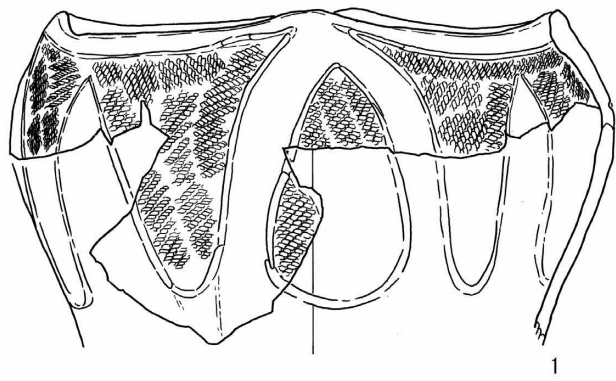
弧状となる磨消しの鋸歯文等が配される、間隙には単節 RL 縄文が縦位回転で充填される。内面は横位の撫で整形が施される。21は、縄文の施された胴部下半の資料である。残存部最大径は19cm、残存高は8cmを測る。

第59図1は、4単位の緩波状縁となるキャリパー形深鉢の胴上半部資料である。口縁部に下端を1条の沈線で区画する幅の狭い無文帯を持つ。波頂部には以下に展開するしずく型の縄文帯を取り巻くように垂下する磨消文帯が描出される。その結果、波底部には逆三角形の縄文帯が形成される。地文は単節 RL 縄文で、口縁部無文帯に沿うように横位施文され、以下は縦位ないし斜位に施文される。括れ部以下は残されていないが、縄文が施されるか、5のように鋸歯状の縄文帯が施されるものと思われる。内面は丁寧な横位の撫で整形が施される。2は、やはり4単位の緩波状縁となるキャリパー形深鉢で、口径19cm、最大径22cm、推定高22cmを測る。内湾する口縁部から5cmほどの部位に最大径を持ち、胴部で括れたのち底

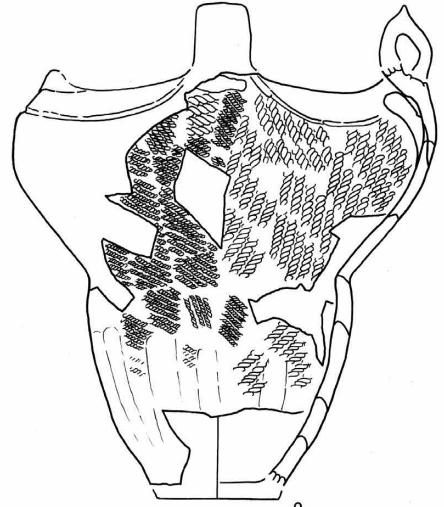


第58图 第5号住居跡出土遺物(1)

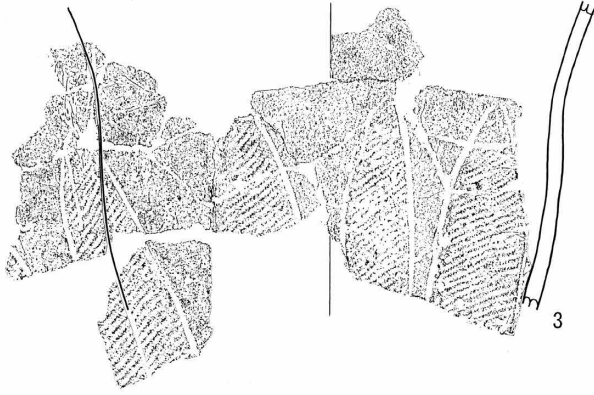




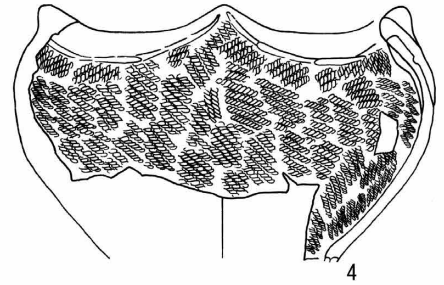
1



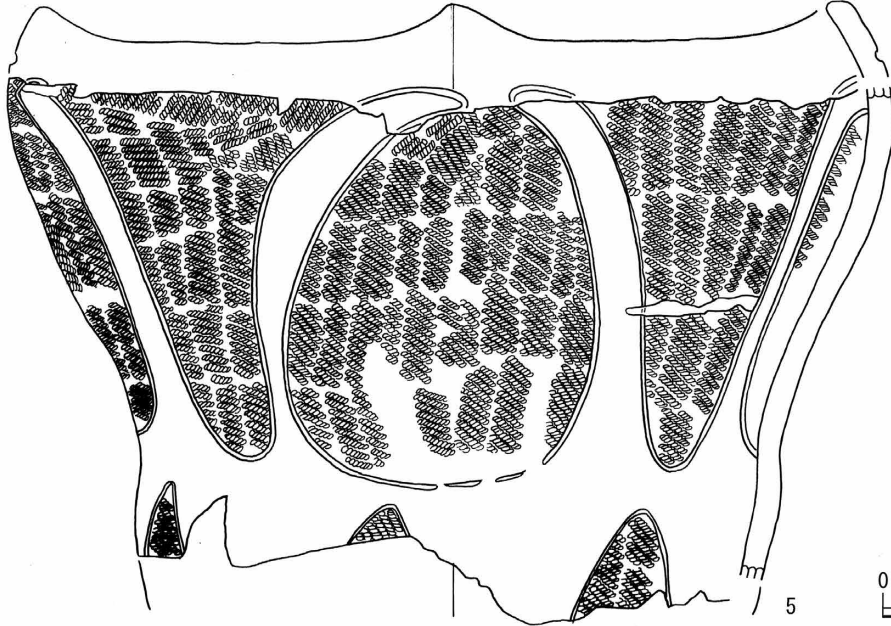
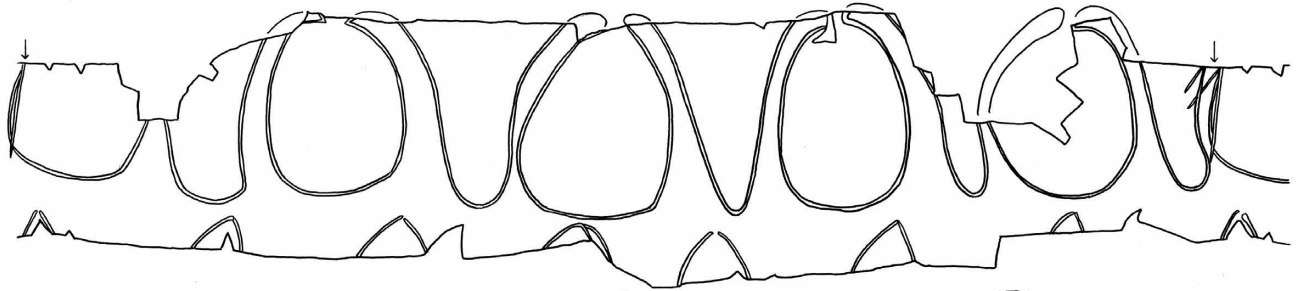
2



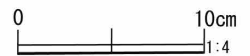
3



4



5

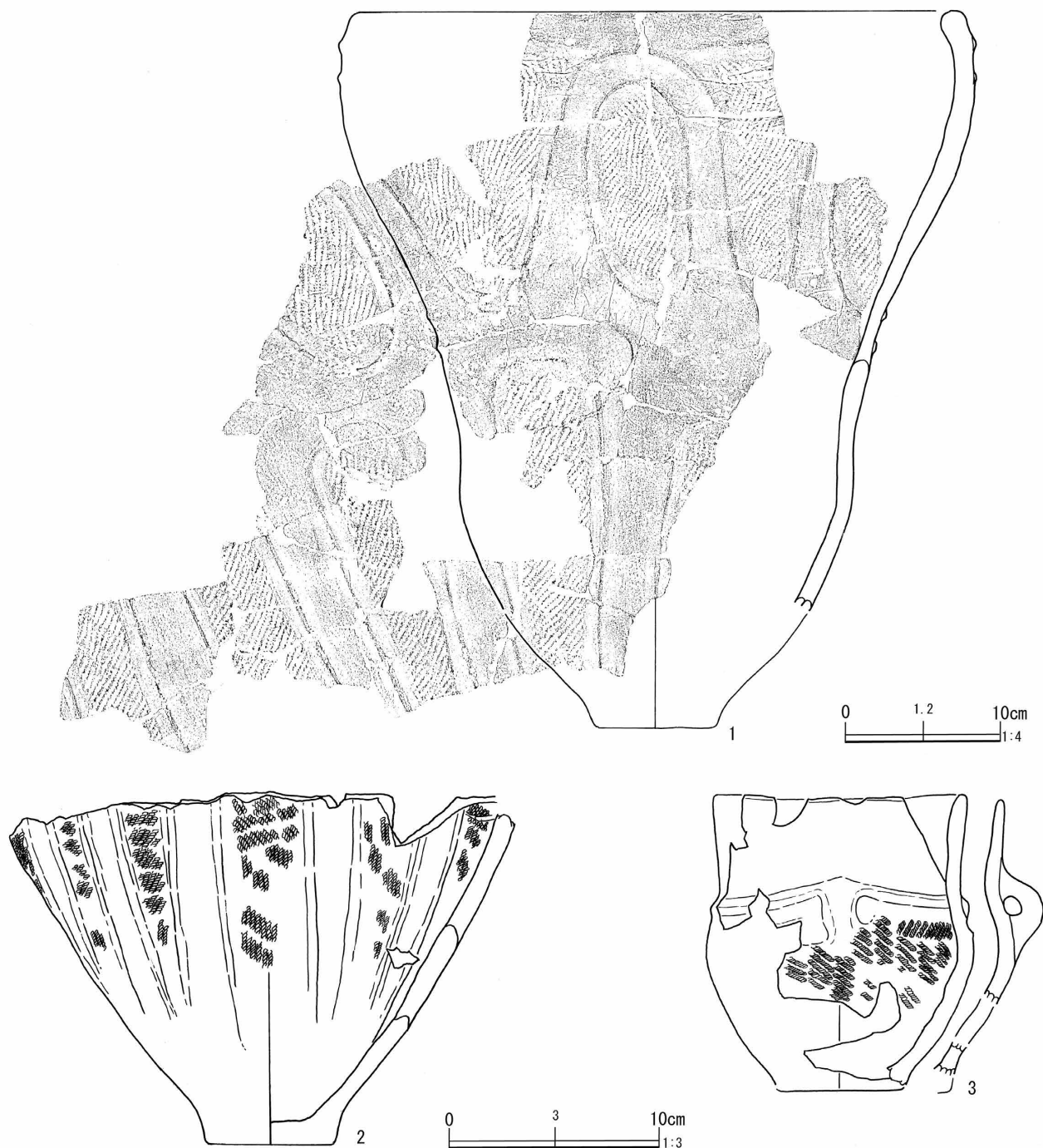


第59图 第5号住居跡出土遺物(2)

径6.5cmほどと推定される底部に向けて緩やかにすぼまる器形を持つ。口縁部には、下端を1条の沈線で区画する幅の狭い無文帯を持ち、波頂部の1か所には橋状把手が付されたようである。口縁部を巡る沈線以下には縄文が施され、その他のモチーフは描かれない。縄文は、太く節の大きな単節RL縄文と、細く節の小さなLR縄文の2種が用いられ、橋状把手の付された部分からほぼ器面を2分するように施文される。胴部下半は縦位の粗雑な撫で整形が施される。内面は口縁部では丁寧な横位の撫でが、括れ部以下では掻き上げるような斜位から縦位の撫で整形が施される。3は、残存部最大径28cm、残存高20cmを測る深鉢形土器の胴部資料である。胴上半部は粗く撫で整形を受けた磨消文帯で、同下半部には緩やかな括れ部付近を頂点とする剣先状の鋸歯状の縄文帯が見られる。縄文は単節RL縄文で縦長の縄文帯に沿うように縦位に施文される。内面の整形は粗い縦位の撫で整形である。4は、口径19cm、最大径22cm、括れ部胴径12cm、残存高13cmを測る4単位緩波状縁のキャリパー形深鉢の胴上半部の資料である。口縁部には、下端を1条の沈線で区画する幅の狭い無文帯を持ち、波頂部はつまみ出されるように突出する。口縁部無文帯下端区画線以下にはその他のモチーフが観察される、単節縄文が全面に施される。地文は単節LR縄文である。この個体の胴部の括れは強く、最大径の半分近くまで括れることとなる。5は、本址の炉体土器である。残存部最大径47cm、括れ部胴径34cm、残存高27cmを測る。口縁部は失われているが、4単位の緩波状縁を呈するものと推定される。胴上半には弧状の磨消文による玉抱き文と逆三角形の縄文帯が繰り返される。玉抱き文の上部は接続しない推定図を描いたが、口縁部無文帯下端区画と一体化する可能性もある。しかし展開図で確認すると玉抱き文は5単位描出されることがわかり、4単位の波頂下で無文帯下端区画と一体となるにはやや難があるためこれと切り離れた。括れ部以下は、剣先状の鋸歯状文が施され、内部には縄文が充填される。地文は単節LR縄文で、ほぼ全面縦位回転施文となる。内面は、口縁部付近では、指頭によると思われる粗く太い撫で痕が認められるが、大半の部分で、胴下位に至るまで火はねによる潰痕でおおわれる。

第60図1は、平縁のキャリパー形深鉢で、推定口径38cm、最大径40.5cm、括れ部胴径28cm、推定器高46cmほどを測る。口縁部に2~3cmほどの無文帯を持ち、以下は長楕円の玉抱き文と逆三角形の縄文帯が施される。胴下半は、括れ部を頂点に「∩」状の縄文帯が巡る。これらの縄文帯と磨消文帯との区画には断面三角形に微隆帯が用いられる。地文は単節RL縄文で、口縁部無文帯に沿って横位回転される部位があるものの、その他の部位の多くは縦位回転である。内面は、口縁部周辺が横位の、括れ部付近以下は掻き上げるような斜位から縦位の撫でが施される。2は、残存部最大径33cm、残存高23cmほどの深鉢形土器の胴下半から底部にかけての資料である。断面三角形の微隆帯によって区画された磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下する。底部付近は無文となり、粗い縦位の撫で整形が観察される。内面は、残存部上部は縦位の撫で整形が残されるが、底面から12~3cmの部位で追加整形が行われておりこの部分は横位の篋撫での痕跡を残す。底面周辺は横位の撫で整形となる。3は、小型の両耳壺である。口径12cm、胴部最大径13cm、器高14cmほどを測る。両耳壺の形態をとるが、別の機能を持っていたものであろう。口縁部に横位から斜位の撫での施された無文帯が形成され、下端を1条の隆帯によって区画する。隆帯上下はよく撫でられ、一部凹線風となる部分も認められる。把手は橋状把手となるが、上部が突出する傾向はなく、丸い撫で肩となり、縦位の撫で整形が施される。貫通孔は、やや下側が広く、外側へ開く楕円形となる。口縁部無文帯の下端区画隆帯は橋状把手部分を頂点として両側へ下がる。胴部は単節LR縄文で、隆帯直下は横位施文となるが、以下は縦位施文である。内面の整形は横位の丁寧な撫で整形で、底部付近は縦位の





第60図 第5号住居跡出土遺物 (3)

撫で整形となる。

第61図1は、残存部最大径48cm、残存高46cmほどを測る大型の深鉢形土器である。微隆帯によって区画される縄文帯と磨消文帯とが交互に垂下する。縄文帯と磨消文帯の幅は均等ではなく、それぞれに異なるようである。図正面の幅広い縄文帯は口縁部付近が広く最上部では25cmを測るが胴下半では10cmほどとなる細長い逆三角状を呈する。地文は単節LR縄文で縦位から斜位に施文される。焼成は良好で、内面は上部では縦位から斜位の撫でが施される。胴下位では追加整形の影響か横位の撫でが施される。2は、1と近似するものであるが、接合せず、推定口径がやや異なることから別個体とした。推定口径40cm、最





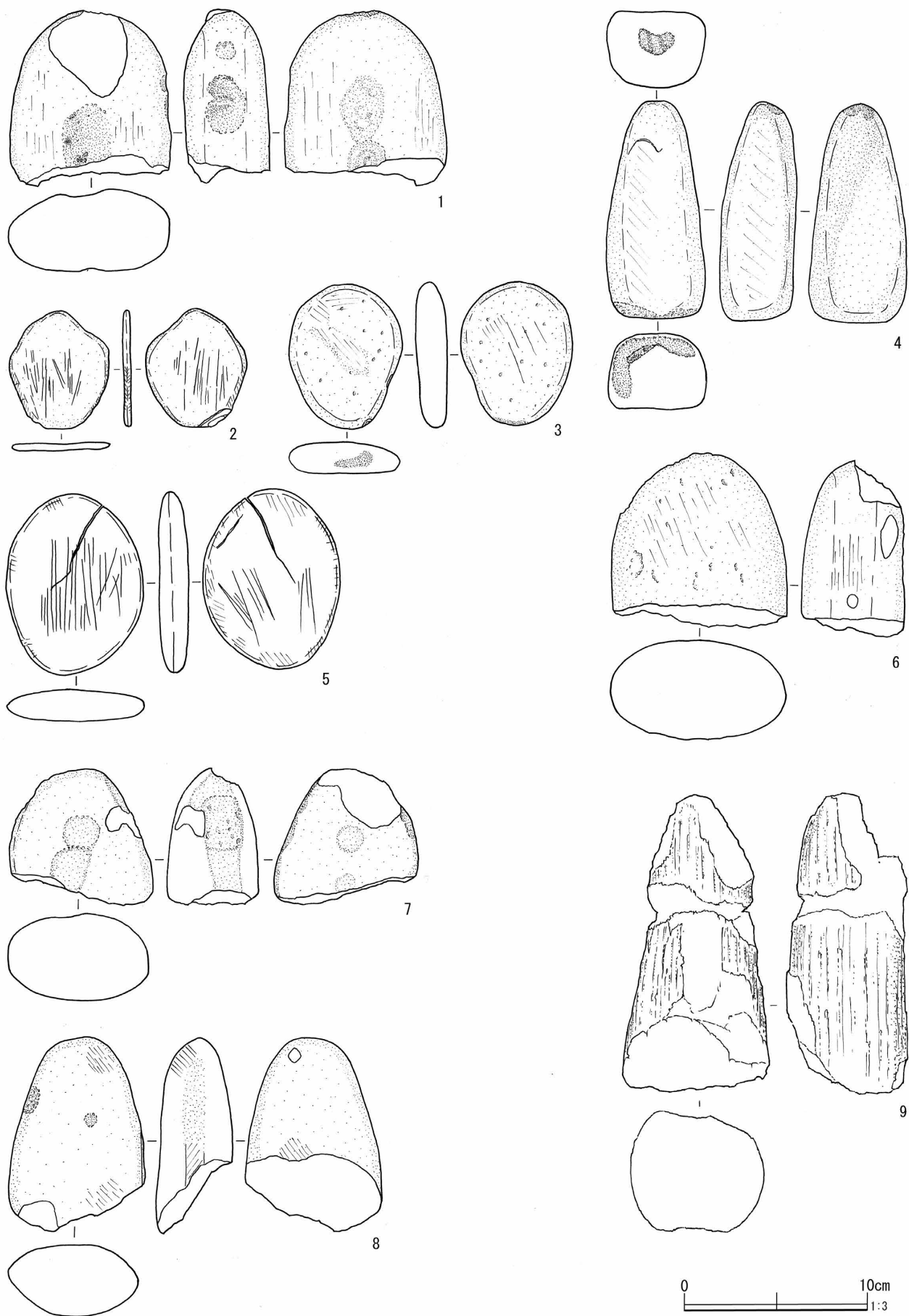
第61图 第5号住居跡出土遺物(4)

大径44cmほどを測る平縁のキャリパー形深鉢の口縁部付近の資料である。口縁部に幅2cmほどの無文帯を持ち、その下端を低平な隆帯で区画する。これ以下には微隆帯によって区画される縄文帯と磨消文帯とが交互に垂下する。縄文帯と磨消文帯の幅は均等ではなく、それぞれに異なる。図正面左側の磨消文帯では、横位方向の細かい撫で整形痕が認められる。口縁部内面には稜を持ちこの部分は横位の撫でが施されるが、内湾する口辺部内面は斜位の粗い整形痕が残される。地文は単節 LR 縄文で口縁部区画隆帯の下部では横位施文となる部分が多いが、以下は縦位施文となる。

**石器** 第62図1、4、7は磨石兼敲石である。1は長楕円形の扁平な円礫を素材とし、側縁を面取りし石鹼状に整形したものである。下端は欠損する。磨石としての使用は表裏両面に及びよく磨られている。敲石としての使用面は表裏両面のほか側縁に及び、浅い敲打痕が形成される。4は、不正長楕円形のやや角張った礫を素材とするもので、正面及び側面を磨石として使用しているほか、上下端面を敲き石として使用している。特に下端部は隅丸方形となるが端面の2側縁を使ってよく敲いている状況がうかがわれる。上部がやや細くなる素材礫の形状が握りやすかったものと思われる。7は、やや厚みを持つ楕円礫を素材としたもので、側面は敲打して整形したものである。磨石としての使用は表裏両面に及ぶが研磨はそれほど進行していない。敲石としての使用は表裏両面のほか側縁に及び、浅い潰痕が残される。本址の炉の石囲いとして用いられたものと思われ、裏面上端は被熱により剥落したものと見られる。2、3、5の3点はごく薄い扁平な楕円礫を素材とするもので、明瞭な擦痕が残ることから砥石とした。2は砂岩製で、周縁を磨って面取りしている。表裏に主に縦位の明瞭な擦痕が観察できる。3は、不正楕円形の安山岩の円礫で表裏に斜方向の擦痕が観察される。下端部にわずかな敲打痕が見られる。5は、きめの細かい泥岩の扁平な楕円礫を素材とし、周縁部を研磨して面取りしている。使用は表裏両面に及び、彫の深い擦痕が残される。6と8は磨石である。前者はやや厚みのある楕円礫を素材とするもので、側面に面取り整形を加え形状を整えている。磨石としての使用は両面に及ぶが、裏面は被熱し剥落が目立つ。後者は、不正楕円形の円礫を素材とするもので、下端部を欠く。磨石としての使用面は両面に及ぶ。部分的に敲打と思われる痕跡がある。9は、緑泥片岩製の石棒残欠である。被熱によると思われる剥落が激しい。頭部はやや尖り気味と

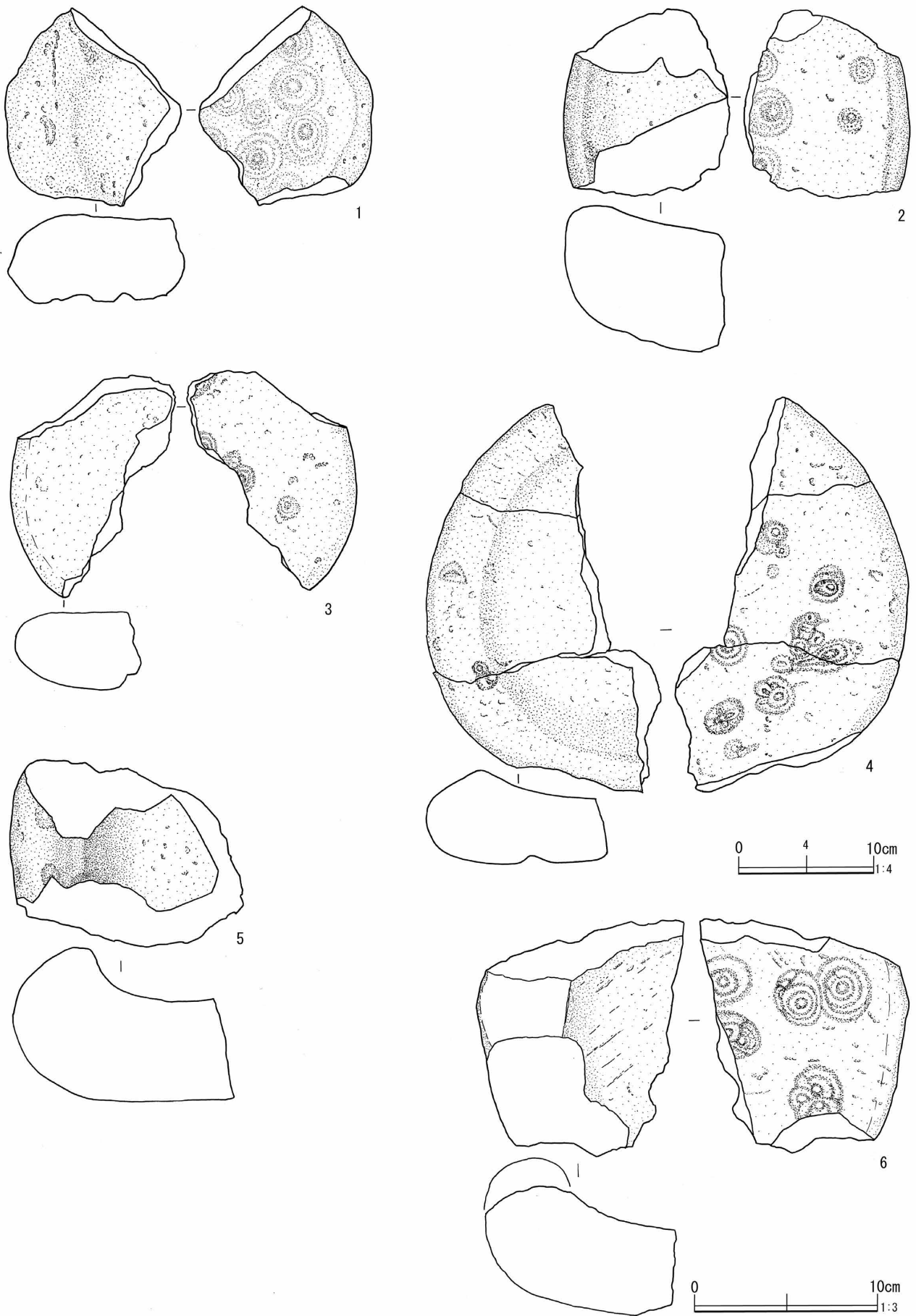
第9表 第5号住居跡出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
62	1	磨石兼用敲石	硬砂岩	(8.8)	8.9	4.4	(512.0)	被熱
62	2	砥石	砂岩	5.4	6.4	0.4	26.9	
62	3	磨石	安山岩	7.8	6.1	1.7	123.5	
62	4	磨石	安山岩	11.8	5.4	4.1	413.0	
62	5	砥石	泥岩	10.0	7.5	1.7	164.9	
62	6	磨石	安山岩	8.3	9.7	5.4	754.0	被熱
62	7	磨石兼敲石	安山岩	(7.4)	7.8	4.8	(368.0)	被熱
62	8	磨石	硬砂岩	(10.7)	7.4	3.8	(337.0)	被熱
62	9	石棒	緑泥片岩	(16.0)	(7.2)	6.5	(844.0)	残欠
63	1	石皿	安山岩	(10.4)	(9.6)	4.7	(562.0)	被熱・残欠
63	2	石皿	安山岩	(10.2)	(8.9)	6.8	(662.0)	被熱・残欠
63	3	石皿	安山岩	(9.8)	(6.2)	4.2	(464.0)	被熱・残欠
63	4	石皿	安山岩	(29.0)	(17.3)	6.8	(3,040.0)	残欠
63	5	石皿	安山岩	(9.0)	(11.9)	8.2	(1,010.0)	残欠
63	6	石皿	安山岩	(12.3)	(10.3)	5.2	(862.0)	被熱・残欠



第62图 第5号住居跡出土遺物(5)





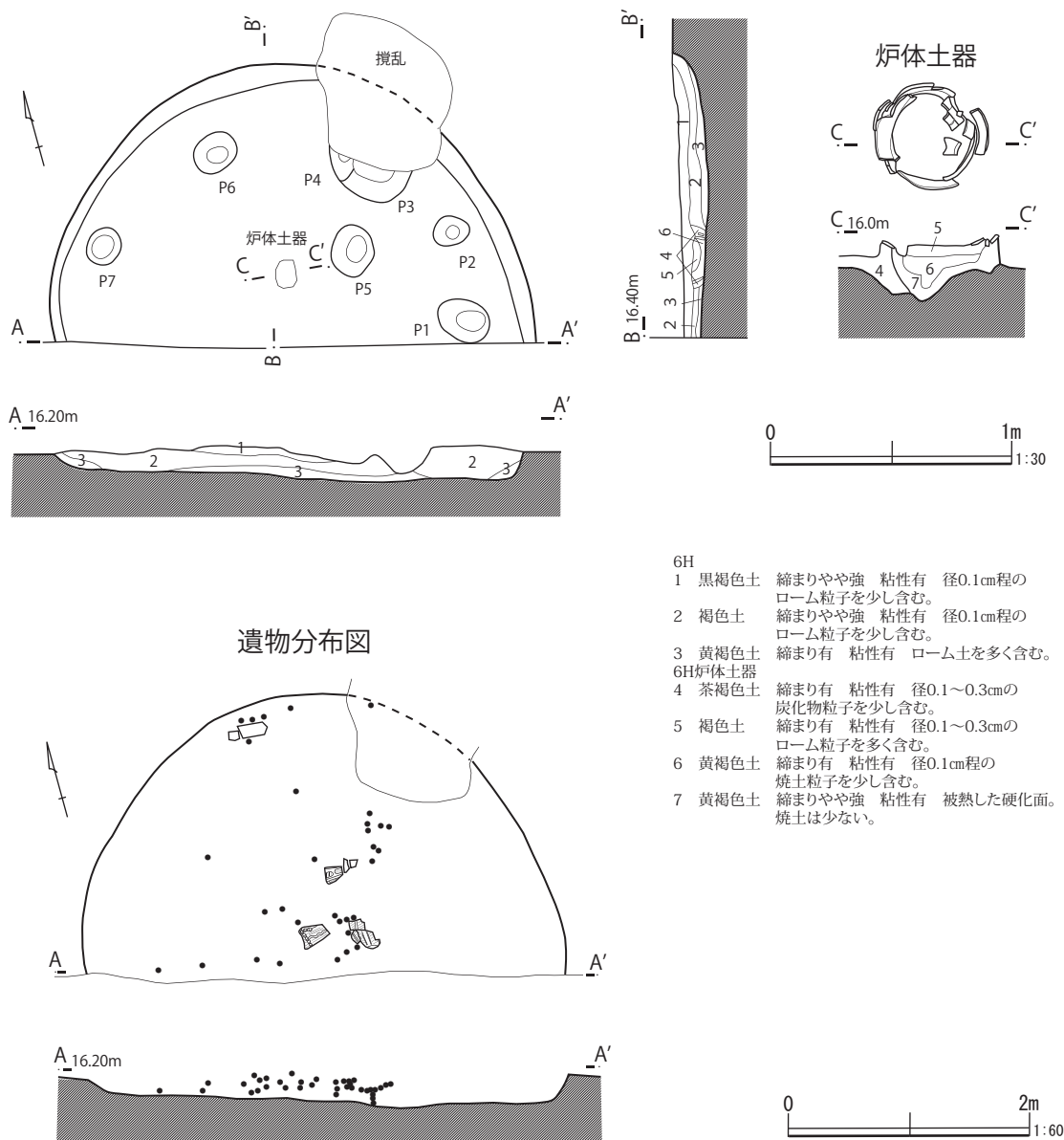
第63图 第5号住居跡出土遺物(6)

なり、一旦括れ胴部では再び膨らみを増す。断面でわかるように胴部は円形に近く、もとは丁寧に整形されていたことがわかる。完存すれば40cmを超えたものと思われる。

第63図1~6は、いずれも本址炉跡出土の石皿残欠である。安山岩製の大きぶりな石皿が多く、5を除き裏面には複数の窪みが観察される。このうち1~3は比較的皿面の深さの浅い扁平な資料、5、6は縁のしっかり立つ深さのあるものである。4は、3点接合したもので、炉枠にする段階で打ち欠いて埋め込まれたものと思われる。残存部でも差し渡しが30cmに及ぶもので、完存すれば短径35cm、長径40cmを超えるものであったと思われる。石材産地から遠い白岡市域では大きな資料である。

●第6号住居跡（第64図）

15・6グリッドに位置し、南半部は調査区外、北端の一部は攪乱で切られる。検出部分のみで長径約4.0m



第64図 第6号住居跡

を測り、南北軸は約2.3mを調査した。確認面から床面までの深さは約0.3mであった。住居跡に伴うピットは7基検出した。有意な深さを持つピットはP1の30.2cm P3の22.3cm P4の30.5cmの3基で、これ以外は12~3cmの浅いピットである。P1とP4が支柱穴であろう。比較的小振りな住居跡であることから未調査部に1本のピットがあれば上屋は支えられた可能性がある。

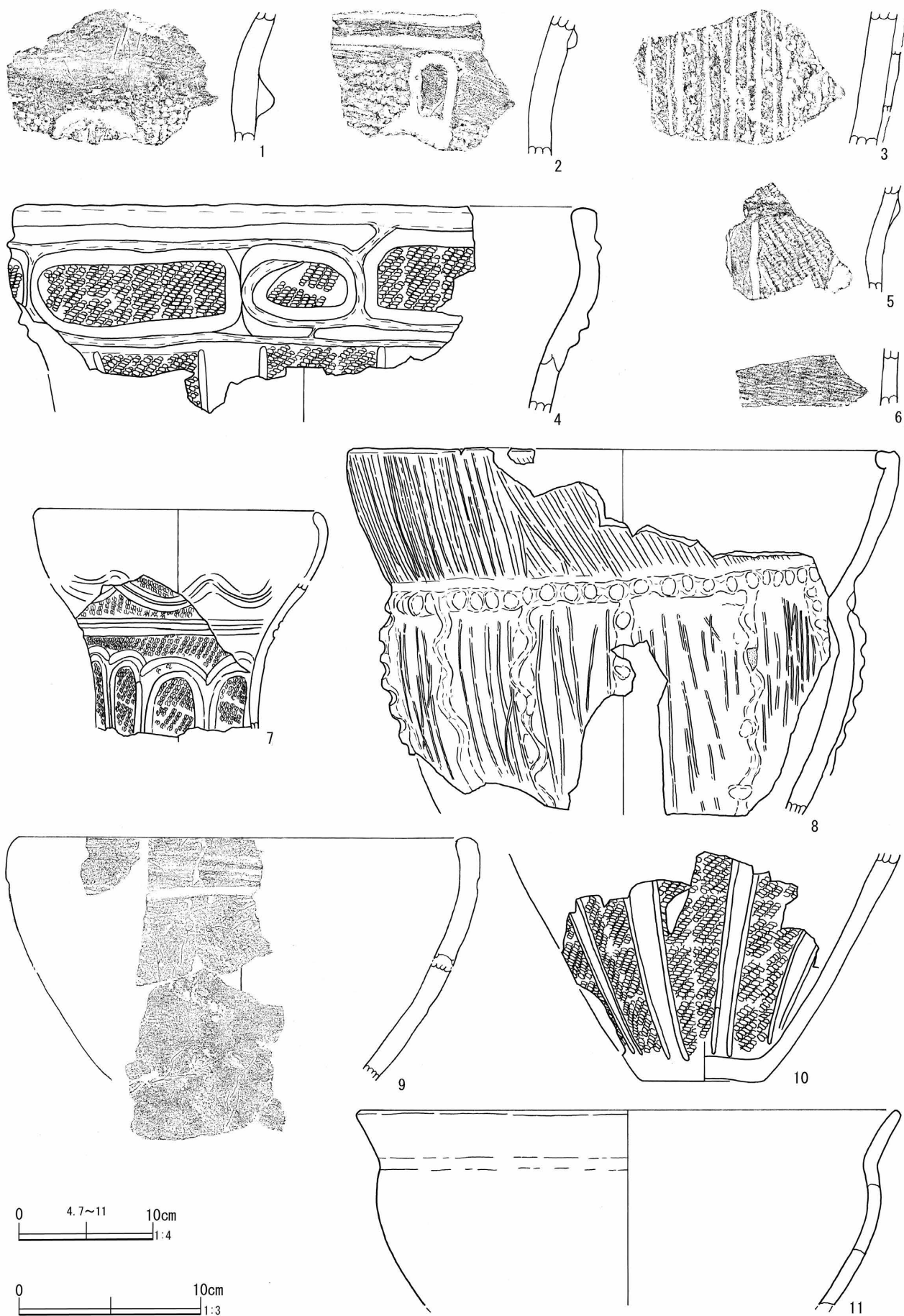
炉跡は炉体土器を伴う埋甕炉で、住居跡のほぼ中央で検出した。炉の規模はほぼ炉体土器の径に等しいとみてよく、直径0.5m弱を測る。炉体土器内の焼土堆積面は中央が浅く窪むが、床面に比べ10cmほど高い。

住居跡内では、中央と北寄りで縄文土器の大破片が散在している状況が認められた。

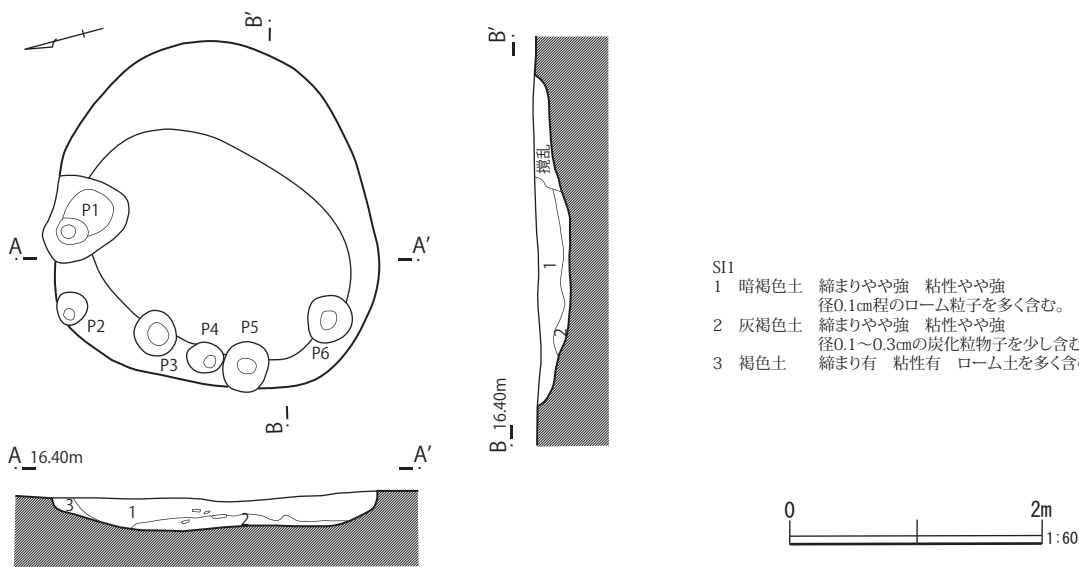
#### 出土遺物 (第65図)

**土器** 第65図1は、断面三角形の丈の高い隆帯が横走り無文帯と縄文帯を分けている。隆帯上部の無文帯はそのまま外反しながら口縁部となるものと思われる。縄文帯には下向きの弧線文が看取される。2は、上下に沈線を有する隆帯の下部の縄文帯に「∩」状の磨消文帯が描出されるものである。3は、多裁竹管による集合沈線の地文上に丈の高い隆帯が垂下するものである。5は、低平な隆帯で形成される口縁部楕円区画帯の下に磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下するものである。6は無文の胴部資料で、横位の細かい撫で整形痕が観察されるものである。4は、低平な隆帯とこれに沿う凹線とで、口縁部に横位の長楕円形の窓枠状の区画文と円形区画が形成される深鉢形土器の口縁部資料である。推定口径は43cm、残存高16cmを測る。口縁部文様帯の隆帯は区画上下に配され、大きく長楕円区画を包み込むようにして円形区画に沿ってわずかに渦を巻く。このため長楕円区画は基本的に凹線によって区画される。口縁部文様帯以下は磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下する。区画内部及び胴部縄文帯には単節RL縄文が縦位施文される。内面の整形は粗い横位の撫で整形である。胎土には3~5mmほどの茶褐色の粒子が目立つ。7は、キャリパー形深鉢の胴部資料である。残存部最大径19cm、残存高12cmを測る。緩やかに括れる頸部に2条の沈線を巡らせ、この上部には2条の弧線が観察される。胴部には、「∩」状の縄文帯が施されその上部は連弧文によって閉じられる。閉じたことによって、「∩」状の縄文帯間に幅の狭い磨消文帯が形成される。地文は複節縄文である。連弧文系土器群に位置付けられよう。8は、推定口径41cm、残存高27cmほどを測る甕形土器である。口唇部が内折し、頸部に大きな括れを持ち胴部がやや膨らむ器形を呈する。口唇部上から内折した口唇部内面は施文されない。口縁部外面は横位の乱雑な撫で整形ののち集合沈線を斜行ないし縦走させる。頸部括れ部に鎖状隆帯を巡らせ、胴部は、乱雑な横位から斜位の器面整形ののち粗い集合沈線を引く。さらに丈の高い鎖状隆帯と相互刺突風に刺突を加えた蛇行隆帯を垂下させている。内面の整形は、内折した口唇部直下には棒状工具を用いた横位の撫でが繰り返して施される。以下は横位の撫でが施される。特に括れ部上下には丁寧な撫で整形が観察されるほか、胴部下位においては一部に縦位の撫でも観察される。9は、無文の鉢形土器である。最大径35cm、残存高20cmほどを測る。口縁部に3.5cmほどの横帯を形成し1条の区画凹線を巡らせている。表裏とも丁寧な横位の撫で整形が認められる。10は、残存部最大径29cm、残存高17cm、底径9cmを測る大型の深鉢形土器の底部周辺の資料である。磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下するもので、縄文は単節RL縄文縦位施文である。内面は縦位の撫でが施される。11は、本址の炉体土器である。口径40cm、残存高15cmを測る無文の浅鉢形土器である。頸部に弱い括れを持ち口縁部は外反する。表裏全面に丁寧な横位の撫で整形を加えている。内面には一部に火はねによる潰痕が認められるほか、明らかな被熱の痕跡が残される。





第65图 第6号住居跡出土遺物



第66図 第1号竪穴状遺構

(2) 竪穴状遺構

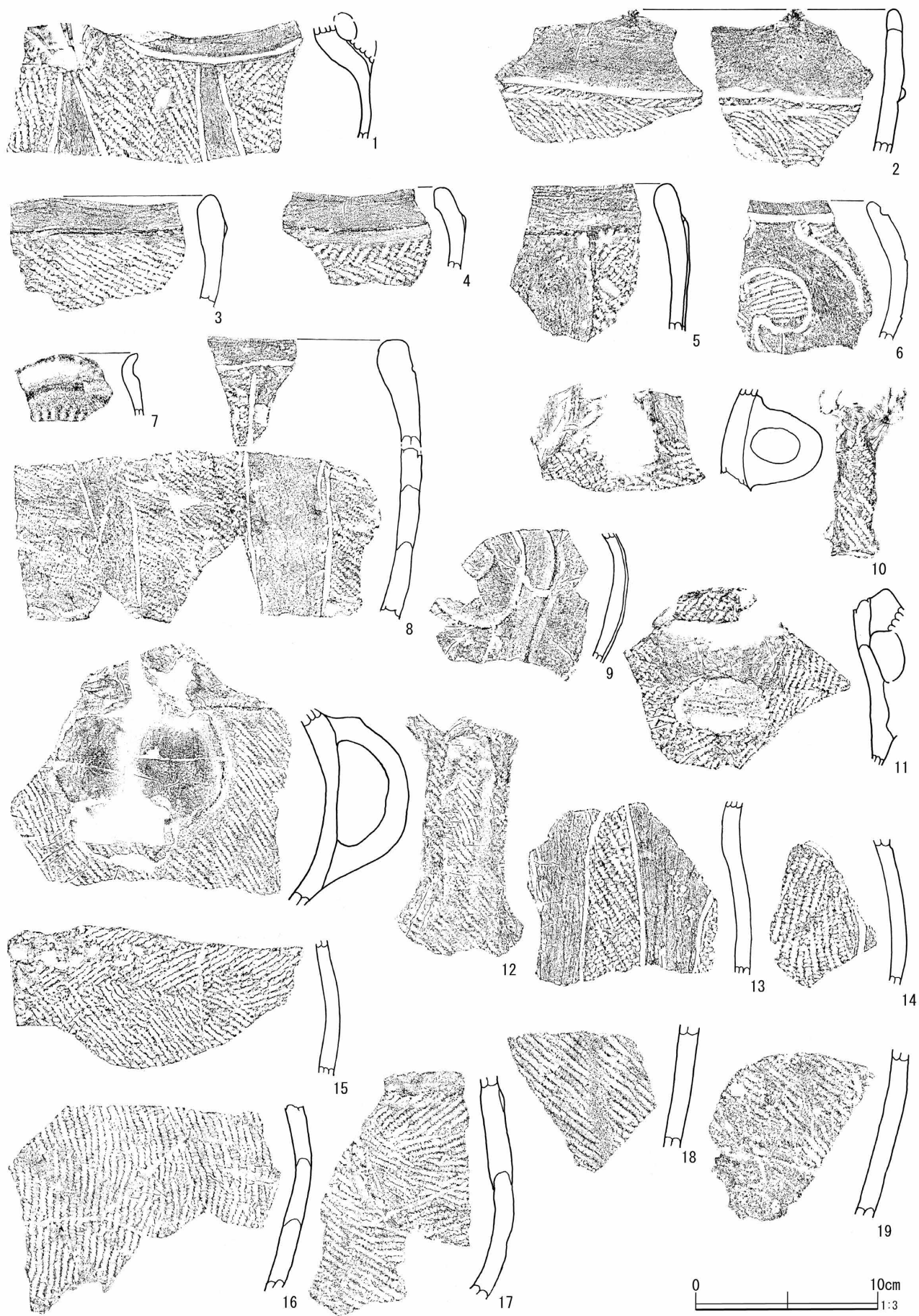
●第1号竪穴状遺構 (第66図)

J4・5グリッドに位置する。平面形は長径約2.8m、短径約2.6mの不整形円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、床面は平坦である。炉跡は確認できなかった。遺構の南寄りにピットを6基検出した。ピットの深さはそれぞれP1最深部が24.4cm、P2が39.3cm、P3が8.0cm、P4が7.9cm、P5が33.2cm、P6が24.8cmを測る。P2とP5が対をなしP1とP6がこれを支える構造だと考えると小型ながら上屋を持つ何らかの構造物と考えるのが妥当であろう。

出土遺物 (第67・68図)

**土器** 第67図1は、口縁部の内湾する4単位波状縁深鉢の口縁部資料である。波頂部に橋状把手が付されたものと思われる。口縁部に下端を沈線で画す幅の狭い無文帯を持ち以下に鋸歯状の磨消文帯が配されるようである。地文は単節LR縄文で、口縁部無文帯直下は横位施文の部位が見られるがそれ以外は縦位から斜位の施文である。口縁部無文帯及び内面は丁寧な横位の撫で整形が施される。2～5は口縁部に数cmの無文帯を設けその下端部を微隆帯で区画するものである。2では、3～4cmほどの無文帯を設ける平縁土器であるが、ところどころに小突起を持つ。隆帯上には縄文が施される。縄文は単節LR縄文で、隆帯上は横位回転、胴部は縦位から斜位の回転施文としている。3は平縁となるもの、4は緩波状縁を呈すると思われるものである。縄文は両者とも単節LR縄文である。5は、口縁部無文帯を画す微隆帯からさらに微隆帯を垂下させ磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下する平縁の甕形土器である。6は、平縁ないしごく緩い波状縁となるキャリパー形深鉢で、口縁部に引かれた横走沈線に接するように鉤の手あるいは「J」字を呈する磨消文帯と縄文帯とが描出されるものである。7は波頂部の丸い小型の波状縁深鉢である。口縁部に沿ってよく撫でられた無文帯を形成しその下端を微隆帯で区画する。微隆帯は無文帯を撫でて盛り上げさせたものであろう。8は、平縁で口縁部がわずかに内湾する甕形土器である。口縁部に沈線で下端区画される幅の狭い無文帯を持ち、以下に磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下するものである。9は緩やかに





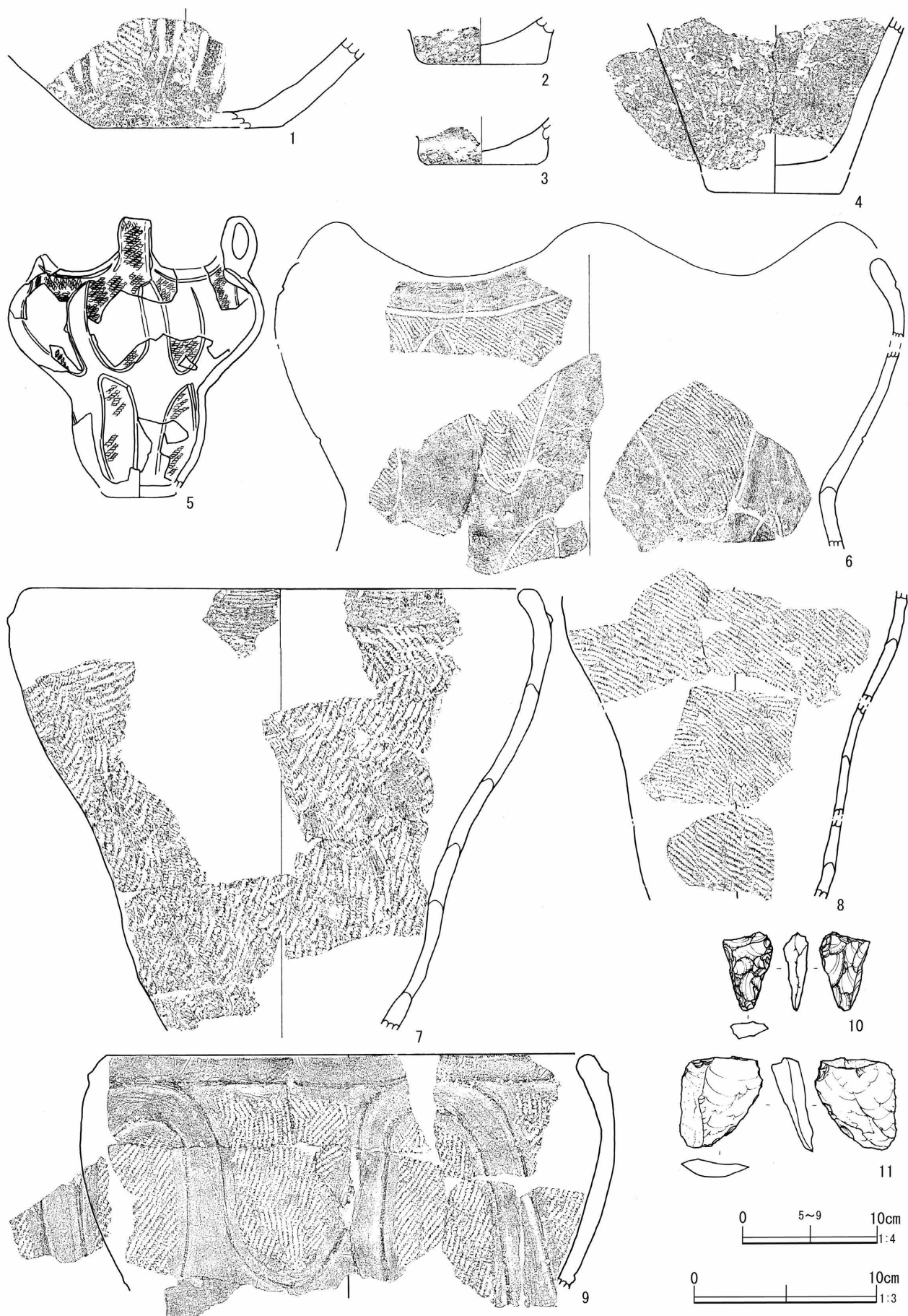
第67图 第1号竖穴状遺構出土遺物(1)



内湾する薄手の土器で、微隆帯で渦巻状のモチーフが描かれる。瓢型の注口土器の胴部資料であろう。10～12は橋状把手部の資料である。10は、単節 LR 縄文の施された橋状把手である。土器自体が外反傾向を示す。把手両側に隆帯で区画される無文帯が看取される。11は、把手上部が残される。上側を盛り上げ、把手には縄文が施される。12は、把手を取り囲むように微隆帯で円形の区画を設け内部を磨り消している。把手は周囲を縁どるように盛り上げ縄文を施している。いずれも両耳壺に伴うものと思われる。13、14は口縁部の内湾する4単位波状縁深鉢の胴部資料である。括れ部付近を頂点とする剣先状の縄文帯と陥入する磨消文帯が看取される。15～19は縄文の施される胴部資料である。15は、内湾する資料で、単節 LR の同一原体を用いて羽状縄文を形成している。16は単節 RL 縄文を縦位施文する胴部資料、17は上端部に低平な隆帯が横走る資料である。18、19は単節 LR 縄文を縦位施文するものである。

第68図1～4は、本址出土の底部資料である。1は、底径10cmを測る大型の底部資料で、体部は大きく開きながら立ち上がる。沈線で区画された磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下するものである。2は底径7cm、3は底径6.5cmを測る平底無文の資料である。4は底面円盤を欠失する無文の胴部下半の資料である。5は、口縁部の内湾する小型の4単位波状縁深鉢である。口径13cm、最大径19cm、括れ部胴径10cm、推定高は橋状把手を含め21cmほどと思われる。波頂部は摘み上げられるように引き上げられる。口縁部には1条の沈線で下端を区画する無文帯が形成され、強い内湾を呈する口縁部文様帯には「U」状の、括れ部以下には「∩」状の縄文帯が配され、その間隙は磨消文帯となる。「U」と「∩」の頂点は組み合う部分と合わない部分がある。縄文は、単節 RL 縄文である。内面調整は粗雑な横位の撫で整形である。胎土には砂粒が目立ち、焼成は、胴部以下はやや甘く風化する部分が見られる。6は、推定口径42cm、最大径46cm、括れ部胴径36cm、残存高22cmほどと思われる大振りの4単位波状縁深鉢である。口縁部には、下端を1条の沈線で区画する幅2.5cmほどの無文帯を持ち内湾する口縁部には大振幅の鋸歯文が描かれる。下向きの三角形区画内に縄文が充填される。括れ部以下には、剣先状を呈する縄文帯が配される。両者の間隙は磨消文帯となる。縄文は単節 LR 縄文縦位施文である。7は、口縁部がわずかに内湾し、胴部下半に緩い括れを持つ平縁深鉢である。推定口径38cm、最大径40cm、残存高33cmほどと思われる。口縁部に細い棒状施文具を用いた横位の撫で整形痕が明瞭に残る。口縁部無文帯の幅は2～3cmほどで下端を低平な隆帯で区画する。以下は全面に単節 RL 縄文が施される。胴部下半では縦位の粗い整形痕の上から施文されている。内面の整形は全面比較的丁寧な横位の撫で整形である。8は、口縁部は残存しないが、わずかに内湾傾向を示すと思われる、胴部下半に緩い括れを持つ深鉢である。残存部最大径26cm、残存高25cmほどと思われる。全面に施される縄文は単節 LR 縄文で縦位施文を基調とする。内面の整形は上部では横位の、下部では縦位の比較的丁寧な撫で整形が施される。胴下半にはカーボンが付着するようで、黒色を呈する。9は、キャリパー形の平縁深鉢の口縁部資料である。口径35cm、最大径39cm、残存高18cmほどを測る。口縁部に2cmほどの無文帯を持ち、下端は断面三角形の微隆帯で画する。以下に同様の微隆帯で区画された「∩」状の磨消文帯を描出する。また、「∩」状の磨消文帯同士を連結する「U」状の隆帯もうかがわれる。間隙に単節 RL 縄文が施されるが、「∩」状区画内部が比較的整然と縦位施文する軒比べ、「U」状区画内は、横位、斜位、縦位とランダムである。内面整形は口縁部から5cmほど横位の撫でを加えるが、以下は縦位の撫で整形である。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好である。

**石器** 第68図10、11は共にチャート製の2次加工剥片である。前者は、正面両側縁に乱雑で不規則な2次加工を施している。裏面は両側縁からの粗い成形加工が施され厚みを削いでいるものと思われる。後者は、



第68图 第1号竖穴状遺構出土遺物 (2)

不整形の貝殻状剥片で、正面左側縁には表皮が、裏面には主剥離が残され、打瘤もそのまま残される。右側縁に押圧剥離による不規則な加工が施されている。

第10表 第1号竪穴状遺構出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
68	10	2次加工剥片	チャート	4.2	2.3	1.3	10.5	
68	11	2次加工剥片	チャート	5.0	4.5	1.6	23.6	

### (3) 土坑

#### ●第56号土坑 (第69図)

J4グリッドに位置する。平面形は長径約1.4m、短径約0.8mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。土坑に伴うピットを1基検出した。

#### ●第57号土坑 (第69図)

J4グリッドに位置し、北半部は調査区外である。残存部で長径約1.3m、短径約0.2mを測る。確認面から底面までの深さは約0.8mを測り、底面は中央が浅く窪む。

#### ●第58号土坑 (第69図)

J4・J4グリッドに位置し、第59号土坑を切り、第60号土坑に切られる。西端は攪乱に切られる。残存部で長径約2.0m、短径約1.7mを測る。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

#### ●第59号土坑 (第69図)

J4グリッドに位置し、第58・60号土坑に切られる。残存部で長径約2.0m、短径約1.6mを測る。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

#### 出土遺物 (第70図)

石器 第70図1は、小型の無文の底部資料である。底径4cmを測る。

#### ●第60号土坑 (第69図)

J4グリッドに位置し、第58・59号土坑を切る。平面形は長径約1.5m、短径約1.2mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

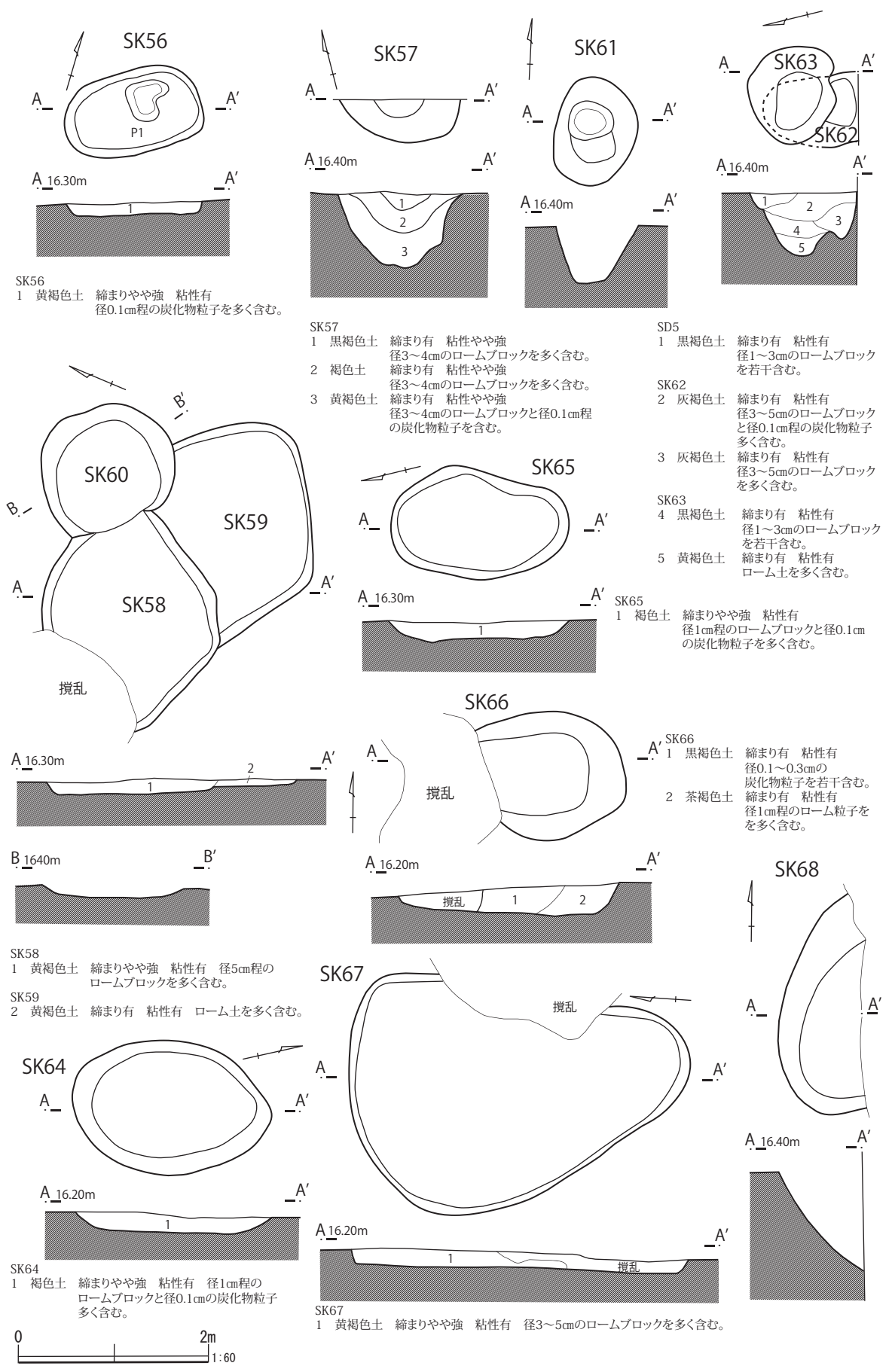
#### ●第61号土坑 (第69図)

J4・J4グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約0.9mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.6mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

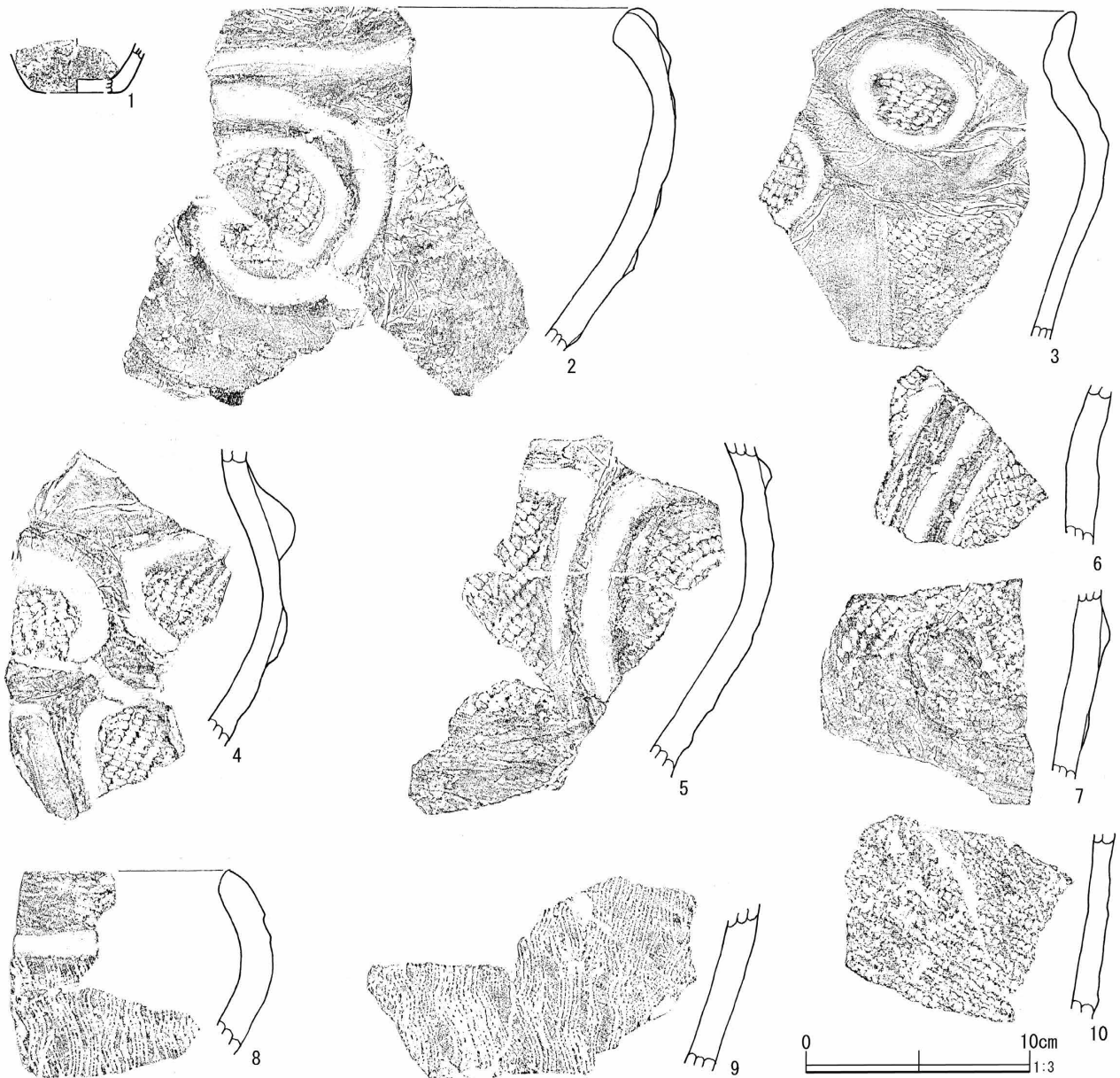
#### ●第62号土坑 (第69図)

J5グリッドに位置し、第63号土坑を切り第6号溝跡に切られる。南半部は調査区外とする。残存部で長径約1.0m、短径約0.7mを測る。確認面から底面までの深さは約0.4mを測り、底面は南寄りが浅く窪む。





第69図 第56~68号土坑



第70図 土坑出土遺物 (3)

●第63号土坑 (第69図)

J5グリッドに位置し、第62号土坑に切られ第6号溝跡を切る。平面形は長径約1.0m、短径約0.9mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.7mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第64号土坑 (第69図)

H4グリッドに位置する。平面形は長径約2.1m、短径約1.4mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第65号土坑 (第69図)

H5グリッドに位置する。平面形は長径約1.9m、短径約1.1mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

●第66号土坑（第69図）

H5・I5グリッドに位置し、西端が攪乱に切られる。残存部で長径約1.5m、短径約1.4mを測る。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

●第67号土坑（第69図）

I5グリッドに位置し、東端の一部が攪乱に切られている。平面形は長径約3.6m、短径約2.6mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第70図）

土器 第70図2～4は、キャリパー形深鉢の口縁部資料である。2は、かなり大振りの資料で、口縁部に隆帯と沈線とで巻き切らない渦巻状のモチーフが施される。内部には単節縄文が充填される。3は、山形の突起を持つもので、突起化には円文が、そのわきには楕円文が配されるようである。以下は磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下するものである。4は、隆帯と沈線による楕円区画の描出される口縁部文様帯を持つ資料で、楕円区画の上に伸びる無文部が看取される。おそらく大き目の山形突起部と思われる。5、6は口縁部あるいは胴部に2本1組の隆帯で渦巻文の施されるものと思われる。地文は単節縄文である。7は低平な隆帯で区画された緩やかに渦を巻く磨消文帯の末端が観察される資料である。8は、内湾する平縁を持つ浅鉢形土器の口縁部資料である。1条の沈線で区画される無文帯の下部は蛇行条線が施される。9は、蛇行条線文の施される胴部資料、10は単節縄文の施される胴部資料である。

●第68号土坑（第69図）

J4グリッドに位置し、第1号木炭窯跡に切られる。残存部で長径約2.2m、短径約0.9mを測る。確認面から底面までの深さは約1.1mを測り、底面は中央が浅く窪む。

(4) 溝跡

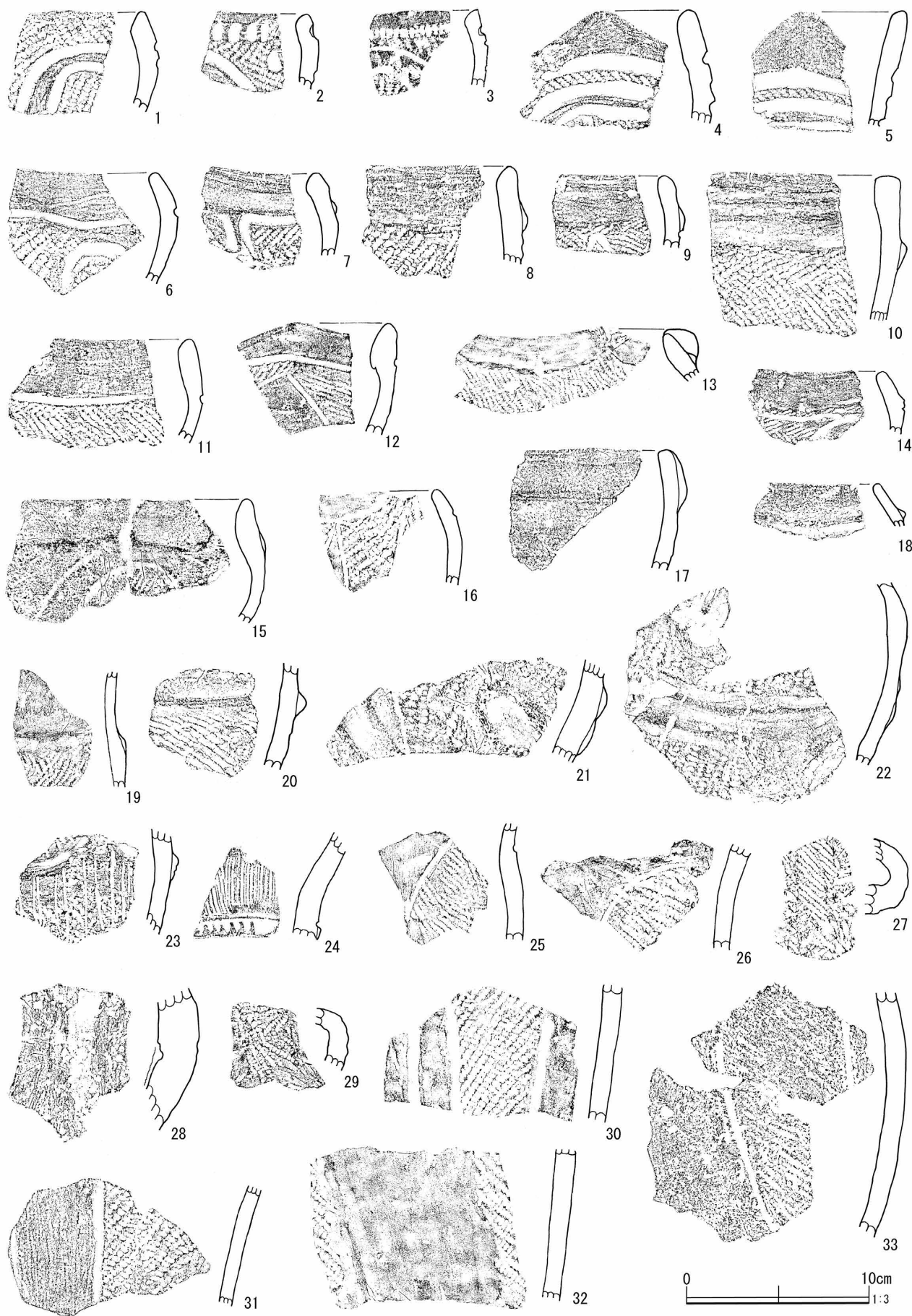
●第6号溝跡（第53図）

J5・K5グリッドに位置し、第5号住居跡を切り第62・63号土坑に切られる。調査区内を東西方向に長さ約9.7m延伸する。平面形は直線的で、最大幅は約0.6m、確認面からの最大深は約0.6mを測る。

(5) グリッド出土遺物（第71・72図）

土器 第71図1～3は内湾する口縁部に「∩」状の磨消文帯を形成するものである。2、3では口縁部に沿って刺突列が見られる。4、5は同一個体で山形突起を持つ口縁部資料である。突起下には大振幅の波状文が描かれるものと思われる。波状文は幅の広い3条の沈線で描かれるものと思われ、外側の沈線間には縄文が施される。6、11、12、14、16は、口縁部に1条の沈線で下端を区画する無文帯を持つ緩波状縁のキャリパー形土器の口縁部資料である。6は「∩」状沈線が看取されるもの、12では波頂下に幅広の剣先状磨消文帯がうかがわれるもの、16は、幅の狭い剣先状磨消文帯がうかがわれるものである。8～10、13、15、18は、口縁部無文帯下端を微隆帯で区画する一群である。8～10は、口縁部直立の平縁深鉢で、微隆帯下は縄文となる。9では、剣先状の磨消文帯がうかがわれる。13、15は口縁部が内湾するもので、前者は緩波状縁となり、波頂部を摘み上げるように突出させる。後者は「∩」状磨消文帯がうかがわれる。17





第71図 グリッド出土遺物(8)





第72図 グリッド出土遺物(9)

は複合口縁となる無文の鉢形土器である。19、20は体部に横走する隆帯の観察されるもので、前者は小型の両耳壺と思われる。21、22は2条1組の低平な隆帯で渦巻状のモチーフが描出されると思われるもので、地文は単節縄文である。23は破片両側から上部へ向かう弧状の隆帯が看取される。以下は集合沈線と縄文が併施文される。24は、刺突列を施す頸部から外反する器面に条線文の施された資料である。25、26、33は、剣先状または「∩」状となる縄文帯の観察される胴部資料である。27～29は橋状把手部の資料である。27、29では縄文が施される。28では凹線が引かれる。30～32は磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下する胴部資料で、32は区画を微隆帯で行うものである。

第72図1～4は縄文の施された胴部資料である。1、3、4は単節LR縄文を縦位に施すもの、2は、単節RL縄文をランダムに回転させるものである。5～13は、条線文の施された胴部資料である。5は直行する条線文が、9～13は蛇行条線文が施されるものである。14～21は底部資料である。14は、小型の瓶型土器で、底径4.2cmを測るもので、体部には指痕を明瞭に残す。ミニチュア土器としても良いものかもしれない。15は体部が大きく外反しながら立ち上がるもの、16は単節縄文の施されるものである。19は、残存部最大径16cm、底径9cm、残存高14cmを測るもので、胴中位に複数本の沈線が緩やかに斜行するものである。後期堀之内式に該当しよう。22は、口縁部に山形の小突起を持つ平縁のキャリパー形深鉢である。内湾する口縁部文様帯には幅広の沈線と低平な隆帯とで横長の楕円区画が設けられる。突起の下では緩やかな渦を巻くようである。胴部は「H」状磨消文が施され、間隙は単節RL縄文で埋められる。推定口径は32cm、最大径35cm、括れ部胴径20cm、残存高33cmほどを測る。

**石器** 第72図23は不整形剥片を素材としたもので、正面には主に下端部方向からの加撃による不規則で大振りな剥離痕が残される。上部には背潰し風の加工が認められる。裏面には素材表皮を大きく残し、周縁部から粗く大きな剥離を重ねたのち、下端部及び左側縁に調整加工を施している。24は、凹基無茎の石鏃で、片脚及び体部上半を欠く。押圧剥離による調整加工は特に右側縁では表裏とも丁寧なものとなっている。25は、23と同一母岩を用いて作られたものである。細長い不整形剥片を素材とし、正面には主剥離が、裏面には素材表皮を大きく残す。湾曲する右側縁に加工を集中させ、正面からの加撃により裏面には細かく丁寧な調整加工が残される。削器またはドリルの可能性もある。26、27は磨石残欠である。前者は硬砂岩の扁平な楕円礫を素材とし、面取りは行われていない。後者は、安山岩製で、面取り整形を施すが、元の大きさは推定できない。使用は表裏両面に及ぶが進行したものではない。被熱している。

第11表 第12地点グリッド出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
72	23	スクレーパー未製品	チャート	6.0	6.6	1.3	57.6	25と同一母岩
72	24	石鏃	黒曜石	1.4	1.6	0.4	(0.8)	
72	25	ドリル?	チャート	4.6	1.8	0.9	5.5	23と同一母岩
72	26	磨石	硬砂岩	(8.2)	(5.7)	4.0	(260.0)	
72	27	石皿	安山岩	(5.3)	(8.8)	3.8	(240.0)	被熱・残欠



## 5 第14地点の遺構と遺物

### (1) 土坑

#### ●第69号土坑 (第73図)

K3・4・L3・4グリッドに位置し、北半部は調査区外である。残存部で長径約2.0m、短径約1.1mを測る。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

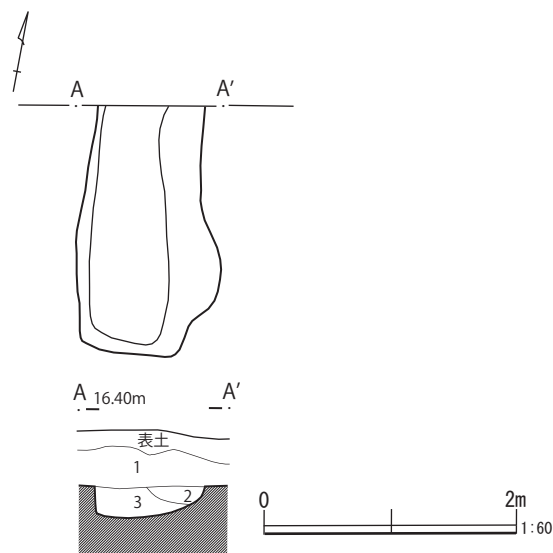
#### 出土遺物 (第74図)

土器 第74図1は外反する陶器甕の頸部付近の資料である。常滑焼と思われる。2は、条線文の観察される胴部資料である。

### (2) グリッド出土遺物 (第74図)

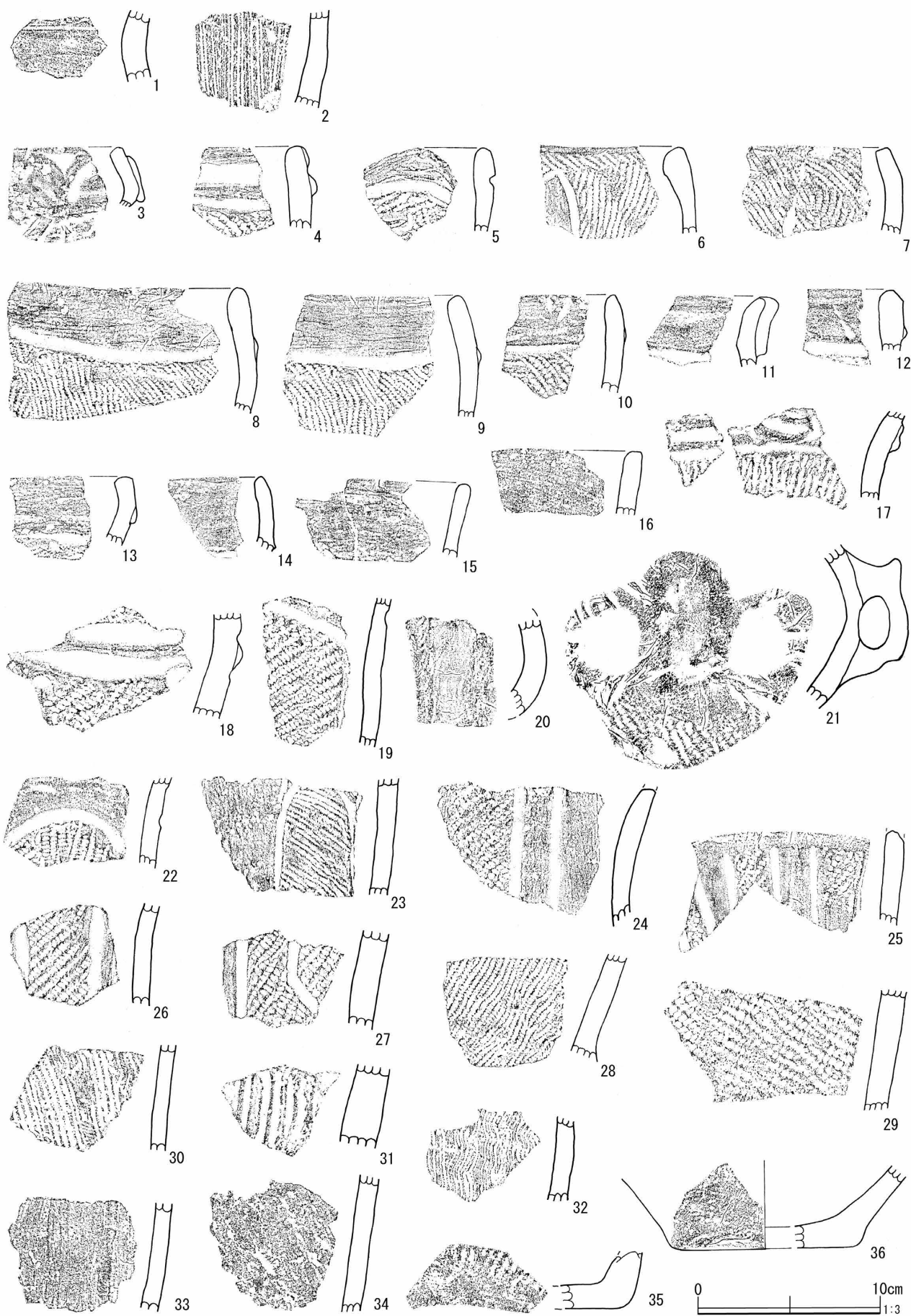
土器 第74図3は内折する口縁部を持つ薄手の平縁土器で、「V」字状に開く隆帯を付しその内側を撫でつけるように整形している。口唇部と隆帯とで三叉文が形成される。阿玉台式に相当するものと思われる。4は口縁部に低平な隆帯2条が横走する土器で、体部には単節縄文が見て取れる。

5は緩波状縁を呈する口縁部資料で、口縁に沿うように弧状の沈線が見られる。6、7はキャリパー形深鉢の内湾する口縁部資料で、前者は「U」状の磨消文帯がうかがわれる。後者は単節RL縄文が横位に施される。8~10、12~14は、わずかに内湾する平縁土器で、無文となる口縁部下端を微隆帯で区画するものである。8、9は同一個体の可能性もある。11は、複合口縁となる無文の口縁部を持つものである。15、16は、外反気味に開く無文の口縁部資料である。17は、2条1組の隆帯で口縁部文様帯下端を画するもので、一部に横「S」字状あるいは鉤の手状となるとと思われる隆帯の下部がうかがわれる。18は、2条の凹線縁どられた隆帯が横走する大振りの資料である。体部は単節縄文である。19は「U」状となるとと思われる縄文帯の看取される胴部資料である。20は橋状把手部分の資料で、把手中央部には凹線が引かれる。21は、両耳壺の橋状把手部分の資料である、把手両側は磨消しとなり、以下は縄文が施される。把手は、中央部は縦位に窪められる。22、23は「U」状の縄文帯が施され周囲が磨消文帯となる胴部資料である。24~27は磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下する胴部資料である。このうち24、25は共に輪積で欠損したのち研磨しており、口縁部として再生しているものと思われる資料である。27では縄文帯の中に蛇行沈線が垂下する。28、29は縄文の施された胴部資料で、前者は底部付近と思われるものである。30は撚糸文の施された胴部資料、31は集合沈線の引かれた胴部資料、32は蛇行条線の見られる胴部資料である。33、34は無文の胴部資料である。35、36は底部で、前者では撚糸文が看取される。後者は無文で大きく開きながら立ち上がるものである。



基本土層  
 1 黄褐色土 縮まり有 粘性有 ロームへの漸移層。  
 SK69  
 2 黄褐色土 縮まりやや弱 粘性有 径3-4cmのロームブロックを多く含む。  
 3 褐色土 縮まり有 粘性有 ローム土を多く含む。

第73図 第69号土坑



第74图 第14地点出土遺物

## IV 自然科学分析

### 1 山遺跡（第3地点）出土炭化材の自然科学分析

株式会社古環境研究所

#### 1. はじめに

山遺跡（第3地点）の発掘調査では、南北方向に長い地下式の木炭窯跡が検出された。同遺構は箱状の断面形状をしており、長さ6m、幅約2m、深さ1.5mほどの大きさである。天井部は崩落していたものの、遺構内には炭化材層と灰層・焼土層が交互に堆積していた。そこで、同遺構の帰属時期を検討する目的で、検出された炭化材を対象として放射性炭素年代測定を行った。また、あわせて当該炭化材の樹種同定を行い木材利用についても検討した。測定にあたっては、米国の Beta Analytic Inc. の協力を得た。

#### 2. 試料

試料は、山遺跡（第3地点）で検出された木炭窯跡より出土した炭化材1点である。

#### 3. 放射性炭素年代測定

##### (1) 方法

二次的に混入した有機物を取り除くために、まず蒸留水中で細かく粉碎し、超音波洗浄および煮沸洗浄を行った。次に塩酸（HCl）により炭酸塩を除去した後、水酸化ナトリウム（NaOH）により二次的に混入した有機酸を除去した。さらに塩酸（HCl）で洗浄し、最後にアルカリによって中和した。これら前処理をした試料は、定温乾燥機内で80℃で乾燥した。乾燥後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス・メタノール、n-ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。このターゲットをタンデム加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。測定試料と方法を第12表にまとめた。

第12表 試料と方法

試料名	遺構	種類	前処理・調整	測定法
No.1	第1号木炭窯跡	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

※1) AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

##### (2) 結果

年代測定の結果を第13表に示す。

第13表 測定結果

試料名	測定No.(Beta-)	<sup>14</sup> C年代(年 BP)	δ <sup>13</sup> C(‰)	補正 <sup>14</sup> C年代(年 BP)	暦年代(西暦)
No.1	201814	1220 ± 40	-26.7	1190 ± 40	交点 : cal AD870 1σ : cal AD780~890 2σ : cal AD720~740 : cal AD760~960



#### 1) $^{14}\text{C}$ 年代測定値

試料の  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。 $^{14}\text{C}$  の半減期は、国際的慣例により Libby の 5,568年を用いた。

#### 2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  比を補正するための炭素安定同位体比 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (%) で表す。

#### 3) 補正 $^{14}\text{C}$ 年代値

$\delta^{13}\text{C}$  測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

#### 4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中  $^{14}\text{C}$  濃度の変動を較正することにより算出した年代 (西暦)。cal は calibration した年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の  $^{14}\text{C}$  の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と  $^{14}\text{C}$  年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約 19,000年 BP までの換算が可能となっている。ただし、10,000年 BP 以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正  $^{14}\text{C}$  年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。 $1\sigma$  (68% 確率) と  $2\sigma$  (95% 確率) は、補正  $^{14}\text{C}$  年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の  $1\sigma \cdot 2\sigma$  値が表記される場合もある。

### 4. 樹種同定

#### (1) 方法

試料を割折して炭化材の新鮮な横断面 (木口と同義)、放射断面 (柁目と同義)、接線断面 (板目と同義) の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって 50~1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

#### (2) 結果

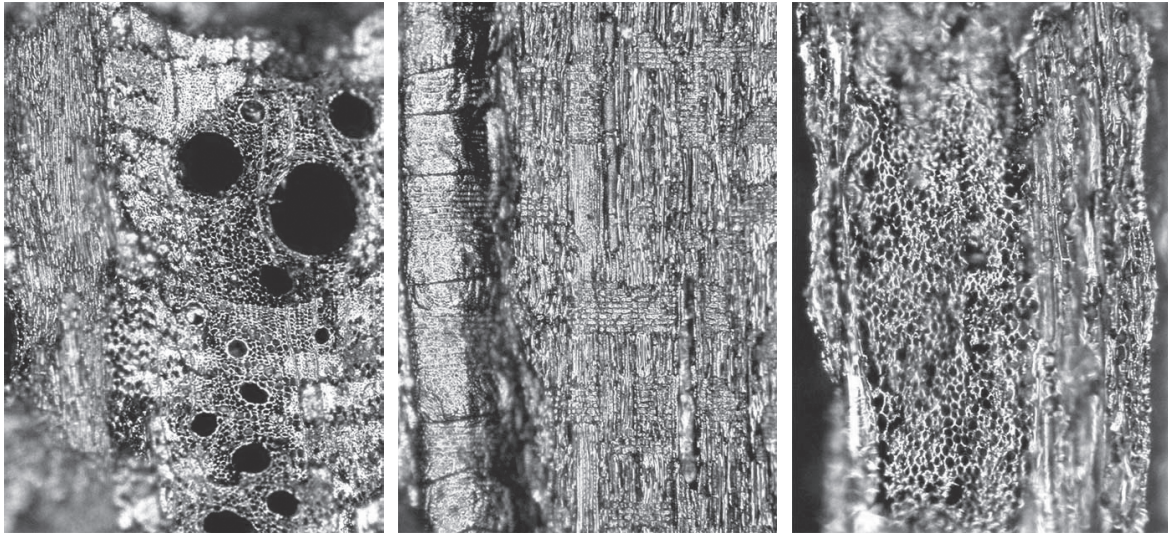
コナラ属クヌギ節に同定された。以下に同定の根拠となった特徴を記し、顕微鏡写真を第75図に示す。

コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1~数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。



横断面 ————— : 0.4mm      放射断面 ————— : 0.4mm      接線断面 ————— : 0.2mm  
 第42号土壙（炭焼窯） コナラ属クヌギ節

第75図 炭化材顕微鏡写真

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靱で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

## 5. 所見

山遺跡の第1号木炭窯跡より出土した炭化材について、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った結果、 $1190 \pm 40$ 年 BP ( $1\sigma$  暦年代範囲は AD780~890年) の年代値が得られた。また当該炭化材は、樹種同定の結果コナラ属クヌギ節であった。コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあるが、これらは温帯域に広く分布し、山地や乾燥した台地および丘陵地に生育する。なお二次林要素でもある。生態上、遺跡周辺に生育していたとみられ、容易に入手できたものと考えられる。

## 参考文献

- 佐伯浩・原田浩 1985 針葉樹材の細胞・木材の構造, 文永堂出版, p.20-48.  
 佐伯浩・原田浩 1985 広葉樹材の細胞・木材の構造, 文永堂出版, p.49-100.  
 島地謙・伊東隆夫 1988 日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣, p.296.  
 山田昌久 1993 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成, 植生史研究特別第1号, 植生史研究会, p.242.

## V 総 括

### 1 出土土器

山遺跡ではこれまで17地点の発掘調査を行っている。このうちの多くの地点で縄文時代中期後半加曾利E式期の住居跡が検出され、当該期の集落遺跡としては市内でも屈指の大規模集落と考えられる。主体を占める時期は加曾利EⅢ式からⅣ式に及ぶ時期である。

今回報告した調査地点でも第3地点1号住居跡、3B号住居跡が加曾利EⅢ式期後半、第12地点5号住居跡、第1号竪穴状遺構が加曾利EⅣ式期に相当するものとみられる。

特に加曾利EⅢ式期の資料は充実度が高く、既報告資料でも、第1地点第1号～第4号住居跡、第2地点第1号～第3号住居跡、などの例がある。これに第3地点3B号住居跡が加わり、その厚みが増したといえよう。深鉢形土器だけを見ても、加曾利E式主流の第23図1、2など口縁部に楕円区画文帯を持つ一群に加え、第22図2や第24図1などいわゆる吉井城山類型と呼ばれる一群、さらに、第24図2や4のような口縁部文様帯を欠失するようなものなどが存在し、多様な系統の接触の中で、第22図3のような大振幅の弧線と渦巻文風のモチーフの融合などが生じる。セット関係を見ると、これに第23図3、第24図5、6のような両耳壺、第25図1～3のような浅鉢という組合せとなる。他の調査地点の例などと合わせ、検証する機会を設けたいと思う。

次に、加曾利EⅣ式期について述べる。今回の報告で特に注目したい部分である。第12地点5号住居跡の資料群（第58図～第61図）は、該期の一括性の高いまとまった資料として評価できるものと考えている。口縁部に玉抱き文を描出する一群（第59図1～3、第59図1）やモチーフが描出されないながら同類型を支える地文系の一群（第59図2、4）に、いわゆる岩坪類型に類する第61図1のような資料と、前原類型の甕形土器などが構成要素として存在する。加えて第58図20のような「J」字や鉤の手状となる鋸歯状文系から派生する一群などが存在することも見逃せない。

また、1号竪穴状遺構の資料群（第67図、68図）も、類似の構成内容を示す。

山遺跡では、これまでにも第2地点で、第1号土器埋設遺構とした土坑埋設の玉抱き文土器が知られており（2008・奥野）、これらと合わせて極めて興味深い資料である。

山遺跡のこれまでの調査例を勘案し、本稿では、加曾利E式の新段階の土器に注目したが、今回の報告では、加曾利EⅠ式期やそれ以前の勝坂式期、阿玉台式期の資料も断片的ながら確認できた。市内においては、これまでこの時期の調査例はなく、出土資料も極めて希薄な状況であり、全容はうかがえないながらも、3A号住居跡の炉体土器（第22図1）や第1号木炭窯出土の第42図25、26などの資料は非常に重要な資料だといえる。また、2号住居跡の第10図3や第6号住居跡の第65図8などのような、曾利式に伴う復元可能な資料の出土も山遺跡を考察していくうえで今後大きな参考となるものと考えている。



# 写真図版



掘削作業状況 (1)



掘削作業状況 (2)



実測作業状況 (1)



実測作業状況 (2)

図版2

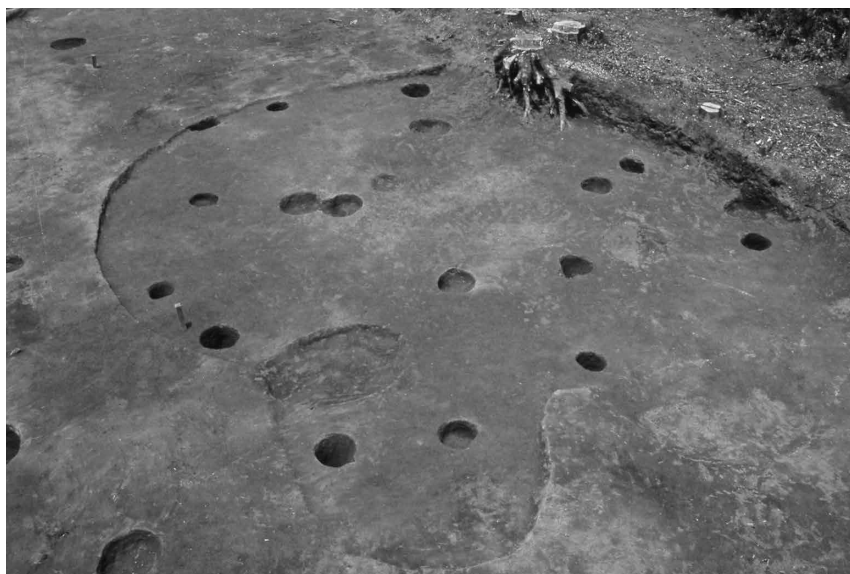


第3地点調査区西半部全景



第3地点調査区東半部全景





第1号住居跡



第2号住居跡



第3号住居跡



图版4



第3A号住居跡炉体土器



第3B号住居跡炉体土器



第4号住居跡





第25号土坑



第26号土坑



第27号土坑



第28号土坑



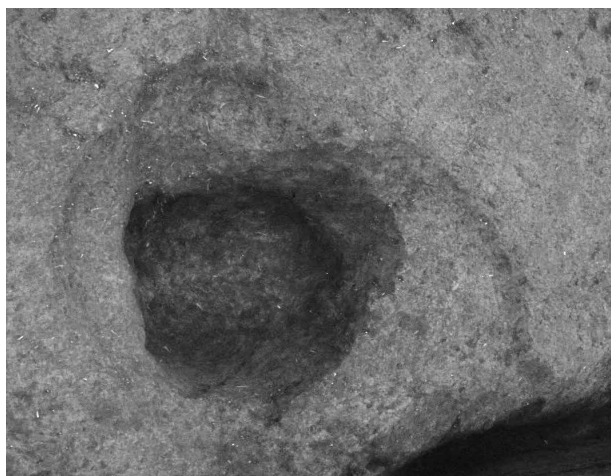
第30号土坑



第31号土坑



图版6



第35号土坑



第37号土坑



第41号土坑



第42号土坑



第43号土坑

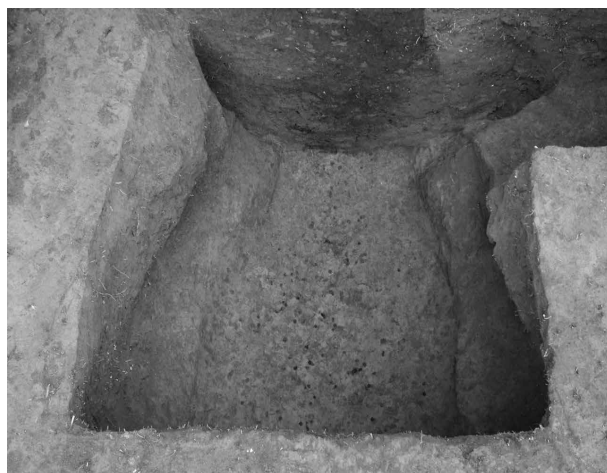


第3号沟迹





第1号木炭窯跡前庭部



第1号木炭窯跡燃烧部



第1号木炭窯跡前庭部横断面



第1号木炭窯跡燃烧部横断面



第1号木炭窯跡前庭部縦断面



第1号木炭窯跡燃烧部縦断面

图版8



第1号住居跡出土遺物 (1) (第5図)



第1号住居跡出土遺物 (2) (第6図)



第2号住居跡出土遺物 (1) (第8図)

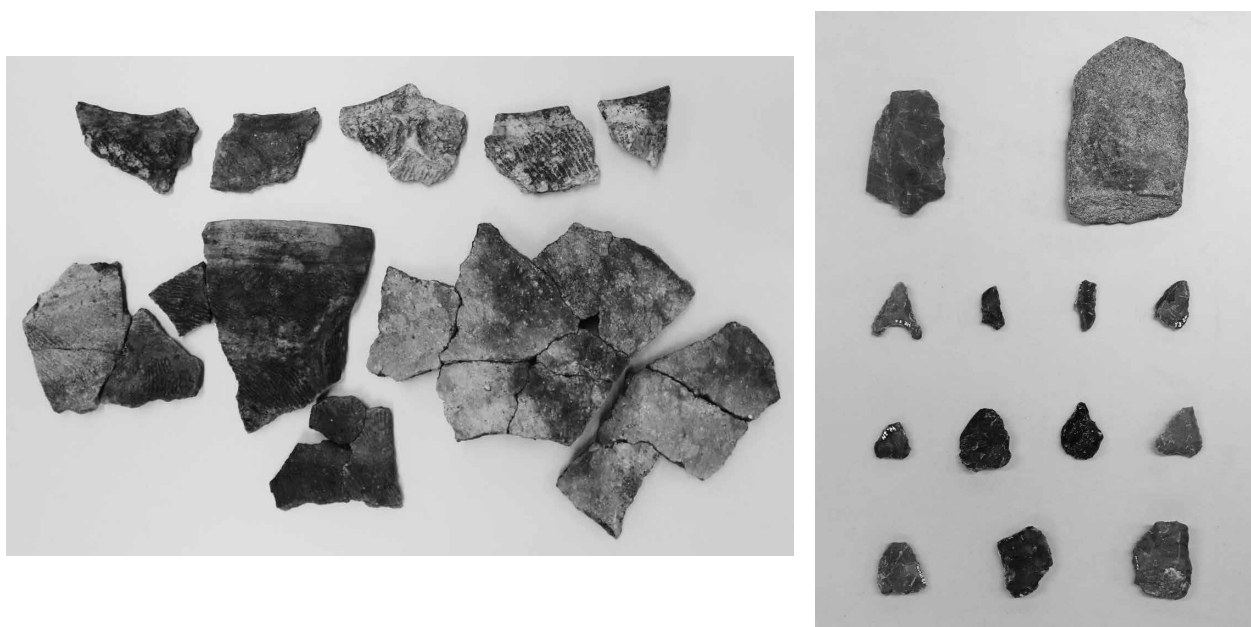


第2号住居跡出土遺物 (2) (第9図)





第2号住居跡出土遺物 (3) (第10图)



第2号住居跡出土遺物 (4) (第11图)



图版10



第2号住居跡出土遺物 (5) (第12図)



第3号住居跡出土遺物 (2) (第17図)



第3号住居跡出土遺物 (1) (第16図)



第3号住居跡出土遺物 (3) (第18図)



第3号住居跡出土遺物 (4) (第19图)



第3号住居跡出土遺物 (5) (第20图)



第3号住居跡出土遺物 (6) (第21图)



第3号住居跡出土遺物 (6) (第21图)



图版12

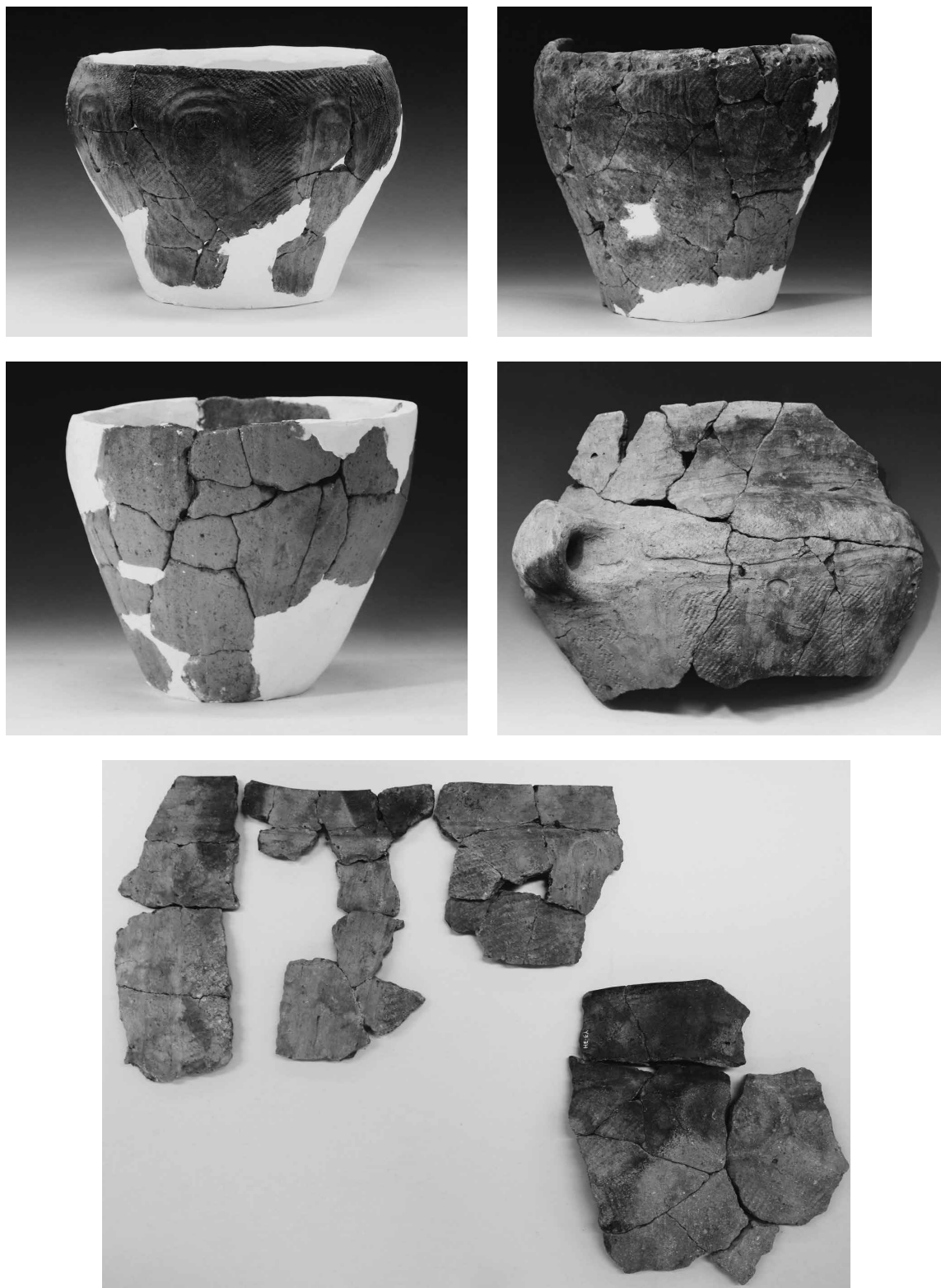


第3号住居跡出土遺物 (7) (第22图)



第3号住居跡出土遺物 (8) (第23图)





第3号住居跡出土遺物 (9) (第24図)

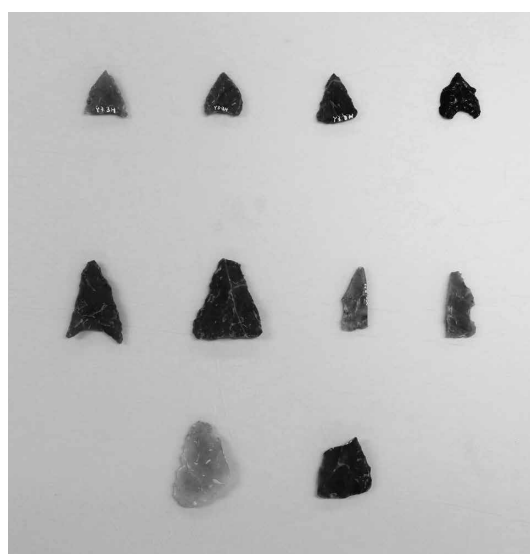
图版14



第3号住居跡出土遺物 (10) (第25图)



第3号住居跡出土遺物 (11) (第26图)



第3号住居跡出土遺物 (12) (第27图)



第4号住居跡出土遺物 (2) (第30图)



第4号住居跡出土遺物 (3) (第31图)

第4号住居跡出土遺物 (1) (第29图)



图版 16



土坑出土遺物 (1) (第35图)



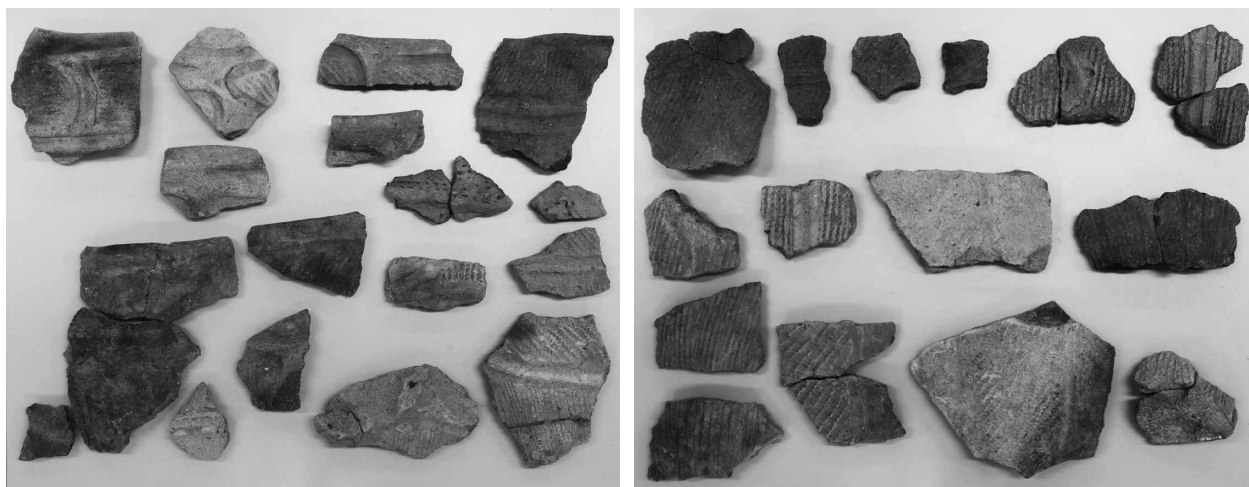
土坑・溝跡出土遺物 (第39图)



土坑出土遺物 (2) (第38图)



木炭窯跡出土遺物 (第42图)



12グリッド遺物集中区出土遺物 (1) (第43図)



12グリッド遺物集中区出土遺物 (2) (第44図)





グリッド出土遺物 (1) (第45図)



グリッド出土遺物 (2) (第46図)



グリッド出土遺物 (3) (第47図)





グリッド出土遺物 (4) (第48図)



グリッド出土遺物 (5) (第49図)

グリッド出土遺物 (6) (第50図)



グリッド出土遺物 (7) (第51図)



第9地点調査区西半部全景

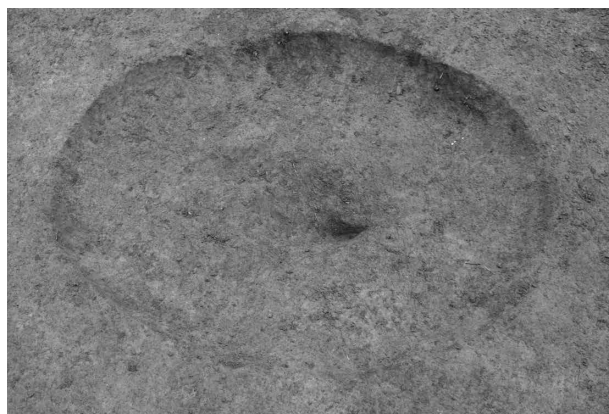


第9地点調査区東半部全景





第46号土坑



第48号土坑



第51号土坑



第53号土坑



第54·55号土坑



第5号沟迹



图版 22



第9地点出土遺物 (1) (第54图)



第9地点出土遺物 (2) (第55图)



第12地点調査区全景

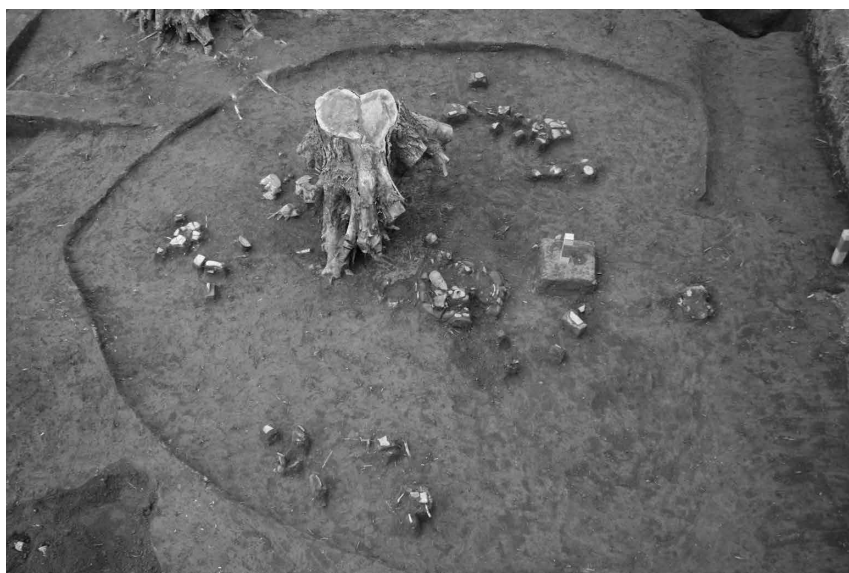


第12地点調査区東端全景





第5号住居跡



第5号住居跡遺物出土状況



第5号住居跡炉体土器





第6号住居跡

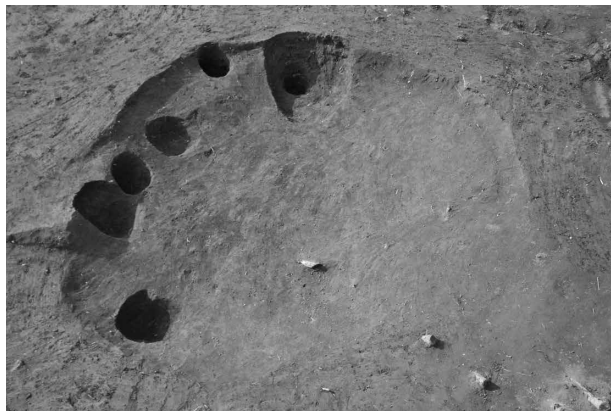


第6号住居跡遺物出土状況



第6号住居跡炉体土器

图版 26



第1号竖穴状遺構



第1号竖穴状遺構遺物出土状況



第56号土坑



第59号土坑



第60号土坑

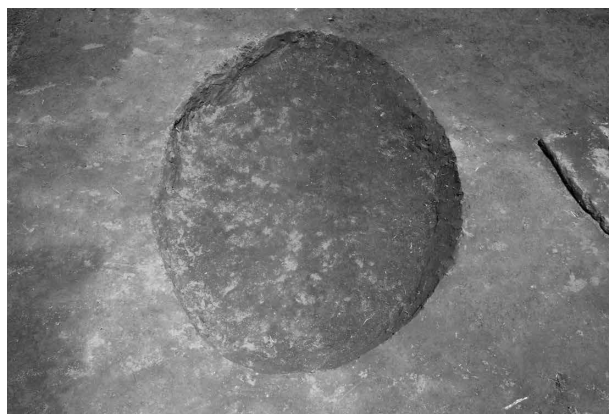


第61号土坑

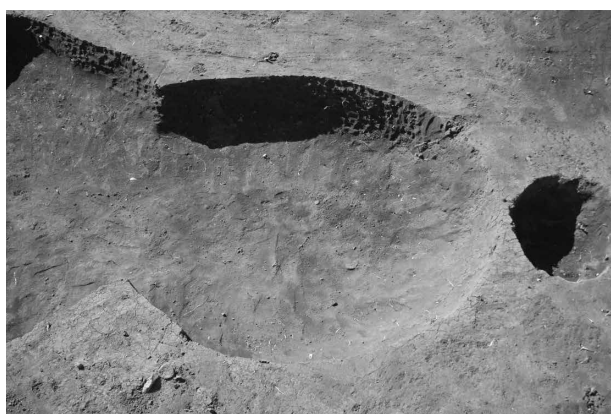




第62·63号土坑



第64号土坑



第66号土坑



第67号土坑



第67号土坑遺物出土狀況



第6号溝跡





第5号住居跡出土遺物 (1) (第58图)



第5号住居跡出土遺物 (2) (第59图)



第5号住居跡出土遺物 (3) (第60图)



第5号住居跡出土遺物 (4) (第61图)



图版 30



第5号住居跡出土遺物 (5) (第62図)



第5号住居跡出土遺物 (6) (第63図)

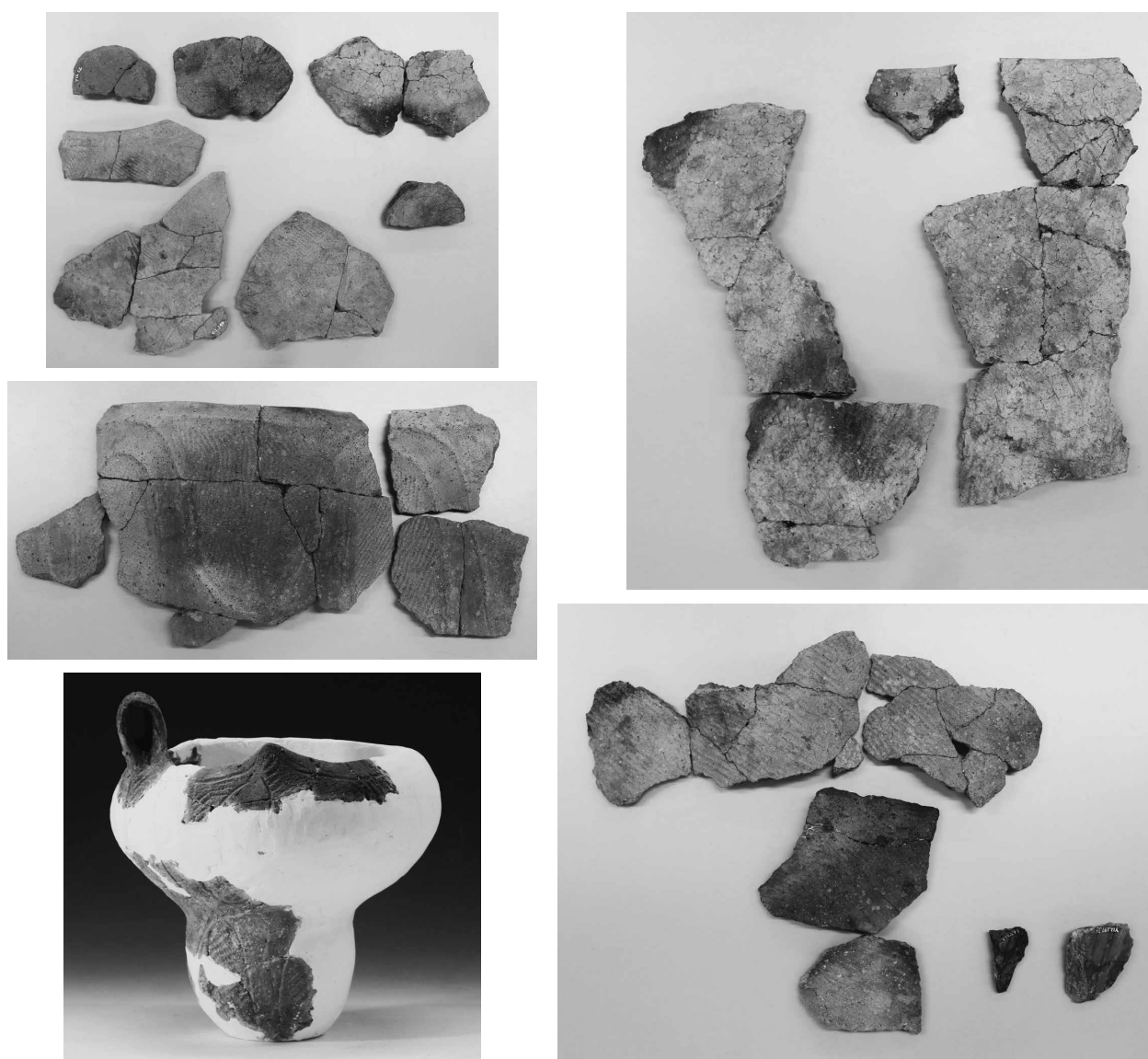


第6号住居跡出土遺物 (第65図)

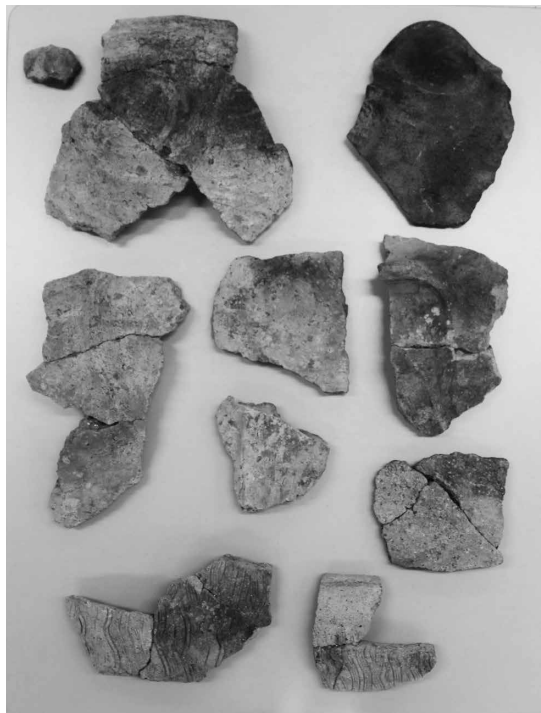




第1号竖穴状遺構出土遺物 (1) (第67图)



第1号竖穴状遺構出土遺物 (2) (第68图)



土坑出土遺物 (3) (第70図)



グリッド出土遺物 (8) (第71図)



グリッド出土遺物 (9) (第72図)





第14地点調査区全景



第14地点調査区西半部全景



第69号土坑





第14地点出土遺物（第74図）

## 報告書抄録

		ヤマイセキ(ダイサン・キュウ・ジュウニ・ジュウヨンチテン)						
書名	山遺跡(第3・9・12・14地点)							
副書名	市内遺跡群発掘調査報告書XXX							
シリーズ名	白岡市埋蔵文化財調査報告書第32集							
編著者名	奥野 麦生 杉山 和徳							
編集機関	白岡市教育委員会							
所在地	〒349-0292 埼玉県白岡市千駄野432 TEL 0480-92-1111							
発行年月日	2023(令和5)年3月31日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東経			
ヤマ 山 イ 遺 セキ 跡	第3地点 シラオカ 白岡744  第9地点 シラオカ 白岡744-5、745-1  第12地点 シラオカ 白岡746-1の一部  第14地点 シラオカ 白岡746-1の一部	11445	014	36° 00′ 45″	139° 39′ 32″	第3地点 19970512 ～ 19970703  第9地点 20090622 ～ 20090715  第12地点 20150507 ～ 20150529  第14地点 20200527 ～ 20200618	第3地点 935.57  第9地点 770  第12地点 482  第14地点 396	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
山 遺 跡	集落	縄文時代中期 奈良・平安時代 中・近世		住居跡7軒 竪穴状遺構1基 土坑69基 溝跡6条 木炭窯跡1基	縄文土器・土製品・石器・ 金属製品	奈良・平安時代の木炭 窯跡を検出した。		
遺跡の概要 縄文時代中期の住居跡を7軒検出した。住居跡には埋設土器を伴うものが多く認められた。								

白岡市埋藏文化財調査報告書第32集

**山遺跡（第3・9・12・14地点）**

市内遺跡群発掘調査報告書XXX

令和5年3月28日 印刷

令和5年3月31日 発行

発行 白岡市教育委員会

印刷 朝日印刷工業株式会社